
BLACK FANG -血塗れの連鎖-

遠野秀一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK FANG 一血塗れの連鎖―

【Nコード】

N0147Q

【作者名】

遠野秀一

【あらすじ】

悲劇は何度でも繰り返される。

穂村慎は突如、恋人である大神マイラから別れを告げられた。

慎は一度はマイラのことを諦め、他の女性と付き合うことを選んだが、

マイラへの想いを捨て切れなかった。

しかし、それが新たな悲劇の引き金となった。

これは血染めの鎖に縛られた運命に引き込まれた者達の物語。

序章 二月の別れ

序章 二月の別れ

「……別れて、慎……」

一瞬、彼女が何を言ったのか、わからなかった。

……ワカレテ……？

時が止まったような錯覚を覚えた。しんと降り頻る雪の音さえ聞こえるような静寂。俺達の間には流れる空気は未だかつてないほど重苦しいものとなっていた。付き合ってから二年間、こんな空気とは無縁だったというのに。

俺は彼女の言葉を理解し、信じられない、といった面持ちで彼女を見つめた。どうして、こんな唐突に別れを告げられなければならないんだ。

わからない。ついさっきまで二人で笑い合っていたというのに、何故破局が訪れるのだろうか。こんな現実を信じられるはずもなかった。

「じよ、冗談だろ、マイラ？」

情けないほど俺の声は震えていた。あんまりにも格好悪くて自分に嫌気が差す。

マイラの表情からはとても冗談を言っている様子はなかった。いつも眩しい笑顔を浮かべている彼女の表情は今、完全に凍り付いてい

た。

しかし、それでも全てが冗談であることを願った。この破局が偽りであるという期待に縊らなければ、今にも泣き崩れてしまいそうだったから。

「……ごめん。私はもう慎と一緒にいられないの……」

「……………俺の他に、好きな奴ができたから、か…………？」

マイラは黙って頷いた。

心が押し潰されそうだった。こんなにも惨めな気持ちになったのは、本当に久し振りだった。しかも、彼女の言葉によってそんな想いをさせられるとは夢に思っていなかった。

マイラと出会って、俺は本当に幸せだった。彼女と過ごす時間の全てが、俺にとっての大切な宝物、どんな宝石よりも眩しく輝く思い出だった。

しかし、その思い出を踏み躪られた。

今まで俺と一緒にいながら、マイラは他の男のことを考えていたのか…………。

くそッ!! 何だよ、それは!? そんなの許せるかよ!!

「ふざけんな!? 冗談じゃねえぞ!?」

「…………ごめん」

格好悪く怒鳴り散らす俺に対し、マイラは至って冷静だった。固く唇を噛み締めたまま俯き、まるで人形のように微動すらない。

彼女の冷え切った様子に、頭に上った血も幾分か冷えた。全部が冷

えた訳ではないが、みつともなく怒鳴らない程度にはなった。

「……何で、こんな突然、別れるなんて……」

「……ごめん」

また同じ言葉の繰り返し。

まるで事務的に繰り返しているみたいで腹が立つ。だけど、ここで激昂してもみつともないだけだ。我慢しないといけない。

「……………お前はもう、俺のこと、好きじゃないのか……?」

「……………うん、もう好きじゃない……」

彼女が告げる言葉、俺の心を容赦なく切り刻んだ。

もう、終わりなんだ…。ぜんぜん信じられないけど、もう駄目なんだな……。

「……………わかった。別れよう……」

せめて去り際ぐらいは格好よくいこう。

納得のいかないことはたくさんある。だけど、彼女の想いが離れていくのなら、俺がいくら喚き散らしても意味はない。

悔しいけど、本当に悔しいけど、別れるしかない。

「……………うん、ありがとう……………」

彼女は俯いたまま、小さく呟いた。そう言う彼女の様子がまるで泣いているように見えるのは、俺の未練がそんな幻想を見せているだけなのだろうか。

「じゃあ、ね…………。もう私と貴方は赤の他人だよ……………」

「赤の他人って…………。お前、これから学校でも会うんだぞ。それなのに、いきなり赤の他人って……………」

「学校で会っても話しかけてこないで。今更、友達なんかに戻れないわよ。私達はお互いに踏み込み過ぎているし、あまりに近過ぎる。別れても普通に話せる訳がないじゃない。…………大体、未練がましいわ」

未練がましい、という言葉が俺の一番隠したい想いを躊躇なく貫いた。

言い返してやろうと思ったが、止めた。ここで喚いてもダサいだけだ。確かにマイラの言うとおり、別れた恋人が普通に友達に戻れるはずがない。一度壊れた関係が修復することなど決してない。俺はそのことを実の両親から嫌というほど思い知らされた。

顔を合わせても話せることなどあるはずもなく、ただ辛いだけだ。やり直したいとも思っていない限り、そんなことに意味はない。もっともそれができるとは思えなかったが。

「…………ごめん、それじゃあね……………」

彼女は踵を返し、雪が降り頻る坂道を降りていった。
何もかも終わった。俺達の関係は完膚なきまでに壊れてしまったんだ。幸せに満ちた時間が今、終わりを告げた。

「くそ……、くそおおおおおッ!!」

彼女の姿が消えると同時に、俺は吠えるように泣いた。

純白の雪が舞い落ちる高台公園に俺だけが残され、慟哭の声だけが虚しく響き渡った。彼女と出会い、恋をして、愛し合ったこの場所で俺は泣き続けた。

俺にとって彼女は何より大切な人だから、大切な人だったから、この別れを悲しまずにはいられなかった。誰よりも愛していたからこそ、この別れが俺の心を容赦なく切り刻んだ。俺の想いはもう彼女には届かない。

この日、俺と彼女は別れた。それは凍て付く寒さに身を震わす二月の出来事だった。

つづく

第一章 君が思い出に変わるまで（前編）

第一章 君が思い出に変わるまで（前編）

俺、穂村慎はいわゆる不良と呼ばれる存在だった。

素行が悪く、暴力を振るうのも厭わなかった。学校に出ても教師と口論、町に出れば喧嘩三昧。飲酒喫煙は当然で、警察の世話になったのも一度や二度ではなかった。

幼い頃から不仲の両親を見てきた俺には、抛り所がなかった。だから、何かを求めるように、けれども矛盾した暴力を振るうようになった。生きることを証明するように暴れ、死ぬことを求めるように暴れ、何をしていいのかわからずただただ暴れ続けた。

しかし、それも全ては過去のことだった。

彼女、大神マイラと出会ってから、俺は変わることができた。彼女と付き合い始め、俺はようやく抛り所ができた。無意味で矛盾した暴力を振るうこともなくなり、酒も煙草も時間をかけて断った。彼女と同じ高校に行くために嫌いだった勉強にも励み、補欠合格ながらも二人一緒に私立犬神高等学校に入学することができた。

それから一年、俺は本当に幸せな日々を過ごした。初めて誰かに必要とされる喜びや、誰かを愛する幸せを知ることができた。俺は漠然とこんな幸せを日々が続くものだと思っていた。

しかし、昨日唐突にそんな日々の終わりが訪れた。俺達が初めて出会った場所で、俺達の関係は終わった。突然の彼女の別れの言葉によって、全ては壊された。

「……まだ、結構残っているな」

軋むアパートの扉を開けると、昨日の雪がまだ残っていた。

あの別れの直前に振り出したあの雪だ。降り始めた時は珍しい天からのプレゼントと一緒に喜んだものだ。それから一時間も経たぬうちに全ては終わった。

この雪化粧をされた町並みを見ると、昨日の出来事が夢ではなかったと思い知らされる。マイラと別れたという事実、頭で理解できても心がまだ受け付けなかった。会えば昨日のは全部冗談よく、と笑いかけてきそうに思えた。しかし、あの時の言葉が冗談とは思えなかった。

正直、学校など行く気分ではなかった。しかし、振られたからといって学校をサボるというのは非常に格好が悪い。別に今更サボることに抵抗はなかったが、女に振られてサボった奴、と思われるのは癪だった。格好悪い見栄だが、人間とは男女を問わず些細な見栄を気にする生き物なのだ。

俺は仕方なく家を出た。気分は限りなく鬱だったが。

今日の通学時間はいつもより大分遅めだ。何故遅いかといえば、昨晩はあまり眠れなかったのが原因だった。俺は昨日別れを切り出されたばかりで、まだ未練がたぷりと残っていた。ぐっすりと眠れるはずもなく、気付いたら危うく遅刻寸前の時間だった。

「はあ……、だりい……」

思わずそう呟かずにはいられなかった。そもそも彼女と別れて元気でいられるはずもないのだから同情の余地はあるだろう。

俺は陰気臭い空気をまといながら、学校を目指していた。その途中、普段の通学中には見かけない人物と出会った。

「あつ、先輩！ おはようございます！」

「おう、妖怪アンテナ。おはよう」

「妖怪アンテナじゃない！ ううう、会うたびに同じこと言う！」

彼女は芝崎初音。俺の友人の中では珍しくマイラと付き合う以前から親交があった人物。いわゆる幼馴染という関係だ。子供っぽい三つ編と、少し跳ねた癖毛が特徴。昔から俺はそこを飽きずにからかっていた。

「それより、お前っていつもこの時間なのか？ 早いんだな」

「そうですね。大体こんなもんです？ 先輩こそ早いじゃないですか？ マイラ先輩に振られてショックで眠れなかったとか？」

「な、何で知ってたんだ、俺達が別れたことを！？」

俺が振られたのは昨日の放課後のことだ。それ以降、俺は親を含めて誰とも会っていない。まだ噂にすらなっていないはず。マイラも初音とは親しくないから、彼女が話したという可能性は低い。だから、初音がそんなことを知っているはずがない。

「……えっと、いつもの冗談だったんですけど、本当になっちゃったんですか？」

「て、適当に言っただけかよ！」

間の悪い冗談だ。おかげで見事に自爆してしまった。

俺とマイラが別れたことを知り、初音は驚愕の表情を浮かべた。喧嘩が多かったとはいえ、あれほど仲がよかった俺達が突然別れたのだ。驚くのも無理はないだろう。

「ご、ごめんなさい、先輩……。まさかそんなことになっていたなんて知らなかったから、先輩に酷いこと言って……」

知らなかったとはいえ、俺を傷付けるようなこと言ってしまった初音は、見ている方が気の毒なくらいに落ち込んだ。初音は冗談でも人を傷付けるようなことは言わない（いや、結構言うかな……）。今のも故意の発言ではなく、ただの冗談のつもりだったのだ。

俺達が別れていなければ、本当にただの冗談であったはずだったのだ。

「別に気にすんな。悪気があった訳じゃないんだろ……」

「は、はい……。マイラ先輩、信じてたのに、どうして先輩を……」

いや、別れたとは言ったが、振られたとは言っていないぞ……。

どうやら初音の脳内では、振られたのは俺、と決定されているようだ。事実、間違っていないので訂正しようがないが、この無性に沸いてくる切なさは何だろう。

「知るか、俺達は終わったんだよ。蒸し返すな……」

「……それで、先輩はいいんですか？ やり直そうとか……」

「無理だ。一度関係が壊れちゃったら、もうそれっきりだ。それが、

ウチの親から教わった唯一のことだからな」

俺はじかに関係が壊れた者達の末路を見てきた。だからこそ、断言できる。一度終わってしまった関係は二度と元通りにはならない。どれだけ繕おうとしても、ヒビを埋めることはできない。たとえ、同じように積み直しても結局大きな傷が残り、また同じことの繰り返し。そんなことは、嫌というほど味わってきた。だからこそ、俺はあの家を逃げ出したのだ。今にして思えば、それが親に対する最後の抵抗だったのかもしれない。

「先輩、また前みたいなことにならないでね……。私、そんなの嫌だよ……。また先輩が悪いことしたり、私のこと無視したり、そんなのはもう……」

俺が非行に走った時も、初音はずっと俺に声を掛け続けてきてくれた。そのせいで彼女にもいろいろと酷い目に合わせ、傷付けてしまった。今ではそのことを本当に申し訳なく思っている。

「わーってる、大丈夫だ。もう心配させるようなことはしねえから、安心しろ」

俺はそう言って、昔の無邪気な子供時代の頃のように、初音の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

俺が更生した時、一番喜んでくれたのは初音だった。彼女の嬉し涙を見て、俺は本当に悪いことをしていたのだと反省した。

「んなことより、お前、どこまで付いてくる気だ？ 中学校はあっちだろ」

俺は去年まで通っていた、今も初音が通っている中学校への道を指差した。

俺は高校一年、初音は中学三年。当然、通う学校は違うので、道はここで分かれる。

「えっ？ ああ、本当だ！ じゃ、じゃあ、先輩、私は行きますけど、馬鹿なことしちゃ駄目ですからね！」

「ああ、いいからさっさと行け。しっ、しっ！」

「ひっど〜い。それがこんなに心配してる後輩に対しての仕打ちですか！ 感謝の言葉の一つくらいくれたっていいじゃないですか！」

「お前にはちゃんと感謝しているさ。本当に、今まで迷惑かけっぱなしだったからな……」

ふと、今まで口に出せなかった感謝の言葉が、俺の口から零れていた。こうやって礼の言葉を初音に言っただのは初めてかもしれない。幼馴染としての意地で今まで言えなかったが、積もり積もった感謝の気持ち溢れてしまったのだ。それぐらい、初音には感謝しても、し足りなかったから。

「せ、先輩……。う、うう……。…」

思いがけない言葉に、初音は顔を真っ赤にした。まさか俺がこんなことを言うなんて思ってもみなかったのだろう。彼女は真っ赤な顔

をしたまま、見事なまでの俊足で中学校へと走って行ってしまった。嬉しかったのか、恥ずかしかったのか、おそらく両方だろう。とにかく凄まじい勢いで逃げられてしまった。

初音の想いに気付いていない訳ではない。だが、俺にとって初音はずっと『妹』でしかない。そうでしかなかったはずだったのに……。

初音と別れた後、特に見知った者と会わずに教室に着いた。途中でマイラと出くわさないか不安になったが、いらぬ心配だったらしい。普段と通学時間がずれているのが幸いしたようだ。

今では幸いというべきか、俺とマイラの教室は別だった。マイラ以外とはあまり話さない俺にとって好ましくない状況だったが、別れた今となってはむしろ幸いだった。おかげで当分別れたという噂が流れないだろう。マイラが言い触らさない限りは。

二人がまだ付き合っていた時は、俺の教室にマイラがよく顔を出していた。しかし、喧嘩も多いせいもあって彼女が来る周期はまちまちだった。このまま顔を合わせず、気まずい雰囲気さえ出さなければ、しばらく外野も大人しいだろう。

俺は机に突っ伏すと一日中そのまま寝るつもりだった。普段から授業など真面目に聞いていないが、今日は一切内容が頭に入らないだろう。

今日は何をしてもマイラのことが脳裏から離れなかった。想いは簡単に断ち切れない。だからといって、やり直すことは不可能だというは両親から嫌というほど思い知らされていた。

昼休み、食堂に行く途中でマイラとすれ違った。一瞬だけ視線が交錯したが、それも本当に一瞬だけだった。目が合ったと思った瞬間にはすでに彼女の視線は別の場所に向かっていた。俺の胸に残ったのは惨めさだけだった。

顔を見合せば自然に笑みが綻ぶ関係はもう終わっていた。やはり、彼女の想いはもう消えてしまったのだろう。

「……だっせえな、俺……」

そう愚痴りながら、俺は学校を飛び出していた。どうしても居た堪れなくなり、逃げ出したのだ。しかし、五時間目までに戻ってきたのは、ただの意地だった。

そして、放課後。

俺が帰ろうとしたその時、マイラが教室に姿を現した。しかも、真っ直ぐに俺を見つめ、近付いてきた。

「慎、ちょっといい？」

「な、何だよ？ 何か用か？」

明らかに普通ではない重苦しい雰囲気、クラス中の視線が俺達に集まった。ただの喧嘩ならクラスメイトも見慣れているだろうが、こんな重苦しい空気は初めての経験だろう。必然的に何があったか悟られてしまっただろう。

「……慎の家にある私の私物は全部処分しといて」

決定的なセリフに、ざわめいていたクラスが一気に静まり返った。

「私も、慎の私物は処分するから……。だから、これで後腐れなく全部終わり」

「……あ、ああ、わかった……」

逃げ出したい衝動に駆られながらも、何とかそう答えられたのは、ちっぽけな意地のおかげだった。みつともなく逃げ出すのはあまりに格好が悪く、耐えられなかったから、意地で踏み止まった。

「……これも、返すね」

マイラが差し出してきたのは、俺の家の鍵だった。この鍵は俺が初めて彼女にあげたプレゼントだった。彼女がそれを

求め、俺もそうしたかったので、その鍵を彼女に渡したのだ。鍵だけでは格好がつかないという理由で妙に凝ったキーホルダーを付けてプレゼントした。だから、この鍵は二人にとって特別な思い出がこめられたものだった。

「……慎、受け取って」

「……………」

俺はその鍵を見て、凍り付いた。全ての思い出を壊されたような気がして。もう何もかも本当に終わってしまった、と再び思い知らされた。

だから、すぐにそれを受け取ることができなかった。心がそれを拒絶したから。

「……慎」

「あ、ああ………」

彼女の呼び掛けに、俺はようやく覚悟が決まり、鍵を受け取れた。プレゼントとして作った不恰好な銀細工のキーホルダー。それが物悲しい輝きを放っていた。

俺とマイラを繋ぐ大切な絆がまた一つ途切れた。こうして一つ一つ絆が途切れ、二人の関係は終わっていくのだろう。関係が薄れていけば、いずれこの胸の苦しみ消えていくのだろうか。

俺の手には、思い出の残滓だけが虚しく残された。

その日、俺はとても真っ直ぐに家に変える気分にはなれなかった。精神的に打ちのめされた俺は、浮浪者のように町を彷徨い続けた。まるでそうすること以外を忘れてしまったように、ただ歩き続けた。そして、あの場所に行き着いた。

高台公園。二人が出会い、別れた場所。

小高い丘から見える夕日がとても綺麗だった。ここで、まだ不良でしかなかった穂村慎が、この高台から身を投げようとしていた大神マイラと出会った。今も二人で眺めた夕日は記憶に深く残っていた。

『……誰が助けてなんて言った？』

あの時の彼女の第一声が、脳裏に蘇ってきた。落ちれば間違いなく転落死の高さがある高台から、身を投げようとした彼女を助けた時に言われた言葉だ。その時の彼女には、現在の明るく勝気な面影など微塵もなかった。そこにあったのは、深い絶望と底知れぬ憤怒。

結局、あの時の真相は聞けなかった。俺が知っているのは、彼女の両親が外国で事故死したということだけ。

今までその真相を聞こうとしなかった。自殺の理由など絶対にまともではない。俺にはその重苦しいものに触れる勇気がなかったのだ。付き合うことで彼女の傷が癒えれば、と思いながらも俺は結局、彼女の心に踏み込めなかった。

（振られて当然だったのかも……。俺は自分のことしか考えてなかった……。あいつの悩みを知ろうとしなかった……）

彼女が飛び降りようとした場所で、俺は泣いた。

今まで彼女と付き合えて、確かに幸せだった。だが、それは居心地がいいだけのぬるま湯でしかなかった。彼女が求めていたのは、そんなものでなかったのかもしれない。自殺をしたくなるほどの傷を癒せるような、そんな優しい場所を求めていたのかもしれない。

「くそ……。どうして俺は気付いてやれなかったんだ……」

俺はマイラに突き返された鍵を手にした。思わず投げ飛ばしてやるうかと思っただ、止めた。鍵を投げたら後々面倒だ、とか言い訳が頭を過ぎったが、実際は全く違う理由で思い止まった。

彼女との思い出を否定したくなかった。たとえば、どんなことがあっ

ても、俺は彼女に救われたのだから。

「吹っ切って、帰るか……」

やり直すことなどできない。そんなことは嫌というほど痛感している。だから、思い出を胸に、前へと進もうと思った。

まだ心は痛む。傷むからこそ、前に進もうと思う。そして、いつか振り返った時に全ていい思い出になってくれれば、それはきつと素晴らしいことだと思う。

「……じゃあな、マイラ……」

だから、これが最後の涙。彼女のために流す涙は、これでもう最後にする決めた。

つづく

第一章 君が思い出に変わるまで（後編）

「……ッ!？」

俺が自宅アパートに帰り着いたのは夜も大分遅くなった頃だった。しかし、そんな時間に初音は一人、俺の帰りを待っていた。星もほとんど見えないような漆黒の夜空を見上げながら、まだ春の訪れも遠い冬の寒空の下、彼女はたった一人で待っていた。まるで世界にたった一人取り残されたように、彼女は孤独な空気をまとっていた。その姿は月光を浴びた妖精のように美しく、思わずいつもの調子で声を掛けるのを躊躇われた。

しかし、俺が声を掛ける前に、初音が俺の存在に気付いた。俺の姿を見つけると、初音は花も綻ぶ花のように満面の笑みで駆け寄ってきた。

「先輩、遅いですよ！ 心配しました！」

「お、お前こそ何してんだよ、こんな時間に!？」

「先輩を待っていたんです！ 本当はちょっと顔を出しに來ただけなのに、いつまで経っても帰ってこないし……、不安で……」

先ほどまでの笑顔が嘘のように一気に泣き顔になっていく初音。初音は本当に不安だったのだろう。俺がまた昔のように堕ちていく姿を見るのが。

「……悪い。俺はいつもお前を泣かしてばっかだな……」

またいつかのように彼女の顔をくしゃくしゃと撫でた。
そうすると、今度は泣き顔が嘘のように笑顔に戻った。それは本当に嬉しそうな、いや、幸せそうだった。

「先輩が戻ってきてくれて、本当に良かった……」

初音の笑顔はこそばゆい。俺のように捻じ曲がっていない純粋な笑顔だから。

「まったく、このくそ寒い中、何時間待ってんだよ」

「い、ごめんなさい……」

「お前が謝るようなことじゃないだろ！」

むしろ謝らなければならないのは俺だ。しかし、俺は素直にそのことを言えなかった。恥ずかしかったから。

「ほら、何か温かい物ぐらい用意してやるから、ウチ入れ」

「あっ、じゃあ、どうせなら夕飯ご馳走してください！ もちろん、先輩の手料理で！」

「阿保！ 俺にそんな芸当ができる訳ないだろ（まあ、そろそろ自炊できない不味いんだが……）！ いいから黙って入れ！」

やかましい小娘の後頭部に一発入れて、俺は家の鍵を空けた。その時無意識に使った鍵は、マイラから突き返されたあの鍵だった。彼女との思い出。俺は鍵のキーホルダーを取り外し、それを靴入れの上に置いた。この思い出の残滓は、もう俺には必要のないものだ。

前に進むには、足枷にしなければならない。

「紅茶とコーヒー、どっちがいい？」

「日本人は緑茶に限ります。欧米文化にかぶれてはいけません」

「やかましい！ インスタントの緑茶なんかウチにねえ！」

誰かが後ろでごちゃごちゃ言ったようだったが、俺は丁重に無視した。しかし、そんなぶっきらぼうにしながらも、茶葉の場所はどこだったろうか、と必死に思い出そうとしていた。

結局、俺は初音に甘かった。ずっと昔から初音は俺にとって特別な存在だったから。

「茶葉は、……あった。急須はどこだっけ……？ ってか、あったか？」

それにしても、彼女と別れた翌日に別の女を自宅に連れ込んでもいいものなのか。

わざわざ励ましに来てくれた初音に緑茶を淹れながら、俺はそんなことを考えていた。マイラに振られた俺を心配してくれた初音は多分悪くない。ただ、俺が悪くないかは微妙な気がする。

普段は邪険にしているが、俺は妹みたいな存在の初音に甘い。そういう部分が気に障ったから、マイラは俺を振ったのかもしれない。俺の記憶が確かなら、マイラと初音は積極的に顔を合わそうとしなかったし、会ってもほとんど口を利いた覚えはなかった気がする。あまり気にしたことはなかったが、あの二人はもしかしたらかなり陰悪な仲だったのかもしれない。思い返してみると、やはり悪いのは俺という気がしてならない。しかし、それも全て後の祭りだった。

「ほれ、粗茶だ」

「ありがとうございます。先輩でもお茶淹れるぐらいできたんですね？ あゝ、でも、玉露の方がポイント高かったですよ」

「やかましい！」

余計なことばかり言う口を引っ張り上げてやった。

「それ飲み終わったら、さっさと帰れよ」

「じゃあ、十時間ぐらいかけて飲みます」

相変わらずいい度胸をしてやがる。しかも、それを実行するだけの行動力があるから油断できない。

「勝手にしろ」

「むっ、ノリが悪いですね？ やっぱり、マイラさんに振られてダメージ受けてます？」

「……ぐッ!？」

い、痛いところを突きやがって…。

「お前、俺を励ましに来たのか、トドメを刺しに来たのか、どっちだよ？」

「もちろん励ましに来たんですよ。まあ、ちょっと刺激的に、ですけど？」

「ちっ……。朝は結構しおらしくったくせに……」

「だって、こっちまで元気なかったら励ましにならないじゃないですか？　だから、これぐらいでちょうどいいんです」

随分と勝手な言い分だが、ある意味正論で腹が立つ。普段なら意地でも反論していたかもしれないが、今は何も言い返せなかった。

「……先輩、やっぱり堪えてるんですね？」

「思った以上にな……。ったく、情けないぜ……」

ここで否定しないのも、普段の俺らしくなかった。格好悪い姿を見せたがらない俺が、こんなに弱い姿を見せるなんてマイラにもなかったことだ。

「先輩……」

「マジだと思ってたのは俺だけだったのかね……」

「そんなことないです！」

俺の口から零れた弱音を、初音は思い切り否定した。

「あの人が本気で先輩のことを好きじゃなかったら、私は絶対に認めませんでした！　先輩も、あの人も、本気だってわかったから、私は……」

初音はそこで言葉を切り、顔を真っ赤にして俺から目を逸らした。彼女の想いに気付いていない訳ではない。ガキの頃からずっと一緒だったんだ。気付かぬはずがない。しかし、俺にとって初音は『妹』以上にはならなかった。

「わ、私は……、えっと、あゝ、先輩！ お腹空いてませんか？
私でご飯作りますよ！ どうせ先輩、自炊なんてしてなさそうです
し、手料理に飢えているんじゃないですか？」

「ああ、頼むわ」

初音は真っ赤な顔を隠しながら、台所に逃げていった。

そういえば、俺もマイラも得意料理は消し炭だった。しかも、時々
血の味がしたので、一人暮らしを始めてからまともな手料理を食っ
た覚えはなかった。

(……って、またマイラのこと考えてるよ。くそ……)

忘れようとしても、やはり脳裏からマイラの姿を消せない。彼女と
の思い出はあまりに多過ぎる。どこで何をして、彼女の影がちら
ついている。

「……って、冷蔵庫に何もない！ っていうか、そもそも冷蔵庫の
電源が入ってない！」

あゝ、そういや、そうだな。料理自体しないのに、わざわざ材料を
置いておく奴などいる訳ないし……。まあ、材料がないなら、初音
の手料理は諦めるか。

俺は寝転がって、テレビをつけた。この時間帯で面白いものといえ
ば、バラエティー番組くらいしかないなので、それを見た。普段はあ
まり見ていない番組だが、見ると結構笑える。

「あっははは！」

「パスタ発見……って先輩、もう私の手料理に興味失ってる……」

「あっははははは！ 有り得ねえ！」

「……………」

「何だかよ、お前が料理をしている間の記憶がないんだが、どうしてだろうな？」

俺が目覚ますと、すでにミートスパゲティーが完成していた。そもそも寝た記憶がないのに、目を覚ますという行為は矛盾している。やたら後頭部が痛い理由もよくわからん。そして、フライパン近くに置かれている缶詰が変な形に凹んでいるのはどうということだろうか。

「クソつまらないバラエティーに飽きて寝ちゃったんじゃないですか？」

超笑顔。

清々しいほどに白々しい笑顔だった。

「よくそんなセリフが吐けやがるな、この小娘。人の後頭部に缶詰

当てて気絶させたくせに……」

「うあ、酷いです。わざわざ夕ご飯まで作ってあげてる健気で可愛い後輩に向かって、何てこと言うんですか？ 誤解です。大体、私みたいな弱い女の子がどんなに頑張っても人を気絶させるぐらいのスピードで物を投げられるはずがないじゃないですか？」

野球部のレギュラー全員を三球三振させた奴が何を言っているのだろうか。ちなみに、その突拍子もない勝負が起こった経緯は、野球部連中が初音を『妖怪アンテナ』となじったのが原因だ。その後、勝負に負けた野球部は一ヶ月初音の下僕と化した。

「けっ、スパゲティー茹でて缶詰開けただけじゃねえか」

「むっ、それだけのことでできない人に言われたくないです」

「ぐっ……」

確かに俺はイカ墨を使わずにイカ墨スパゲティーを作った経験がある。マイラはスパゲティー煎餅という独創料理を完成させた。ちなみに、どっちも一口だけ食べて、廃棄処分した。

どうも今日はいろいろと分が悪過ぎる。俺の立場があまりにも弱過ぎだ。

「まあ、そこまで言うならいいですよ。今度は、一生君の作る味噌汁が食べたいなあ、と言いたくなるような凄いの作ってあげますから！」

「何だよ、また来る気か？」

内心では嬉しかったが、表面上でウンザリした調子で返した。どう

にも俺は素直ではない。

しかし、俺のデリカシーに欠ける発言で、笑顔だった初音の表情が一瞬にして曇ってしまった。

「……私が来ちゃ、迷惑ですか？」

……ったく、反則なんだよ、その顔は……。

初音に瞳を潤ませられると、俺は何も言えなくなってしまう。昔からよく喧嘩をしたが、いつも彼女の泣き顔に負けてしまうのだ。

「来たければいつでも来いよ。どうせ俺は彼女もいない寂しい奴なんだからな」

マイラ曰く、俺達はもう赤の他人、だそうだからな。誰に遠慮する必要もない。

「……いいんですか？」

「ああ、好きにしろ。これやるから」

彼女に向かってぶっきらぼうに投げたのは、今日マイラに突き返されたこの家の合鍵だった。鍵に付けられていた不恰好なキーホルダーはすでに取り外されているので、何の飾り気もない。

しかし、それを受け取った初音は、まるで宝物を貰ったかのような喜び様だった。そんなに喜ばれると、何の飾り気もない鍵（あまつさえ元カノから返された物）なんかをあげたことに罪悪感が沸く。そこまで喜ばれるような物ではないのに。

「あ、ありがとうございます……」

……だから、反則なんだよ、それ……。

悲し涙も、嬉し涙も、俺にはどちらも苦手なものだった。

俺はくすぐったい心情を隠すように、ガツガツと音を立てながらミートスパゲティを頬張った。

「あ、あの、本当に先輩の家に来てもいいんですね？　いつでも、好きな時に……？」

初音は大事そうに合鍵を握り締めながら、尋ねてきた。喜びと不安が入り混じったようなこそばゆい表情で、俺は真正面から彼女の顔を見ることができなかった。

「ああ……」

俺はスパゲティをがつつきながら、素っ気なく答えた。

「明日も来ていいですか？」

「ああ……」

「明後日もいいですか？」

「ああ……」

「明々後日もいいですか？」

「しつこいぞ、馬鹿！」

「先輩こそ、ああ……、ばっかで素っ気ないです！」

うるさい、恥ずかしいんだよ……。

顔を見合わせると真っ赤になるしかない気がしたので、俺は黙って

スパゲティを食い続けた。どうやら初音も同じらしく、黙々とスパゲティを食べていた。どちらも何も言わない気まずい沈黙だが、どこか懐かしい雰囲気だった。

……マイラと付き合い始めた時の雰囲気思い出すな……。

またマイラを思い出す。しかし、最初ほど胸は痛まない。何故だろうか。初音と一緒にだからだろうか。

「……え、えっと、本当に毎日来てもいいんですか？」

「お前、本当にしつこいぞ……。今更遠慮するな」

「だ、だって、不安なんです！ 先輩が優しくしてくれたのなんて全然なかったから」

うっ……。心に突き刺さる一言だな……。

「……俺、そんなに冷たかったか？」

思い返してみれば、思い当たる節がいくつもあった。と言うか、初音に優しくした覚えがほとんどない。

「そ、そうじゃないです！ 先輩はいつだって優しくかったけど、それが凄く捻じ曲がってるっていうか、素直じゃなくてわかり辛いっていうか、正直もっと他の言い方してほしいなあっていうか……」

「あゝ、つまり、俺は屈折してるってことか……」

「そうです、素直じゃないんです！ 本当は優しいのに、全然そん

な素振りとか見せてくれない根性曲がりです！」

「んなこと断言するな！　　つか、ドサクサ紛れに暴言吐きやがったな、この小娘！」

俺は食卓を乗り出し、初音の頭を掴んで思い切り振ってやった。脳味噌シェイクは地味だが、意外にダメージの大きい技だ。

「ごー、ごーめーんーなーさーいー……」

謝っているようなので、一応シェイク攻撃は止めた。

「先輩、酷いです！　冗談じゃないですか！」

「いーや！　今のは絶対本音だ！　そう簡単に許しやるかよ、腹黒娘！」

「じゃあ、どうしたら許してくれます？」

「……そうだな。罰の意味も込めて、一週間俺に美味しい飯を提供するってのはどうだ？」

「せ、先輩……」

俺、今かなり恥ずかしいこと言ったな……。

恥ずかしくなった俺は逃げるように食器を片し、台所に逃げた。しかし、狭くて汚いアパートだ。この上なく嬉しそうな初音の視線から逃れられない。穴が開きそうなほど見られているような気のせいではないだろう。

「ありがと、先輩」

初音は俺を追うように食器を片しに来た。いや、実際に追ってきたのだろう。

「馬鹿、罰だって言ってんだろ。しっかり美味しいもの作れよ」
「はーい♪」

俺の腕にじゃれ付きながら返事をする初音。その様子はまるでマタタビを貰った猫のようだ。

ああ……、ヤバい、いろいろと……。マイラに振られて、大分参っているな、俺……。初音に対して、抱き締めてえ、なんて思うなんて……。

いや、もう思っているだけじゃない。すでに実行した後じゃないか……。

「……初音」

俺の腕の中で、彼女は信じられない表情を浮かべていた。

こうして当たり前のように隣にいてくれる初音。それがどんなにありがたい存在か、俺はよく知っている。そして、どれほど大切な存在なのかも、よくわかっている。

「せ、先輩……。急にどうしたんですか……？」

「……ずっと側にいてくれないか、初音……？」

その言葉は、自然と俺の口から零れていた。

初音は一瞬、何を言われたのか理解できなかったようだ。しばらく呆然と俺を見上げていたが、フリーズしていた思考回路が働きを取り戻すと、沸騰しそうなほど真っ赤な顔になった。

しかし、突然に初音の熱は冷めた。先ほどまでは火が出そうなほど真っ赤だった彼女が、今では背筋が凍るような冷たさに変わっていた。

「……それは、あの人の代わり、ってことですか？」

「……ッ!？」

グサツと来た。

ある意味、マイラの言葉以上にきつい。そして、即座に否定できない、ということは初音の指摘を暗に肯定しているということだ。俺はあまりにも軽率なことを言ってしまった。

「……まあ、先輩が傷付いている時に来た私も悪いんですけど、やっぱりあの人の代わりってのは嫌です。私のプライドが絶対に許しません。まあ、こうして抱き締めてもらえるのは嬉しいですけどね」

「すまない、初音……」

「先輩の心には、まだあの人がいるんですね？」

どうやら初音には何でもお見通しらしい。

確かに俺はまだ、マイラへの想いを断ち切れていない。そもそも振

られてすぐ、すっぱりと忘れられる想いなど偽物以外の何物でもない。俺はあれほど強く人を愛したのは初めてだった。そんな想いを簡単に忘れられるはずがない。

だが、そんな想いを抱えたまま初音を抱き締めるなんて、何を考えているんだ、俺は……。本当に最悪なことをしている。

「先輩。そんな落ち込まないでください」

「……初音？」

俺は初音から離れようとしたのだが、彼女自身の手によってそれを止められた。

「さっきも言いましたが、こうされること自体は嬉しいんです。悪いと思うんだったら、もうちょっとこうしててください」

……何ていうか、初音は強いな。俺とは大違いだ……。

「たくましい奴。女にしておくのが勿体ねえよ」

「むっ、さっきからいろいろと失礼ですね。女の子じゃなかったら、こうして抱き締めてもらえないじゃないですか？」

「いい根性してるよ、お前……」

「先輩みたいなヘタレを好きになると、嫌でも強くなるんです」

反論を言ってやろうとしたその瞬間、俺は思い切り彼女の方に引っ張られた。完全に不意を突かれ、俺は何が起こったかわからなかった。

しかし、気付いた時には、俺と初音の唇は一つに重なっていた。微かに触れ合うだけの優しいフレンチキス。刹那的な触れ合いに、

俺も初音も目が当てられないほどに真っ赤になってしまった。

「え、遠慮しなくてもいいんですよ？」

強気なこと言っているくせに震えている。行動力はあっても、どこか怖気づいているのは初音らしかった。

「……い、今のは前借です」

「ま、前借？」

「先輩の心に、まだあの人がいるのは仕方ないことです。でも、いつか先輩の心からあの人を追い出して見せます。私しか見れないくらいに、私を好きにさせちゃいます。だから、次に先輩とキスする時は、先輩の心に私しかないときです。でも、それまでどれくらい掛かるかわからないので、ちょっとズルしました」

それで前借か……。

悪戯が成功した子供のような笑顔をしている初音を怒ってやりたかったが、その笑顔があまりにも可愛くて結局何も言えなかった。ただ、やられっ放しは悔しかったので、デコピンを食らわせて彼女を突き放した。

「まったく、勝手にしろ」

「はい、勝手に先輩の隣にいます♪」

その後、しばらく初音と他愛もない話をしながら時間を過ごした。初音という間は、本当にマイラのことを忘れられた。しかし、時間

は有限だ。いつまでもそんな楽しい時間を過ごせるはずもなかった。時刻は、まもなく十一時を迎えようとしていた。初音は、泊まりたい、と駄々をこねたが、さすがにそれを了承する訳にもいかなかった。とつてもとつても勿体ないが……。

「それじゃあ、今日は帰りますね、慎さん……」

彼女はいつしか俺を先輩ではなく、慎さん、と呼ぶようになっていた。どうにも慣れぬ呼ばれ方でくすぐったいが、そう呼びたがっている初音の意思を尊重することにした。

「……また、明日も来ていいですか？」

「当たり前だ。美味しい飯、期待してる」

「あ、あははは、そうでしたね。任せてください！」

はにかんだ笑いを浮かべ、初音は踵を返した。

彼女が無防備に俺に背を向けた瞬間、悪戯心がくすぐられた。先ほどは不意を突かれて後れを取ったが、このまま勝ち逃げされるのは不本意だった。

「ひゃ、ひゃう！？ し、慎さん！？」

急に背後から抱き締められ、初音は大いに動揺した。自分から攻めるなら優位でいられるが、不意打ちをされると冷静ではいられないようだ。

「よくよく考えたら、お前に前借させてやる理由がない」

「えっ、えっと……、確かにそうですけどお……」

「だから、返却だ」

そう言っ、先ほど奪われたキスを強引に奪い返すように、俺は初音の唇を貪った。先ほどの甘く優しいキスは比べ物ならないほど、深く交わるようなキスだ。

「し、し、し、慎さん!？」

「あゝ、あと、これは勝手なことしたお仕置きな」

更にもう一度、初音の唇を奪った。

有無も言わず二回も唇を奪われた初音は真っ赤な顔のまま、完全に硬直してしまった。俺はそんな彼女の体を反転させ、帰り道の方へと突き飛ばした。

「じゃあな、妖怪アンテナ。襲われないように気をつけろよ。あ、でも、大丈夫か？ その妖怪アンテナが危険を察知してくるはずだしな」

まあ、忠告している本人が襲った後だからな。今更なセリフだ。

「ううゝ……。慎さんの馬鹿!!」

蒸気機関車顔負けの勢いで湯気を噴出し、走り去っていく初音。そんな微笑ましい光景に、俺は新たな希望を見出した気がした。

まだこれは始まり。まだ白雪に包まれ、温かな春を待ち続ける二月の出来事だった。

――二ヵ月後

そして、季節は巡り、春が訪れた。

あの厳しい寒さに身を震わせたのが嘘のような麗らかな春の陽気。永い眠りに就いていた緑が芽生え始め、日野塚の町は春色に染まっていく。その中でも、私立犬神学園高校はもともと春らしい桜色に満ちていた。木造作りの古めかしい校舎に、薄桃色の桜はよく映えた。

今日は四月十日、私立犬神学園の入学式。今年から初音もこの高校一年生となる。俺は授業をサボって、初音の入学を祝いに行っていた。

「よう、入学おめでとう、妖怪アンテナ」

「妖怪アンテナじゃないです！ 慎さんの彼女ですよ？」

「やかましい、まだ彼女にしとらんわ」

パシン、と快音。張り手の突っ込みを食らわせ、口の減らない小娘を黙らせた。

「ううゝ……。いい加減、諦めて認めちゃえばいいのに、相も変わらずヘタレっ子ですねえ、慎さんは……」

「……………」

すでに俺達は半分付き合っているような状態なので、初音を彼女扱いしても一向に構わないのだが、そうしないのは俺にまだマイラへの未練が残っているからだ。それだけマイラへの想いが強い、といえど多少なりとも聞こえはいいが、とどのつまりは初音と付き合うことに臆病になっているのだ。こんなだからヘタレ扱いされても何も言い返せない。

一方、初音は肝が据わっている。一度は諦めていた恋ですからいくらだって待ちますよ、と彼女は宣言したとおり、俺の気持ち振りが向くまで待ち続けている。恋する乙女は無敵なのよ、と言った誰かの戯言は真実だったらいい。

「ま、慎さんがこうして迎えに来てくれただけで私は嬉しいからいいです。わざわざ授業サボってまで、私と一緒にいてくれるんですから」

「……何だか最近、口で勝てた覚えがねえな」

「唇奪った回数なら、慎さんの方が……」

「やっかましいわ!」

口では勝てないので、腕力で訴える。女に対して実行するには最低の解決策だが、こうでもしないとこの娘は黙らないのだ。

「うう、最近の慎さん、手が早いんじゃない……」

そう言い掛けて、初音の言葉は途切れた。視線を見上げたまま、まるで恐怖に竦むかのように固まっていた。俺はその様子を不思議に思い、初音の視線の先を追った。そして、俺も初音同様に凍り付い

た。

「……ま、マイラ……」

大神マイラ。二ヶ月前まで俺が付き合っていた人物が、校舎の屋上から俺達を見下ろしていた。しかも、ぼんやりと町の様子を眺めているようには見えない。明確な意志を持って俺達を見下ろしているようにしか見えなかった。

そして、俺達を見下ろすマイラの背後には、男子生徒の姿があった。あの野郎がマイラの言った、好きな人、なのか。マイラの影が妨げとなって、男の顔はよく見えなかった。ただ、授業をサボって恋人同士の甘い語らいをしているようには見えなかった。

マイラとあの野郎はこんな時間に何をやっているんだ……？

あの二人が何をしているのか気になって仕方がない。しかし、もう俺とマイラは何の関係も赤の他人同士。あそこに踏み込むことはできない。

「……慎さん、やっぱり、まだあの人のこと……」

「……俺とあいつはもう赤の他人だ。誰とどうなろうが、知ったことじゃねえ」

まだ心は痛む。

だけど、俺は前を進むと決めたんだ。

俺はマイラから目を逸らし、初音と共にその場を去ろうとした。その時、マイラの声が聞こえた。いや、聞こえたような気がした。

『……ごめん、ごめんなさい、慎……』

『マイラ……？』

交錯する俺とマイラの視線が、距離を越えて互いの意思を伝えてくれるように思えた。もちろん声が聞こえる訳ではない。しかし、特別な想いを重ねた俺達だからこそ、言葉では表せない何かで繋がっているのかもしれない。

『許してなんて言える立場じゃないのはわかってる。だけど、お願い。貴方を傷付けたこと、謝らせて……』

『……馬鹿。謝るのは俺の方だ。俺はずっとお前に甘えていた。本当はお前の方が苦しんでいたのに、死にたいって願うほどに苦しんでいたはずなのに、俺はそれに気付いてやれなかった。俺ばかりお前に癒してもらって、俺はお前に何もできなかった……』

『……そんなことないよ、慎。私もちゃんと癒してもらった。でも、ごめん……。貴方を振ったのは、私のワガママ……』

『だとしても、愛想尽かされた俺が悪いさ。実際、お前と別れてすぐに女作ってるロクデナシだからな』

『……慎は、やっぱりその子と一緒に行くの……？』

『ああ、そうだ。……だから、これでお別れだ、マイラ』

『そう、だね。さよなら、慎……』

そこで俺達の繋がりは断たれた。

もう二度とこうして心を通わすことはないだろう。俺とマイラはそれぞれ別々の道を行くと決めたのだから。だから、もう二度と俺達の道が重なることはない。

マイラは踵を返し、校舎の奥へと姿を消した。あの男と一緒に。

「慎さん……」

不安そうな初音の瞳が、真っ直ぐに俺を見つめている。

初音は未だ煮え切らない俺の答えを求めている。いや、求めているのは俺の想いだけ。それ以外のものなど何も望んでいない。

俺は今、ここで答えないといけないのだろう。マイラを選ぶか、初音を選ぶか。はっきりとした形で彼女に見せなければいけない。

「なに不安そうな顔してやがる。お前は俺の彼女なんだ。そんな顔、する必要ない」

「慎さん!？」

初音は満面の笑みを浮かべ、俺の胸に飛び込んできた。

その勢いに押し倒されそうになりながらも、俺はしっかりと彼女を抱き止めた。

「お前、いきなり抱き着いてくるな」

「あっ、お仕置きですか？ 歓迎ですよ？」

嬉々として唇を突き出してくる初音。

最近何かやらかすと必ずこのパターンで返してくる。例の件で味を占められ、随分と扱い難くなってしまった。自業自得といわれればそれまでなのだが。

「やっかましいわアアッ！！」

再び快音が鳴り響いた。初音の頭はいい音で鳴る。

しかし、いくら引き離そうとしても、初音は俺から離れようとしなかった。見ているこっちが幸せになってしまうような嬉しそうな笑みを浮かべたまま、猫のように俺にじゃれ付いていた。

ああ……、入学式を終えた新入生達が面白いものを見るような目で俺達を見ている。この一学年分の生温かい視線は拷問以外の何物でもない。

まあ、だけど、今日くらいは構わないだろう。今まで初音にはずっと辛い思いをさせてきたのだから、今日くらいは彼女の望むままに言うことを聞こう。それだけが俺の贖罪となる。

春、新たな始まりの季節。薄桃色の花が新たな門出をした二人を祝福するかのように舞っていた。悲しみが思い出に変わり、新たな思いが紡がれる。俺と初音の新たな関係がどんな物語となるかはまだ誰も知らない。だが、それでもきつと素晴らしいものになると予

感じていた。今日はこんなにも希望に満ちているのだから、明日もきっと希望に満ちた日になるだろう。そんな最高の未来があると俺は信じて疑わなかった。

しかし、この時の俺はまだ知る由もなかった。すでに俺は、これから起こる血塗られた惨劇に足深く踏み込んでいたということに気付いていなかったのだ。そして、深い絶望に打ちひしがれた俺は、再び選択を迫られることとなる。

希望に満ちていた俺には、まだ知り得ぬ残酷な運命なのだが……。

つづく

閑話 忘却のバレンタイン

二月十四日、セント・バレンタイン・デー。

この時点では誰も、数日後に慎とマイラが別れるとは夢にも思っていなかった。それほど慎とマイラの関係は良好だった（喧嘩はかなり多かったのだが）。しかし、この時すでに悲劇は起こった後であり、惨劇が始まろうとしていた。

もったも、慎がそれを知ることになるのは、数ヵ月後のことなのだが。この時の二人はまだ幸せだった。幸せだった最後の思い出。

「……今日は、バレンタイン、かあ……」

早朝に目を覚ました慎は、開口一発目にそう漏らした。

本日のバレンタイン・デーで、慎が確実にもらえるチョコレートの数は二つある。恋人であるマイラからのものと、幼馴染である初音からのもの。去年、マイラと初音との間でプライドの衝突があり、慎は大量のチョコを食べられた。今年のバレンタインも去年同様のバレンタイン・チョコ対決が起こり得る可能性は高かった。それが慎の憂鬱の理由だった。

慎は元々甘味が苦手だった。特にチョコレートは匂いですら嫌気が差す。それでも、好きな子からもらえるバレンタイン・チョコは嬉しい。嬉しいことに違いないが、実際に食べるとなると話が違ってくる。

また、マイラは重度のカカオアレルギー。よって、少量のチョコを食べるだけでも、命に関わるらしい。だから、バレンタイン・チョコを減らす援軍として使えない。

「……またチョコ地獄なんてのは、勘弁してくれよ……」

去年の悪夢が思い出される。

慎とマイラが付き合い出し、初めてのバレンタイン・デー。甘味が苦手な慎も、純粋にマイラからのチョココレートを楽しみにしていた。そして、マイラも真心込めて手作りチョコを作ってくれた。

しかし、不器用なマイラの手作りチョコを嘲笑うかのような豪華絢爛なウェディングケーキ並のチョココレートを、初音が作ってきたのだ。しかも、当てつけのように（初音の性格等を考慮すると、当てつけの可能性が非常に高い）、マイラの目の前でそれを渡した。あまつさえ彼女であるマイラよりも先に。

マイラは負けず嫌いで、熱くなりやすい性質だ。その挑発的な初音のチョココレートに怒りを覚え、初音に負けない超弩級のチョココレートを作ってやる、と宣言した。初音もマイラの挑戦に受け、手作りチョココレート対決をすることとなった。

前述のとおり、慎はチョコが苦手だ。にもかかわらず、山のようなチョココレートを一人で食べる羽目となった。もちろん、バレンタイン・チョコなので残すなどという選択肢は選べず、慎は血反吐を吐く思いでそのチョココレートの山と戦った。

あれは今まで生きてきた中で一番の苦行だった、と慎は思っている。

「……さて、と……。まだ早いけど、起きるか……」

慎は辛い過去の思い出を記憶の奥底に封印し、起き上がった。時間はまだ早朝に近く、ようやく朝日が昇り始めた頃だった。さすがに早く起き過ぎたので二度寝をしたかったのだが、今日は目が冴えてもう眠れそうになかった。

慎は欠伸をしながら布団を畳み、流しに向かった。流しの蛇口を捻り、冷水が勢いよく放出される。六畳一間のボロアパートで顔を洗えるのは流し場だけなので、冬の洗顔はかなり辛い。

バシャバシャと適当に洗顔をしていると、古くて立て付けの悪い扉がノックされる音がした。呼び鈴は壊れているので、知人が訪れる時はノックをする。

こんな早朝に来るなんて非常識な奴だとも思いつつも、慎は洗顔を止めて扉に向かった。さすがに水浸しの顔で出る訳にもいかず、タオルで軽く顔を拭いてから慎は扉を開けた。

「チャッス！ 目え覚めた、慎？ って、うわぁ、ワックスつけてない慎って何か変だね？」

早朝の来客は、マイラだった。彼女は味気ない部屋を見ると、やたら機嫌が悪くなった。

ちなみに普段の慎は、前髪は金のメッシュで、全体の髪をワックスで逆立てている。今は寝起きで髪がベタッと垂れたままだ。

「マイラ……。わざわざ来てくれるのはありがたいが、いくらなんでも早過ぎないか」

「去年は初音に先越されちゃったから、今年こそは彼女としての意地で、慎に一番にチヨコを渡したかったの！」

「阿保……。まったく、可愛いことを言うな……。…」

思わず抱き締めてキスしたくなるじゃないかと内心愚痴りながらも、慎はマイラを部屋に招き入れた。

「じゃあ、コーヒ―淹れるね」

「うい」

マイラはやかんに火をかけ、溜まっている洗い物に手を付け始めた。慎は畳んだ布団を隅に移動させ、卓袱台を部屋の中央に引っ張り出した。

「この時間じゃ、さすがの初音も来ないでしょうね」

「ああ、ぶっちゃけ、起きてなかったら超迷惑な時間だったからなあ」

いくら行動力のある初音でも、朝日の上がり切る前に来るほど常識知らずではないだろう。逆に言えば、マイラの行動力と常識知らず振りは初音以上なのだ。

「いいじゃん、起きてたんだから文句言うなあ！　っていうか、チヨコ届けにきてあげたんだから、感謝してよ！」

手際よく次々と食器を洗いながら、マイラは不満を言った。

「はいはい、あんがと」

「もっと気持ちを込めて」

「サンキュ、マイラ。嬉しいぜ」

「ふふ、どういたしまして」

マイラは食器を片し終え、ラッピングされたチョコレートを卓袱台の上に置いた。去年のようなハート型ではなく、クッキーの詰め合わせが入っているような箱だった。もしかすると、チョコレート嫌いの慎に合わせ、チョコクッキーを焼いてきたのかもしれない、と慎は予想した。

箱を開けてみると、予想的中。マイラのパレンタイン・チョコは、チョコチップクッキーだった。

しかし、半分以上がチョコチップのない普通のクッキーだったことに、慎は疑問に思った。何故、わざわざ二種類のクッキーを作ったのだろうか。しかも、パレンタイン・チョコの意味合いのない普通のバタークッキーの方が多いので、その疑問も更に大きくなった。

「……なあ、マイラ？」

慎がその疑問について聞こうとした時、ちょうど湯が沸いた。

マイラは一度場を離れ、インスタントのコーヒーを二つ淹れて、戻ってきた。ちなみに、慎はブラック、マイラは砂糖五杯にミルクたっぷり飲むのが習慣になっている。

「さ、一緒に食べよっか」

「……なるほど、そういうことか……」

つまり、チョコチップクッキーは慎へのバレンタイン用のもので、普通のクッキーはマイラが食べるためのもの、ということ。最初からマイラは慎と一緒にクッキーを食べるつもりだったのだろう。これなら、カカオアレルギーのマイラも一緒に食べられるし、甘味嫌いの慎にとっても食べやすく一石二鳥だ。

「おお、美味しいな。甘さ控えめで俺の好みだ」

「ありがと。そう言ってもらえると、頑張った甲斐があるよ」

よく見るとマイラの手には火傷の痕がいくつもあった。料理下手なのに、随分と頑張ってくれたようだ。

慎はチョコチップクッキーを、マイラはバタークッキーを食べ、舌鼓を打った。互いに好みの味に調整してあるため、両者共に満足だった。

しばらく二人は他愛もない話もしながら、クッキーを食べていた。本当に何事もない普通の幸せに満ちていた。

この時の慎はまだ知る由もないのだが、この数日後に残酷な別れが訪れることとなる。そして、これから話される会話が、これから彼が巻き込まれる惨劇に関わっていることなど、夢にも思っていなかったはずだ。

「……ねえ、慎」

「ん？ 何だ？」

クッキーを食べ終わると、マイラは少し改まった様子で話を切り出した。

思ったことはすぐ口に出てしまう性格のマイラにしては、このように改まって話をするのは珍しい。慎は少し不思議に思ったものの、特に気にする様子はなかった。

「もし、もしもの話なんだけど……」

「あ、ああ？ 何だよ？」

二度も、もし、という仮定の言葉を繰り返すマイラに、若干の違和感を覚えた。しかし、この時の違和感は、一時間も経たずに慎の記憶から消えてしまう。

後にその問いがどれほど重い意味になるかも知らず。彼女が今、どれだけの覚悟を背負っているかも知付かず。

「……もし、私が人殺しになったら、慎はどうする……？」

無論、この時に何を答えたか、慎の記憶に残るはずもなかった。

閑話休題、二章「マイラ」へ……

第二章 マイラ（前編）

二月某日、深夜。日野塚市園崎町二丁目、住宅街の一角にて。

私達は顔を隠すように深くフードを被り、閑散とした住宅街の裏通り集まっていた。闇深き夜の刻に殺伐とした雰囲気をもっている私達は、明らかに不審者集団だった。

私達が囲む円の中心には、一人の男の死体が転がっていた。

死体は、筋肉質な長身の男だった。年齢は四十代前半。鍛え抜かれた筋肉質な体と無骨な顔立ちから、ただならぬ武道家の印象を受ける。しかし、彼の背中には理髪店などで用いられるハサミ（ただし、サイズは二周りほど大きい）が深々と突き刺さっていた。その凶器であるハサミは心臓まで達しており、このハサミによる一撃が直接的な死因だ。

殺された男は、私達の組織の一員だった。

男の名は、芝崎剛三。組織間の抗争のための戦闘員で、かなりの修羅場を潜った猛者。背後からとはいえ、大人しく殺されてくれるような者ではなかった。

「……瞬殺だな。喧嘩屋で有名な芝崎剛三を、よくもまあ一撃で……」

隊長はヤンキー座りをしながら芝崎剛三の死体を検分し、大きく溜

め息を吐いた。緊張感に包まれた私達とは違い、彼はどこか面倒臭そうな雰囲気醸し出していた。

「こんな芸当ができる奴なんて、そうそういないぞ。敵ながら天晴れな手際だな」

「そうね……」

私は相槌を打ちながらも、死体を直視できずにいた。

「……このハサミ、『憂いの切り裂き魔』か？」

「間違いないんじゃない……？ 奴以外にこんな芸当ができる奴なんていないわよ」

『憂いの切り裂き魔』とは、一年前からこの地方に現れた敵対組織の暗殺者。漆黒のロングコートに身を包み、涙を流した悲しみの仮面を被った瘦身長躯の男（もしくはその線の細さから女の可能性もある）。憂いの切り裂き魔を前にし、生き残れた者は片手で数えるほどしかない。憂いの切り裂き魔の最大の特徴は、得物であるハサミ。理髪店で使われるようなハサミ（ただし、武器に使えるほどの大型）を用い、相手を切り刻むことを好む。

「んー、どうかね？」

「奴の仕業じゃない、とでも言いたげね？」

「そうだな。どうも、奴らしくない殺り方だからなあ」

憂いの切り裂き魔は、その忌まわしき二つ名が示すとおり、相手をバラバラに切り刻むことを好む。

今回の芝崎剛三の死体は、背後から心臓を一突きされただけ。それ以外の外傷は何もなかった。確かに、執拗なまでに獲物を切り刻む憂いの切り裂き魔らしくない殺し方だ。

「かと言って、他の連中に芝崎の猛者を殺せる奴がいるとは思えないけど？」

「そうだなあ。確かに、こんな芸当ができるなんてなあ……」

隊長の瞳が私を射抜く。普段は不真面目極まりないおっさんだが、潜ってきた修羅場の数は私などとは比べ物にならないだろう。

冷や汗が背中を伝う。しかし、その焦りを表情には出していないはずだ。

「俺か、お前、もしくはホムラ……。やれるとしたら、それぐらいだな」

「……………」

心臓の鼓動が激しく脈打ち、恐怖が湧き上がる。

大丈夫、わかるはずがない……。この男を殺したのが、私だってことに気付く奴なんているはずない……。大丈夫、人間なんかは後れを取るものか……。

芝崎剛三を殺したのは、この私だ。

私にはこの男を、芝崎家を憎む理由がある。殺さなければならぬ理由があったからこそ、私は罪を犯した。

「ま、内部に裏切り者がいる訳でもないし……」

「……ッ!？」

一瞬、心臓が止まるかと思った。しかし、すぐに私の怯え過ぎだということに気付いた。

「まあ、殺ったのは、憂いの切り裂き魔で決まりだろう。じゃあ、後は俺と情報部の連中に任せて、お前は帰れ」

「え、ええ……」

しまった。声の上擦った。

焦りと失敗が私の心から余裕を確実に奪っていった。隊長は人間の些細な変化を絶対に見逃さない。彼の前でこんな失態を見せたのは、後々につながる致命的なミスだ。

隊長は観察するような目で私を見ていたが、すぐに何事もなかったかのように、部下達に指示を出し始めた。

「じゃあ、帰るわね」

「ああ、そうだ。一応、護衛を付けるか？」

護衛? ……監視じゃなくて?

「……いらない。憂いの切り裂き魔相手だろうとも、後れは取らないわ」

「まあ、それも、そうだな。氣いつけて帰れよ」

隊長の気のない声に見送られ、私は闇の夜道を歩いていった。人殺しに堕ちた私の道は、どこへと続いているのだろう。血と罪に塗れた先にまともなものがあるとは思っていない。しかし、それでも私の願いを叶えるためにはこの道しかないのだ。だから、その先に無残な死があると理解しながらも、私は咎人の道を進む。

神でも悪魔でも構わない。どうか、私に課せられた宿命をまっとうできるだけの時間をください。

私、大神マイラは人間ではない。

いきなり人間ではない、と言われても「はい、そうですか」と信じる者など皆無だろう。だから、少々長くなるかもしれないが、ここで面倒な説明をさせてもらう。

一般人の認識では、地球上に存在している人間は、ホモ・サピエンスのみ、とされている。しかし、実際は違う。ホモ・サピエンス以外の人間種も存在しているし、人間以外の知的生命体も存在している。

そもそも、人間はホモ・サピエンスだけではない。ネアンデルタール人^{ホモ・ネアンデルタール人}は、現生人類であるホモ・サピエンスとは別種の間人であった。近年までホモ・サピエンスはネアンデルタール人の進化形である、という説が主流だったが、今では人間の亜種であったとされている。たとえば、同じ霊長類の猿であっても、多くの亜種がいるのと同じだ。人間にも亜種が存在していた。しかし、現在の一般常識では、ネアンデルタール人他、人間の亜種は絶滅し、ホモ・サピエンスだけが現生人類として残ったとされている。

しかし、どうしても誰も疑問に思わないのだろうか。現生人類が、ホモ・サピエンスだけという不自然な形を。生物は環境に適応し、様々な進化を遂げる。ほとんどの生物が様々な変化を遂げるというのに、人間にはあまりに変化が少ない。皮膚や髪や瞳など、若干の違いがあるにしても、全てが同じホモ・サピエンスであることに誰も疑問を持たない。

そして、もう一つの疑問点。何故、人間の亜種が絶滅したのか。一つの種が絶滅するのには、環境の変化のようなかなり大掛かりな力が必要となる。人間や大型肉食獣などによって絶滅された種も数多く存在するが、それでも全ての人間の亜種が絶滅するのは、あまりに不自然ではないと思わないか。

ネアンデルタール人絶滅の理由として挙げられるのが、ホモ・サピエンスによる虐殺がある。しかし、この二つの種に大きな違いは存在しない。近代の化学兵器でもない限り、同じ程度の実力を持った種を全て殺し尽くすのは、かなりの労力と時間が必要だ。そこまでして、相手を絶滅させようとするだろうか。答えは否だろう。古代史でも、侵略者が敵国の人間全てを殺し尽くす、という例はほとんどない。まあ、私は確認してないから、ないとは言い切れないけど……。

ならば、ネアンデルタール人は何故絶滅したのか。それを説明する説の一つに、ウイルス進化論というものがある。ウイルス進化論とは、ダーウィンの提唱した自然選択による進化ではなく、ウイルスによって強制的に進化させられた、という仮説だ（証拠はない）。しかし、ダーウィンの進化論も正当性も証明できていない）。この説は、ダーウィンの進化論では説明できない急激な進化などを、説明するための仮説の一つだ。

ネアンデルタール人はウイルスによって、ホモ・サピエンスという種に進化したのではないか、という説がある。ネアンデルタール人の急激な絶滅を説明するための仮説だ。しかし、どうしてホモ・サピエンスに進化しなければならなかったのか、と疑問も浮かばないだろうか。いや、これはあらかじめホモ・サピエンス以外の人間を知っている者の考え方だろう。今、地球上にはホモ・サピエンス以外の人間は存在していない、と思われる。だから、ウイルス進化による果てがホモ・サピエンスだけと信じるのも当然かもしれない。

しかし、前述したように、ホモ・サピエンス以外の人間は存在する。私の種のように。

ウイルス進化の果てに生まれた新たな人間。それが、私の種族だ。もっとも、私の一族以外にも、多くの亜種がこの地球上に存在している。人間に限りなく近いが、人間とは明らかに異なる、文字通りの別種。

私はそうした種の一つ、『ホモ属ヴァンパイア種ウェアウルフ亜種』だ。

……急に胡散臭くなったことを、まず詫びよう。だが、その文句は陳腐な伝説を面白がって学名にまでしやがった奴に言ってほしい。その名からわかるように、私の種の名は、ヴァンパイア伝説から付けられている。いや、むしろ逆かもしれない。私の種からヴァンパイア伝説が生まれた。

ヴァンパイア種は、『狼』もしくはそれに近い獣のDNA因子を保有している。この世界に数多存在している人間の亜種の中で、もっとも人間から離れた種の一つだ。

ヴァンパイア種の本来の姿は、人間とは大きくかけ離れている。しかし、ホモ属の血液を摂取することにより、一時的に姿を擬態することができる。この擬態のメカニズムは、一般的に知られている擬態と異なり、ヴァンパイア種特有のものだ（ホモ・サピエンス以外のホモ種には、こうした特殊な擬態能力を持つ種がいくつかある）。迷彩のようなものと異なり、摂取した血液から体組織そのものを変えてしまう。この擬態のメカニズムについてはまだ詳しく解明されていない。伝説上のヴァンパイアの吸血嗜好は、この擬態による血液摂取のためである。

ウェアウルフ亜種とは、ヴァンパイア種の中でも、より狼に近い種族を指す。最大の特徴は、イヌ科のような獣耳だ。人間に擬態しない時の私の耳は、まるで獣のそれと同じものだ。他にも、鋭い牙、強靱な爪、筋肉や骨密度の違いなどがある。そして、ヴァンパイア種よりも高い身体能力を有している。反面、持久力がかなり低い。

私はウェアウルフ、誇り高き純血の人狼。

血生臭い殺人現場から帰ると、私の部屋に彼女がいた。

別段、彼女が私の部屋にいることは不審ではない。元々、私の家は彼女の家の管理下にあるのだから、彼女はいつでも好きな時に私の家に入れる。

問題なのは、まるで呪い殺さんばかりに機嫌の悪そうな彼女の様子だった。

ある程度予想していたが、彼女の不機嫌さはかなりのものだった。実際に呪詛を念じられていないだけマシだろう。彼女なら本当にそうしたことができてしまうから、私の今後の対応次第では本当に祟られてしまうかもしれない。

「……今日の一件、どういうことか、説明してもらいますよ、マイラ先輩」

芝崎初音は私が部屋に戻ってくるなり、私の胸倉を掴んで睨み付けてきた。

慎には一切伝えられないことなのだが、芝崎初音は毎日私の家を訪れる（あと、私の家が芝崎家の管轄であることなども、伏せられている）。仲が悪い私達がどうしても毎日会うのか、その理由については後述する。

今は初音の質問をどう誤魔化すかが先決だ。ここで問題を起こす訳

にはいかない。

「ちょっと苦しいんだけど……。とりあえず、離してくれない？」

「あんたが全部話したらね」

そう言って、更に私の胸倉を締め上げる初音。とりあえず、離すつもりはなさそうだ。

初音はかなり殺気立っている。できることなら、このまま私を絞め殺してやりたいのだろう。彼女のささやかな理性に、ありがとう、とでも言うべきか。

「叔父さんのことは残念……」

「そのことをわざわざ貴方なんかに関わり質す訳ないじゃないですか？ あれは憂いの切り裂き魔の仕業でしょう？」

さすがに耳が早い。分家の中でも序列の高い家柄だけのことはある。

「私は、慎さんと貴方のことを聞いているんですよ！？」

「……だから、別れたのよ」

「その理由を聞いてるんですよ、犬娘？」

「……あア！？ 今、なんつった、人間！？」

私は誇り高きウェアウルフだ。狼ならともかく、犬扱いされることだけは絶対に許せない（狼扱いも不快だけど、犬よりマシ）。たとえ、慎が相手だろうと、この手の侮辱だけは絶対に許せない。

「犬って言ったんですよ、阿婆擦れ女」

こいつ、犬の次は、阿婆擦れ扱いか……。

「本気で死にたいの、あんた……？ 人間の分際でウェアウルフに喧嘩売るなんて。私があんたをミンチにすんのに、一分掛からないわよ」

「できることなら、私があんたのドタマがち割ってるわよ！」

殺気立ったウェアウルフに対しても、初音は一步も引かなかった。むしろ、初音の方がよほど獣性に満ちた殺気を放っていた。

「どうして先輩を振ったの！？ どうして！？ どうして！？ 先輩はあんたのことが本当に好きだった！！ あんたも先輩を本当に好きだった！！ 二人とも本当に幸せそうだった！！ 本当に、本当に幸せそうだったじゃない！！」

だから、悔しかったけど、本当に悔しかったけど、私は先輩のこ
と諦めたの！！ 認めようと思ってたの！！ だけど、どうして別
れるのよ！！ どうして！？ どうして！？ 答えなさいよおお、
大神マイラ！！」

絞め殺さんばかりの勢いで私の胸倉を掴み、怒鳴り散らす初音。
彼女の激情がそのまま伝わってくるようだった。彼女も慎が好きな

のだ。どうしようもないくらいに、彼が好きなのだ。だから、彼女が私に対して良い感情を抱いていなかったのは知っていた。しかし、それでも彼女は私と慎の仲を認めてくれた。

それは、とても悲壮な決意だったはずだ。その苦しみを、私も知っている。

私は慎を裏切ると同時に、初音の決意まで踏み躪った。彼女の怒りは当然のことだ。しかし、だからといって私の想いを口に出すことはできない。

「……元々、私と慎は結ばれちゃいけないのよ。慎は私のこと、何も知らないし、教えられるはずもない。私と慎が付き合うことに、反対する人間だって多いし、貴方だって初めはそのうちの一人だったじゃない」

「だから何ですか？ それでも反対押し切ったのは、マイラ先輩じゃないですか？ それを今更……」

「わかってる！ でも、私は純血のウェアウルフ！ この血と誇りは穢せないの！ 私の血肉は種を存亡させるためのもの！ 他にどんな好きな人がいたって、私はウェアウルフという種を守るために、自分の意志を捨てなきゃならないのよ！

それがウェアウルフなのよ……。貴方達、人間とは違うの……」

ウェアウルフ種は、絶対数が限りなく少ない上、受精率が非常に低い。ほとんどの同胞は、ホモ・サピエンスとの間に生まれた混血。しかし、ホモ・サピエンスと交わると、ウェアウルフとしての血は

大分薄れてしまう。純血種でさえ一度ホモ・サピエンスと血を交えた子を生めば、二代目にはほぼウェアウルフとしての身体的特徴は消えてしまう。実際、私の従兄弟のほとんどは擬態が必要ないほど人間に近い容姿をしている。

それ故、ウェアウルフは純血を守ることを重要視している。また、種や家族を第一に考えるのが当然なのだ。人間にはわかりづらい価値観かもしれないが、ウェアウルフにとって『血』は絶対的なものなのだ。

「……虫唾が走りますね。そのクソみたいなプライドに」

初音の煮え滾った憎悪と殺意に、私は畏怖の念を覚えた。人間相手に、ウェアウルフの私が圧倒されたのは初めてだった。

ウェアウルフは人間の亜種の中では、最強の分類に入る。ただの人間とウェアウルフとは生まれ持った身体能力が違う。ウェアウルフは、たとえ十歳に満たない子供であろうとも、成人男性三人がかりでも止められない力がある。

女の私でも、人間相手には絶対に負けない自信がある。だから、人間相手に恐怖を感じるのは屈辱だった。だが、同時に畏敬の念も生まれた。

芝崎初音には、ウェアウルフさえ圧倒するような強い想いがある。その真っ直ぐな想いが、私には羨ましくも思えるし、妬ましくも思える。

「人間の価値観を押し付けけないで。私は、この血に誇りを持っている。侮辱は許さない」

「貴方の血とか誇りとか、そんなものどうでもいいんです。私は人間、貴方はウェアウルフ。違うのはわかっています。」

私が気に入らないのはただ一つ、貴方の勝手な都合で先輩が傷付けられた、ってことだけです」

この子は、いちいち私の一番触れられたくない場所、一番深い傷を躊躇なく突いてくる。

気に入らない。本当に気に入らない。

この子は人間。ウェアウルフである私の苦しみはわからない。そして、慎と同じ人間だから、なお一層に気に入らない。苦しみなど背負わずに、慎と一緒にいられるから。それが一層妬ましい。

「……つまり、こういうことですよね？ 貴方ご自慢のウェアウルフの血と誇り、そんなものと先輩への想いを天秤にかけてえ、いない方をポイツと捨てた、と？」

殺してやりたい、この人間……。

何も知らないくせに、何も知らないくせに……。

私の想いも、この想いを縛り付ける苦しみも知らないくせに、わかったような口を叩いて、この決意を踏み躪るこの人間が憎い、妬ま

しい。

「マイラ先輩、先輩を傷付けた私は貴方を許しません」

「……………」

「先輩は、私が幸せにしてみせます。貴方は指でもくわえてその様子を見ていてください。貴方が血や誇りなんかで捨ててしまったものが、どれだけ大切だったか、もう手の届かなくなった後で気付きなさい！」

捨て台詞を吐くと、初音は私を突き飛ばし、汚らしい物を見るような目で私を見下ろした。そして、彼女は肩にかけていたクーラーボックスを私に投げ付け、部屋を出て行った。

ちなみに、投げ付けられたクーラーボックスは、私への補給物資だ。中身は、擬態に必要な人間の血液。

芝崎初音は、私達ウェアウルフのような亜人種の保護団体の一員。いくら私達ウェアウルフが人間より優れているとはいえ、六十億の目から逃れられるはずがない。人間社会で亜人が隠れるには、やはり人間の協力者が必要なのだ。

そもそも、私のような白人が欧州ではなく、日本にいるのも保護団体の事情だ。

異端保護団体『白の派閥』。私達のような亜人を保護するため、『清流会』という組織を前身として作られた秘密保護団体。詳しい説明は割愛するが（組織自体が大き過ぎて、私も把握しきっていないし）、前身となった清流会は日本を発祥とし、歴史は千年以上。元

々は異端保護のための活動をしていなかったのだが、その理念上私達のような異端な存在を受け入れてくれる唯一の存在だった。そのため、いつしか主たる目的が変化し、白の派閥が生まれた。

また、世界中の異端者達が集まり、組織の影響力は世界規模である。ただし、政には一切不干渉である、というのが清流会設立当初からの絶対的な方針で今も貫き通されている。利己的な理由からその方針に反旗を翻している組織もあるのだが、その説明も今は割愛する。

そもそも、太古から私達のような亜人は、口に出せないような酷い迫害を受けていた。特にウェアウルフの故郷である欧州地方では、キリスト教徒による異端審問や魔女狩りなど、見つければ即刻殺されるのが当然だった。新天地を求め、ヨーロッパから逃げ出す者も多かった。現在でもヨーロッパでは、キリスト教徒の根強い宗教観が残り、私達のような亜人種は住み辛い。よって、亜人の多くは宗教的価値観が薄く、白の派閥本部のある日本に移り住んでいることが多い。私もそんな理由で日本に住む亜人の一人だ。

「……慎は、大丈夫だよね……。私と違って、ちゃんと前に進めるよね……」

私はクーラーボックスを隣に置き、そのまま床に寝転んだ。

瞳から一筋の涙が零れた。

涙の理由はわかっている。だけど、慎を振ると決めた時から、この苦痛と後悔を覚悟していた。覚悟していたはずなのに、それでも涙が零れてしまうほどに胸が苦しい。

「……慎、慎、慎……」

私が絶望に暮れていた時、希望を与えてくれたのは慎だった。

初めて出会った時の慎は、私と同じ孤独な目をしていた。まるで、世界にたった一人残されてしまったような寂しげな目。そんな目をした者が二人、偶然に出会ってしまった。

だから、お互いに惹かれたのかもしれない。

私達是一緒にいて互いの孤独を紛らわし、傷を癒していった。それが依存であったことは認める。

しかし、今の慎はもう私に依存した存在ではない。傷を癒し、前を向いて進み出していた。私とは違い、真っ直ぐ未来に向かっていった。今の私にとって、慎はまるで太陽のように眩し過ぎた。

そんな彼を、巻き込んではいけない。

彼が本当に好きなら、私は身を引かなければならない。

「うう……、うわあああああああああああああああッ
！！」

慎への想い。今日、その全てを捨てる。

だから、泣くのは今日で最後。慎への想いを全て吐き出し、私は血塗れの道を往く。もう二度と後戻りできない場所へ、私は堕ちてい

くのだ。

私はウェアウルフ。この血と誇りは誰にも穢させはしない。

「んっ……」

ケータイの着信音が鳴った。

闇からの誘いだ。この電話の主が、私を凶行に走らせた張本人。狡猾な悪魔のような存在。しかし、私は悪魔に唆されて芝崎剛三を殺した訳ではない。確かに私は手を汚すことになったが、それでも協力を決めたのは相応の見返りがあるのだ。そして、私の課せられた運命はその見返りを得なければ果たすことができない。

だから、私は悪魔の誘いに乗った。全ては私自らの意志で決めたことだ。

ただ一つ、後悔があるとすれば、慎と出会うよりも早く全てに気付ければよかった。そうすれば、こんな想いをする必要なかったのだから。

私は震える指でケータイを取り、再び悪魔の誘いに乗った。

つづく

第二章 マイラ（後編）

——一週間後

今でも手に残っている。あの肉を切り裂く感触、砕け散る骨の感触、生温い血の感触。その全てが忌まわしい記憶の断片。しかし、それは消せない過去、消せない罪。

私の手は、血に塗れてしまった。

……これ以上は、もう思い出したくない。

とにかく、私は芝崎家の人間を一人殺した。しかし、まだ一人目だ。芝崎家は、日野塚市全体に影響力を持つ組織の古株。市中でも特に、私達が住まう園崎地域は、本家が所在しており、芝崎家の総本山とも言うべき場所。そこで身内が一人、しかも組織に深部に関わる人間が殺されたのだ。今、どのような事態になっているかは、わざわざ説明するまでもないだろう。

終焉はまだ遠い。私が殺さなければならぬ人間は、まだ腐るほどいる。それら全てを殺し尽くすまで、私は生き延びられるのだろうか。

「……ねえ、マイラ？ マイラ？」

「えっ？ 何？ ごめん、聞いてなかった……」

つい考え事に没頭してしまい、友人達の話を全く聞いてなかった。私は今、いつものように友人達と学校の屋上で昼食を食べていた。私がいかにボーっとしていたため、友人達が心配そうに私を見ていた。

友人の名は、沙雪と久里子。モデル並の魅惑ボディのくせにどこか自信がなく気弱なのが、沙雪。見た目気弱そうなのに中身は豪胆でとてつもなく強かなのが、久里子。容姿と性格が逆になっているが、その辺りのギャップが好きでいつも一緒にいる。

犬神学園の屋上は一般開放されており、昼休みは私達のように屋上で昼食をとる者が多い。また、バスケットも完備されており、遊びに来るものも多い。慎もよくバスケットをするため屋上に上がっていることがあった。もっとも当分来ることもないだろうが。

「……また、慎君のこと考えてた？」

「く、久里子……」

私と慎が別れたことは、すでに校内中の噂になっていた。元々私と慎は校内では有名だったし、意図してそういう噂を流されるような行動をした。友人達には、直接そのことを話していないが、私達のことはずでに聞き及んでいるだろう。

「……別に。私と慎はもう赤の他人だし、あいつのことを考える必要なんてないじゃん」

嘘だ。慎のことを忘れられるはずがない。付き合っている頃よりも、別れた今の方がよほど慎のことを考えている時間が長い。

「嘘だよ。だったら、何でいつも慎君がバスケットしてたコートばかり見てたの？ 噂じゃ、マイラが振ったってことになってるけど、本当は違うんじゃない？ だって、慎君、マイラと別れた翌日からあの幼馴染の子と一緒に通学してるみたいだし」

「何が言いたいのか、久里子？」

久里子、スイッチオンか……。彼女は一度スイッチが入ると、容赦というものが一切ない。

「ちょっと、マイラ、久里子……」

沙雪はオロオロとしながらも、私と久里子の仲裁に入ろうとした。しかし、気弱な彼女では、私達を止めることなどできるはずもなかった。

「慎君、浮気してたんじゃない？ それで、マイラ……」

「違うわよ！」

それはないはず。確かに慎は初音に甘くて、それが大分腹立たしかったけど、浮気はしてないはず。うん、多分……。……じ、自信はないけど。

「どうかな？　だったら、どうしてそんなにムキになるのかな？　変じゃない？　ううん、変だよ。それとも、もしかしたら元々慎君に対して潜在的にそういう不満があったのかもしれないね？」

「ぐっ……」

的確に私の心理を読み、一番痛いところを突いてくる。無意識に急所を突いてくる初音と違い、久里子は意図的に私の急所を狙っている。スイッチの入った久里子を相手に、舌戦ではいささか分が悪過ぎた。

「もし、そんな理由でマイラが傷付いたっていうんなら、ボクは慎君を許さないよ。引き摺ってでもマイラに謝らせてやるから。マイラがこんなにも辛い想いをしているのに、あの男は……」

久里子の言葉は厳しかった。しかし、その厳しさは私のことを思ってくれたから。

いい友達だ。こんな私なんかのために本気で怒ってくれて、悲しんでくれて。本当にいい友達だ。

「久里子、止めて……。お願いだから……」

でも、それでも慎を卑下するような言葉は止めて欲しい。

「悪いのは、私なの。私が、慎の他に好きな人ができたから……、勝手に振ったの……」

慎は悪くない。悪いのは、全て私だ。

だから、汚名は全て私が被らなければならぬ。血と罪に塗れた私には、惨めでみすばらしい汚名こそ、相応しいのだ。

「……嘘だよ。だったら、そんな未練のある顔をしないよ」

久里子は強い。普通なら、こんなに惨めな顔をしている私に、そんなことを言えない。

久里子は、私が傷付くとわかっていても、正しい道に導こうとしている。私なんかのために、汚れ役をやってくれる。それが、本当に嬉しい。

「……お願い。そういうことにして」

「……………」

私の言葉に、久里子は二の句を失ってしまった。

彼女なら、私を問い詰めるくらいの言葉くらい思い付いているだろう。しかし、久里子はもう何も言えなくなった。私がこれ以上傷付かぬよう、配慮してくれた。

「久里、もういいでしょ？ もうこの話題は止めよう。マイラにとっても、私達にとってもいいことなんて何もないんだから……。ね？」

先ほどまでオロオロとしていた沙雪が、私と久里子の肩を叩いて取り繕うように微笑んだ。そのぎこちない笑いで、私も久里子も気持ちが落ち着いた。

沙雪はいつも私達の間を取り持ってくれる。私と久里子の喧嘩だけでなく、慎との喧嘩なども何度か取り持ってくれた。

こういう険悪なムードではオロオロすることしかできないが、いつも最後まで諦めずに場を取り持ってくれるのが沙雪だ。今回の件も裏で彼女が、慎との復縁のために奔走してくれたことを、私は知っている。沙雪にも、本当に感謝している。

「忘れよう。きっと、それが一番いい……」

沙雪の意見は、逃避だ。問題から目を背け、残酷な真実から逃げていくだけに過ぎない。

しかし、今の私達にできる最善は、その逃避しかなかった。

悲しい。なんて悲しいのだろう。しかし、全ては私が招いたこと悲劇なのだ。私自らの意志で、この残酷で悲しい道を選んでしまったのだ。

――二ヵ月後

そして、季節は巡り、春が訪れた。

昔の私ならば、萌える若草の香りに心安らぎ、陽気の温もりに心踊っただろう。しかし、どれほど温かな陽気に包まれようと、私の心は未だに凍えるような冬が続いている。おそらく血と罪に塗れた私の心に、再び春が訪れることは永遠にないだろう。

失ったものはあまりにも多く、これから取り戻せるものもないだろう。だが、それでも私は咎人の道を進まなければいけないのだ。

今日は四月十日、入学式。あの芝崎初音が犬神学園に入学する日。

慎と初音が付き合っていることは、すでに公然の事実だった。今日も授業をサボって、彼女の入学を祝いに行っている。私の知っている慎は、わざわざ授業をサボってまで入学祝に行くような殊勝ではなかった。

今の慎は、すでに私の知っている慎ではなくなっている。

……大丈夫、私は大丈夫。もう苦しみも悲しみも、何も感じない。

「……それで、わざわざこんな場所に呼び出して、何の用？」

私はある人物に呼び出され、授業をサボって屋上に上がっていた。できることなら、学校では会いたくない人物であったが、私は逆ら

える立場ではなかった。

重い鉄扉を開き、屋上に出た。屋上は遮蔽物がなく見通しがよいので、その人物をすぐに見つけられた。フェンスに背を預け、私の来訪を待っていた。バスケットコートとベンチがいくつあるだけの屋上は今、私と私を呼び出した人物の二人しかいなかった。

「わざわざ呼び出して悪かったなあ、大神？」

「心にもないことを……」

彼は、沼影敦盛。私に隠匿された真実を教え、闇に引き込んだ張本人だ。

もちろん最初は、こんな怪しげな奴の言葉など信じていなかった。しかし、数々の証拠を見せ付けられ、私自身の手で組織のライブラリを検索した結果、彼の言葉が認めがたい最悪なものであっても、真実であると認めるしかなかった。

私達は利害の一致から手を組むことにした。しかし、それは組織に対する裏切りだった。

沼影の所属する組織は、『黒の派閥』と言う。元は白の派閥と袂同じく、清流会から派生した組織だったが、己が欲望のために道を踏み外した連中だ。ここ数十年間で抗争が激化し、禍根は尽きない関係だった。

「そう釣れないことを言わないでくれよ。僕達は仲間だろう？」

「……仲間、ねえ。一方的に手駒にされている気がしてならないんだけど？」

私が殺した人間の数はすでに三人。もう白の派閥も裏切り者の可能性を視野に入れているだろう。いや、すでに私は疑われている頃だ。

「自分にしてほしいことは他の人にするものだ。それが法律であり預言者なんだよ。」

まあ、こちらとしても、お前が信頼に足るか慎重になってたのさ。だが、喜べ。お前の働きを、上の連中は評価してくれた。これからは黒の派閥が責任を持って、お前をバックアップしよう。僕達は、晴れて仲間になったんだ」

「……………」

なるほど、堂々と学校で接触して来たと思ったら、そういうことか。これで正式に私は、『裏切り者』となった訳だ。

しかし、黒の派閥の一員となれたことは、私の宿命を達成するに必要なことだ。仲間と認められたことは喜ぶべきことだ。しかし、全く嬉しくない。所詮、罪によって得られた報酬だ。求めていたものとはいえ、素直に喜ぶべきではないのだろう。

「今度は僕達が信頼を見せる番だ」

「へえ？　じゃあ、だったら今すぐにも奴等のところに……」

「慌てるな。前にも言っただろう。奴等に挑むのは、そう簡単にかない。僕やお前だけでどうにかなる問題ではないんだよ。何事も定まった時期がるものだ」

「ちえ……。先はまだまだ長いか……」

私と沼影にとっての共通の敵は、あまりに強大だった。どれほど憎かろうとも、簡単に手を出せる相手ではないのだ。

「だが、これで確実に一步進む。受け取れ、大神」

沼影はそう言うと、私に向かって何かを放り投げてきた。

普通の人間の動体視力なら、飛んでくる何かの正体はわからなかっただろう。しかし、私の目は、その正体をはっきりと見極めた。

だから、避けた。

沼影から抛られた物は、甲高い音と立てながら転がっていった。もしかしたら、少し傷が付いたかもしれない。だとすると、少し勿体ない気もする。

「って、おい！？ 避けんなよ！？」

「あんたから貰う指輪なんて、怖気がするわ」

「心底嫌そうな顔すんなよ！ ちょっと凹むだろうが！」

沼影が私に向かって投げた物は、真鍮の指輪だった。

慎以外の男から指輪を貰うなんて、私の本能が受け付けない。それも、相手が沼影敦盛と言うなら、なおのことだ。反吐が出る。全身全霊で拒絶したい。

「お前なあ！ この期に及んで、ただの指輪を渡す訳がないだろうが！」

「…………えゝ、でも、あんたから貰う指輪ってだけで拒絶反応が……」

「ぐおお……。泣きたくなるようなこと言うな！ 黙って受け取れ！」

沼影は男としてのプライドを酷く傷付けられたようだが、私の知ったことではない。むしろ、清々するのしばらく凹んでいて欲しいくらいだ。

心底嫌だったが、私は仕方なく先ほど投げられた指輪を拾った。その瞬間、目の前が真っ黒に塗り潰された。

……………オ……………ロ……………セ……………。

「…………うう…………、ああああああ…………？ な、何、これはああ…………？」

指輪から得体の知れない何かが、私の心に押し寄せてきた。

得体のしれない何かはまるで蛇のように私の心に入り込み、猛毒の牙を突き立てた。全身に毒が回るかのごとく得体のしれない何かは私の心を塗り潰していった。

……ドウシテ私ダケガ苦シマナクチャイケナイドウシテ私ガ悲シマナケレバナライ私ガ一体何ヲシタト言ウノダ私ダケガ大切ナ人ヲ失イ人殺シヲシナケレバナライノダアノ忌々シイ芝崎ノ小娘ガ慎

ノ隣ニイルコトヲ許サレテイルノニ何故私ハ血塗レニナツテイル…。

これは、悪意だ。あまねく世界の全てを否定するような絶対悪。そんな凄まじい悪意の奔流が、指輪から私に注ぎ込まれるのを感じた。あらゆるものを妬み、憎みたくなる負の衝動が、私の心を塗り潰していった。

「意志を強く持て、大神。じゃなきゃ、そいつに喰われるぞ」

「……ッ!？」

沼影の声で正気を取り戻した私は、慌てて指輪から手を離した。一体、この得体の知れない指輪は何なのだろうか。まともな物ではないことは確かだ。下手をすれば、精神を崩壊するところだった。

「何、これ……?」

「まあ、睨むなよ。確かにろくでもない物だが、必ず役に立つ物だ」

沼影は不敵な笑みを浮かべ（正直、気持ち悪い）、得体の知れない指輪を拾い上げた。

「こいつは、『狼王の遺産』だ」

「お、『狼王の遺産』！？　ちよつと待って、狼王って、あの狼王ロボ？　あれって実在しないしなんじゃなかった？」

狼王ロボ。博物学者アーネスト・トンプリン・シートンの著書に登場する賢き狼。

十九世紀末、狼王ロボはニューメキシコ州の牧場で猛威を揮っていた狼の群れを束ねていた。悪魔が知恵を授けたと言われるほどに賢く、あらゆる罠を掻い潜って腕利きのハンター達でさえ捕まえることが出来なかった。

そこで牧場主は、野生動物の生態に詳しい博物学者アーネスト・トンプリン・シートンの助力を頼む。シートンは狼王の妻ブランカを捕獲し、伴侶を奪われて冷静さを欠いた狼王ロボを罠に捕らえた。しかし、狼王ロボを捕らえた時には、すでにブランカは息絶えており、かつての荒々しさを失ってしまった。

その後、捕らえられた狼王ロボは与えられた水や食料には一切口にせず、餓死した。シートンはその誇り高き狼王ロボの最期に敬意を表し、自身の卑劣さを恥じたという。

ただし、この話はシートンの狼狩りの体験談を統合して生まれた創作と言われている。少なくとも、多少の誇張がなければ、あそこまで賢い狼が存在するとは思えないからだ。

「そうだな。だが、人々は偉大なる狼王ロボの存在を信じた……」
「……まさか」

「信仰こそが全ての幻想の根源となる。あらゆる魔術の始まりは、信仰から生まれた。そして、多くの人が信じた狼王ロボの幻想が具現化した。しかし、幻想種として生まれた狼王ロボは再び人間に討たれることになった。幻想種、狼王ロボは殺される寸前、人間達の憎悪を形にした武器を残した。それこそが『狼王の遺産』だ。」

こいつは指輪の形をしているが、人間以外の者の魔力を吸収すると武器の形になる。現在、黒の派閥でも狼王の遺産の研究は進められているが、ほとんど解析不能と言うのが実情だ」

「……なるほど、確かに今の私にもっとも必要な物かもね……」

偉大なる狼王が残した憎悪の遺産。

人間への復讐のために生まれた武器こそ私に相応しいかもしれない。狼王ロボ、誇り高き人狼の末裔としてお願い申し上げます。私に一族の仇を討つための御力を与えてください。

「求めよ、さらば与えられんって奴だな。それは今のお前に与えられた悪魔からの贈り物だ。」

その狼王の遺産は僕等黒の派閥にとっても重要な宝具だ。これをお前に渡すという意味、わかるな？」

「……信頼されたってこと？」

「まあ、好意的に見ればな。だが、知ってのとおり、狼王の遺産は使用者に災いを招くと言われている呪われた品だ。誰も使いたがらない。しかし、研究のためには、実際に使用したデータが欲しい」

「……ああ、つまりは実験動物扱いってことね」

どうやら黒の派閥にとって、私はただの使い捨ての駒らしい。魔具を持ち逃げしない程度の信頼が置き、なおかつ魔具の災いで狂っても死んでも構わないような便利な駒。

いいさ、利用したければ好きにだけ利用すればいい。私も黒の派閥を利用してやるつもりだったのだから。

「悪く思うなよ。互いに利用し合うのが、ウチのモットーだからな」
「嫌なモットーね……」

沼影の顔を見ているのがウンザリしてきた私は、彼に背を向けた。屋上のフェンスに半身を預け、私は講堂へと目を向けた。この時間なら、すでに入学式が終わった頃。私の視線は、無意識のうちに慎の姿を追っていた。

慎は、初音の側にいるはず。彼等と一緒にいる姿を見ても、辛いだけなのに、それでも私は慎の姿を捜してしまう。

そして、運良く、いや、運悪くかもしれない。私は探し人の姿を見つけてしまった。しかも、予想どおり、あの子と一緒にいるところを。

「……ッ!？」

慎が私の視線に気付いた。

穂村慎。二ヶ月前まで私が付き合っていた人物が、校舎の前庭から

私を見上げていた。私の存在に気付き、とても寂しげな瞳で私だけを見つめていた。

今の彼には、私の姿しか目に映っていない。しかし、それだけだ。彼の隣にいるのは、私ではない。あの芝崎初音だ。

慎はあの子と幸せな時を過ごしているのかな……？

あの二人が何をしているのか気になって仕方がない。しかし、もう私と慎は何の関係も赤の他人同士。あそこに踏み込むことはできない。

「……まだ、奴に気があるのか？ くっくくく……」

「……私は自らの意志で、血塗れの道を行くと決めた。だから、今更引き返せないわ」

まだ心は痛む。

だけど、私は血塗れの道を進むと決めた。

私は仲睦まじい慎達から目を逸らしたかった。しかし、私の想いは未だに慎に繋がっていた。去り行こうとする慎達に、私は思わず叫びかけた。いや、もしかしたら叫んでいたのかもしれない。

慎は振り向き、もう一度私を見つめてくれた。

『……ごめん、ごめんなさい、慎……』

『マイラ……？』

交錯する私と慎の視線が、距離を越えて互いの意思を伝えてくるように思えた。もちろん声が聞こえる訳ではない。しかし、特別な想いを重ねた私達だからこそ、言葉では表せない何かで繋がっているのかもしれない。

『許してなんて言える立場じゃないのはわかってる。だけど、お願い。貴方を傷付けたこと、謝らせて……。勝手なことをして、傷付けて、ごめん……。』

『……馬鹿。謝るのは俺の方だ。俺はずっとお前に甘えてばかりだった……。お前はいつも俺を支えてくれたのに、俺は何もできなかった……。』

『……そんなことないよ、慎。私も慎にたくさん支えてもらった。でも、ごめん、裏切って……。悪いのは、全部私なんだよ。私が、慎を好きになっちゃったから……。慎まで巻き込んで、傷付けちゃった……。』

『だとしても、俺にも非はあったさ。実際、お前と別れてすぐに女作ってるロクデナシだからな』

『……慎は、やっぱりその子と一緒に行くの……？』

『ああ、そうだ。……だから、これでお別れだ、マイラ』

『そう、だね。さよなら、慎……。』

そこで私達の繋がりとは断たれた。

もう二度と、こうして心を通わすことはないだろう。私と慎はそれぞれ別の道を行くと決めたのだから。彼はあの子と共に真っ直ぐと眩い未来に向かっていくだろう。しかし、私が進の血と罪に塗れた闇の道。もう二度と二人の道が交わることはない。

私は居た堪れなくなり、慎から視線を逸らした。

慎の側にいられなくなって、嫌というほど思い知らされた。

私、こんなにも慎のことが好きだったんだ……。

「沼影、狼王の遺産を……」

「……………」

沼影は無言で、私に狼王の遺産を渡した。

再度押し寄せてくる荒々しい狼王の憎悪。しかし、私はこんな悪意などに負けない。課せられた宿命を全うするまでは、絶対に。

「行こう……。血塗れの道を……」

「ああ、付き合ってやるよ。僕の求める道も、お前の行く先にあるからな」

「うん……。ありがとう……」

狼王の遺産を手にし、私は血塗れの道を歩いていく。

しかし、この時の私はまだ知る由もなかった。狼王の遺産を手にした瞬間から、私の運命は破滅に向かっていたということに。残酷で無慈悲な道の先にあるのは、ただただ絶望だけの未来しかなかったのだ。

すでにどう足掻いても救われない絶望の中にいるということに、私はまだ気付いていなかった。そして、それに気付いた時にはもう何もかも手遅れだった。

つづく

閑話 彼がネクタイを結ばない理由

意外かもしれないが、慎は毎朝五キロのランニングを行っている。
この日課は元々、不良の頃に吸っていた煙草の毒を吐き出させるために始めたものだった。最初は渋々マイラに引っ張られて、慎は走っていた。しかし、マイラに追い付けないことが悔しくて、日に日に力を入れるようになった。そして、いつしかマイラの付き添いもなくなるとも、毎日一人で走るようになっていた。

今日は、慎とマイラが私立犬神学園に初登校する日だった。つまり、あの悲しい別れの約一年前。

いつもよりも早めにランニングを切り上げた慎は、熱いシャワーを浴び、髪を整え、真新しい制服に袖を通した。

犬神学園の制服は、深緑色を基調としたブレザーだ。慎自身、この制服が自分に似合っているとは思っていなかったが、早くマイラの制服姿を見たいと思っていた。彼女なら、この深緑色の制服が似合うと確信していた。

「ん……？ ネクタイってどう結ぶんだ……？」

慎は今まで自分でネクタイを結ぶような機会はなかった。中学時代は学ランであつたし、共働きでいつも忙しかった両親からネクタイの結び方について教わる機会もなかった。

慎は何とか自分一人で結べないかと悪戦苦闘したが、結局は敗戦した。今まで一度もネクタイを結んだことのない慎に、自己流結びは難しかったようだ。

「……ま、いつか。こんなもんでも」

元不良の身分なのでネクタイの一つや二つ結ばなくても構わないだろう、という考えに至った慎は、早々にネクタイ結びを諦めた。ちようどその時、アパートの呼び鈴が鳴った（この時はまだ呼び鈴は壊れていなかった）。

「開いてるぞ」

「チャッス、慎！」

来訪者はマイラだった。先日、一緒に登校しよう、と約束していたので、慎を迎えに来たのだろう。

マイラは開けた扉の隙間から顔だけを出していた。顔だけしか見えないので、彼女の可愛い制服姿は見えなかった。

マイラの制服姿が見られない慎は菌痒かっただろうが、初めて着る制服を慎に見せるのが恥ずかしいマイラの乙女心も推し量るべきだろう。

「えへへ……。慎の制服姿、格好いいよ……」

顔を赤らめ、はにかんだ笑みを浮かべるマイラ。

普段の明るくお転婆な調子からは想像できないほど、しおらしく可愛らしい。

「お前だけずるいぞ。俺にも、お前の制服姿、見せろよ」

「うっ……。でも、恥ずかしいよ……」

「何恥ずかしがってんだよ。これから毎日見ることになるんだぞ」

早くマイラの制服姿が見たい慎は、そわそわして落ち着きがない。

「わ、笑わない？」

「笑わねえよ。いいから見せろ」

「わ、わかったわよ！ 見せればいいんでしょ、見せれば！」

マイラは覚悟を決め、勢いよく扉を開けた。

深緑色を基調としたブレザーの制服をまとったマイラは、真新しい制服以上に初々しく、抱き締めたくなるほど可愛らしかった。初めこそ大きな胸を仰け反らせ、虚勢を張っていた。しかし、何の反応も内心の様子を見て、だんだんと不安になり、身を縮こまらせた。

一方、慎はマイラの初々しい可愛さに目を奪われ、完全に惚けていた。声を出すのも忘れるくらい彼女の制服姿に見惚れていた。

「ど、どう、かな……。？　へ、変……。？　似合って、ない……。？」

「あ……。いや……」

マイラに見惚れていた慎は気の利いたセリフも言えないくらい思考回路が混線していた。

しかし、その慎の反応がマイラを不安にさせてしまった。

「あ、あははは……。やっぱ、私なんかじゃ、似合わないか……。そ、そうだね。やっぱ、こういうのは日本人の方が似合うもんね……。私みたいなイギリス人には似合わなくて当然か……」

「……や、いや、そんなことない！ 凄く似合ってる！」

ようやく思考回路が回復した慎は、慌ててマイラの制服姿を褒めた。しかし、時すでに遅かった。

「いいよ、そんなフォロー入れてくれなくても……。ごめんね、変な気を使わせて……」

マイラの瞳には薄っすらと涙が滲んでいた。

マイラは決して心の強い娘ではない。慎との関係にいつも不安を抱えている。唐突に彼との関係が終わってしまうことにいつも怯えていた。

彼女は純血のウェアウルフであり、本来は人間と結ばれてはいけない存在。慎に肉体関係を求められても応えられない。慎も男である以上、マイラと肉体関係を結びたいだろう。彼がマイラを愛しているのなら当然の願望であり、またそうした気持ちがなくなることはすなわちマイラへの気持ち冷めたということになる。慎の欲求を拒むことは、いずれ破局に繋がる。

いつか慎に振られてしまう。それがマイラにとって最大の不安であり、恐怖であった。

「ち、違えよ、馬鹿！ フォローとか、そんなんじゃない！ 俺は

ただ、お前に見惚れて、何も言えなかっただけで……って、何言っ
てんだ、俺は!？」

慌てて口を噤むが、恥ずかしい失言はもう戻らない。覆水は決して
盆には返らないのが世の常だった。彼の失言はしっかりとマイラの
耳に届いてしまった。

「し、慎……。そうなんだ……。見惚れてくれたんだ……」

「ば、馬鹿! そのにやけた顔止めろ! くそ!」

あまりの恥ずかしさで、慎の顔は焼けるように熱くなっていた。
一方、マイラはすっかり機嫌をよくし、満面の笑みを浮かべていた。
見ている方が幸せになるような、そんな屈託のない笑顔だった。

「えへへ、慎。この制服、似合ってるかな？」

「あ、ああ、似合ってるよ……」

「ありがと、慎!」

マイラはまるで尻尾をはちきれんばかりに振る犬のように慎に飛び
付いた。

慎は彼女の勢いに吹き飛ばされ、たたらを踏みながらも何とか堪え
た。以前に何度も押し倒されて気まずいことになった経験があった
ので、彼はある程度学習したのだ。彼女は一向に学習する気はない
ようだが。

「外でこんな恥ずかしい真似すんなよ……」

「あははは、わかってるよ！　こんなことするのは、慎の前でだけだもん」

「あ、阿保……。恥ずかしいこと言うな……」

慎は顔を真っ赤にしてマイラから顔を背けた。そんな彼の様子がおかしくて、マイラは慎の胸に頭を預けたまま、くすりと微笑んだ。

「慎……」

「何だ？」

「大好きだよ、慎……。私、人間をこんなにも好きになれる時が来るなんて、思ってもみなかった。多分、こんなに人を愛しく思うことなんて、もう私の生涯でないと思う」

この言葉は、マイラにとって偽りない本音だった。

まさかただの人間をここまで好きになるとは、昔のマイラには想像すらできなかっただろう。しかも、同族ではなく、本当にただの人間を好きになってしまった。誇りあるウェアウルフからすれば、人間を愛することは血の冒涇であり、至上の罪。許されないことはわかっていたが、それでも止められないほど彼女の想いは強かった。

しかし、二人の関係はいずれ破局する。たとえば、マイラにあの覚悟がないとしても、彼女にはウェアウルフの誇りは捨てられない。だからこそ、この関係は必ず崩れ去るのだ。

「ああ、俺もこんなにお前を好きになるなんて思ってみなかった」
「あははは……、ありがと……」

切ない。いつか終焉が訪れると知っているから。ずっとこのままでもいい。

マイラは零れそうになった涙を堪え、満面の笑みを浮かべた。自分の悲しみで慎を苦しませたくなかったから。しかし、自分の存在がいずれ彼を傷付けると知っていたからこそ、胸が張り裂けんばかりに痛んだ。

「あつ、慎……。ネクタイはどうしたの？」

「あ、ああ……、別にネクタイなんかなくなってたって……」

「あゝ、結べないんだ、ネクタイ？」

「ば、馬鹿！ 違えよ！」

「隠さなくていいからゝ。ほら、私が結んであげるよ」

女々しく言い訳を続ける慎を無視して、マイラは彼のネクタイを手にとった。そして、嬉々とした笑顔のマイラは慣れた手付きで慎のネクタイを結んだ。

が、失敗。ネクタイは歪な形になってしまった。

「あ、あれ？ 何で？ こ、このおゝ、今度こそ！ ふえゝ？ どうして？」

マイラは再び結び直すが、上手く結べなかった。ムキになったマイラはその後も挑戦し続けるが、結局彼女が慎のネクタイを結べることはなかった。

ネクタイ結びに奮闘するマイラが可愛くて、慎はそれ以後自分でネクタイを結ばないようになった。暇があれば、マイラにネクタイを結ばせるが、彼女がネクタイ結びに成功した試しはなかった。

閑話休題、三章「編入生と切り裂き魔」へ……

第三章 編入生と切り裂き魔（前編）

日野塚通り魔殺人事件。

俺とマイラが別れた当日から起こり始めた殺人事件。事件から二ヶ月経った今も解決の見通しはおろか、犯人の手掛かりさえ発見できずにいる。しかも、初めは無差別な通り魔殺人かと思われていたが、犠牲者が増えるにつれて犯人の明確な目的が見えてきた。

現在、被害者は四人。そして、被害者の姓は全て『芝崎』。つまり、犯人の標的は明確に芝崎姓だけを狙っているということだ。

芝崎家はこの地方でもっとも栄えた名家だ。古き華族の家系で、初音の家はかなり序列の高いらしい。つまり、初音は結構なお嬢様だそうだ（とてもそうは見えないが）。それと、芝崎家は江戸の時代から明治六年の禁教令が發布するまで、隠れキリシタンを保護していた敬虔なキリスト教徒の家系だそうだ。

元華族だとか、クリスチャンだとかは、この際どうでもいい。訳のわからない異常者に、芝崎家が狙われている、ということが問題だ。芝崎、という理由だけで初音に害が及ぶ可能性があるかもしれないのだから。初音と付き合い出した俺にとって、この事件は無視できないものだった。

それに、何故かこの事件は気になるのだ。理由はわからないが、無視できない何か、この事件にはあるような気がしてならない。いつしか俺は探偵の真似事を始め、この事件を追うようになっていた。

「……ここが、昨日の事件現場か……」

昨日、新たな犠牲者が出た。俺は早朝ランニングのついでに、その殺人現場に寄った。

殺人現場は、日野塚第三教会。ブルーシートとテープで封鎖され、中の様子は窺えないが、殺人現場から察するに被害者は、牧師さんだろう。そして、おそらく芝崎の人間であることも間違いない。この町のキリスト教関連の施設には、全て芝崎家に関わっているといっても過言ではないのだから。

それにしても、すでに通り魔事件ではなくなっている。近いうちに、報道でも『芝崎家殺人事件』とでも言い換えられるかもしれない。俺は詳しい話を聞くべく、教会前にいる警官に声を掛けた。

「すみません。聞きたいことがあるんすけど……」

「ん？ ああ、穂村の悪ガキじゃないか？ どうした？」

俺は何度か警察のお世話になっているため、警官にも顔見知りが多い。まさか、そんなことが今になって役に立つとは思ってもみなかった。

「これって例の通り魔殺人、ツスよね？」

「ん……。一応、そういうことは言えないんだよ。大体、野次馬根性でこんな事件に首突っ込むな」

「頼んマスよ。俺の彼女が、その芝崎なんで。気になるんすよ」

「ん……、お前の彼女が、あの芝崎なのか……」

この事件が、芝崎家を狙ったものだということは、すでに周知のことだ。

ここで俺が芝崎の子と付き合っているとえば（まあ、実際付き合っているし……）、警官も事情を汲み取って話してくれるだろう。

「……ん、まあ、そういうことなら特別だぞ。絶対に言い触らすなよ。」

お前の推察どおり、殺されたのはまた芝崎家の人間だよ。ガイシヤは、芝崎九郎。この教会の牧師だ。芝崎家の中では序列は低いんだが、牧師ってことでかなり優遇されていたらしい。まあ、芝崎家は序列を重要視するらしいんだが、成果を出せる者には抜擢や優遇もあるようだな。芝崎九郎も、実力で本家から認められた者の一人だそうだ」

「そういえば、初音も前に言ってたな。序列が高くて、実力がないと見限られるって……」

古臭い慣習があるくせに実力主義って、矛盾しているような気がするな……。まあ、どうせ他人の家のことだし、気にすることもないか……。

「それとな……、この事件、もしかしたら今までの事件とは関わりがないかもしれないんだ」

「は？　　どういうことッスか？」

「前の三件は、背後から鋭利な刃物で刺し殺しただけの大人しいものだったんだが……、今回はちよつと毛色が違う。まあ、中を見せる訳にはいけないんだが、遺体はかなりズタボロにやられててな。多分、凶器は今までの事件とは全くの別物だったのが、素人目でも簡単にわかる。それに、激しく争った形跡もあってな……。一筋縄にいかない事件だよ……」

どういふことなんだ……？

この教会の事件は、今までの通り魔事件と違うのか……？

殺されたのは確かに芝崎家の人間だが、殺しの手口があまりに違う。もしかしたら、全く別の人間の犯行かもしれないが、この期に及んで別人がこんなことを起こすとは思え辛い。おそらく同一犯だろうと思う。だとしたら、何故手口を変えるのだろうか？

もしかしたら、犯人側の都合が変わったのかのか……？

「まあ、本官が言えることはここまでだ。ほら、行った行った」

くそッ、結局余計に混乱したな……。

「いろいろ教えてくれてありがとうごさいやした」

「まあ、彼女を守ってやれよ。あと、もう二度と警察の世話になるようなことをするな」

「へい。その辺は骨身に染みてるツスから、安心してくだせえ！」

初音は俺の命に代えても守ってみせる。ようやく取り戻した幸せなんだ。こんな訳のわからない殺人鬼なんかに奪われてなるものか。それに、警察の世話になるようなことも金輪際ない。俺はもう更正

した。マイラとの過ごした思い出を否定するようなことは絶対にしない。

「じゃあ、失礼しやす」

俺は警官に一礼をし、殺人現場に背を向け、ランニングの続きを始めた。

その時、視界の片隅に一人の少女の姿が映った。その少女は、じつと俺のことを窺うような目で見つめていた。いや、それは少し言い過ぎた表現かもしれない。ただ俺の姿を見かけたただけなのかもしれない。

「あいつは……」

俺はあの少女の名を知っている。

彼女は、逢瀬美夜。今年度から犬神学園に編入し、現在は俺と同じ二年D組のクラスメイトだ。そして、今ではマイラの友人の一人となっている。

そんな彼女が何故こんな場所にいて、俺のことを見ているのだろうか。俺は彼女を見つめながらそんな疑問を思った。しかし、逢瀬美夜は俺の視線に気付くと、十字路の向こうへと消えていった。

ランニングから戻ると、美味しそうな味噌汁の香りが鼻をくすぐった。

恋人宣言をしてから、初音は毎日朝飯を作りに来ている。例の通り魔事件があるので、来なくてもいい、と言っているのだが、全く聞く耳を持たない。早朝ランニングの時間を早くして彼女を迎えに行くべきなのかもしれない、とも考え始めていた。しかし、それはあまりに図々しいような気がして、なかなか実行する気にはなれなかった。

それに、俺は初音の糞親父とは相性が悪い。それはもう恐ろしく悪い。できることなら、わざわざ迎えに行つて遭遇するなんてことは避けたかった。

「おかえりなさい、慎さん」

「おう、ただいま」

「慎さん、今日のお弁当は慎さんの激辛麻婆茄子ですよ」

「そりゃ楽しみだ」

初音が作ってくれる料理は、本当に俺の好みを射ている。初音は辛党なので、マイラの時のように飯で喧嘩することもなかった。

「じゃ、シャワー浴びるわ」

俺はバスルームに入り、バンダナを外した。

このバンダナは、マイラから貰ったものだった。ランニング時には必ず着けているのだが、そろそろ捨てようかと考えていた。もう未練は振り切らないと、初音に申し訳がないからだ。

思い切って今、捨てちまおうか……。

「……………」

……ぐっ、意気地がないな、俺……。こんなだから、初音にはヘタレ扱いされるんだな……。

バンダナを棚に置き、俺は熱いシャワーを浴びに行った。

もつとしっかりしないと、マイラにも馬鹿にされちまうな……。

カラスの行水を済ませ、さっさと髪を整えると、俺は食卓へと急いだ。初音と付き合い出してから、朝飯が俺の楽しみの一つとなっていた。

「初音、今日の朝飯は？」

「鰯の開きとウチで漬けてきた漬物、それと大根の味噌汁です。後は昨日の残りの肉じゃがですよ」

「お前の家の漬物か。あれ、美味しいよなあ」

「そりゃ、先祖伝来の製法を継いでますからね。美味しくて当然です！」

初音はただの腹？小娘のように見えて、意外に万能少女だった。頭脳明晰で、わざわざ犬神学園のような普通の高校ではなく、県内一の進学校にも進める成績を有している。運動神経は並の男では太

刀打ちができないほどのものがあり（野球部全員を下僕にした経歴あり）、居合いの腕前は達人並だとか。もちろん、炊事洗濯は完璧にこなし、華道や茶道も文句のない腕前らしい。

ただの口喧しい小娘のように見えて、実は凄い少女なのだ。特に居合いの技を見せられてからは、二度と喧嘩はするまいと誓った（まあ、その三日後にその誓いは破られたが）。初音の奴、刀を握るとまるで別人みたいに目付きが変わり、かなり怖い。

それにしても、何故俺が付き合う女は、こうも俺より強くて恐ろしい奴ばかりなのだろうか。マイラにも喧嘩やスポーツで勝てた試しはなかった。

……ちなみに、俺が弱いとか、運動神経がない、とかではない。これでも体育の成績だけはずっと最高評価を取り続けてきた（授業をサボっていい時期に限るが）。マラソン大会では本命陸上部を押さえて優勝した経験もある。マイラや初音の運動能力が異常なのだ。

「あつ、慎さん。悪いんですけど、今日からは一緒に帰れなくなりました」

「ん？ 何でだ？」

「逢瀬先輩に剣を教えてくれて頼まれて……、その、断れなくて……。居合い部に入部することになっちゃったんです」

居合い部なんて、ウチの学園にあったのか……。

まあ、ウチの高校は運動系の部活に特に力を入れているからな。そ

ういうマイナーな部活があっても不思議ではない。実際、学園七不思議の一つに、部員が誰もいないのに廃部にならない運動部ってのがある。ちなみに、情報源はマイラの友人だ。

それより、今気になる奴の名前が聞こえたな。

「逢瀬先輩って……、もしかして、逢瀬美夜か？」

「はい、そうです。同じクラスのはずですよね？」

「まあ、な……」

ついさっき見かけた、と言おうかと思ったが、止めた。こんな朝っぱらから、逢瀬を見かけたなど、彼女の視点から見ればかなり不審に思えるだろう。初音はマイラ以上に嫉妬深いので、余計な火種は起こさない方がいい。

「あいつ、居合い部に入ったのか？ 似合わねえ……。っていうか、想像できねえ」

逢瀬美夜を一言で表すなら、チビッコだ。とにかく小さくて、とても高校生とは思えない。よくて中学生、悪くて小学生ってところだ。しかも、かなりの天然でお世辞にも運動神経が良さそうには見えなかった。

「まあ、ぶっちゃけ、技術も実力も全然駄目ですし、才能の欠片も見当たりません。あそこまで見込みのない人は、滅多にいないでしょうね。おまけに使ってる刀も彼女には分不相応です。チビっこのくせに三尺近い長刀使おうなんておこがましいにも程があります」

ひ、酷え……、そこまで言うか……。

「……でも、あの意気込みは半端じゃないです。正直、あそこまで意志の強い人を、私は初めて見ました」

「……悪いが、想像できないな」

俺の逢瀬美夜の印象は、一人じゃ寂しくて死んじやうウサギみたいな奴、だ。とても意志が強いようには見えない。悪口の一つでも言ったら、すぐに泣き出しそうなチビッコだ。

「わかりますよ、その気持ち。私もそうでしたし」

「まあ、それで、あのチビッコ逢瀬に剣を教えることになったのか？」

俺の言葉に、初音は申し訳なさそうに頷いた。

「はい……。ごめんなさい……。わざわざ私を心配して、毎日送ってくれてるのに……」

「阿保、物騒な殺人鬼がいるんだぞ。放っておけるか。今日も部活終わるまで待っててやるよ。彼女を守るのは彼氏の役目だろう？」

「慎さん……」

初音は感極まったように目を潤ませた。

初音は恋人扱いされるのに弱い。今まで散々な扱いばかりだったから、嬉しいやら恥ずかしいやら、いろいろ戸惑っているのだろう。

「ほら、そろそろ出るぞ」

「はい！」

それにしても、あのチビッコ転校生が居合いをやってるとはねえ…。

昼休み。俺は弁当（初音特製）を食いながら、逢瀬美夜の姿を目で追っていた。彼女には悪いが、居合いどころか、刀さえ似合わないような感じた。

「チビッコ、確保」

「うにゃあ、止めてください、マイちゃん」

ああ、ちなみに「チビッコ、確保」と言って逢瀬にじゃれ付いているのは、マイラだ。マイラは最近逢瀬を玩具にして遊ぶことが多い。というか、逢瀬はいろいろな人間にいじられている。まあ、誰からも愛されるタイプといえれば聞こえはいいが、単純にからかい甲斐があるだけのようないでもない。

逢瀬と友達になってから、マイラは随分と明るくなった気がする。俺と別れたばかりの二月三月の時期はかなり暗い雰囲気だったが、逢瀬と友達になってからは以前の暗い雰囲気を全く見せていない。

そういう意味では、逢瀬に感謝したい気分だ。

……まあ、もう俺はマイラの彼氏でも何でもないんだけどな……。

「美夜、誰がワンコみたいだって？ ん？ あんたなんかただのチビッコじゃない？ ええ？」

「うう、チビッコじゃないです！ チビって言う方がチビなんです！」

まるでじゃれ合うワンコとニャンコだな……。喧嘩のレベルが非常に低レベルだ。それと、チビと言ったからといっても相手がチビとは限らないだろう。

「ちょ、ちよつと、マイラも美夜も喧嘩はよくな……」

「うっさい、沙雪！ これは私のプライドの問題なの！ よりもよって、このチビッコは、私のことをワンコ扱いして」

「マイちゃんだって私のこと、チビッコ扱いしました！ しかも、朝から合わせて一〇回以上はチビって言いました！ 酷いです！」

マイラは犬扱いされるとすぐ怒るが、逢瀬はチビと言われるとすぐ怒るらしい。

あの気弱な沙雪では止められないだろうな。沙雪は俺とマイラの喧嘩した時も止めにきていたが、一度も止められたことはなかった。しかし、彼女のおかげで仲直りできたことも多かった。

「久里。お願い、二人を止めて……」

「え、ボクが……？ 全く、仕方ないなあ」

おっ、出るか、鬼の久里子。

口先でも腕尽くでも、誰も勝てない無敵お嬢様。見た目は深窓の令嬢を思わせるのに、その実態は鬼か悪魔か、修羅か羅刹か。以前、躊躇なく股間を蹴られた覚えがある。その日は一日中保健室のベッドの上だった。

とにかく、久里子に勝てる奴なんて、マイラか初音くらいだろう。まあ、今回みたいなつまらない喧嘩なら簡単に止めてくれるはず。

「はいはい、ワンコ&チビッコ、喧嘩ストロップ！」

「誰がワンコよ！」 「チビッコって言わないでください！」

「やかましい!!」

久里子は二人の頭をぐいっと引っ掴むと、ガツン、と凄まじい音が出るぐらいにぶつけた。その動作には一片の容赦も躊躇もなく、渾身の力を込めてやがった。

……だ、大丈夫か、マイラも逢瀬も……。ピクリとも動かないが、
気絶しただけだよな……？

久里子は気絶した二人の襟元を掴むと、億劫そうに二人を保健室へ引き摺っていった。沙雪はあまりのことにしばらく呆けていたが、正気を取り戻すと久里子を追っていった。

「……相変わらずおっそろしい奴だな。あのマロン野郎は……」

姦しい四人組が去り、俺は友人の仁^{じん}に声を掛けた。

「……ああ」

素っ気ない返事で返す仁。

別に機嫌が悪いとか、疲れているとか、そういう訳ではない。仁はとにかく寡黙で口数が異常に少ない。相槌を打つだけ今日はマシな方だ。普段から愛想など欠片もない奴で、いろいろ余計な誤解を招いてしまう奴なのだ。おまけに、右頬と左目辺りに凄まじい傷跡があり（それがなけりゃ、かなり美形の部類に入るんだが）、人を威圧する雰囲気が出ている。

それと、仁はマイラの再従弟で、イギリス人のハーフだ。彼と知り合うキッカケもマイラだった。

この無愛想野郎と話す奴なんぞ、俺かマイラ（沙雪と久里子も、マイラと一緒に話したりする）くらいだろう。あとは、誰に対しても人当たりのいい逢瀬くらいだ。

「それにしても、面白い奴だよな、あの逢瀬って奴」

「……ああ。いつの間にかクラスの中心になってるからな……。不思議な奴だ……」

おお、こいつが相槌以外のセリフ吐くなんて珍しいな。
もしかして、こいつ、逢瀬のことかなり気に入ってるのか……？

「クラスの中心っていうか、クラスの愛玩動物っていう感じだけだな？」

「……そうだな」

逢瀬はちっこいくせに人の目を引く不思議な魅力がある。彼女自身の人懐っこい性格なのか、それとも親しみやすいキャラクター性なのかはわからないが、人に注目されやすい。いつの間にかクラス委員に抜擢されていた（担任の徳島の指名）。

まあ、忙しく働き回る様子なんかは、見えて面白いものがある。
何というか、小学校の頃にクラスで飼っていた愛玩動物みたいな感じか……？

「ああ、そういや、初音から聞いたんだけど、あいつって居合い部らしいぞ」

「……知ってる」

「知ってる？ 何でお前がそんなことを？」

「……俺も、美夜と芝崎に居合い部に引き込まれた……」

ほお、美夜、ですかあ？

これはこれは、とっても面白いねえ。俺やマイラが名前で呼び捨てにされるのはわかるが、どうして転校してきたばかりの逢瀬を呼び捨てにするのかね？ ちよつと、さっきの推理が冗談じゃなくなってきたかもしれないな。

「へえ、お前があ？ ふん」

「……何だ、その笑いは？」

「いやいや、仁君は『美夜ちゃん』のために、わっざわざ部活に入ったりするのかあ。随分と優しくなったなあ？ ん？」

仁は珍しく、本当に珍しく気まずそうな顔になった。仁が表情変化を起こすなんて、かなりレアだ。一ヶ月に一度見られるか見られないかくらいの珍事だ。

「……別に美夜のためでは……」

「美・夜？ 随分と親しげだな？ そういや、逢瀬もお前のこと、仁君？ って呼ぶよな？ そのへんどうなん？」

「……………」

おお、怒ってる怒ってる。元の顔が大分人相悪いから、かなり迫力

がある。しかし、俺には通用しない。厳つい野郎の面は見慣れているからな。初音の親父とか、最高に悪人面だ。

それにしても、仁がこんなに感情をあらわにするなんて明日は槍でも振るんじゃないか？ それとも、仁にこんな感情を引き出させた逢瀬が凄いのか？

どっちにしても、興味深い奴だな、逢瀬は……。

「あははは！ お前にも春が来るなんてな。応援してやるよ」

「……………」

おお……、マジで殺気立ってやがる……。

け、結構怖いな……。そろそろこのネタでからかうの止めよう。爆発寸前の危険状態だ。こいつに限ってないだろうが、我を忘れて殴り掛かってきたりするかもしれないし。

ぶっちゃけ、仁とガチなんてゾツとしねえからな……。

「ま、まあ、冗談はさておき、だ……。あの事件に、新たな犠牲者が出たの、知ってるだろう？」

仁はボーっとしているようで意外に情報には敏感だ。どうしてこの人付き合いの悪い朴念仁がこんなにも情報収集能力があるのかは疑問だが、その情報の信頼度はかなりのものだ。今まで間違ったことを教えられたことは一度もない。

この連続通り魔殺人事件についての情報も、半分は仁から伝え聞いたものだ。

「……ああ。昨日、第三教会の牧師が殺されたな」

「今日、ランニングのついでに現場に行って、知り合いの警官に聞いたんだけど、今回の事件は今までの通り魔事件とやり方がずいぶん違うらしいんだ」

「……らしいな。だが、これは同一犯で間違いない……」

仁は迷わず、一連の事件は同一犯である、と断言した。

これまで三件の事件は同一犯と見て問題ないだろう。犯行時刻や場所、手法などがほぼ同一で、尚且つ被害者に、芝崎、という共通点があった。

しかし、教会の事件はあまりに毛色が違う。屋内で犯行が行われ、激しく争った形跡があった。遺体も酷く損傷されていたらしく、凶器も今までの事件に用いられたものと違う。

「……二人目を殺されて以来、芝崎家の警戒レベルはかなり上がっている。特に序列の高い家の警戒レベルは、かなりのものだ」

「だけど、初音なんか一人でウチに来ているぞ？」

「……そんな訳ないだろう。送りは車。昼夜を問わずSPが監視。これぐらいされているはずだ」

まあ、あれでお嬢様だからな、あいつ……。影でそれぐらいされていても不思議ではないか。というか、この物騒なご時世に一人で出歩くほど馬鹿ではないか。

「一体、この事件の犯人は何者なんだ？　芝崎家に恨みがある奴ってことは間違いないんだろうけど……」

「……芝崎家に恨みを持つ者など、吐いて捨てるほどいる。それに、あれだけ巨大な影響力のある一族だ。恨みがなくとも、命を狙われることも多い。」

殺された者達は、芝崎家の中でも序列が高く、実力の認められた芝崎家の中枢となる人物ばかりだ。彼等も何度か修羅場を潜った猛者であるにも拘らず、殺された。犯人は相当の手練れに違いない。芝崎家全体の警戒が強まったため、殺り方を変えてきたんだろう」

つまり、初めから、ただの通り魔ではない、と芝崎家は判断していたのか。

それにしても、仁が気になることを言ったな。殺されたのは序列の高い者ばかり、と。初音は確か、かなり序列の高い家柄だったはずだ。あいつに害が及ぶ可能性は、やはり高いのだろうか。

「……仁、初音の家って芝崎家でもかなり序列が高いんだよね？」

「……ああ、序列二位だからな。分家筋ではもつとも高い」

「な、何！？」

それじゃあ、あいつってマジで相当なお嬢様じゃねえか！　あの芝

崎家の中で序列二位の家柄って、相当なもんだろう……。

「……だが、安心しろ、慎。いくらこの犯人でも、芝崎初音は簡単に殺せないだろう」

「何でだよ？」

「……慎、お前は知らないだろうが、芝崎初音の实力は武芸に富んだ者の多い芝崎家においてもずば抜けている。百年に一人の逸材とも言われているほどだ」

まさか初音がそこまでの実力者だったとは初耳だった。確かに以前に見せてもらった居合いの技は凄かった。いともたやすく鉄パイプを一刀両断にしていた。

「……それに、芝崎初音自身の实力に加え、腕利きのSPが数人、彼女の身辺警護をしているはずだ。いくら犯人が相当の手練れだろうと簡単には殺れないだろう」

「そんなんじゃない、俺が気を使う必要なんてないのかもな……」

「……そうだな。足手纏いがいいところだろう」

「ぐっ……」

普段無口なくせに、嫌なことははっきり言う奴だな……。

だが、事実だろうな。実際、剣の腕がなくても初音は俺より強いからな……。

「……だが、芝崎はお前と一緒にいたがっている。本当はお前の家に行くことも反対されているらしいが、それでも芝崎は反対を押し切って、お前の家に行っている。……芝崎は、本当にお前のことが好きなんだろうな」

「……ああ、わかっているよ……」

初音の想いはよくわかっている。

俺も初音の想いに応えようと頑張っているが、まだまだ初音の想いに届いていないだろう。初音の真っ直ぐな想いに応えられるだけの想いは、まだ俺の中じゃない。

だけど、いつかきつと応えてみせる。

マイラを愛していた時のように、限らない想いを初音に向けてみせる。そうしないと、いけないんだ。

つづく

第三章 編入生と切り裂き魔（後編）

静まり返った道場の中心には、袴姿の初音が座していた。

何の変哲もない道場であるにも拘らず、彼女が座するだけ空気が一瞬にして変わっていた。息を吐くことさえ許されぬような厳格な空気に包まれ、道場内は張り詰めた緊張感に満ちた。

俺は初音から目を離せなかった。

極限の緊張感の中、初音だけは落ち着き払っていた。彼女だけがこの厳格な場所に居ることを許されているようで、絶対的な存在感を醸し出していた。今、俺の目の前に居る彼女には普段のお調子者な様子は一切なく、言うなれば一人の剣客にしか見えなかった。

一閃。

まさに目にも留まらぬ早業だった。初音が抜刀したことに気付いたのは、彼女が刀を返し、納刀しようとしたその時だった。抜刀したことにすら気付かせぬ、鮮やか過ぎる剣技。

チン、と小さく鳴った納刀の音で、その場の緊張感が一気に解放された。

「凄いです凄いです、初音ちゃん！　こんなに綺麗な抜刀、なかなか見られるものじゃないですよ！」

「ふふん。そうでしょそうでしょ」

逢瀬は無邪気な子供のようにはしゃいでいた。

……確か、逢瀬の方が先輩だったよな？ 悪いが、とてもそう見えないぞ、逢瀬……。

「人間、一つくらい取り得があるもんだなあ。初音にさえあるんだから……」

「慎さん、刀の錆になってみえますか？」

笑顔で剣先を俺の喉元に突きつけてくる初音。またも抜刀の瞬間を見逃していた。

「冗談です。許してください、初音様」

「全く、失礼ですよ！ っていうか、どこから湧いて出てきたんですか？」

「お前な、彼氏を虫みたいに言うなよ」

「ぶっちゃけ、鍛錬の時は邪魔です」

「こ、この小娘が……」

ぶっちゃけ過ぎだ……。人がせっかく部活動に励んでいる彼女を見に来てやったってのに、この扱いは何だってんだ？

「まあまあ、初音ちゃんは慎君が居ると気になっちゃって、鍛錬に

ならないんですよ」

「お、逢瀬先輩!？」

初音は顔を真っ赤にして、天然少女の口を塞いだ。しかし、今更彼女のを口を塞いだところで零れた言葉はしっかりと俺の耳に届いた。

初音も可愛いところがあるじゃないか……。

俺は何だか嬉しくなって、初音の頭をわしゃわしゃと乱暴に撫でた。マイラと付き合っていた時はあまり彼女を撫でたりはしなかったが、初音に対してはこうして撫でることが多かった。

「あう……」

「初音ちゃん、幸せそうです。羨ましいです」

顔を赤らめて幸せそうにする初音。その隣で、満面の笑みで俺達を見守る逢瀬。

「そんなに羨ましいなら、お前も撫でてやろうか、逢瀬？」

「そういうことは彼女さんだけにしないと。ほら、初音ちゃんが拗ねてますよ」

逢瀬に指摘され、視線を初音に戻すと、刀身が俺の首筋に置かれていた。俺は慌てて後退り、嫉妬の刃から逃れた。

それにしても、何の躊躇いもなく彼氏の首に刀を押し当てるとは、恐ろしい女だ。

「お、お前な！ さっきから俺を殺す気なのか！」

「この刀は刃引きしてますので、安心して斬られてください」

「馬鹿言うな！ だ、誰が好きこのんで斬られたりするか！ って、おわッ！？」

一片の躊躇もなく斬りかかってくる初音。いくら刃引きされているとはいえ、彼氏相手に真剣で斬りかかるのは問題あると思うぞ。

彼女選び、間違ったかな……。

うおっ、危ねえ！？ 今、本気で喉狙われたぞッ！？ ま、まさか、今の俺の心を読んだとか……。いや、まさか、なあ……。

俺はしばらく不機嫌な初音に追い回され、彼女の鬱憤晴らしに付き合わされることとなった。際どい一撃は何度もあったが、初音の刀は一度も当たらなかった。一応、手加減はされていたようだが、それでも彼氏相手に真剣振りかざすのは本当に止めて欲しい。

「……楽しかったか、慎？」

「はあ、はあ……。仁、見てたなら助けろよ」

「……悪いが、道場の掃除やら備品の点検やらで忙しかった」

どうやら仁は、初音に使い走りにされているようだった。こいつも別の意味で、先輩には見えないな。

「別に今そんなことしなくたっていいだろう？」

「……いや、この道場は久し振りに開けられたからな。掃除が必要だ」

「久し振り？」

「この道場は元々居合い部の物だったんですけど、居合い部はここ数年、部員に恵まれなかったんです。それで、大分長いこと使われていなかったんです」

仁の代わりに、逢瀬が俺の疑問に答えてくれた。

逢瀬の手には、木刀二本をテープで繋げたやたら長い得物があった。しかも、その改造木刀には、三ヶ所ほど重りがつけられており、相当な重さだろう。小柄な彼女には分不相応なほど長く、重い得物だろう。

「逢瀬先輩、素振りは終わりました？」

「はい！ バッチリ二百回やりました！」

あの木刀で素振り二百回とは、相当な力が必要だ。まさか小柄で非力そうな逢瀬に、そこまでできるとは驚きだった。

逢瀬の認識を少し改めた方がいいのかも……。

「……芝崎。備品の刀だが、手入れが必要なものが多い」

「やっぱり、そうですか。……うーん、それじゃあ、今日は備品の手入れをした方がいいですね。とりあえず、備品の手入れは私がや

りますから、仁先輩は逢瀬先輩の相手をしていてください」

一番年下のはずの初音がテキパキと指示を出し、部をまとめていく。確かに経験者の意見は重要だろうが、仁や逢瀬はもう少ししっかりするべきだと思う。

「あっ、慎さん、どうせ暇なら、私の手伝いを……」

「……じゃあな。俺はどこかで昼寝してくるわ。部活が終わったら、メールしてくれ」

「ああーん、慎さーん!!」

俺は面倒事を押し付けられる前に、道場を後にした。

全く、あの小娘は人が甘い顔を見せるとすぐ調子に乗りやがって……。

『……誰が助けてなんて言った?』

——てめえ、人がせっかく助けてやったのに、何つう言い草だッ!?

『私一人だけおめおめと生きてはいられないのよ……』

——はア？ 何言ってるんだ、てめえ？

『もう、邪魔しないで……。あの子の……。みんなの後を追わせて……』

——って、人が体張って助けてやったのに、また飛び降りようとするな！

『邪魔をしないでって言ってるでしょ！』

——やかましい！ 自殺なんて馬鹿な真似は止せ！

『って、何であんたまでフェンス乗り越えてくるのよッ！？』

——お前を止めるためにだよ！！

『……止めてよ。私は、もう生きる気力なんてないの……』

——うるせえ！ だからって軽々しく死のうとするな！

『……何も知らないくせに、勝手なことを……』

——あんたのことを知ってないと、あんたを止める資格はないのか？

『……そ、それは……』

——俺はあんたのことなんて何も知らない。まだ会ったばかりだからな。

『……そうね。私も、あんたのこと、何も知らない……』

——……俺も、前に死にたいって思うことがあった……。

『……そう、なんだ……』

——だけどさ、やっぱり怖くて死ぬこともできなかった……。

『情けないわね……』

——ムカつくが、否定できないな。だけど、多分、お前の言っているような怖さじゃねえよ……。

『……どういうこと?』

——俺が死んだところで、あいつ等はきつと何とも思わない。わずらわしいガキが消えて清々するぐらいだろうな。結局、俺が死んでも、俺が生きていた証なんて何も残らない。一大決心で死んでみても、結局何も変わらないんだ……。

『……生きた、証。……それって何よ……?』

——わからねえよ。俺には、ないものだから……。

『……そうね。私にも、それはない……。もう何も……』

——誰にしろ、死んだって何の意味はねえ。だから、死ぬなんて止めろ……。

『でも……、独りは辛いよ……』

——だったら、俺がお前の側に居てやるよ……。

『えっ……？ な、何言ってるのよ？』

——どうせ、俺も独りだ……。お前が寂しいなら一緒にいてやる……。

『……あんたって変な奴ね』

——うるせえよ！ ったく……。

『今の言葉、責任持てる？ 嘘だったら、あんたを殺して私も死ぬわよ』

——ぶ、物騒な奴だな……。冗談に聞こえねえぞ……。

『冗談じゃないもん……』

——わーったよ。ちゃんと責任持って、お前と一緒にいてやる。

『……うん、ありがと……』

——じゃあ、戻って、飯でも食おうぜ。

『うん！ 行こ……、あっ……』

——ちょ、ちょっと、待ってって……、うわあああああああッ！？

懐かしい夢を見た。

あれは、彼女と初めて出会った時の思い出だった。

今となってみれば笑い話だが、あの時俺はマイラの飛び降り自殺を止めるために飛び出し、説得できたというのに、最後にドジ踏んで一緒に高台から落ちてしまった。あの高台は相当な高さで落ちれば死は免れないと思った。しかし、気付いた時は俺もマイラも軽傷で済んだ。

あの日を境に、マイラは何かが吹っ切れたらしい。もう死のうとは思わなくなった代わりに、俺に付きまとうようになった。そして、いつしか俺達は想い合うようになり、付き合い出したのだ。

だが、それも全ては思い出。過ぎ去った日々の残照。

「……泣いているんですか、慎さん？」

「初音……」

瞼を開けると、そこには初音が居た。

彼女は悲しげな瞳で俺を見つめ、声なき想いを俺に訴えかけていた。

——私を見て……。もうあの人のことは思い出さないで……。

どれだけ偽ろうとも、初音にはわかってしまうのだろう。俺のマイラへの想い、いや、未練が……。だからこそ、彼女はいつも声なき想いを俺に訴えていた。そんな未練など全て断ち切ってくれ、と。

「部活、終わったのか？」

「はい、終わりました。逢瀬先輩も仁先輩も帰っちゃいました」
「そっか……」

俺はいつの間に流れていた涙を拭い、起き上がった。
大丈夫、俺はもう大丈夫だ。もう前に進める。初音と一緒に歩んで行ける。

「……慎さん、あの人の夢、見たんですか……？」

俺は初音の問いを無視して、思い切り体を伸ばした。そのまま枕にしていた鞆を手に取り、彼女に背を向けて立ち上がった。

「だっせえな、俺……。未だに未練タラタラだよ……。お前を彼女

にするって決めたのにな……」

「……慎さんは、そんなにもあの人のこと、愛していたんですか……？　まだ、あの人のこと、忘れられませんか？　私が貴方の側にいるのに……」

「……………」

無言で頷く。

今更否定しても意味はないだろう。だが、初音としては、あまり自分のいい反応ではなかっただろうな。

初音は多分、マイラを憎んでいる。

俺とマイラが付き合い出すと言ったその時から、初音はマイラを憎み続けているんだと思う。理由は、今更言葉にするまでもないだろう。俺は初音の気持ちには気付いていた。しかし、それでもマイラを選んだ。だから、マイラは嫉妬され、憎悪の対象となった。

今、初音はどんな表情をしているのだろう。初音に背を向けている俺には、彼女の表情はわからない。だけど、これだけは感じる。マイラに対する憎悪を。

「……大丈夫だ。もう、全ては過去のことだ。もう忘れ……」

「嘘だ……」

背筋が凍るような冷たい声。

今の声は本当に初音の声だったのだろうか。そう疑いたくなるほど、今の声には冷たい怨嗟の念が込められた。

「慎さんはきつとあの人のことを忘れない……。きつと、あの人の思い出は全部美化されて、綺麗なまま残るんだ……」

あながち間違いに聞こえないから、反論もできない。

確かに初音の言うとおり、マイラとの思い出は綺麗なまま俺の心の奥底に仕舞われている。きつと一生忘れられない思い出になるだろう。

だが、それは仕方のないことだろう。

俺にとってマイラはあまりに大きな存在だった。彼女との思い出を全て消し去ったら、後は汚い両親との思い出ばかりが残ってしまう。そんなこと、俺は耐えられない。

いくら初音が、マイラとの思い出を消したがつても、こればかりはどうにもならない。マイラと過ごした時はあまりに眩しく輝き、俺の心に強く刻み込まれているのだから。

「……慎さん」

初音が包み込むように俺の背中を抱き締めた。

彼女の温もりが肌を通して感じられる。しかし、同時に感じる背筋

を凍らすような悪寒は一体何だろうか。

「全部断ち切ってあげます……」

「はっ？」

「今日、深夜一二時に第三教会に来てください」

突然見当外れなことを言われ、俺は一瞬呆気にとられた。

しかし、背後から感じるプレッシャーに冗談の気配は一切なかった。ある種の脅迫めいた圧力を感じる。拒否することはできそうもない。

「……そこで、何があるんだ？」

「……あの人が慎さんを振った、本当の理由が、わかります」

「……ッ!？」

マイラが俺を振った、本当の理由？ 何だ、本当の理由って？ いやあ、あの時マイラが言った理由は、嘘だったというのか？ まさか、あの時自殺しようとしたことと、何か関係があるのだろうか？

俺は振り返って、初音を睨み付けた。今の言葉の意味を知りたくて、問い詰めるつもりだった。

しかし、俺は初音の瞳を見て、言葉を失った。

憎悪に澱む冷たい瞳だった。ゾツとするような底知れぬ暗闇が、そこにはあった。背筋を凍らす憎悪の闇に、俺は圧倒された。

「全て断ち切ってあげます。あの人の思い出も全部、私が消し去ってあげます。だから、今日の一二時、忘れないでくださいね……」

「あ、ああ……」

俺には大人しく頷くことしかできなかった。

初音は俺の返答に満足すると、そのまま踵を返して去っていった。彼女の背中には、付いて来るな、という無言の空気が滲み出ていた。いつもなら、一緒に帰りましょうよ、とせがんで来るはずなのに、今日の初音は振り返ろうともせず、姿を消した。

俺は得体の知れない恐怖に身を強張らせ、しばらくその場から動くことができなかった。

初音との約束の時刻が近付き、俺は家を出て日野塚第三教会に向かった。

マイラが俺を振った、本当の理由。それがわかると言われ、のこのこ釣られてしまったが、やはり行かない方がいい気がする。しかし、あの時の初音の冷徹な瞳が脳裏を過ぎり、逃げることはできなかった。

それにしても、胸騒ぎが治まらない。

嫌な予感がして堪らないのだ。あの初音の瞳を見てから、俺の中の何かがずっと警鐘を鳴らしている。このまま家に帰って寝てしまった方が、誰にとってもいいことに思えてしまう。しかし、マイラの名を出されて、俺が逃げられるはずもなかった。

俺はまだ、こんなにもマイラに未練が残っている。

初音と付き合い出してから、マイラを忘れられた日など一日もなかった。暗い幼少時代を過ごした俺にとって、全ての思い出はマイラと出会った時から始まったようなものだ。どんな時でも、どんな場所でも、どんなことをしていても、常にマイラの思い出が脳裏を掠める。どうしても忘れることができなかった。

「……マイラ、どうして別れるなんて……」

四月も終わりに差し掛かったこの時期でも、まだ夜は凍てつくような寒さの日もある。

今夜は、あの日を思い出させるような寒さだった。

俺は寒さに身を震わせ、一度足を止めた。いや、自発的に止めたというより、足が勝手に止まってしまったといった方が正しいかもしれない。

もしかしたら、本能的に何者かの気配を感じ、足を止めたのかもしれない。

「……誰だ？　そこにいやがるのは……？」

足を止めた瞬間、目の前の電柱の影がほんの少し動いたように思えた。

もしかしたら、ただの見間違いかもしれない。俺の警戒し過ぎかもしれないが、最近は物騒な殺人鬼がうろついているのだ。これくらい警戒していた方が安全だろう。

「まさか、気付かれるとは思わなかったです……」

電柱の影から現れたのは、あまりに意外な人物だった。

何故、彼女がこんな時間に、こんな場所に居るのだろうか。あまりに不自然だった。

「……お、逢瀬？」

「こんばんは、です……」

彼女の手には、刀……？

まさか、こいつが芝崎家を狙う切り裂き魔……？
……いや、まさかな……？

「そんな物持っていると、変な誤解されるぞ」

「……慎君は、誤解しないんですか？」

「まあ、仁だったら、誤解したかもな。あいつ、悪人面だし」

「慎君、酷いこと言ってます。仁君はいい人ですよ」

仁、良かったな。お前の好感度は悪くないらしいぞ。

いつまでもこんな話をしている訳にもいけないので、俺はずばり本題を問い質した。

「それより、こんな所で何してんだ？」

「……慎君を止めに来ました」

俺を止めに……？

止める、ということは、逢瀬は俺の目的地を知っているのだろうか。そして、その目的地で教えられることも全て、知っているのだろうか。

逢瀬は普段からは想像もできないほど、強い意志のこもった瞳で俺を見つめていた。

おそらく逢瀬は全て知っているのだろう。これはただの勘だが、間違っていないと思う。そうでなければ、逢瀬が俺を止める理由はな

いだろう。

「……お前も知っているのか？ マイラのこと……」

「それは……、はい、知ってます。だからこそ、止めに来たんです」

予感的中。やはり、逢瀬は全てを知っている。

だったら、何故止めるのだろうか。日野塚第三教会で知られる真実に、止めるような理由があるのだろうか。

「知れば、慎君はきっと後悔します……。だから、私は慎君を止めます！」

逢瀬は両手を広げ、道を塞ぐように立ちはだかった。

小柄な彼女を押し退け、先に進むことは可能だろう。しかし、決意に満ちた彼女の瞳を無視できるほど、俺は無粋でもなかった。

「……後悔なら、たくさんしたさ。だけど、俺はマイラが別れを切り出した本当の理由が知りたい」

「知れば、どんなに辛くても、どんなに悲しくても、もう逃げられませんよ……」

逢瀬は俺を案じて、こんな警告を発してくれている。

きっと彼女の警告を無視すれば、それ相応の痛い目に合うのだろう。マイラが隠した真実というものは、俺が思っている以上に厄介なも

のなのかもしれない。

だが、そこにマイラが関わっているのなら、俺は躊躇わず先に進む。

「マイラのこと、逃げたくないんだ」

俺は強い意志を持って、逢瀬を真っ直ぐに見据えた。

彼女も俺の瞳からは逃げなかった。真正面から俺の意志とぶつかり、それでも道を譲ろうとしなかった。

「……後悔をしてからじゃ、遅いんですよ。きっと、知った後の後悔の方が慎君にとっては辛いです、悲しいです。誰も幸せになつたりできないんです」

「それでも、構わねえよ……。俺はやっぱり、マイラが好きだから……。知ってたいんだ、あいつのこと……。全部……。そこにどんな後悔があっても、俺はマイラの全てを受け入れたい……」

この想いは心の奥底に封印したと思っていた。

マイラと共に行く道を諦め、俺一人で前に進もうと思っていた。

だけど、やっぱり無理だった。

マイラへの想いを止めようとしても、無限に溢れ出てしまう。

俺はマイラなしでは生きていけない。

「……………そこまで言われたら、退くしかないじゃないですか……」

逢瀬は悲しそうに目を伏せると、両手を下げ、道を空けた。

心配してくれる逢瀬には悪いが、俺は全てを知りたい。どんな後悔があろうとも、マイラのことなら、全て受け入れる覚悟がある。

「……悪いな、逢瀬」

「私より初音ちゃんに謝ってください。初音ちゃんだって、慎君のこと、本当に好きだったんですから。慎君の中途半端な気持ちで、どれだけ苦しんだと思っっているんですか？」

痛い言葉だ。返す言葉もない。

俺は初音を愛していない。もちろん友人としては好きだが、一人の女性として愛し切れていなかった。知り合って間もない逢瀬が気付くくらいなのだから、初音はとくに気付いていたのだろう。

そして、俺の中途半端な想いのせいで、初音を傷付け続けていた。

彼女の想いに応えよう、などと思っている時点で駄目だったのだ。愛情とは己の意志とは無関係に溢れ出るものであって、意図して湧かすものではないのだ。結局、俺は初音に対する愛情を生むことができなかった。

初音と別れよう。

きつとこのまま付き合い続けても、俺は初音に応えられない。いつか応えられる日が来るとしても、その頃には初音がたくさん傷付いた後だろう。このままズルズルと付き合い続けていれば、俺も初音

も潰れてしまう。

……最低な男だな、俺は……。

殴られるくらいは覚悟しよう。刺されたとしても恨まない。

俺は何があっても、マイラが好きだから。マイラともう一度、やり直したい。

「……もし……」

「んっ……?」

「もし……、マイちゃんを説得できる人がいるなら、きっと慎君だけだと思います」

説得、とはどういう意味だろうか。しかも、それができるのは俺だけ、とは意味を更に謎にしている。俺だけが説得できる、という状況にマイラはあるというのだろうか。そんな状況がまるで思い浮かばない。

「どういう意味だ?」

「言葉どおりの意味です。初音ちゃんは慎君に全てを教えて、マイちゃんを遠ざけようとしています。いえ、そんな生易しいものではないです。慎君の中にあるマイちゃんの綺麗な思い出も全部、完膚なきまで壊してしまうつもりです。慎君の心を奪い取るために。」

もし、慎君が全てを知って、マイちゃんから目を背けるような人だったら、力づくでもここを通すつもりはありませんでした。それはきつと誰にとっても最悪な事態しか生まないでしょうから。

でも、慎君がマイちゃんを受け入れてあげれば、マイちゃんの心だけは救えると思うんです」

救えるのは、マイラの心、だけ……？

わからない。俺とマイラが別れた理由に、どうしてそれだけ重い事態になり得るのだろうか。それとも、俺が知らないだけで何か恐ろしい事実が隠されているのだろうか。

「……私はこういうことは嫌いです。だから、慎君を行かせないことが唯一の抵抗だと思っていました。慎君が行かなくても、結果は同じだったでしょうから」

「何だか、まるで教会で何かが起こるような口振りだな。……いや、きっと何かあるんだろうな。だから、俺を止めたがっている。そして、それはマイラに関わる何か、か？」

「……そうです。とても悪いことが起こります……。今でも私は、行かない方が慎君のためだと思ってます……」

そう答える逢瀬は、苦虫を噛み潰したような表情だった。

最初から感じていた悪い予感、どうやら間違いはなかったようだ。悪いことは確実に起こる。そして、それが俺にとってもマイラにとっても後悔だけを生む悲劇である、と逢瀬は言っていた。

逢瀬の忠告が嘘だとは思えない。しかし、それでも俺の心は決まっていた。

「だけど、それでも行くぜ。マイラが関わっているなら、尚更だ」

「……なら、一つだけ約束してください」

「約束？」

逢瀬は小さく息を吐き、俺の瞳を真っ直ぐに見据えた。その瞳には一切の虚偽を許さぬ強い光が灯っていた。

「何があっても、マイちゃんの味方でいてあげてください」

「ああ、当然だ」

俺は迷わず頷いた。

わざわざ逢瀬に言われるまでもなく、俺は何があらうともマイラの味方だ。

逢瀬は俺の答えに満足すると、花も綻ぶような笑みを浮かべた。しかし、彼女の笑みにはいつも眩しさはなく、どこか悲しげな影が見えた。そして、逢瀬は俺がこれから向かう道とは逆方向の道へと歩き出し、そのまま姿を消した。

擦れ違い様に、一言だけ残して。

「……ごめんなさい。マイちゃんを助けてあげられなくて……」

漆黒の闇にそびえ立つ石造りの日野塚第三教会。

大正時代に建築された日野塚第三教会は、日本で一般的な木造建築ではなく、欧州の石造教会を模倣して造られた。長き時を経た石壁は深緑の蔦に覆われ、庭先には美しい薔薇が咲き誇っていた。少々錆び付いてはいるものの、入り口には赤薔薇のアーチが建てられており、来訪者を歓迎していた。それがかつての日野塚第三教会だった。

しかし、現在の教会前にはテープが張り巡らされ、厳重に入り口を封鎖されていた。先日、ここで芝崎の人間が殺されたからだ。仁の予想では、例の通り魔と同一犯。芝崎家を狙う異常者の犯行。

ここは、人が無残に殺された呪われた場所。

不気味な静けさが辺りを支配していた。春先だと言うのに、虫の鳴き声一つ聞こえなかった。まるで何もかも死に絶えてしまったかのような、そんな物悲しい静寂だった。

逢瀬の話では、ここで何か悪いことが起こる。そして、それにはマイラが関わっている。

ここは危険だ、と本能が警鐘を鳴らしている。しかし、それでも俺

は先に進まなければならない。そこにマイラがいるのなら。真実を知れるのなら。

俺は覚悟を決め、嚴重に張り巡らされたテープを潜り、教会の敷地内に侵入した。

たかだかテープを潜っただけだというのに、緊張感がいや増した。冷や汗が流れ、鳥肌が立った。妙な視線を感じる気がするが、おそらく気のせいだと思う。

一步一步進む毎に、足音が響く。俺の神経が昂ぶって、音が大きく聞こえるだけなのだろうか。ただ、一つ言えることは、一步一步確実に災禍の中心に近付いているということだ。

遅々とした歩みで、俺はようやく教会の扉まで辿り着いた。

心臓が早鐘のように激しく脈打っている。得体の知れない恐怖が俺を縛り付けていた。ここを開ければ、もう逃げられない。逃げるチャンスがあるとしたら、今だけしかない。

……ビビるな、俺ッ！！ このまま逃げたって、今以上に後悔するだけだッ！！

俺は両腕に力を入れ、重い扉を押し開けた。ギギギ……、と轟音を鳴らしながら教会の扉が開いていく。まるで地獄の門を開いているような最悪な心地だった。

もう後戻りはできない。

俺は闇に支配された教会に足を踏み入れた。踏み込めば、そのまま飲み込まれてしまいそうな漆黒の闇が広がっている。その暗黒の中に、俺は一步足を踏み出した。

バキッ！！

俺の意識はそこで途絶えた。目の前が暗転する寸前、歪んだ笑みを浮かべる初音を見たような気がした。

つづく

閑話 ワンコVSチビッコ その1

私立犬神学園高校は県内でも特に運動部が盛んな学校だ。

充実した設備、優秀な指導者、特待生制度など、才能ある者や志ある者にとってこれ以上ない環境が与えられる。犬神学園は三千人以上ものキャパシティがある広大な敷地を保有しているが、その敷地の半分は運動部のための施設である。全校生徒のほぼ七割は運動部に所属し、慎やマイラのような帰宅部の方が少数派だ。

また、学校全体が運動部を推奨しているためか、他校よりもスポーツイベントが多い。新学期が始まってから一週間も経たずして、最初のスポーツイベントが開催される。

今日は四月一日、入学式の翌日。最初のスポーツイベント、新入生歓迎ハーフマラソン大会が開催される日だった。

「レディース、エーンド、ジェントルマン!!」

さあ、いよいよこの日がやってきた! 新入生歓迎ハーフマラソン大会! 新入生諸君、覚悟はできているかア? これぞ毎年恒例の犬神学園の洗礼、第一弾! 諸君は入学して早々からいきなり、犬神学園の厳しさを思い知るだろう! しかし、このハーフマラソンなど、犬神学園地獄巡りの一丁目! まだまだ地獄は待っているぜえ! 覚悟しとけや、一年坊主共!

なお! 司会はこの僕、超絶美男子にして生徒会期待のルーキー、沼影敦盛だアアアアアッ!!」

『引っ込めエエエツ!!』

『消え失せろオオオツ!!』

『目障りだ、オカマ野郎ッ!!』

沼影の演説（おそらく最後の部分に対して）に苛立ちを覚えた外野から、大ブーイングが巻き起こった。野次はもちろんのこと、放送席の沼影目掛けて靴やら空き缶やらが投げ付けられていた。その幾つかが見事に沼影の顔面にクリーンヒットした。

「くオラアアッ!! 顔に当てるな、顔に! っていうか、物を投げるな!」

『黙れ、河童頭! 三枚目のくせに顔のことなんて気にしてんなア!』

『てめえの不細工な面は少し潰れてるくらいちょうどいいんだよ!』
『いいからさっさと引ッ込めや、三枚目がア!』

犬神学園は基本的に体育会系が多いのでノリがいい。少々羽目を外し過ぎている部分はあるが、この勢いも含めて犬神学園の生徒達なのである。

それにしても、沼影の不人気ぶりは凄まじい。このままでは物を投げ込まれるだけでなく、壇上に登って乱闘を起こす者も現れそうだった。

「……な、何だか凄い学校に来ちゃった気がします……」

編入したばかりの逢瀬美夜は、新入生同様に周りのテンションに取り残されていた。彼女も割りとノリがいい性格なのだが、フリーガンのような周囲の勢いに圧倒されていた。

戸惑っている美夜の元に、マイラ達が近寄ってきた。というより、飛び付いてきた。

マイラは犬神学園に編入したばかりの美夜の最初の友人だった。二人は馬が合うようで、今では一緒にいることが多かった。

「驚いてるわね、美夜。ま、いきなりじゃウチのノリには付いていけないでしょ？」

「あ、あははは……、そうですねえ。どうしてただのマラソン大会なのに、みんなこんなにテンションが高いんですか？」

「まあ、さっきあの馬鹿司会が言ってたとおり、このマラソン大会は新人生に対する洗礼なのよ。ほら、美夜と同じで一年生もポカーンとしてるでしょ？ 上級生の力つてのを見せしめる舞台って奴なの、この大会は。だから、みんな異常に盛り上がって、新入り達をビビらせているって訳。

それと、これはおまけなんだけど……。五十位以内になると、その人が所属している部活の部費アップなのよ。ほら、ウチって運動部が盛んじゃない？ だから、その部費増額を狙って、各部の意気込みが凄いの。ちなみに帰宅部の人には、食券一ヶ月分ね」

「なるほど、本当に学校全体で体育会系ですね」

学校全体で体育会系なのは問題なのではないのか。

どうやら美夜には、そうした疑問は浮かばないようだった。一応一般常識を持っているようだが、どこか天然で抜けていた。

「あの、逢瀬さんは大丈夫なの？ ハーフマラソンなんて初めてじゃないかな？」

沙雪が心配した様子で聞いてきた。

犬神学園は運動神経に富んだ者が多いためにあまり問題にならないのだが、普通の者にとってハーフマラソンはかなり過酷なものだ。多少スポーツができる者でも二十キロ以上の距離を走るのは辛いだろう。まして、美夜のような小柄な女の子には相当厳しいのではな
いか、と心配になるのは当然のことだ。

実は沙雪は運動音痴で、犬神学園のスポーツイベントではいつも辛い思いをしていた。今では何とか他の者達に付いていけるくらいになったが、最初は何度も泣きそうになった。その辛さをよく知っているので、余計に美夜のことを心配だった。

「大丈夫です。毎朝走っていますから」

「そ、そうなの？」

沙雪と久里子は意外そうに驚いた。

小柄で華奢な外見をしている美夜は、お世辞にも運動神経に恵まれているようには見えなかった。そのため、毎朝ランニングをしているところなど想像できなかった。

「はい。持久走ならそれなりに自信があります」

「うわぁー、私と逆だ。私、短距離なら自信があるんだけど、こういう長距離は駄目なんだよねえ」

ウェアウルフは身体能力に優れているが、乳酸が溜まりやすい体質で持久力には恵まれていない。もっとも、それは沙雪や久里子を知る由のないことなのだが。

「……マイラ、それは去年の新歓マラソンを一年で唯一、五十位以内になった人が言うセリフじゃないと思うけど？」

「久里子だって百位以内に入ったじゃない？」

「うう、マイラも久里子も私一人置いていくう……」

運動神経に長けた友人二人を持つ沙雪は、いつも置いていかれて少し寂しかった。

マイラと久里子は犬神学園の中であっても、ずば抜けた身体能力を持っている。新入生歓迎ハーフマラソン大会で、一年生が百位以内入るのは異例なことだった。特に五十位以内に一年生が入ったのは、二十年振りの快挙だったそうだ。

「逢瀬さんなら一緒に走ってくれると思ったんだけどな……」

「あははは……、ごめんなさい、サユちゃん。私、五十位以内に入って、居合い部の部費確保したいんで」

この時の居合い部は、まだ美夜だけだった。初音と仁が入部するのはまだ先の出来事。

部費は部員の人数での分配となるため、居合い部の部費は非常に少ない。だから、美夜は新入生歓迎ハーフマラソン大会五十位入賞の特典を目指すつもりだった。

「ふふーん？ だったら、美夜、勝負しよ？」

「勝負、ですか？」

「そう！ 新歓マラソン、どっちの方が高い順位になるか、勝負よ！」

マイラは勝負好きだ。しかも、筋金入りの負けず嫌い。何かにつけ

て勝負を持ち掛けてくることが多く、何かにつけてその勝負がトラブルに繋がることが多い（おもに初音などと）。

一方、人の好い美夜はあまり競争事が得意ではない。むしろ、自分が不利益を受けても、他人を助けるような慈愛に満ちた性格をしている。ただし、チビ扱いする相手には結構手厳しい、というか意外に容赦がなかったりする。

「そんなこと言われても、マイちゃん相手じゃ……」

「ま、チビッコに無理は言わないわよ。どうせチビッコじゃ、私に勝つなんて逆立ちしても無理だもんね」

「うにゃあああ、上等です!! その喧嘩、買います!! 買っちゃいますよ!!」

チビと言われるとすぐ怒るのが、美夜の最大の欠点だった。もっとも、欠点というより、からかいの対象となることが多いのだが。

「言ったわね。じゃあ、私が勝ったら、かすみ屋のサンシャイン・ブラボーね」

「さ、サンシャイン・ブラボーですか!？」

かすみ屋の名物パフェ、サンシャイン・ブラボー。一言で例えるならば、それはフルーツで模られたバベルの塔。パフェと称するにはあまりに巨大なその姿は、天を貫くばかりの巨塔と見間違う圧倒的な迫力がある。そして、圧巻的なのはその偉観だけではなく、料金も神罰に匹敵するような凶悪さが秘められている。

「いやゝ、さすがの私もあれを一人で完食する自信はないから、美夜に手伝ってもらおうかと思ってね。ついでに払いも押し付けられるし」

「うう……、マイちゃん、鬼です……。でも、負けたら、それを払うのはマイちゃんですからね！」

「へえゝ、私に勝つ気？ 舐められたもんね。この私が、あんたみたいなチビッコに負けるはずなんてないじゃない？ 調子乗るのも大概にしときなよ、チビッコ？」

「あああゝ、またチビって言いました！ しかも、二回も言いました！」

チビに反応し、またボルテージが上がる美夜。数分前と比べると、随分と好戦的になったものだ。

勝負の前から熱く燃え上がる二人の闘志。過熱する投資はすでに爆発寸前だった。

かたや、犬神学園？2と謳われる天下無敵のワンコ、大神マイラ。かたや、今年度編入したて潜在能力未知数のチビッコ、逢瀬美夜。

ワンコVSチビッコ。大神マイラと逢瀬美夜の決して逃れられない宿命の始まりだった。二人の運命はこれからも相反し続ける。彼女達は己が信念の違いから、これから幾度も戦い続ける運命にあった。これは逃れられない二人の宿命であった。

因縁の対決第一幕となる勝負が、今まさに切って落とされようとしていた。

閑話休題、四章「二人の少女」へ……

第四章 二人の少女（前編）

私が彼女と出会ったのは、新学期開始の一週間前。

きっと私の手が血に汚れていなければ、彼女とは最高の友人となれただろう。

二人の出会いには運命だった。互いに譲れない想いを背負ったが故に出会い、戦い合うよう宿命付けられた。己が信念を持つが故、私と彼女の運命は交わらない。たとえ、どれだけの犠牲を払おうとも、叶えなければならぬ想いがある。私達は出会った時からすでに、それを背負っていた。だからこそ、私達の出会いは運命だったのだ。

もし、私達がそれぞれ運命を背負う以前に出会えたのなら、きっと誰よりも強い絆で結ばれた親友になれたはずだった。出来ることならば、運命に巻き込まれる前に彼女と出会いたかった。

しかし、彼女との出会いはすでに手遅れになった後だった。

「どうも初めまして。今日から同居させていただく逢瀬美夜です。これから短い間だと思いますが、よろしく願います、大神さん」

「あゝ、貴方が例の……」

彼女は清流会の一員、逢瀬美夜。

清流会は白の派閥を統括する組織であり、彼女はその組織の中でも高い位階にいる。

もう少し組織について説明すると、白の派閥は異端者を保護し、霊域を管理するために作られた清流会の一派閥なのだ。他にも心靈治療に特化した派閥や、魔術知識を管理するための派閥などが存在している。で、清流会から離反して独立した裏切り者の派閥が、黒の派閥という訳だ。

清流会に属するということは全ての派閥を統括する権限を持つ。しかし、美夜はそんな高い位階にいるとは思えないほど可愛らしく、まるで小動物のような少女だった。人を和ませる太陽のような笑みを浮かべ、見る者さえも笑顔にさせてしまうような魅力があった。

年齢的には私と同年代なのだが、彼女の容姿はそれよりもずっと下に見えた。しかし、こんな可愛らしい少女でも私などより相当上位の存在なのだ。

芝崎家の重鎮が殺されたため日野塚市内の警戒レベルが高まり、私と彼女は二人一組での行動が義務付けられた。逢瀬美夜は私のパートナーとなるべく、市外から送られてきた増援の一人だった。彼女は私と行動を同じくするため、同居することになっていた。

表向きにはパートナーとなっているが、逢瀬美夜の本来の任務はおそらく私の監視だろう。警戒を怠らず、また彼女に不信感を植え付けないようにしなければならない。

ただ、彼女は芝崎家とは無関係な人間だった。立場的に言うならば、芝崎家の行動を唯一制限できる監査官な存在だった。つまり、正確には『私を含めた芝崎家全勢力』の監視者なのである。彼女は見た目からは想像もできないほど重要な立場にいる人間なのだ。

「ようこそ、逢瀬さん。これからよろしく頼むわね」

「はい、一緒に頑張りましょう！」

笑顔が素敵な子だ。つい気を許してしまいたくなってしまうような雰囲気がある。

「私のことは好きに呼んでいいわよ。私も貴方のこと、美夜って呼ぶから」

「じゃあ、マイちゃんって呼ばせてもらいます」

うわっ、子供っぽいあだ名付けられた。もし、私が子供の頃に日本にいたら、そんなあだ名を付けられていただろう。

「うん、わかった。じゃあ、とりあえず荷物を部屋に運ぼっか。まゝ、元は一人部屋だから、あんまり広くないけど、ゆっくりしてよ」

「すみません、押し掛けちゃいまして……」

「まゝ、組織の命令じゃ、私達は逆らえないわよ」

私達のような亜人は、組織の庇護がなければ日の下を歩くことさえできない。西洋には白の派閥とは逆に、亜人を殺すための機関があるくらいだ。日本にもそうした一派は存在している。組織から離れて生きていくことは難しい。だから、命令に逆らえるはずなどないのだ。

……私のように、新たな庇護を得られない限りは……。

「でも、まー、私って一人っ子だから、二段ベッドってちょっと憧れてたんだよねえ。あははは、美夜は上と下、どっちがいい？ 勝負で決める？」

「そんな……。私は押し掛けてきた立場なんですから、そんな権利ないですよ」

「むう、つまんないなあ」

美夜は見た目どおり、温厚そうであり勝負事には関心がないようだ。何かにつけて勝負や競争をすることが好きな私とは対照的だ。

「ま、いつか。すでに上の段はすでに使ってるし。美夜の背じゃ、下の方が何かと都合がいいだろうし……」

「ううー、身長のことと言わないでください。気にしてるんですから」

子供っぽく頬を膨らませ、拗ねる美夜。その様子は本当に微笑ましかった。

美夜には悪いが、とても私と同年代だとはとても思えない。身体的に見れば、せいぜい中学一、二年生くらいとしか思えない。小学校と言われても全く違和感がないだろう。ランドセルが恐ろしく似合っ

「あははは、ごめんごめん！ ほら、機嫌直してよ、飴あげるから」

「うにゃゝ、子供扱いしないでください！ ……あ、飴は欲しいですけど……」

「あははははははははは！ 素直だねえ。お姉ちゃんが可愛がってあげるよ！」

「うにゅゝ……」

拗ねる美夜を宥めながら、私は彼女を部屋に案内した。少々からかい過ぎたため（案内する途中でもからかったから）、飴玉一個では機嫌を直してくれず、十個で手を打ってもらった。

監視者かもしれないという疑惑は消せなかったが、美夜と一緒にいると楽しかった。美夜の笑顔は人を温かい気持ちにさせてくれる。あの日以来、胸にすっぱりと開いた穴が埋まっていくような気がした。

これが私と美夜の出会いだった。これから彼女とは熾烈な戦いを幾度と繰り返し、繰り返すこととなるが、生涯で一度たりとも私はこの出会いを後悔したことはなかった。

予想どおり、美夜は新しい学校でもすぐに周りと打ち解け、クラスの人気者になっていた（というか、愛玩動物かな？）。彼女の人懐っこい笑顔は人を安心させるような温もりがある。あの無愛想、朴念仁、仏頂面の仁でさえ、気を許しているくらいなのだから驚きだ。

「あれ？ 仁君、今日は一人なんですか？」

昼休み、いつもは慎と一緒に購買から戻ってくる仁が一人で戻ってきた。

そんな彼に美夜が懐っこく近寄って行った。いくら人懐っこいからと言っても、あんな物騒で不愛想な奴に好んで近付くのは美夜くらいだろう。あとは私か慎くらいだ。

私は机に頬杖を突きながら、二人の話に耳を傾けていた。仁が一人で戻ってきた理由も少し気になっていたから。

「……ん？ ああ、慎が学食行く途中で芝崎に拉致られてな……」

「あ、あははは……。初音ちゃんも強引ですね」

……慎は、あの子と一緒に……。

駄目、妬むな……。慎を振ったのは、私なんだから……。私はいずれ破滅する……。だから、私なんかと一緒にいて、慎を巻き込む訳にはいかない……。

これでいいんだ……。慎は、あの子と一緒にいるべきなんだ……。

「じゃあ、今日は一人なんですか？　だったら、私達と一緒にご飯食べましょう？」

「……だが……」

「私達と一緒にじゃ嫌ですか？」

「……いや、そんなことは……」

「じゃあ、一緒に食べましょう？」

にここに。

無邪気な笑み。あの笑みを曇らせるのは、人として忍びないだろう。私も美夜の笑顔には敵わなかった。仁はあれに勝てるのか見物だった。

「………わかった……」

「はい！　じゃあ、行きましょう！」

仁、呆気なく陥落。美夜に掛かれば、あの朴念仁なんてイチコロのようだ。

そういえば、仁と一緒に食事なんていつ振りだろう。一応、私と仁は再従姉弟同士ではあるのだが、あまり交流はなかった。その辺りの事情は両家の軋轢が関係しているのだが、説明が面倒なので割愛する。

「……仁君と逢瀬さん、仲良さそう……」

沙雪の小さな独り言が聞こえてしまった。沙雪自身、口に出したかわからないような小さな呟きだった。おそらく私の耳でなければ、沙雪の声は捉えられなかっただろう。

どうやら私の知らないところで変な方向にベクトルが向いていたようだった。沙雪が仁を好きだったとはかなり驚いた。仁は確かに美形だが、顔に大きな傷がある上に目付きが最高に悪い。鼻屑目に見ても堅気にすら見えない。普通ならお近付きになりたくないタイプだ。沙雪も仁を怖がっていたと思っていたのだが、私の勘違いだったのだろうか。

……それにしても、悪いこと聞いちゃったなあ。まあ、あの朴念仁のどこがいいのかはさっぱりわからないけど。

「みなさん、今日は仁君と一緒に弁当にしましょう」

「いいわよ。じゃあ、ほら、席寄せて」

いつもより一名多く、私達は昼食をとり始めた。

美夜と沙雪は自作弁当。私は元々パン組だったのだが、今では美夜が弁当を作ってきてくれている。久里子だけは未だに購買の激戦を潜り抜け、パン食を貫き続けている。私はそこまでしてパンなど食べなくなかったので、美夜の弁当には本当に助かっている。

料理が全く駄目な私と違い、美夜は炊事から洗濯まで家事全般が完璧だった。私と美夜は、得意なことから苦手なことまで本当に対照的だった。

「美夜、箸と皿取って」

久里子がアンパンを銜えながら、催促してきた。

美夜が来て以来、私達のグループではおかずの交換が盛んに行われるようになった。いつもパン食の久里子を気遣って、栄養満点のおかずをたくさん作ってくれるのだ。そのため、私と美夜の弁当のおかずのラインナップが違う。

「あっ、はい。どうぞ、久里ちゃん」

美夜は久里子に箸と皿を渡すと、もう一組の箸と皿を出した。

「仁君もどうぞ」

「……いや、俺は……」

「仁君もいつもパン食ですよね？ たまにはちゃんと栄養摂らないと駄目ですよ？」

にここに。

私も弱いよね、美夜の笑顔……。まあ、この子の笑顔に勝てる奴って方が珍しいんだけどね。

「……………わかった……」

仁、再陥落。

頬をほんの少しだけ赤くして、仁は箸と皿を受け取った。

（可愛い反応ねえ）

（……黙れ）

目だけで会話をする私と仁。再従姉弟同士のアイコンタクトは上々だった。

「それにしても、美夜って物怖じしないよね？　こんな物騒な面した奴と普通に話せるなんて。再従姉の私が言うのものなんだけど、こいつって性格も面構えも怖いでしょ？　だから、こいつと進んで話そうとする奴なんて滅多に見たことないよ」

「もう、マイちゃん、酷いこと言ってます。仁君は優しい人ですよ。ただ、自分の気持ちを伝えるのが苦手なだけで、ちっとも怖くならないです」

「んー、まあ、こいつが悪い奴じゃないってのはわかってるけど、それをわかってくれる人なんて滅多にいないよ。だけど、美夜みたいに普通にこいつと接してくれる人が一人でもいると、何だか嬉しいよ」

「……そういう話は俺がいない時にしろ」

仁は不機嫌そうな、しかし少し恥ずかしそうな表情で言った。確かに目の前でこんな話をされれば、肩身も狭くなるだろう。

「「あははは……。ごめんなさい」」
「……………」

「あ、ほら、仁君。若竹煮でもどうぞ。タケノコは今が旬ですから、とっても美味しいですよ？」

仁の機嫌をとるように、美夜は弁当を差し出した。仁は戸惑っているようだったが、若干嬉しそうだった。

あのタケノコは美夜が昨日、大量に買い込んだものだ。料理が苦手な私には、あんなドリルのような物の調理法なんて全くわからないのだが、美夜は実に手馴れた様子で様々な料理を作っていた。昨日は確か、タケノコの炊き込み飯だった。

「……美味しいな。……本当に」

おお、感想が二言だ。仁にしては珍しい。

「本当ですか！　ありがとうございます！」

「……ああ、初めて食べる味だが、美味かった」

……そういえば、私もタケノコ料理なんて食べたの、昨日が初めてじゃなかったっけ？

私も仁も日本在住とはいえ、元は西洋系の人間なので（仁はハーフだから、日本人の血も流れているけど）、あまり日本食は食べたことがなかった。

「あ、あ、あの、仁君！　私のも、どうぞ……」

仲良く談笑している美夜と仁の間を割り込むように、真っ赤な顔の沙雪が弁当を差し出した。消極的な沙雪にしては、かなり珍しい光景だった。

（……マイラ、これ、何……？）

（んー、見たとおりじゃないかな？）

（沙雪が、仁君を……？ マジで……？）

（みたいねえ。しかも、何気に三角関係？）

私と久里子のアイコンタクトは恐ろしいほどに完璧だった。互いに言いたいことが目を合わせるだけで完璧に伝わった。

「……美味しい」

沙雪、残念。仁の感想は一言だった。

あつ、ちよつと悔しそうだ。しかも、少しだけ涙ぐんでいる。

「じ、仁君、これもどうぞ！ これも！」

「……あ、ああ」

少しムキになった沙雪が、ヒョイヒョイと仁の皿におかずを乗せていった。沙雪自身が食べる分まであげてしまうような勢いで、仁も少し圧倒されていた。

「……こんなに貰っていいのか？」

「い、いいの。私、小食だから」

「……だが……」

だからといって、その小さい弁当の半分を揚げてしまうのはどうかと思うけど？

さすがに仁も戸惑った様子で、私に助けを求める視線を送っていた。しかし、私も困惑しているので、彼の求めには応えられなかった。

「仁君仁君、サユちゃんは甘いものが好きなんですよ？」

「……………」

美夜の言葉を聞き、仁は手持ちのパンを見た。以前慎に聞いたが、仁のパン選びはランダムらしく（多分、近くにある物を適当に取っているのだろう）、いつもラインナップが大きく違う。

本日のラインナップは、カレーパン、アンパン、コッペパンの三つだった。カレーパンはともかく、アンパンとコッペパンは最後まで売れ残るような物だ。どうやら今日は大した戦績ではなかったらしい。

「……やる。おかずの礼だ」

「あつ……、ありがとう、仁君……」

沙雪は仁からアンパンを受け取ると、目に見えるほど真っ赤になり、

本当に嬉しそうな笑みを浮かべた。こういう反応を見ると、やはり沙雪が仁を好きなのは間違いないようだ。

それにしても、初々しいなあ、沙雪。私はもうこういう反応できないからなあ。

「よかったですね、サユちゃん」

にこにこ満面の笑みで、沙雪と仁を見守る美夜。

……もしかして、美夜って沙雪が仁を好きなの、知ってた？ だとしたら、かなり意外だった。この天然娘がこんなにも鋭かったとは。

（美夜、仁を誘ったのって、このため？）

（……？）

（や、だから、沙雪の気持ち知ってたから、仁を呼んだんじゃ……？）

（……？）

どうやら私と美夜の間ではまだアイコンタクトはできないようだ。友好度が足りないのだろうか。それとも、天然娘にはアイコンタクトのスキルがないのか。

「……何だかボク達、蚊帳の外だね」

「あ、あははは……」

微笑ましい雰囲気的沙雪達とは対照的に、私と久里子はすっかり取り残されていた。

つづく

第四章 二人の少女（後編）

「それにしても、沙雪があのだ念仁に惚れてるなんてねえ」

今日の夕飯は、沙雪と仁の話で盛り上がった。

やはり美夜は沙雪の想いに気付いていたらしく、昼食に仁を呼んだのも沙雪のためだったそうだ。ただし、美夜自身は仁の想いが自分に向かっていくことには気付いていないようだった。

ちなみに今日の夕飯は、ブリの照り焼きと旬野菜の煮物だ。味噌汁はシジミ。

美夜は気取らない家庭料理、その中でも特に和食系が得意だそうだ。要望があれば、和洋折衷のあらゆる料理が作れるらしい。前にフランス料理のフルコースが食べたい、と冗談で言ったら、その日の夕飯に本物のフルコースが出てきて驚いた。

「そんなに意外ですか？ 仁君はいい人です。サユちゃんが好きになっちゃうのも不思議じゃないと思いますよ？」

「んー、まあ、昼にも言ったけど、あいつは確かに悪い奴じゃないのよ。だけど、あいつって極端に人付き合いが苦手で、そういうの避けてるからね。沙雪みたいに普通の女の子が好きになるようなタイプじゃないでしょう？」

実際、仁に出会って間もない頃の沙雪は彼を怖がっていたはずだ。一応面識はあっても、消極的な沙雪はあまり彼と話そうとはしていなかった。

一体あの二人の間に何があったのだろうか。いつか久里子と聞き出してやろう。

「誰かを好きになるのに、理由なんて必要ないですよ」

「まあ、確かに……」

よくよく考えれば、慎だって元はただのチンピラだったし……。

「でも、それよりさ、美夜はどうなのよ？」

「はい？」

ほお、とぼける気ね。

私は悪役のような笑いを浮かべ、美夜を睨み付けた。美夜は本能的に危険を感じたらしく、警戒した小動物のように身を縮こまらせた。苛め甲斐がある反応で実に愉快だ。

「な、何ですか？ 何か凄く嫌な予感がするんですけど？」

「ふふ、いい勘してるじゃん。私がずばり聞きたいことはただ一つ！ 美夜、貴方は仁のこと、どう思ってるの？ 随分とあの朴念仁を高評価してみたいけど、もしかして美夜も……」

「ち、違いますよ！ マイちゃん、誤解してます！」

予想どおり、顔を真っ赤にして面白い反応を見せてくれる美夜。期

待を裏切らない反応で、こちらとしても嬉しい限りだった。

「何が誤解なの？　むふふ」

「その含み笑い止めてください」

「むふふ。慌てるところが怪しいな」

「もう！　本気で怒りますよ！」

雰囲気的には、美夜はかなり怒っているようだった。しかし、チビっこの童顔で怒られても全く迫力がなかった。むしろ、小動物がむくれているようで微笑ましいくらいだ。

何だか無性に可愛かったので、私は仔猫とじゃれ付く時のように彼女を撫で回した。すると、美夜はお気に召さなかったようで、私の手を少々乱暴に払い除けた。

「マイちゃん！　私にはもう身も心も捧げた人がいるんです！」

「……はア？」

今、この子、結構凄いこと言わなかった……？

「……身も？」

「………あっ？」

美夜は一瞬私の発言の意図に気付かず、きょとんとしていた。しかし、言葉の真意に気付くと、美夜の顔は今にも蒸気が噴出しそうなほど真っ赤になった。

えっと……、マジで、身も捧げちゃったの、この子……。

「う、うにゃあ……」

私の疑問に対して、美夜は真っ赤な顔のまま頷いた。

「嘘!？ ほ、本当に……、その……、やっちゃったの……?」

「そ、そういう言い方しないでください!」

反発するものの、否定はしない。

やはり、そういうことらしい。こんな小学生にしか見えないチビッコの分際で、女の子の大切なものを捧げちゃったようだ。きつと、その男はロリコンの変態野郎に違いない。

「……マイちゃん、今凄く失礼なこと考えませんでした?」

「ああ、ごめん。せいぜい中学生くらいよね?」

「何の話ですか!？ 私は真正正銘の高校二年生です!!」

「それにしても、本当に彼氏いるの……? 正直、信じられないんだけど?」

「真顔でそういうこと言われると、凄く傷付くんですけど……。これでも何度か告白されたことあるんですよ、私……」

……ああ、それは世に言うロリコンという類の連中で真正の変態達だ。

可哀想に、美夜って今まで大変人生を送ってたのね。からかい方を少しだけ注意しよう。

「……マイちゃん……」

「んっ? 声出てた?」

「マイちゃんの顔を見れば、何考えてたなんてすぐわかりますよ。仕舞いには本当に怒りますよ。さっきから酷いです……」

「ほら、キャラメルあげるから許して」

「……ご飯の途中ですよ」

と言いつつも、受け取ったキャラメルを口の中に放るチビッコ。目に見えて機嫌もよくなってくれた。扱いやすくて、実に助かる。

「ねえ、それはそうと、美夜の彼氏ってどんな人なの？ 教えてよ？」

「……えっと、これが写真です」

美夜は首から提げているロケットを外し、私に差し出してきた。私の知る限り、美夜がこのロケットを外している姿をほとんど見たことがなかった（さすがに入浴時は外しているけど）。学校に行く時でも制服の下に隠しているし、体育の時まで手放さない。

きつと美夜にとって命よりも大切なものなのだろう。

いつも彼女に対しては無遠慮な私でも、これを受け取るのは躊躇われた。しかし、美夜は、気にしないでください、と言うような優しい笑みを浮かべながら、私の手にそれを握らせた。

「……へえ、この人が……」

慎には悪いけど、慎より百倍は格好いい……。

写真には、前の学校の制服を着た美夜と彼氏が二人一緒に写っていた。美夜は真っ赤な顔のまま俯き、彼氏はどこか遠く見つめているようだった。おそらく付き合う前の頃か、付き合い出した直前の頃の写真なのだろう。二人に若干の距離があるように見受けられた。

「初めて二人で撮った写真なんです。恥ずかしいので、あんまり人に見せたことがないんですよ」

「私なんかが見てよかったの……?」

「マイちゃんだからこそ、見て欲しかったんです」

「美夜……」

温かな美夜の微笑みがあまりに眩しくて、私は彼女の視線から避けるように俯いた。少々不審な行動だったかもしれないが、美夜からは写真を眺めているようにしか見えないだろう。私も視線を逸らしたのは失態だと思い、取り繕うように視線を写真に向けた。

美夜の彼氏。まさに眉目秀麗を体現したような美形だ。しかし、どこか冷酷な印象を拭い切れない。私だからわかる。この男は、私と同じ人殺しの目をしている。

それに、何だろう……? 何か、引っ掛かる……。

「どんな人だったの?」

「無口で無愛想で人と距離をとっているところは、仁君に似てますね。でもね、いつも誰かのために頑張る人なんです。どれだけ自分

が傷付こうとも、他人の涙を無視できない、そんな人です」

「……ふくん、そうなんだ……」

違う……。この男は、美夜が言うような優しい人間などではない。

私の本能が告げている。こいつは、血と罪に塗れた咎人の道を往く者だ。数え切れぬほどの死と戦乱を駆け抜けた修羅。運命が紡ぐ絶望を、救いなき死を受け入れた目をしている。この男は、人の温もりなんて知らない鬼だ。

「でもね……、似ていると言うなら、マイちゃんの方が彼に似ていますよ」

「私と……?」

確かに、この写真の男は私と同じで美形だ。しかし、こんな無愛想極まりない面と私が似ているとは思えない。ならば、美夜はこの男の何が、私と似ているというのだろうか。

……まさか、私を感じ取ったように、美夜も気付いた……。

「……ええ。一族郎党を皆殺しにされた過去を持ち、復讐のために命を懸けているところなんて、そっくりじゃないですか……」

「……ッ!？」

……ああ、バレてたんだ……。

しかし、裏切りが発覚した時はもっと焦りや恐怖が渦巻くと思って

いた。惨めに追い詰められて、恐怖に押し潰されているのだと思っていた。

しかし、今の私の心に渦巻く感情は、寂しさだけだった。

予想していなかった訳じゃないけど、美夜に追い詰められることになるなんて、やっぱり悲しい。短い付き合いだったけど、私は美夜を好きになっていたから、彼女が敵になるのは辛い。

「……………へえ、そうなの……………」

「……………彼も、今のマイちゃんのように苦しんでいました……………」

美夜はどこか遠い目をしていた。その瞳には言葉にできない憂いの感情が見て取れた。

「……………過去形？ ……もしかして……………」

「……………死んでは、いません……………。でも、生きているとも……………」

伏せられた彼女の瞳には、今にも零れそうなほどの涙が湛えられている。

死んでいるとも生きているとも言えない、とはどのような状態を指すのだろうか。私には想像はつかないが、ろくでもないことに違いない。美夜をここまで悲しませるなんて、反吐が出るような事態になっているに決まっている。

「私は戦います！ あの人を救うためなら、誰とだって！」

零れ落ちそうな涙を拭い、顔を上げた美夜の顔には決然たる覚悟があった。私の覚悟とは別種だが、似て非なる絶対的な覚悟だ。命すらも代価とできる揺るぎない信念が、美夜の瞳には存在していた。強い意志を秘めた瞳で私を真正面から見据える美夜。その瞳には、敵対の意思はなかった。しかし、それでも私を試すような、いや、問い掛けてくるような意思は感じられた。

私は彼女から目を逸らさず、真正面から私自身の覚悟を見せた。宿命を果たすためなら、たとえ親友が、美夜が相手だろうと戦う。不転の強い覚悟を、彼女に向けた。

「私だって、戦うわ。誰が相手だろうとも、決して退かない！」

「……それでこそ、マイちゃんです」

美夜は目を閉じると、小さく微笑んだ。

もう彼女からは揺るぎない強い意志は感じ取れなくなった。普段のぼわぼわした雰囲気に戻っていた。しかし、彼女の意志が消えた訳ではない。ただ私を感じ取れなくなっただけで、あの意志は今も彼女の中にあり続けるはずだ。

私と美夜は、その目的こそ全く別だが、互いに譲れない強い信念を持っている。おそらく、いずれその信念が衝突する日が来るだろう。できることなら、彼女と戦うことはしたくない。いや、彼女だけでなく、無関係な人間とは極力戦いたくない。だが、それでも私の邪魔をするなら、誰だって容赦はしない。

「……やっぱり似てますね。ホント、困っちゃいます」

そう言い、ロケットの中の男に向けて微笑む美夜。

美夜の彼氏。私と同じように、一族を殺されて復讐の道を歩んだ男。名前も知らないけど、妙な親近感を覚える。彼が今どうなっているかには興味はない。しかし、彼が美夜に出会えたことは幸福だったろう。

私は写真の男に向かって軽く微笑むと、ロケットを閉じた。

「……一応口にも出しときますけど、その人好きになっちゃ駄目ですよ」

「馬鹿！ 私はまだ慎のことが……、って……うわわッ!？」

今のは完全に失言だった。

私は慌てて口を塞ぎ、今の言葉を飲み込もうとした。しかし、一度零れた言葉は二度と戻ることはなかった。

慎への未練は絶対に口に出さない、と心に決めていた。一度口にしてしまえば、想いが溢れ出てしまうと思ったから。だから、厳重に鍵をかけて閉じ込めたはずだった。しかし、美夜と話しているうちにその心の鍵がいつの間にか開かれていた。

「……そんなに慌てて否定することないと思いますけど?」

「う、うるさい！ 貴方に私の何がわかるのよ!」

「確かに、私にはマイちゃんのお持ちはわからないです。でも、慎君のお持ちならわかりますよ。かつての私は、今の慎君の立場だったんですから」

「……ッ!？」

美夜の彼氏は私と同じ体験をした者。ならば、美夜は慎と同じ（もしくは似た）立場にいた者になる。

復讐の道へと歩むなら、大切な人を巻き込まないようにするのは当然のことだ。破滅するとわかっていながら、大切な人と一緒にはいられない。いや、あまりに辛い道だからこそ一緒にいたい、と思う者もいるだろうが、この男は恐らく違う。

きっと、私と同じようにこの男も美夜を拒絶したはずだ。おそらく、彼は救いなき死と絶望を受け入れていた。だからこそ、誰かと共に歩むことはしなかったはずだ。それがどれほど苦しくて、悲しくて、救われないと知っていたから。

拒絶された経験があるというなら、慎のお持ちはわかると言うのも納得できた。いや、美夜にしか理解できないお持なのだろう。

「マイちゃん、貴方は勝手です。何の事情も話さずに突然、慎を拒絶するなんて最低です。それがどれだけ傷付くのか、私はよく知っています。本当に、本当に大好きな人から一方的に突き放される悲しみや苦しみがどれほどのものか、貴方にはわかるんですか？」

確かに私は、マイちゃんの苦しみはわかりません、わかってあげられません。貴方がどれほど悲しくて、苦しんだかは、同じことを

した彼じゃないと、わかってあげられないでしょう。でも、貴方だって、慎君の悲しみや苦しみを、何一つわかってあげることはいないんです！」

「……ッ!？」

美夜の言葉が、容赦なく私の心を抉る。いや、抉るなどという生易しい表現ではない。私の心をズタズタに引き千切った。

今の言葉は、今まで一番私の心を傷付けた。

私自身への中傷なら構わない。それだけの罪を私は犯したのだから。だけど、慎は何も悪くない。私が一方的に巻き込んでしまっただけ。だから、慎の悲しみ、苦しみが一番私の心を傷付ける。

そして、今の美夜の言葉は、慎の悲しみや苦しみをそのまま形にしたようなものだった。同じ悲しみや苦しみを知っている美夜だからこそ、その言葉は重かった。

「……ごめん、ごめん、ごめんなさい……。確かに、美夜の言うとおりだよ。私、慎に凄くひどいことをしたんだよ……。慎を、凄く凄く、傷付けた……。」

ごめん、ごめんね……。お願いだから、許して、美夜……。……
慎……。」

いつしか涙が零れていた。

慎への想い。それはどうあっても私の心からは消せなかった。

好きだから、どうしようもなく慎が好きだから、絶対に忘れられない。

だからこそ、慎を傷付けた私自身が許せない。本当に、どうしようもなく許せない。

「……私の方こそごめんなさい、マイちゃん。貴方だって悲しくて苦しいってことはわかっていたのに、酷いこと言ってごめんなさい。でも、私は慎君の気持ちが痛いほどわかるから、だからどうしても放っておけないんです。だって、慎君は今もマイちゃんのことを好きだから！」

「そんな訳ないじゃない！　だって、だって……」

慎はあの子と一緒に道を選んだ！

私のことを見ているはずなんて、ないに決まってる……。

「もう一度言います。慎君は今も、マイちゃんのことを愛しています。だって、慎君は初音ちゃんと一緒の時でも、彼女のことは見ていません。いつも見ている振りをして、遠くのマイちゃんを見えています」

「そんな……」

言葉にできない複雑な感情が沸き上がる。

今も慎が想ってくれている、と言うなら本当に嬉しい。だけど、そうして想っていてくれると言うことは今もなお慎を苦しめ続けているということだ。それはあまりに辛かった。

「……初音ちゃんも、慎君の気持ちに気付いています。だから、最近はまだ貴方に対する憎しみが、……あまりに凄まじいです」

でしょうね……。慎を振った時でも、充分私を殺してやりたい気持ちだったのだから。今でも慎の想いが私に向いていると知れば、その憎しみがどれほどになるか想像すらできない。

「近いうちに、仕掛けてきますよ」

「……そういうこと、言っちゃっていいの？」

今の情報漏洩は、紛れもなく組織に対する裏切り行為だった。

「いいんですよ。私は、組織の味方でも、芝崎家の味方でもないんです。ただ一人、その人だけの味方なんです。だから、友達にちょっと秘密の情報教えちゃってもいいんです。

それに、私が芝崎家を止める権利はあっても、芝崎家に私を止める権利はありませんし。あと、友達でも私や彼の敵になるって言うなら容赦はしません」

美夜は愛しそうにロケットを見つめ、優しい微笑を浮かべた。

全く、この子は凄い……。どうして、ここまで一途になれるのだろうか。本当に、身も心も全て捧げているみたいだ。それほどまでの深い深い、愛情なのだ。

慎も、そんな風に私を……。

ううん、駄目だ。それは駄目。慎を巻き込まないよう、私は慎を拒絶したのに、それでは何の意味もなくなってしまっているのか。

「あつ、それと、もう一つ言っておきたいことがあります」

「何？ あんまり余計なこと言い過ぎると、いくら美夜でも本当に立場悪くなるわよ？」

「大丈夫です。組織とは無関係なことです」

美夜は悪戯っぽく微笑むと、私の手からロケットを奪っていった。

「もしもの話です。もし、慎君が全てを知ってもなお、マイちゃんと一緒にいたい願うなら。世界中の全てを敵にしても、マイちゃんの味方をしてくれるって言うのなら……」

そんな都合のいいことが現実にかかる訳ない。それは本当に仮定でしかない。

まさに夢だ。そういう幻想を私は抱いている。それは否定しない。だけど、それが現実になるはずがない。そんなことをしてくれる人がいるなんて、現実にいる訳ない。

「もし、慎君が私みたいな大馬鹿さんだったら、受け入れてあげてくださいね」

「……私みたいな、って？ どういうこと？」

「……慎君も私みたいに、地獄の底まで寄り添い続けるって覚悟す

るかもしれないです」

地獄の底まで、か……。

無論、慎をそんな場所まで引き込むつもりはない。だが、もし慎がそこまでの決意をしてくれたら、私は彼を拒絶することができるだろうか。

わからない……。だって、私だって本当は慎と一緒にいたいから……。

「……もしもの話です。でも、そんな『もしも』が起こったら、慎を受け入れてくださいね。命懸けなんですよ、そういう覚悟って」

「……………考えておくわ。もし、もしも、そんな奇跡みたいなことが起こったらね……」

私はどちらを望んでいるのだろう。

たった一人で戦い続ける道と、慎と共に歩む道。

わからない。わからないけど、私には選べない。慎と一緒にいたいという気持ちは、胸を押し潰さんばかりに溢れ出ている。心では慎を求めている。それが偽りない想いであつたが、それでも慎を地獄まで付き合せたくなかった。

もし、もしも、そんな奇跡みたいなことが起こったら、私は……。

555

閑話 Snow White

友達を大切にしなさい。

それが、沙雪の父の最期の言葉だった。

彼女の父は、彼女が六歳の頃に肺癌で亡くなった。彼女の父を一言で例えるなら、煙草好きの熊。生え放題の髭面と山男のような風体は、まさに熊そのもの。無類の煙草好きで、癌を宣告されてからも煙草を止めることはなかった。豪胆でワガママ放題の男だったが、誰よりも情に厚く、彼の葬儀には何百人もの人が弔問に訪れた。

沙雪は誰よりも父が好きだった。高校生になった今でも父を尊敬し、一日たりとも父の遺言を忘れたことはなかった。

事情を知らないマイラは、友達を大切にする子だなあ、程度にしか思っていないが、沙雪が友達のために奔走するのはそういう背景があるからだ。このことを知っているのは、幼稚園時代からの友人、久里子だけだろう。

今日も沙雪は、マイラと慎の復縁のために、ある人物を探していた。その人物とは、二人の共通の友人である仁である。

しかし、三千人以上のキャパシティーがある上に運動施設が多い学内は、無駄に広い。そこで人一人を探すのは一苦労だった。

しかし、時はすでに放課後。仁は帰宅部なので、すでに帰っている可能性が高い。そろそろ仁を探すのを諦め、帰るか帰るまいか沙雪は思案していた。

そんな彼女の耳に、ちょうど探し人の声が聞こえた。声が聞こえたのは、生徒会室からだった。

「……………う。私は、……………してない。……………くても、……………知らな……………」
「そうか……………」

仁は誰かと話しているようだった。よく聞こえなかったが、女の声だった。

沙雪は少し開いている扉から、生徒会室の様子を窺った。少々罪悪感があったが、あの無愛想極まりない仁と話している女性に興味の方が強かった。

扉の隙間から見えたのは生徒会長、岸辺藍だった。昨年、犬神学園に転校してきた少女で、運動神経に富んだ者が多い犬神学園の中であっても、飛び抜けた運動神経の持ち主。犬神学園では運動神経の良し悪しがその人物の評価、人望につながる。岸辺藍もそうした評価で認められ、生徒会長にさせられた人物である。

余談であるが、犬神学園の生徒会選挙は少々変わっていて、本人のやる気の是非に問わず、生徒の総意で勝手に決められる場合がある。岸辺藍もその人望ゆえに、本人の意志とは関わりなく勝手に生徒会長になってしまった人物だった。

それにしても、仁と生徒会長はどういう知り合いなのだろうか。

「今回……………に、私……………関知……………ない……………。そ……………も、……………に恨み……………あるのは、大神やホムラ家……………ない……………?」

藍の声はよく聞こえず、話の内容を把握できなかった。

「……………」

「否定…………いの…………？ まあ、…………のも当然……。貴方…………の…………族を……………したのに、……………も加担……………るんだから……………」

「…………ちよつと待て、どういふことだ!？」

「…………らな…………の？ ヴァ…………ンの連中と……………が共謀して…………ウェア……………を……………、そこにいるのは、誰!？」

「きゃッ!？」

藍に見つかり、怒鳴られた沙雪は思わず軽い悲鳴を上げてしまった。反射的に逃げようとしたが、運動神経のよろしくない沙雪は足をもつれさせ、盛大に転んだ。その隙に、仁と藍が生徒会室から出てきてしまい、簡単に見つかってしまった。

「…………お前か……………」

仁は沙雪を見ると、小さく溜め息を吐いた。心なしか安堵したように見えた。

「知り合い？」

「…………マイラの友人だ」

「じゃあ、もしかして、貴方に用事だったんじゃない？」

「……………そうなのか？」

仁は転んだままの沙雪に対して尋ねた。

二人とも、転んだ沙雪に対して手を差し伸べるといふ親切心は起こらないらしいので、沙雪は一人で起き上がって、仁の問いに頷いた。

「え、ええ……。マイラと慎君のことで話がしたくて探してたんだけど……」

こうして三人が立ち並ぶと、三人が三人とも背が高かった。沙雪も藍も、女性としては珍しく一七十後半を超える長身。仁にいたっては九十に近い。

「……あの二人のことか。まだ諦めていないのか？」

「だって、二人ともまだ、想い合っているんだよ。それなのに、別れるのはおかしいわ」

「……わかっている。だが……、いや……、お前の方が正しいな。おかしいのは、あいつ等の方か……」

普段の彼なら、他人事に好んで首を突っ込むことはなかった。しかし、他ならぬ親友と再従姉の問題。無視を決め込む訳にもいかなかった。

「行くの？」

藍が仁に問いかけた。

「……ああ、行く。さっきの話はまた今度聞かせてくれ」

「それは別に構わないけど、面白い話じゃないわよ。知らないなら、知らないで……」

「……いや、知らなければいけないことだ」

「そう……。まあ、私はどちらでもいいけどね」

藍は億劫そうにそう言うと、生徒会室に戻っていった。

沙雪は二人が何の話をしているかわからなかったが、勝手に踏み入れるような軽い話をしないのはわかった。だからこそ、二人の関係がどんなものか気になった。しかし、控えめな性格の沙雪には、とても軽々しく聞くことなどできなかった。

「……話すなら、場所を変えよう」

「そうね」

二人の関係が気になりつつも、沙雪は大人しく仁の意見に同意した。さすがに生徒会室の前で長話という訳にもいかないだろう。沙雪と仁は、生徒会室から離れて、学内のカフェテリアに向かった。

その途中、偶然にも徳島教諭と出会ってしまった。この時、二人は特に何の感情も起きなかったが、彼から頼まれ事の内容を聞いて、彼と会ったことを後悔した。

「おお、ちょうどいいところに！ 悪いんだが、第七体育倉庫の備品チェックに行ってくれねえか？ 俺ア、ちよつと忙しくてなあ……」

徳島は、二人の返事も聞かずにチェックボードを押し付け、どこかへ行ってしまった。押しの弱い沙雪と、無口な仁では反論もすることができず、そのまま徳島を見送るしかできなかった。しかし、鼻歌交じりの後姿を見ると、とても忙しそうには見えなかったので、非常に不愉快な気分になった。

全く以っていい加減な教師だ。職務怠慢もいいところである。愚痴

を漏らしたくなるのも当然だったが、真面目な性格の二人は大人しく言われた指示に従うことにした。

二人は進路を変え、第七体育倉庫へ向かった。

第七体育倉庫は、数多くある体育倉庫の中でも、もっとも使われない体育倉庫である。そもそも、体育倉庫が七つもあることが異常なのだが、運動施設の多い犬神学園ではこれでちょうどいい数なのである。その中でも第七体育倉庫は、普段あまり使われない器具をしまう場所で、滅多に開かれることのない場所だった。

「……全く、徳島にも困ったものだ」

何事にも興味がなさそうな仁でも、不満を口にすることがあるらしい。

埃塗れの第七体育倉庫に来る羽目になったのはもちろん運悪かったことだったが、仁の意外な一面を知れたのはよかった。沙雪は未だに、無愛想極まりない上に物騒な顔立ちの仁に恐怖心を抱いていた。

「まあ、片付けでもしながら、マイラ達のことを話そう？」

「……そうだな。あいつ等もあいつ等で頭痛の種なんだが……。それにしても、随分と滅茶苦茶な置き方だ。いつ崩れてもおかしくない」

「そうね。まずは少し備品の整備をしてからじゃないと、チェックなんて……」

沙雪は積みまわった放しの備品を整理しようと手を伸ばしたが、それが

間違いだった。

奇跡的なバランスで積み上げられた備品に微かな衝撃が加わり、雪崩のように崩れ落ちた。備品の雪崩は、その均衡を破った沙雪目掛けて崩れ落ちてきた。

「きゃあああああッ!？」

「……くッ!？」

沙雪が雪崩に飲み込まれる寸前、仁は彼女の体を抱き、瞬時に安全な場所へと飛んだ。それはまるで獣のような俊敏さだった。

何が起こったかわからなかった沙雪だったが、仁の温もりだけはしっかりと感じられた。

無残に崩れ落ちた備品を見て、沙雪は初めて仁に助けられたことに気付いた。つい先ほどまでは、獣にでも引き裂かれたような物騒な傷跡のある顔にしか見えなかったが、今の沙雪には仁の横顔が不思議と凛々しく見えた。

閑話休題、五章「エンヴィー」へ……

第五章 エンヴィー（前書き）

残酷描写あり

第五章 エンヴィー

俺を呼び起こす声。

意識が朦朧としながらも、その声が初音のものだと判別できた。彼女の声が俺の意識を覚醒させていく。しかし、意識の覚醒と同時に感じる浮遊感に違和感を覚えた。それともう一つ、足首や胴回りに感じる鈍痛。

普段の起床時に感じるはずのない二つの感覚に疑問を覚えつつも、俺は目を開けた。

暗い。目を開けたその場所は、仄かな明かりのみが照らすだけの暗闇に満ちた場所だった。しかし、薄暗いその場所は、俺の記憶にならない場所だったのは確かだ。

それに、頭上にいくつもの逆さの人影が見えた。これは普通の状態では有り得ない現象だった。それこそ、吊るし上げられた状態であれば、逆さの人影が見えるはずもなかった。

俺の意識はそこで完全に覚醒し、目も暗闇に慣れ、ようやく自分の状態に気付いた。

ここは教会、おそらく日野塚第三教会の中だ。荒縄で縛られた俺は、教会の天井から逆さ吊りにされていた。

「あゝ、先輩、早いお目覚めですね？」

「は、初音!？」

俺の頭上、教会の聖壇近くに彼女はいた。

しかし、今の彼女は平素の私服姿ではなかった。白十字が描かれた黒いワンピースに身を包みながらも、その腰には朱塗りの鞘に納められた大小の刀。普段の彼女とは身をまとう気配が違い、冷徹な暗殺者のように見えた。

それに、彼女の側には見知った顔が何人かいた。それがまた、俺を驚かせた。

「じ、仁……? それに、徳島……。げえ、初音の頑固親父まで……」

初音や彼等を含め、二十人以上の人が教会内にいた。誰もが剣呑な雰囲気をもとい、とても堅気の集団には見えなかった。

「……………」

「こら、先生と呼べ……って、ここじゃ教師面もできねえか……」

「……ふん、小童が」

俺に一瞥くべると目を伏せ、俯いたのは、仁。

この異様な集団の中で唯一、平素と変わらない駄目親父臭を漂わす徳島。

心底俺を毛嫌いしている初音の親父、芝崎壮二郎。

「おい、どうなってんだ、これは? とつと縄を解きやがれ!」

そもそも、どうして俺はこんな目に合っているのだろうか。
マイラが俺を振った本当の理由を教えるから教会に來い、と言われ
て來ただけだ。それなのに、いつの間にか天井から逆さ吊りにされ
ていた。

しかも、そこには初音や仁や徳島を含め、俺とマイラの関係におよ
そ関係のなさそうな連中がうようよという。

ここへ来る直前、逢瀬に警告はされていたが、まさかこんなことにな
るとは思ってもいなかった。逢瀬からの警告は『真実を知れば後
悔する』という内容のもので、教会で何が起るかは具体的に何も
言っていなかった。しかし、俺がこんな目に合うのを知っていたな
ら、このことも一緒に警告してほしかった。

「悪いんですけど、それは出来ません。もう少し、そこで吊るされ
ていてください」

「ふざけんなよ、おい！ どうして俺がこんなところに吊るされなき
ゃならねえんだよ！」

「まあ、安全の確保のため、ですかねえ？」

安全だと……？ この逆さ吊りの状態のどこが安全なのか？ ヨガ
の一種か？ それとも、新興宗教の健康法か何か？ 何にせよ、
冗談じゃない！

「いい加減にしやがれ！ 冗談も大概に……」

「冗談などではない」

重く、低い声が俺の訴えを退けた。

この声の主は、頑固親父こと芝崎壮二郎だ。俺の苦手人物ワースト3に入るほど、不得手な相手だ。およそ初音と血が繋がっていると思えないほど頑強な体格、眼光鋭い面構え。武道の達人らしく、素手で岩を割れそうなほどの剛腕だった。彼女の父親、ということもあるが、厳格で尊大な雰囲気俺の鼻に衝き、正直顔を合わすのも不快だった。おそらく、それは芝崎壮二郎も同じで、向こうも俺を毛嫌いしていた。

「あのウェアウルフの娘が来るのだ。貴様如きでは十秒で肉塊となるぞ」

「ウェアウルフだア？」

まさか、この頑固親父の口から、ウェアウルフなどというファンタジーな単語が出てくるとは予想だになかった。

ウェアウルフといえば、よく漫画やゲームで出てくる獣人。狼男や人狼、と言った方がわかりやすいか。ファンタジーの世界にのみ登場する架空の存在だ。

そんなものが現実に現れて、俺に危害を与えるというのか。馬鹿馬鹿しいにも程がある。

「はッ！ ついに耄碌したか、クソジジイ？ つまんねえ親父ギャ

グ言ってねえで、とつとこの縄解きやがれ」

「黙らんか、小童ッ!!」

脳を揺らすような一喝。しかし、この頑固親父に怒鳴られるのは慣れている。いくら喚かれようと、今更怯むものではなかった。

「まあまあ、お父さん、落ち着いて。慎さんは何も知らないだから、冗談と思うのも仕方ないじゃない？」

憎げに俺を睨む頑固親父を宥めながら、初音は笑顔をこちらに向けただ。しかし、普段の愛らしい笑顔と違い、今はどこかその笑顔も冷たかった。

「慎さん、別にお父さんは冗談を言った訳じゃないですよ。本当に来るんです、危険なウェアウルフが、ここに」

「お前もかよ……。悪ふざけなら、もういい加減にしろ」

「だ〜か〜ら〜、冗談でも悪ふざけでもないですよ」

微笑を浮かべているが、初音の顔に冗談を言っている気配はなかった。

しかし、初音や頑固親父の言葉を信じる気にはなれなかった。今の初音達は明らかに不審だ。どこか狂っているようにさえ感じられた。

「まったく、わかったよ。じゃあ、来るんだな、物騒な化け物が」

「そうです。来るんですよ、おぞましい化け物が」

化け物、と口にする初音はどこか機嫌がよさそうだった。もつとも、何故機嫌がいいのかは全く理解できなかった。

「……おい、お喋りは終わりだ。来るぞ」

仁が厳しい口調で初音を咎めた。

それにしても、一体何が来ると言うのか。まさか本当に、ファンタジー世界の生き物が現れて暴れ出すのか。そんなことを本気にするなんて、正気の沙汰とは思えない。

仁や徳島、芝崎壮二郎までマジ面でそんな冗談を説くなんて、世も末だ。

それより、マイラが俺を振った本当の理由は、いつになったら教えてもらえるのだろうか。そもそも、俺はそれを聞くために来たはずなのに、何故逆さ吊りにされて、いるはずもない化け物を待っているのだろうか。

ギギギ……、と轟音を鳴らしながら教会の扉が開いていく。最初に開いた時もあったが、まるで地獄の門を開いているような音だ。

「……来ましたよ、慎さん。あれが化け物です」

「冗談は止せ」

「いえ、あれは化け物です」

初音は侮蔑するように断言した。しかし、初音がどう言おうとも、教会の扉を開け放ち、俺達の前に

現れた人物は、どこからどう見ても人間にしか見えなかった。

闇に溶けるような漆黒色のレザーコートとブーツに身を包み、フードで顔を隠しながらも、その人物がファンタジー世界に出てくる化け物と同一の存在には見えなかった。顔は隠されているが、胸元の大きな膨らみや、裾から覗ける太股から、その人物がまだうら若い女性であることが判別できた。

レザーコートの女が、初音達に警戒しつつも、逆さ吊りにされた俺を見止めると、狼狽の色を見せた。

彼女の視線が俺に向いたその瞬間、俺の中の何かが強く反応した。言葉では表せない何かが、俺と彼女の間に繋がっている。そう、強く感じられた。

「……まさか、マイラか……？」

「……し、慎？」

初音達が化け物と呼ぶ存在は、マイラだった。

どうして彼女が化け物と呼ばれなければならないのか。いや、それより何故彼女がこんな時間にこんな場所に訪れるのか。それをどうして初音達は予想できたのか。マイラと初音達は何をしようというのか。

数々の疑問が浮かんだが、俺にわかるものは一つとしてなかった。

「おい、初音、仁！ 何がどうなってんだ！？ わかるように説明

しろ!!」

「だから、さっきから言ってるじゃないですか。あれが、物騒極まりない化け物だって」

「初音!　いくらあいつを憎んでいるからって、言っていることと悪いことがあるぞ!」

俺の叱咤に、あからさまな不快感を示す初音。底冷えするような殺気が俺に向けられた。

「慎さんは何も知らないですよ。あの女は、血肉に飢えた卑しい人殺しのメス犬なんですよ!」

「いい加減にしろ、初音!!」

今の言い方には、さすがにキレた。

初音がマイラを憎んでいるのは知っているが、本人を前にしてあそこまでの暴言を口にしていいはずがない。それに、マイラが人殺し呼ばわりされる謂れはないはずだ。

しかし、仁や徳島はおろか、マイラさえも反論の声を上げなかった。俺の怒声だけがむなしく教会内に響いただけだった。何故、誰も俺に賛同してくれないのだろうか。

「……慎、その子が言っているのは、本当だよ」

「なッ……!!?」

マイラは自分が何を言ったか理解しているのだろうか。

初音は、血肉に飢えた人殺しのメス犬、とマイラを罵倒したのだ。それが真実であると言うなら、マイラは人殺しだということ。到底信じられるようなことではなかった。

しかし、誰一人としてそれを否定する者はいなかった。俺以外、誰もマイラが人殺しだという事実を否定しなかった。彼女自身でさえ、それを認めていた。

「馬鹿言うな！　どいつもこいつも冗談が過ぎるぞ、さつきから！」

「……慎、誰も冗談なんて言ってないのよ。信じられなくても、全部真実よ」

「全部って何だよ！？」

「……私が、血と罪に塗れた殺人鬼で、貴方達人間とは違う存在だってこと」

訳がわからない。マイラは何を言っているのだろうか。

マイラが人殺し？　それに、人間とは違う存在？

性質の悪いジョークとしか思えない。そんなことがあるはずがない。マイラが何故、人殺しをしなければならないのか。そもそも、マイラが人間でないのなら、彼女は一体何だというのか。馬鹿馬鹿しいを通り越して、呆れるしかなかった。

「……慎、見て。これが私の本当の姿……」

マイラは俺を見上げながら、顔を隠すように深く被っていたフードを脱いだ。

そして、マイラの本当の姿を見て、俺は絶句した。

な、何だよ、あれは……？ あいつは、本当に俺の知っているマイラなのか……？

独特の癖のある黒髪はまるで燃え上がる炎のような灼熱色と化し、色素の薄かった灰色の瞳は爛々と輝く金色に変貌していた。そして、何より俺を驚かせたのは、人間の物とは到底思えない獣のような耳。紅蓮の髪に溶けるような真っ赤な色の毛に包まれた獣の耳は、まるであつらえたかのようにマイラの体の一部として存在していた。

「さっきの芝崎初音の言葉を一つ訂正するなら、私は血と罪に塗れても、決して犬なんかじゃない！ 私は、誇り高き狼の眷属、ウエアウルフ！」

「う、嘘だ！ そんな訳、ないだろう！ つまんねえんだよ、さっきから訳のわからねえ冗談ばかり言いやがって！ いい加減にしろよ！」

「冗談なんかじゃない！ 全部、本当のことなのよ！」

私は、ウエアウルフ！ 人間じゃないの！ 姿形は人間に近くても、私は慎とは違う存在！ 慎とは全然違う人間じゃない存在なの！

……そして、復讐のために三人もの人間を殺した冷酷な悪魔！

慎なんかとは、絶対に一緒にいられない呪われた化け物なのよ！」

「嘘だアアアアアアッ!!」

信じられなかった。

マイラが、人間ではないなんて。俺とは全く異なる別の存在だったなんて。

今まで俺の心を支えていた何かが静かに崩れ出した。心の支えがある限り、人間は決して諦めずにいられる。どんな残酷な絶望にも立ち向かえる。しかし、支えを失った心は抗うこともできず、ただひたすらに闇に堕ちていくだけだった。

マイラは、ずっと俺を騙してきたのか……？

だったら、今までの思い出は全て幻に過ぎないのか。偽りだらけの思い出に、どれほどの意味があるのだろうか。

俺には、わからなかった。いや、もう考えることすらできなくなっていた。

「……慎、騙してて、ごめん……。巻き込んで、ごめん……」

「……嘘だ。マイラが人間じゃないなんて……」

マイラの声が聞こえる。

しかし、今の俺にはその意味を理解することもできなかった。俺と、マイラは別の存在。決して交わることのない異種。

どうしてだ！ どうして、よりにもよってマイラなんだ！ 俺がこ

の世界でたった一人惚れた女が、どうして人間じゃないんだ！？
どうして、どうしてマイラが人間じゃないんだよ……。どうして……。

「でも、私はもう退けない。最期の一瞬まで戦い続けるしかない。
一族の復讐のために」

「勝手な言い掛かりは止めてほしいですね！」

不愉快そうに声を荒げる初音。

マイラも初音と同様なほど腹立たしげな顔付きで、彼女を睨み付けた。

「『エディンバラの惨劇』はヴァチカン主導で行ったものでしょう！
芝崎家とは何の関係もありません！」

「確かにヴァチカン連中が中心となっていたのは間違いない！でも、奴等に情報売ったのは、貴方達芝崎家じゃない！芝崎家は、ヴァチカンと敵対関係に近い白の派閥の中にありながらも、唯一ヴァチカンとの繋がりを持つ一族！貴方達が、裏でヴァチカンと密に繋がっているのは、組織の記録からほぼ立証されているわ！

それに、私は覚えている！あの時、あの惨劇の中で私は、確かに日本語を聞いた！そして、あの惨劇が起こる数時間前に到着するエディンバラ行きの便に、芝崎分家の人間が、それも腕利きの連中ばかりが乗っていたことも知っている！

芝崎家は、仁の一家を保護していたから、私達の隠れ家も知っていたはず！ヴァチカンと更に深い繋がりがほしかった芝崎家は、私の家族を売って……」

「黙れ、小娘！！」

マイラの熱い口調さえ掻き消すような、凄まじい一喝を吠える芝崎壮二郎。

その怒声と同時に、例の剣呑な雰囲気放っていた連中がそれぞれ得物を手にし、マイラに襲い掛かった。マイラは確かに普通の奴よりずっと強いが、二十人弱に襲われて無事でいられるはずがない。

しかし、喜ばしく俺の予想は裏切られた。

マイラは四つん這いになりそうなほど姿勢を低くすると、襲い掛かって来た連中に向かって突っ込んだ。彼女の動きはまさに地を駆け巡る獣。疾風よりも速くマイラは駆けた。

マイラは獲物を狙い澄ました獣のような鋭い動きで、瞬く間に十人近くを一気に殴り飛ばした。そして、そのまま高速度で壁まで駆け寄ると、壁を蹴って高く飛び上がり、襲撃者の背後を取った。襲撃者は振り向く間もなく数人を倒し、残りは五人。数秒のうちに仲間のほとんど倒され、その五人は完全に動揺して戦意を喪失していた。マイラは残りの連中をそのまま真正面から打ちのめしていった。

俺もそれなりに喧嘩慣れしているが、今のマイラの動きは目で追いかけるのがやっとだった。実際に対峙したら、勝てる自信はなかった。

「芝崎壮二郎、あんたは私達ウェアウルフの力をその身で知っているはずでしょう？ この程度の雑兵で私を倒せると思っていたの？」

「くっ……。これほどとは……」

芝崎壮二郎も俺同様に予想を裏切られたのか、悔しさで齒軋りをしていた。

マイラは確かにずば抜けて運動神経がいいが、ここまでの実力者だとは思わなかった。それに、今のマイラは俺が知っている以上に速く動いていた。あの姿の方が速く動けるのかもしれない。

「仁！ 徳島！」

「……」

「やれやれ……」

芝崎壮二郎の呼び声に、仁と徳島は苦悶に近い複雑な表情を浮かべた。面持ちに緊張を走らせた二人の視線がマイラに向かった。二人の目には静かな殺気がこもり、マイラも今までにないほど緊迫した様子で彼等を睨み返した。

「あの裏切り者を殺れ！ ただし、仁は炎の使用を禁ずる」

「……………任務了解」

「下っ端は辛いねえ」

明らかに不満な様子だったが、二人は大人しく芝崎壮二郎の命令に従った。

「お、おい、馬鹿！ 止めろ！ 冗談になってねえぞ！」

すでに冗談のレベルを通り越していることはわかっていながらも、俺は叫ばずにはいられなかった。全てが偽りだということを願って。しかし、無情にも仁が俺の願いを打ち壊す言葉を放った。

「……慎、現実から目を背けるな。逃げてても、悪夢は終わらない」
「くっ……」

「まあ、あれだ。恨みたければいくらでも恨め。そういうのは、俺も仁も慣れているからよ……」

諦めてこんなクソみたいな現実を受け入れろ、っていうのか……。ふざんけん……。認められるか、こんな現実！ マイラを否定するようなものを、この俺が受け入れられるはずがないだろうが！

「……俺は、俺はこんな現実に屈して、諦めたりするものか！」

そうだ、初めから諦めなければよかった。

マイラのことが本気で好きなら拒絶を恐れずに、何があっても手放さなければよかった。

「マイラ！ 俺はお前に伝えなきゃいけないことがあるんだ！ だから、負けるな！ お前が人間じゃなくても、お前がどんな罪を犯そうと、俺は最後までお前の味方だ！」

「慎……」

マイラは俺の決意を聞くと、顔を真っ赤にして惚けた。

不安で仕方なかったが、今のマイラの反応を見て確信した。マイラはまだ俺のことを想ってくれている。そうでなければ、俺の言葉であんな反応はしない。

まだ想いは届く。

それが俺にとって、掛け替えのない希望だった。マイラに想いが届く。ただそれだけのことが俺に無限の力を与えてくれた。

「余計なお節介を焼いてくれた奴と約束したんだ！　どんなことがあったって、お前の味方でいるって！　だから、マイラ、お前の全部を受け入れる！　お前が俺を好きでいてくれるなら、俺は何だって出来るから！」

「お節介な奴、か……。本当に、あの子は……」

マイラは、お節介な奴に心当たりがあるようで、何だか嬉しそうに苦笑していた。

もし、無事に帰れたら、逢瀬には礼を言わないといけない。ただし、本当に無事に帰れたら、の話になるだろう。

「……慎さん、貴方がここで何を喚こうと、もう意味のないことです」

身の毛がよだつような底冷えする声に、俺は凍り付いた。鈴を転がしたような心地よい初音の声が、今はまるで地獄の底から響く怨嗟の声のように思えた。

ヤバイ。本能がヤバいって訴えている。

初音は本気でマイラを殺すつもりだ。今更、先ほどの全て冗談だったとは思っていないが、今の初音の殺意は常軌を逸している。もし、マイラが負けるようなことがあれば、確実に殺される。そして、絶対にまともな殺され方をしない。

「仁先輩、徳島隊長！ 早くあのメス犬を八つ裂きにしなさい！」

「……………了解」

「あゝ、嫌だね、ホント……」

仁と徳島は得物を構えると、マイラに向かい合った。

二人とも、不満そうではあるが、芝崎家の命令には逆らえないようだった。

「さうて、行くぞ、マイラ。俺と仁を相手にどこまで持ち堪えられるかねえ？」

「徳島、私は負けないわ。今の私は、何だってできるんだから」

マイラは不敵に微笑むと、コートのポケットから指輪を取り出した。暗くて判別しにくかったが、おそらく真珠の指輪だった。

今まさに戦いが始まるという時に出してきた物だ。ただの指輪ではないのだろう。もう何が起ころうと、驚くものか。

「……我が誇り、汝の魂と共にッ！！」

突然、マイラの指輪から銀色の閃光が迸ると、身の毛がよだつような冷気が放たれた。いや、冷気などという生易しいものではない。人の根幹を侵すような邪悪な瘴気。そうした悪意に満ちた何かが指輪から放たれると、指輪はその形を変えた。

それは、筆舌し難き禍々しさを秘めた双剣だった。

禍々しい双剣は獣の牙を思わせる奇形で、漆黒の刀身には不気味な紋様が刻まれていた。鏢には獣の爪牙を思わせる異様な突起があり、柄頭に埋め込まれた宝珠には答申に刻まれたものと同じ紋様があった。

「何だア、あれは!？」

「……この瘴気、この威圧感……。まさか、狼王の遺産か!？」

狼王の遺産？

それが、あの禍々しい双剣の名なのか……？

「ご名答……。さすがに仁も聞いたことぐらいはあるようね……。これは、狼王の遺産が一つ、『ブラックフアング』よ……」

「馬鹿野郎!!」

仁がらしからぬ怒声をあげた。彼がここまで感情を露にして怒鳴るところを、俺は初めて見た。

「それがどれほど危険なものか、知らぬ訳ではないだろう! 今すぐそれを手放せ! 心が喰われてしまうぞ!」

「心が喰われるだって……?」

意味はわからないが、まともなことじゃないのは確かだ。

あの無表情が売りの鉄仮面男があそこまで慌てるくらいだ。相当なヤバさなのだろう。

「危険は百も承知……。組織を裏切った時点から、とっくに命捨ててるわよ……」

今頃になってようやく気付いたが、マイラは肩で息をし、立っているだけでも辛そうだった。その原因はおそらく、あの狼王の遺産『ブラックファング』以外にないだろう。

あのブラックファングとは、一体どんなものなのだろうか。

危険で禍々しいものだということは一目見ただけで分かった。しかし、どのような力を秘めているかまでは想像もできなかった。

「……マイラ、そこまでの覚悟なのか……」

「仁、貴方は人間に近いからわからないかもしれないけど、ウェアウルフは何よりも血と家族を重んじるの……。みんなの無念は、私が絶対に晴らす!!」

「……俺には一生わからないな。物心が付いた頃にはすでに、家族と呼べるものなどいなかったのだから……。俺は、ただ命じられたままに戦うだけの存在だ」

仁は得物、薄黒い色をしたナイフを突き出したまま、マイラに向か

って突っ込んだ。

先ほどのマイラほどではないが、仁の動きもかなり速かった。瞬時にマイラとの間合いを詰め、ジャブのように素早く連続してナイフで突いた。

しかし、マイラはいとも容易く、その連続攻撃を避けていった。あの俊敏な仁の動きを完全に見切っているようだ。マイラに人並み外れた運動神経と動体視力があるのは知っていたが、ここまでずば抜けているとは思ってもいなかった。

「……ッ!? マイラ、後ろに徳島が!!」
「えッ!?!」

俺の声に反応し、マイラは仁の攻撃を捌きながら振り返った。そこには死角を利用して、マイラの背後に回っていた徳島が今まさに攻撃をする寸前だった。逆さ吊りにされている俺だから、徳島の隠密行動に気付くことができた。

「コラ、馬鹿! 言うなよ、慎!」
「うるせえな! 俺はマイラの味方なんだよ!」

絶好の好機を奪われ、俺に文句をつける徳島。ちなみに徳島の得物は、分銅付きの鎖鎌だった。まるで忍者の装備だ。

マイラは、俺に向かって喚き散らす隙だらけの徳島に向かって突っ込んだ。ブラックファングが容赦なく徳島に突き出された。しかし、どうやら徳島の方が一枚上手だった。

隙を見せればマイラが突っ込んでくることを予想し、容易くブラッ

クファンングを鎖で受け止めた。当然鎖で受け止めたところで一瞬衝撃を緩和する程度で勢いを完全に殺すことはできなかった。しかし、徳島にはそれで充分だった。たわませた鎖を引いて、鎌がマイラの頭上に振り下ろした。

「くっ……」

完全に予想外だったにも拘らず、マイラは体を大きく反らして、徳島の必殺の一撃を避けた。更に仰け反りざまに徳島の胸を蹴り、その場を離れると同時に徳島にダメージまで与えた。

「こ、この……、なんつう運動能力だ……」

「そっちこそ相変わらずの曲者振りね……」

マイラと徳島は互いに距離を取りながら睨み合い、牽制していた。互いに必殺となり得る一撃を持っているので、一瞬の油断が全てを覆す。重い緊張が二人の間を包み込んだ。

しかし、戦っているのは、二人だけではない。もう一人、戦場に立つ男がいた。

仁はマイラの横から飛び掛り、回し蹴りを放った。徳島に意識が集中していたマイラは一瞬判断が遅れた。辛うじてブラックファンングで仁の蹴りを受け止めたが、衝撃はほとんど止められなかった。

「きゃあッ!？」

仁の蹴りで軽々とマイラは吹き飛んだ。突き飛ばされた彼女は長椅子にぶつかり、軽く咳き込んだ。そこへ容赦なく、仁の追撃が迫る。マイラは体勢を直し切れず、不利な状態のまま切り結ぶが、耐え切

れずにその場から飛び退いた。

ずば抜けた跳躍力で、俺が吊るされている高さまで飛び上がるマイラ。彼女は空中で体勢を立て直し、仁の追撃に備えた。

しかし、仁は追ってこなかった。ハンカチで口元を押さえ、何か毒ガスのようなものに備えていた。

「……悪いが、炎の使えない状態で、お前と正面からぶつかるような愚はしない。俺の役目は徳島のサポートだ」

「……まさか!？」

マイラが気付いた時には、すでに徳島は行動を起こした後だった。徳島がマイラに向けて投げた球は、炸裂すると刺激臭を放つ煙を辺りに充満させた。一瞬にしてマイラは煙の中に飲み込まれた。煙玉の爆心地から離れている俺でも、辛いことから、あの煙に飲まれたマイラの辛さは相当なものだろう。

「げほ、ごほッ!! げほお、がはあ、ごほッ!!」

煙で姿は見えないが、マイラは激しく咽返り、かなり苦しそうだった。もはや空中でまともな姿勢を保つこともできず、不恰好に咳き込んだまま墜落しようとしていた。

そこへ狙い澄ましたように徳島の分銅がマイラを襲う。マイラは徳島の攻撃に気付いているようだが、煙幕が相当苦しいのか、反撃の体勢もとれずに落ちていた。

「ウェアウルフの卓越し過ぎた嗅覚が仇となったな!」

「げほ、げほッ!! ひ、卑怯よ……」

苦しみながらも、ブラックファングで分銅を弾き飛ばすマイラ。
しかし、攻撃が弾かれたというのに、徳島は全く焦っていなかった。
むしろ、計算どおりにいったかのように不敵な笑みを浮かべていた。

「マイラ、まだ油断すんな！」

「だから、言うなっの！」

徳島は分銅と繋がっている鎖を巧みに操り、分銅の軌跡を変えた。
一度弾かれたはずの分銅はまるで蛇のように、変幻自在の動きを見せ、再びマイラを襲った。

マイラは再度分銅を弾き飛ばしてやろうと、ブラックファングを振るった。しかし、分銅は蛇如き動きでマイラの一撃を避けると、そのまま彼女の手に絡みついた。

「なッ……!!？」

片腕を鎖に絡め取られたマイラは動揺し、更にバランスを崩した。
しかし、マイラも反応も早く、喉や鼻が痛むのも無視して体勢を直そうとした。

「素早い動きさえ封じちまえば、お前なんか怖くねえからな！」

しかし、徳島は鎖を手繰り寄せ、体勢を直そうとするマイラの邪魔をする。加えて、懷に手を突っ込んで何かを取り出し、それをマイラ目掛けて投げた。

手裏剣だ。それも、かなりの数だ。

あいつ、ただのだからしない腑抜けた体育教師だと思っていたが、本

当に忍者だったのか。ウェアウルフに忍者、もはや何でもありだな……。

「いくらお前でも、片手では捌き切れないだろう!」

「この……、舐めんじゃ、ないわよ!」

マイラは無理矢理鎖で縛られた片腕を動かそうともがくが、それを許すほど徳島も甘くなかった。強引に引っ張ったり、力を抜いて撓ませたりさせ、マイラの片腕を完全に封じていた。

そうして足掻く間にも、無数の手裏剣はマイラに迫っていた。

咄嗟にマイラは空いている手にある剣で鎖に切り掛かった。張ったり緩んだりした状態の鎖を切るには相当な切れ味が必要で、あんな捻じ曲がった形状のブラックファングでは切断不能だと思われた。しかし、禍々しい刃はいとも容易く鎖を断ち切った。

「何だと!?!」

「読みが、甘かったわね……」

両手が自由になったマイラは、やすやすと手裏剣の嵐を弾き返した。

そして、必殺の連携を破られて呆気に取られている徳島の懷に潜り込み、渾身の肘鉄を食らわせた。さらに、顎への掌底と続き、一片の躊躇もなく股間を蹴り上げた。

「ノオオオオオオオオオツ!!」

「うえ……」

徳島の奴、気の毒に……。

マイラの殺人コンボを受けた徳島は完全に白目をむいて気絶してしまった。俺も以前に二、三度だけ食らったことがあるが、あれは死ぬ。とりあえず命に別状はないが、悶絶どころか強制昇天並の破壊力はある。

「はあ、はあ……。これなら、さすがのあんたでも確実に落ちたでしょ……」

そりゃそうだ……。男にとってアレへのダメージは防ぎようがないからな。いくら徳島が曲者とはいえ、あれで確実に落ちただろう。

「何やってるのよ、役立たず！」

初音は無様に気絶している徳島を罵倒した。その声はもはや金切り声のようなヒステリックなものだった。

「はあ、はあ……。無駄なのよ……。私は誰にも負けない……」

「……冗談じゃないわよ。いつまでも勝者気分でいられると思うな、大神マイラ！ 貴方はいつも私から全てを奪い取っていく！ 私は貴方に勝ったと思った時がない！ だけど、今度こそ、今度こそ、貴方に敗北の屈辱を味あわせてみせる！」

初音は刀を抜き、マイラに向かっていった。

しかし、あまりに感情的になり過ぎて、攻撃が短絡的になり過ぎている。あれではいくら速くても、簡単に見切られてしまう。並の相手ならいざ知らず、マイラ相手には絶対に通じない。

「初音、止すんだ！」

「止めろ、芝崎！」

危機を察知して、仁が初音の刀をナイフで止めた。

「邪魔をしないで！ あんたもあのメス犬の仲間なの！？」

「……落ち着け。今のお前ではあいつの相手は無理だ」

「退いてよ！ 私は負けない！ あんな……、あんな慎さんを捨てちゃうような人に、私は絶対負けないの！ そして、勝って、取り戻すの！ 私の大切な人を！」

初音は、泣いていた。

抑え切れない熱い想いに胸を焦がし、泣いていた。

……全部、俺のせいだ。

俺が初音を泣かしている。

あいつの想いに、俺が応えてやれないから……。

「……仁、悪いわね、少し寝てもらおうわよ……」

初音と仁の鏝迫り合いをしている間に、マイラは仁の背後に回っていた。

仁は敵を目の前に背を向けてしまったことが仇となり、マイラの接近を予期できなかった。マイラの声聞き、反撃に出ようとしたが、時すでに遅かった。

旋風のようなマイラの回し蹴りが仁の脇腹を抉った。容赦ないマイラの一撃によって、仁は吹き飛ばされた。壁に叩きつけられた。そして、仁はそのまま動かなくなった。おそらく気絶しているだけだ

ろう。

「……さて、邪魔者もいなくなったし、始めましょうか……？ 私
も貴方と決着をつけたいと思っていたの。私も、芝崎分家序列二位
の貴方を妬ましく思っていたから。何もかも恵まれた貴方が……」

「それが、私から慎さんを奪った理由ですか……？」

初音は先ほどまでとは打って変わって、不気味なほど静かな声にな
った。仁を倒され、感情の昂ぶりは収まったようだ。

しかし、その冷静さが逆に恐ろしかった。初音の剣の腕はよく知っ
ている。彼女の一撃は紛れもなく必殺。肉を裂き、骨をも断つ居合
の技。それが今、マイラに向けられようとしていた。マイラならば
避けられなくもないだろうが、もし万が一のことがあれば、マイラ
の命は一瞬にして奪われるだろう。

「……私と慎が出会ったのは偶然よ……。そこに他意はないわ……。
誇り高きウェアウルフが、計算ずくでなんかで人間と付き合うはず
がないでしょう……。人間を本気で愛したのも、慎が最初で最後……
…。ただ、私の愛した人と、貴方が愛した人が一緒だった、それだ
けのことよ……」

マイラ、お前……。

「嘘よ……。嘘嘘嘘嘘嘘！！ 私はそんなこと、信じない！ あ
んたは復讐のためなら何でもできるメス犬だ！ あんたなんか愛
なんて感情がある訳がない！ 化け物の分際で、人間の感情を語る
な！」

「……今の貴方とは何を話しても平行線ね。勝った方が正義。それで、いいわね……?」

「元よりそのつもりよ! 八つ裂きにしてやるわ、メス犬!」

初音は躊躇なく、マイラを殺すつもりで刀を振るった。

居合い以上の閃光のような剣速でも、マイラは完全に見切っていた。首の皮一枚で初音の刀をかわし、初音の懷に潜り込んだ。そして、そのまま攻撃に転じようとしたとその時、マイラは突然這い蹲るようにしゃがみ込んだ。

マイラがしゃがみ込んだ直後、初音は刀を返して切り下ろした。先ほどの太刀筋よりなお速い。マイラがしゃがみ込むのが一瞬でも遅かったら、肩からバツサリと斬られていただろう。実際は獣の耳を掠った程度で済んだが、それでもマイラは怒り心頭の様子だった。

「……こ、この小娘……。よくも私の誇りを……」

浅く切られた耳を押さえ、怒りに体を震わせていた。

「そうやって這い蹲っているのがお似合いですよ、メス犬さん。もっと感情を剥き出しにしたらどうです? 獣みたいに?」

「……調子に乗るな、人間!」

マイラは四つん這いの状態から、肉食獣のようにブラックファングで初音に襲い掛かった。

初音は短刀を抜いて右の剣を止め、左の剣を刀で防いだ。そして、短く鋭い膝蹴りを放った。マイラの顔はちょうど初音の腰の近くで、

簡単にかわせるものではなかった。

避けられないと悟ったマイラは、逆に初音の膝に頭突きを食らわした。ダメージを最低限にした上、初音の膝にダメージを与えてバランスまで崩した。

「くう……」

「悪くない戦い方だけど、もう少し相手を選んだ戦いをしたら？」

片足を痛めて踏ん張りの利かない初音に対し、マイラは力押しで体当たりをした。初音は簡単に弾き飛ばされ、そのまま仰向けに倒れた。

「こ、このッ!!」

初音は倒された状態のまま滅茶苦茶に刀を振るい、マイラの接近を防ごうとした。戦闘技術で一枚上手のマイラを前にし、形振りを構ってられないようだった。

しかし、マイラは冷静に刀を受け、躊躇なく初音の腹を踏みつけた。まるで虫けらを踏み潰すように、初音の抵抗がなくなるまで何度も踏み付けた。

「ん、ぐう……」

「はぁ、はぁ……、貴方じゃ私には勝てないわ……」

「……な、舐めるなアアッ!!」

気合一閃。

初音は渾身の力を込めて、刀を振るった。

瞬時にブラックフアングで防御するが、マイラの体は軽く弾き返された。ダメージはほとんどなかったようだが、初音の気合にマイラは一瞬押されてしまったようだ。

「殺す……。あんたは絶対に殺す!!」

初音はマイラが退いた隙に体勢を立て直し、マイラの喉元に向けて鋭い突きを放った。

マイラは危なげなくその一撃を避けるが、初音の気合いに押されていた。ブラックフアングによる消耗もあるが、初音から発せられる獣のような殺意に圧倒されていたのだ。

閃光のような斬撃が容赦なくマイラを襲う。あのマイラが防戦一方になるほどの初音の猛攻。マイラはその全ての攻撃を捌いているものの、反撃には転じられなかった。

「死ね、死ね、死ね!! あんたみたいな化け物は生まれてきたことそのものが間違っている! 存在そのものが過ち! この世界はあんたみたいな化け物なんかが生きていい場所じゃない! 消えろ、死に失せろオオオッ!!」

暴風雨のような猛攻がマイラを飲み込んでいく。

凄まじい剣戟の嵐だった。しかし、それ以上に凄まじいのが初音の憎悪。狼王の遺産に宿る瘴気にも匹敵するほどの禍々しい殺意。嵐のような猛攻と狂気に満ちた殺意がマイラを圧倒していた。

マイラは全ての攻撃を捌きながらも、何とか反撃の機会を伺ってい

た。一撃でも初音の攻撃を食らえば、次の瞬間にはバラバラにされるだろう。一瞬の油断も許されない状況だったが、マイラは冷静さを失ってはいなかった。

「あんたさえいなければ、誰も苦しむことはなかった！ 何も知らずに幸せでいられたはずだった！ あんたが、あんたの存在がみんなを不幸にする！ あんたなんか、あの時に死んでいればよかったのよ！ そうすれば、慎さんだってあんたみたいなメス犬に惚れるなんて過ちを犯さなかった！」

「……ッ!？」

冷静に対処しているように見えたマイラの表情に、若干の動揺が見えた。

一方、初音は烈火の如く荒れ狂っていた。一撃を繰り出す毎に、その火勢はマイラの神懸かった防御も追い付かぬほどに増していた。徐々にだが、初音の刀がマイラの服を掠るようになっていた。

完全に初音の勢いに吞まれたマイラは徐々に後退し、ついには壁際にまで追い詰められた。

逃げ場のない場所に追い詰めたことで、初音はようやく攻撃の手を止めた。日本刀はあらゆる刀剣の中で最高の切れ味を誇る半面、非常に折れやすい。先ほどのように無暗に振るうべき武器ではない。マイラを追い詰めたことで、初音にもようやく冷静さが戻った。

「……貴方は存在すること自体、罪なんですよ」

「……そうね、確かにその通りかもしれないわね。あの時死んでいればよかった、か。全くそのとおりよ……。私もあの時にみんなと一緒に死んでいれば、こんなに苦しむことはなかった……。大切なものをことごとく奪われ、無様に死んでいた方がよっぽどマシだったかもしれない……」

マイラは自嘲めいた笑みを浮かべた。

彼女の過去にいったい何があったのかはわからない。だが、マイラは光が届かぬほどに暗い闇の底にいるようだった。どこまで深くて暗い後悔に囚われていた。命を絶ちたくなるほどの絶望に苛まれていた。それが確かだというのに、俺にはその苦しみを何一つ分かってあげることが出来なかった。

あまりに情けなくて、腸が煮えくり返りそうだった。何故、今までマイラの苦しみに気付いてあげられなかったのだろうか。いや、たとえ気付けたとしても、俺にいったい何ができたのだろうか。

俺にはマイラは救えなかった。救う力なんて何一つなかった。

「マイラ……、お前はあの時死んだ方がよかったって言うけどな。

俺は、俺はお前と出会えて本当によかったと思ってるんだ……。お前を好きになったことを後悔なんてしてない……。お前が、お前がいてくれて本当によかったと思ってるんだ」

声に出すつもりはなかった。しかし、想いは呟きとなって零れ落ちていた。

その瞬間、マイラがこちらに振り向いた。まるで鳩が豆鉄砲を食ったような間抜け面をしたかと思うと、言葉では形容できないほど複雑な感情が入り混じった表情で俺を見つめた。その表情をあえて言葉にするなら、嬉し泣きをしているようであった。

マイラは俺を見上げたまま何かを口にしようだったが、その声は俺の耳には届かなかった。

「……いい加減目障りです。私が貴方のお仲間がいる地獄まで叩き落としてあげます」

刀と小太刀を納刀し、初音は腰を落として居合いの構えを取った。正確にいえば、立ったままの状態なので、居合いの構えとも少々違う。右手が刀の柄に、左手が刀の柄に置かれている特殊な構えだった。

今まで纏っていたものとは明らかに異質な殺意。

マイラも本能的に危険を悟り、最大限の警戒を見せていていた。初音は大きく息を吸い込み、荒ぶっていた感情を落ち着け、明鏡止水の境地へ至ろうとしていた。ただ、マイラを斬ることだけに意識を集中させているようだった。

「……芝崎新刀流奥義、比翼天翔……。二羽の鳥が一つの翼となつて、貴方を斬り裂きます……」

「上等よ……。やれるものなら、やってみなさいよ……」

強がっているが、マイラは全身から冷や汗を流し、死の危険を感じていた。それほどまでに今の初音にプレッシャーを感じているようだった。

比翼天翔。初音の構えと発言から、おそらく刀と小太刀両方を同時に抜刀する技だろう。通常の剣技でさえ恐ろしい冴えを見せていたというのに、それが同時に襲ってくるとなれば予測できたとしても回避不能だろう。

マイラもそのことを理解しているらしく、攻めあぐねていた。さすがのマイラでも、初音の居合いの技を連続で受けきることは難しいはずだ。それに、壁を背負った状態では退くこともできなかった。

「さあ、悔い改めなさい、メス犬」

「調子に乗るな、泥棒猫……」

「……ッ!? 誰が泥棒猫よ、薄汚いメス犬がアアアッ!!」

マイラの挑発に初音がキレた。本来、居合いの技は座して後の先を取るべきだというのに、初音は感情的に突っ走ってしまった。

二振りの刀が鞘を駆け抜けた瞬間、マイラも地を蹴った。後の先を取らせず、先手で押し切るつもりだ。しかし、一刀の速度ならば初音の方が上であった。それはマイラも理解していたはずだった。

「破アアッ！！」

初音の刀が鞘から放たれ、神速の一撃となってマイラを襲う。小太刀も同様に抜かれようとしているが、俺の目から見ても若干遅い。これは確実に命取りだ。

一の太刀を右手のブラックフアングで防ぐ。初音の太刀筋は凄まじい冴えを見せるが、しょせんは片手。居合の技とはどれほどの勢いと切れ味を誇ろうとも、一撃の破壊力は決して高くない。同じ片手なら、マイラも力負けはしていなかった。

遅れて迫る二の太刀。本来なら、一の太刀とほぼ同時に繰り出されて初めて奥義と呼ばれる技となるはずだったのだろうが、不用意に挑発に乗ったのが仇となった。マイラに一の太刀を受けてから、二の太刀に対応するための余裕を与えてしまった。

「芝崎初音 エエツ！！」

マイラのコートを浅く斬り、今一步で確実にマイラの命を奪うはずだった二の太刀。しかし、マイラは気合と共にその太刀を弾き返した。

「私は負けられないよ！ あの子の仇を取るまでは、絶対に！！」

そして、マイラは膝を突き出して初音の鳩尾に叩き込んだ。

マイラの膝蹴りはカウンターとなり、初音に多大なダメージを与えた。小柄な初音の体は浮き上がり、そのまま後方へと倒れていった。しかし、まだ意識ははっきりしていて、刀や小太刀を手放さず、倒れながらも体勢を直そうとしていた。

しかし、それを許すほどマイラは甘くなかった。刀と小太刀の反撃を防ぎつつ、トドメを刺すべく飛び掛った。

「化け物の分際で調子に乗るな！」

初音の危機に、芝崎壮二郎が戦線へ躍り出た。

芝崎壮二郎の得物も刀。走ったまま抜刀し、そのまま横薙ぎにマイラを斬り払おうとした。しかし、初音のそれと比べると、速さこそ劣っていないが、目を奪われるような華麗さはなかった。

マイラは初音に馬乗りになってトドメを刺す寸前だった。しかし、芝崎の太刀筋はあまり力強く、受け切れないと悟ったマイラは仕方なく、初音の上から飛び上がった。

初音から離れても芝崎壮二郎の刀は執拗にマイラを追う。スピードでならマイラが一枚も二枚も上手だが、力強さでは圧倒的に芝崎壮二郎が上だった。一撃でも受けてしまえば、そのまま斬られかねない威力がありそうだった。

「手を出さないで、お父さん！！ そのメス犬は私が……」

「……ッ!？」

初音の声を聞き、敵を目の前にしていたにも拘らず、芝崎壮二郎の動きが止まった。

しかし、本来芝崎家を狙っていたマイラの動きまで止まるはずもなかった。一瞬の隙を突き、マイラはブラックファングを芝崎壮二郎の腹に突き立てた。

「……我が一族の恨み、思い知れ!!」

マイラが人を殺す瞬間。それはあまりに衝撃的な光景だった。

芝崎壮二郎の背中から突き出た禍々しい凶刃は、血塗られた赤い輝きを放っているように見えた。血が噴き出し、肉が裂け、骨が砕ける気持ちの悪い音が聞こえたような気がした。現実では有り得ないものが見える、届くはずのない音が聞こえる。現実とも夢とも思えない、そんな衝撃的な映像を見て、俺の頭は少し狂ってしまったのかもしれない。

「貴様の罪、その血を以って贖え……」

「……がはぁッ!？ あ、ああ……、こ、小娘、があ……。よ、よくも……。!？」

口から吐き出される血飛沫がマイラの顔を汚した。それに対し、マ

イラは避けることはなく、憎悪に満ちた目で仇の最期の様子を睨み続けていた。

芝崎壮二郎は最後の力を振り絞って、刀を持ち上げようとした。しかし、傷はあまりにも深く、老いた体に残された力はほとんど残っていなかった。芝崎壮二郎は最期に片腕を上げ、憎々しげにマイラの顔を掴んだ。魂までも呪うように自らの血を擦り付け、芝崎壮二郎の体は崩れ落ちた。

マイラの黒いコートは芝崎壮二郎の血を浴び、真っ赤に染まっていた。仇の一人を討ち取ったというのに、マイラの顔には喜びの表情は浮かんでいなかった。それどころか顔面にまで浴びた返り血はまるで悲しみの涙に見えた。

「お父さあああんッ!!」

初音の絶叫が心を締め付けるほどに痛い。

目の前で父親を殺された初音の苦しみや悲しみは推し量れるものではなかった。俺もあまりの出来事に言葉を失い、衝撃を隠せなかった。あのマイラが人を殺す瞬間を見るのは俺も辛かった。

「慎さん、見ましたか!? あノメス犬は穢れた人殺しなんです! ! あんな下種に味方する必要なんてないんですよ!? いい加減、目を覚ましてください!! あノメス犬に騙されていることに気付いて!!」

突然、初音は小太刀を投げ、天井から吊っている縄を断ち切った。逆さ吊りの状態で縄を切られた俺は頭から落ちたが、空中で体を捻って背中から床に衝突した。逆さ吊りが長かったため頭に血が上っているのと、床に落ちた衝撃で背中が痛い。しかし、それ以外は無事だった。あとは縛られたままの手首や足首が少し痛かった。

初音はいまだに芋虫のような状態の俺に駆け寄ると、思い切り抱きついてきた。そして、すがるような瞳で俺を射抜いた。

今、初音には俺しかない。母を早くに亡くし、父も今殺された。親戚は多くても、序列二位の家柄のために多くの問題を抱え、親戚にも心を許せずにいる。彼女の味方となる人物は誰もいない。

だから、あいつの側にいてやれるのは、俺だけだった。

「……初音。俺は……」

だが、俺はもう決めてしまった。

たとえば、その先が救いのない地獄であっても、俺は一緒にいることを決意した。

マイラと共にあることを決意した後だった。

「俺の意志は変わらない……。あいつを……、マイラをこの手に取り戻す！　たとえば、どんな地獄に堕ちようとも、俺はあいつと一緒にいることを望む……！」

殺されると思った。

俺の言葉を聞き、絶望と憎悪に吞まれた初音を見た瞬間、俺は死を覚悟した。

初音を狂わせてしまった。

全て、俺が原因だ。俺が自分勝手な想いで初音を裏切ったから。いや、中途半端な想いで初音を受け入れてしまったからかもしれない。何もかも悪いのは俺だ。

取り返しのつかないことをしてしまった。しかし、それでも俺の想いは決して変わらない。何があろうと俺はマイラを愛し続ける。そのためなら、俺は鬼にでも悪魔にでもなれる。

しかし、決して消すことのできない罪悪感だけが俺を苦しめた。

「アアああアアアああアああアああアああアああアああア
あアあアアアッ！！！」

憎悪や憤怒、嫉妬や狂気。それらが入り混じったような初音の咆哮が教会に響き渡った。

聞くだけで全てを恨み、妬みたくなるような負の感情に満ちた絶叫。俺には、心が軋み苦しんでいる初音の悲鳴のようにも聞こえた。

罪悪感に絞め殺されそうだった。

妹のような存在だった初音にこんな想いをさせ、苦しませている。

一人の女性としては見てやれなかったが、俺は初音が好きだった。

とても可愛らしくて世話焼きでお節介で、本当に俺のことを好きでいてくれて。そんな奴を嫌うはずがない。俺は初音が大好きだったんだ。

だからこそ、苦しい。俺のエゴのため、初音にこんな想いをさせてしまつて。

「どうして、どうしてわからないの！？ あの薄汚いメス犬の本性が！！ 騙されているのに、騙されているのに！！ あんなメス犬、慎さんに相応しくないのに！！ あメス犬は薄汚い人殺しなのよ！！ 私のお父さんを殺したのよ！！ そんな奴を好きでいられるなんて、おかしいわよ！！ 狂ってる！！」

初音は俺を突き飛ばすと、ヒステリックに喚き散らした。

正直、見ていられなかった。初音のこんな姿を、俺は見たくなかった。望んでいなかったのに、俺は初音をこんな姿にさせている。

「あんな、あんな薄汚いメス犬に奪われるくらいなら……」

白刃が月光を反射し、不気味に輝いた。まるで人の血を啜えると歓喜しているようだった。刀とは人を殺すために生まれ、人を殺す瞬間にこそもっとも美しく輝く。

初音は、俺を殺すのだろう。

彼女になら、そうする資格はある。俺は初音に殺されるだけの罪を犯した。俺がこんな裏切りをしなければ、初音がここまで壊れることはなかった。全ては俺の罪なのだ。

「私が慎さんを奪ってやる!!」

ごめん、マイラ……。

これからずっと一緒にいて、お前を支えたかった。だけど、それも無理みたいだ。

ごめん、初音……。

お前を苦しめて、狂わせてしまって……。許してもらおうなんて思わない。だけど、マイラだけは殺さないでくれ……。

「消えろ、消えろ、消えろ!! 何もかも全部、私の前から消えてしまえエエツ!!」

「駄目エエエエエエエエエエツ!!!!」

……肉を切り裂き……、

……骨を砕いて……、

……血の吹き出す……、

そんな忌々しい死の音が聞こえた。

しかし、それは俺から奏でられた音ではなかった。その呪われた音は、初音の胸から奏でられていた。罪深き俺からではなく、無垢で穢れなき初音から。

「……あ、アあ……、あアあ……」

「……慎は殺させない……。ウエアウルフの誇りに代えてだって、絶対に絶対に、慎だけは殺させない！！ 殺させるものかアアアッ！！」

禍々しい黒刃が初音の胸に深々と突き刺さっていた。

初音に突き刺さった凶刃は血塗られながらも、不気味なまでにまぶしく月光を反射し、歓喜の産声を上げているように見えた。感情な

どあるはずのない、ただの道具でしかないそれが確かに喜んでいるように見えた。

「……また、また、私から……、奪っていく……。そんなに、そんなに……、楽しいの……。？　惨めな私を……。、嘲笑うのが……。、そんなに愉快……。？　私から……。、全てを、奪って……。いくのが……。、そんなに、愉快なの……。？」

「……………」

マイラは何も答えなかった。

全ての感情が消え去ったような能面のような表情。俺でさえ、今のマイラが何を思っているのかはわからなかった。不気味なまでの無表情だった。

銀色の閃光と共に、ブラックファングが姿を消した。そして、マイラの右手の中指には、あの時の指輪が鈍い輝きを放っていた。

ブラックファングがなくなり、支えを失った初音は崩れかけた。しかし、倒れながらもマイラの方に振り返り、地に伏すまいとコートに縋りついた。

「……呪ってやる、大神マイラ……。あんただけは、絶対に幸せにさせない……」

憎悪と怨嗟に満ちた声。これがあの可愛らしかった初音の声だとは思いたくなかった。

「……ええ、好きなだけ呪いなさい……。貴方には、その資格がある……」

マイラは縋りつく初音を振り払おうともせず、呪詛を送るような初音の瞳を真正面から見据えた。深き怨嗟の瞳を睨み返し、崩れていく初音の姿をじっと見つめ続けた。

[illegible][illegible]

そして、初音の体は崩れ落ち、そのまま動かなくなった。

死んだ……。

初音は死んだ……。

殺したのは、誰だ？

マイラ……？

違う、俺だ……。

俺が初音を狂わさなければ、初音が死ぬことなんてなかった。

俺が、俺が初音を殺したんだ。

初音……、初音……、初音……。

「……俺が殺した。俺が初音を殺してしまったんだ……」

俺達を呪ったまま死に絶えた初音に這い寄った。

初音が俺に笑顔に向けてくれることはもう二度とない。彼女の笑顔

を奪い、こんな憎悪と怨嗟に歪ませてしまったのは俺の裏切りのせいだ。初めから俺が初音に甘えなければ、こんな無惨な悲劇は起こらなかった。

愛していた訳ではなかった。ただ彼女の優しさに甘え、依存していただけだ。

それを知っていたはずなのに、初音は俺に優しくかった。俺がそれにさえ応えれば、初音が笑顔を失うことはなかった。初音がこんな無残な死に方をするはずがなかったのに。

愛していた訳ではなかった。しかし、それでも俺は初音が好きだった。誰よりも長く共に過ごしてきた掛け替えのない大切な少女だった。それだけは間違いなかった。

そんな大切な少女を、俺が殺してしまった。

「うわああああああああああああああああああああああああああああッ！！！」

つづく

閑話 ワンコVSチビッコ その2

新人生歓迎ハーフマラソン大会後半。

女子のトップ集団は残り一キロを前にして、後続を遥か彼方に突き放していた。もはや圧倒的な差が広がり、後続の参加者がトップ集団に追いつくのはほぼ不能だろう。

もつともトップ集団は、集団といってもたったの四人しかない。しかし、四人は横一直線に並び、誰が先頭なのか判別はつかないほど切迫していた。

「今度こそ優勝は私のものよ!!」

「あんまり大声で喋ると体力なくなりますよ?」

「先輩達には悪いですけど、勝つのは私です! この私が、ワンコやチビッコなんかに負ける訳ないですから!」

「誰がワンコよ! 調子乗ってんじゃないわよ!」

「チビッコじゃないです! 酷いです、私の方が年上なのに、そんな扱い!」

「……はあ、うるさい……」

とても二十キロ近く走っているとは思えないほど元気そうだった。しかも、その体力の使い方が非常に無駄だった。

『おおーっと、ラスト一キロで凄まじいデッドヒートになってきたアアアッ!! ちなみに、実況は生徒会一の美形、絶世の美男子、沼影敦盛だアアアッ!!』

生徒会のテントから、無駄に拡張された阿呆な声が聞こえる。

この阿呆な声の主は生徒会書記、沼影敦盛。非常にウザい。現在、死力を尽くしてハーフマラソンを走っている生徒達は、彼に対して並々ならぬ殺意を抱きつつあった。ブーイングが来ないのをいいことに、調子に乗り過ぎである。

それにしても、この男はマラソン大会に参加しないのでいいのだろうか。誰が実況などを許可したのか。それは一切不明であった。

『現在先頭を走るトップグループは後続と五キロ近い差を広げ、快調に飛ばしている！ 速い、速過ぎる！ 彼女達の体力に限界はないのか？ 凄まじい先頭争いで、誰がトップかわからない！ 実力伯仲！ 誰が勝ってもおかしくない、そんな状況だアアアッ！！』

それにしても、この男は先程から女子の実況しかしていない。そのことについては誰も咎めないようだが、果たして実況としてそれで構わないのだろうか。

『無様にも追い抜かれたノロマどもに、トップグループを走る麗しい美少女達の紹介をしてやろうじゃねえか！』

まずは、一年にていきなり先頭争いに躍り出た期待の新人！ 一年E組、芝崎初音！！ まだまだケツの青いひよっこどもの洗礼であるはずの新歓マラソンでトップ争いに参加するとは、そのポテンシャルの高さはどこから来るのかア？』

「もちろん、慎さんの愛が私に力をくれるんです」

トップ集団の一人、芝崎初音はウィンクをしながら手を振っていた（誰に対して、どこに対しては不明だが）。

「……あア？」

「何です？ 文句あるんですか、えエ？」

「ま、前見て走ってください、二人とも！ 舌嚙みますよ、転びますよ！」

『もう一人も今回初参加の新人！ 二年に編入してきたチビッコエース！ 二年D組、逢瀬美夜！！ 外見とは裏腹に信じられない身体能力だ！ 走る姿はまるで全力疾走のハムスターの如く！ 恐るべし、チビッコエースの底力！』

「誰がチビッコエースですかアアア！？ 外見とは裏腹にとか、ホントに余計なお世話ですよ！ それと、私はチビッコじゃないです！」

普段は良識派の逢瀬美夜も、チビ扱いされると非常に怒る。手が付けられないほど理不尽に怒る。しかし、怒っていても全く怖くないので、その都度からかわれてばかりだった。

「お、落ち着きなって、美夜。沼影如きの言うことなんて気にしない」

『新人二人の若い勢いに若干押されているのか？ 最初の快走で奪

ったりードはどこへ行った？ 走る姿はワンコの如く、揺れる胸は牛の如く、エロ巨乳のワンコ娘！ 二年D組、大神マイラ！！ ちなみに生徒会調べでは、彼女のスリーサイズは上から八十きゅ……』

「ダアアアアア、言うなアアッ！！ っていうか、何で知ってるのよ！！ 沼影、あとで絶対に殺すから！！ 誰が犬よ、誰が牛よ！？ 馬鹿にすんな！！」

機械で拡張された声よりもお馬鹿でかいで叫ぶ、大神マイラ。ちなみに、八十きゅ……までしか聞こえなかったが、一部男子生徒から殺意が消えたのは確かだった。しかし、その分マイラの怒りを買ったのは間違いなかった。

「無駄に大きいからって自慢しないでください！」

「自慢してないわよ！ ぶっちゃっけ、邪魔なの！」

「その発言は、私に対するあてつけですか！？」

つるぺた娘こと芝崎初音は、呪い殺さんばかりにマイラを睨み付けた。

『そして、我等が生徒会のクイーン！ 去年の編入以来、負けなし！ 伝説はどこまで続くのか、無敗の女帝！ 三年H組生徒会長、岸边藍！！ 猛追する造反者達に、王者の力を見せ付けられるかアアア！？』

「……ああ、うざったい……」

生徒会長、岸边藍は心底鬱陶しそうに溜め息を吐いた。同じ生徒会

で働いていても、沼影の鬱陶しさは慣れるものではないようだ。

沼影の実況どおり、新入生歓迎ハーフマラソン大会女子の部の先頭は、大神マイラ、逢瀬美夜、芝崎初音、岸边藍の四人で争われていた。

序盤、持ち前の瞬発力で一気にリードを広げたマイラだったが、中盤で容易く藍に捕まり、以後並走を続けていた。体質的に持久力のないマイラと比べ、藍はペースを保って体力を温存していた。後半、一定のペースを守って走ってきた美夜と初音がスパートをかけ、追いついてきたのが現在の状況だ。

実質的に、一番不利なのはマイラだった。種族的に瞬発力はあるも持久力はない。だからこそ、最初に勝負を賭けたのだ。他の三人のスパートに付いていけるのは、ウェアウルフとしての意地とプライドがあるから。

美夜と初音は実力伯仲。二人とも同じようにペースを守って走り続けた。そのため、余力も同じ程度。身体的には初音が若干有利だった。何故なら、美夜は小さいのでその分体力が少なかったから。

そして、もつとも有利なのが藍。彼女は中盤でマイラを捕らえ、以後はペースを守って走っている。現在はスパートをかけている状態ではない。

「……さて、そろそろ鬱陶しくなってきたから、先に行くわね」

『おおーっと、均衡していたトップグループに動きが！ 無敗の女帝がついに前に出た！』

四人並列していたトップ集団から、藍だけが一人飛び出した。

まるで疾風のような勢いで、他の三人を出し抜いていった。すでに体力の限り、スパートをかけているマイラ達は追いつこうとしても、全く距離は縮まらなかった。

「こ、このお……、今度こそ、今度こそ、優勝するんだから!!」
「わ、私だって負けません!!」

『大神、芝崎共に猛追をかける！　しかし、逢瀬は動かない！　もはや余裕がないのか、ここで首位争い脱落か？』

負けず嫌いのマイラと初音が、プライドを賭けて全身全霊の力を振り絞った。

すでに疲労はピークに達し、マイラも初音も限界寸前だった。しかし、持ち前のプライド高さが功を奏して、徐々に彼女達の走る速度は上がっていった。美夜だけを置いて、王者への猛追が始まった。

しかし、先頭に行く藍までには届かない。圧倒的な速さで、その背中では徐々に遠ざかっていった。

『大神、芝崎、速い速い！　しかし、女帝の前には誰も出られない！　これが王者の貫禄か？　最強の名は、誰にも渡さない!』

「……ふう、三人とも、負けず嫌いね」

「三人とも？　美夜は遅れているようだけど？」

百メートル走並の勢いで走る藍。それを猛追するマイラ、初音。ただ一人、美夜だけは飛び出さず、他の三人の後方に置いていかれて

いた。

しかし、まだマイラも初音も気付いていなかった。かなり速度を上げているのにも拘らず、美夜は一定距離を保て付いてきていることに。

美夜は普段の天然振りとは打って変わって、恐ろしいほどに冷静だった。残り距離が五百メートル以上ある状況で、全力疾走という愚は冒さない。最後の最後まで体力を温存し、虎視眈々と勝利を狙っていた。

(……やはり、一番警戒すべきは彼女ね)

先頭を走る藍は、後続の三人の中でもっとも後方を走る美夜をもっとも警戒していた。理由は至極単純だ。あと数秒もすれば、誰でもわかることだった。

「「ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえ……」」

『おおーっと、ここで大神、芝崎、失速！　どうしたのか？』

全力疾走が長く続くはずもなかった。マイラと初音は早々に体力が尽き、速度が減退していった。

一方、美夜はまだ速度を上げないが、一定の距離を保ちつつ藍を追っていた。しかし、減速しているマイラ達には追い付きつつあった。

「残り二百メートル地点まで、あと十、九、八、七、六、五、四、三、二、一……。GOです！」

残り二百メートル地点で、美夜が勝負を賭けた。

どんな状況に陥っても彼女は冷静さを失わなかった。今まで溜め込んできた力を最後のこの瞬間に爆発させた。元々体格で劣っている美夜にとって、無駄に使う体力の余裕はなかった。だから、こうして最後のスパートに全てを賭ける以外に勝てる方法はなかった。

マイラと初音同様に、藍も早い段階でスパートをかけたため、最初の勢いは消えていた。美夜が一気に差を詰め、残り五十メートルで隣に並んだ。

『何イイイツ!? ここで意外な伏兵が来たアアア! すでに勝負を諦めたと思われた逢瀬が、ここでラストスパート! 速い速い! 全力疾走のハムスターが女帝に迫る! 無敗の女帝、ここで伝説に終止符が打たれるか!』

(……ハムスターの全力疾走って速いの? ……とっこしてそうであんまり速そうに思えないんだけど?)

猛追する刺客から逃げ切るべく全力疾走をしていた藍は、ふとそんなことを思った。状況的にピンチに見えるが、彼女はまだ余裕があった。余力がある訳ではないが、負けるつもりはなかった。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……。もう、ちよつとなのに……」
「はあ、はあ……。あともう少し、体力が残っていれば、貴方の勝ちだったわ……」

藍がかなり早くスパートをかけたのは、並走する三人（おもに最後

まで力を温存していた美夜）の余力を削ぐためだった。かなりのハイペースであったが、藍は最後まで走りきれるように計算して、ペースを作っていた。しかし、他の三人は藍のペースで走らされた。他人のペースで走れば、体力は早く失われる。

美夜は残り二百メートルを全力疾走するほど余力が残っていなかった。しかし、勝つためにはそこでスパートをかけるしかなかった。だから、あともう少しで追いつくというところで力が尽きつつあった。

残り五メートル、美夜はまだ藍には届いていない。しかし、藍はまだゴールテープを切った訳ではない。勝負は最後の一瞬までわからなかった。

「負けるもんかアアアアアアアアッ!!」

『おおおっつと、来た来た来たアアアアッ!! まさか、最後の最後でやはりこの女が来た! 一度たりとも白星を奪えずにいるが、常に女帝を脅かす最強の刺客! 大神マイラだアアアッ!!』

（ま、まさか……? どこにそんな力が……?）

常に冷静沈着な藍だったが、ここで初めて動揺の色を見せた。

勝利の寸前、思わぬところから横槍が降ってきた。まさか完全に力尽きたと思われたマイラが、ここで追い上げてくるとは思ってもみなかった。

この追い上げは、美夜や藍のように計算して作った余力によるものではなく、実はただの意地だった。負けず嫌いと自尊心の高さが最後の力となっていた。美夜のようなチビッコにまで負けられない、

と奮起して限界以上の力を発揮したのだ。

「岸边にならともかく、チビッコにまで負けられないわよ！」

「うにゃあゝ、マイちゃん、言い過ぎです！ 私だって意地があります！」

「……先輩ぐらい付けなさい、小娘……」

ゴールテープ直前で、三人がほぼ一列に並んだ。

最後の最後で、勝負の行く末がわからなくなった。勝利の女神は誰に微笑むのだろうか。

「うらアアアッ！！」

マイラの気合とは裏腹に、勝負は非情だった。あと一步が届かなかった。

ゴールテープを切ったのは、藍だった。

先にリードを奪っていた藍に、マイラも美夜もあと一步が届かなかった。無敗の女帝の通り名は伊達ではなかったらしい。

『勝ったのは我等が女帝、岸边藍だアアアアアッ！！』

伝説は終わらない！ 彼女に土を付けられる者はやはりいないのか！ しかし、今回は惜しかった！ 特に大神の胸があと一センチあれば、夢の九十代……ではなく、その豊満な胸でゴールテープを切れ……』

「黙りやがれエエエッ！！」

最後の最後、限界の限界を超え、マイラは渾身のドロップキックを沼影に食らわせた。生徒会テントで好き放題なことをほざいていた沼影は、無様に吹っ飛んでいった。

とても気分爽快だった。マイラは一仕事をやりきったような笑顔を浮かべ、美夜の元へ駆け寄ってきた。それにしても、マイラは元気一杯のように見える。彼女の種族は本当に持久力がないのだろうか。

「あゝ、それにしても、また負けたあ……。っていうか、私と美夜の勝負はどっちの勝ちなのよ？」

「はあ、はあ……。いいじゃないですか、引き分けて……」

「駄目！ パフェの奢りがかかってるんだから！」

「はあ、はあ……。先輩達、そんなもの賭けてたんですか？」

結局四位に終わってしまった初音は、二人の話を聞いて呆れた。彼女は三人に負けて、非常に悔しそうな顔だった。

「そうよ、悪い？」

「はあ、相変わらず食い意地張ってますね。……太りますよ」

「……そ、そういう貴方はもう少しふくらした方がいいんじゃない？ ……局部的に」

超笑顔×2。

笑顔のまま殺気を撒き散らし、睨み合うマイラと初音。どうもこの二人は本質的に相性が悪いようだった。顔を合わせるたびに喧嘩を

している。

「あ、あの！ ほら、仲良くしましょう。そんな全く目が笑っていない笑顔で見詰め合うなんて怖いですよ。な、仲良くしましょうよ……」

「うるさい、一番栄養取らないといけないチビッコが！」

「うにゃああああッ！！ 二人してチビって言わないでください！ これでも毎日牛乳飲んでるんですよ！ それなのに、それなのに……」

女三人寄れば姦しい。まさに今の彼女達を表すのにもっとも相応しい言葉だった。仲裁役の美夜がキレてしまい、三人は怒り心頭で口喧嘩を始めてしまった。

とても騒がしかったが、実に平和だった。

しかし、この平穏な日常は決して長く続かなかった。血塗れの惨劇の幕はすでに上がり始めていた。マイラと初音の殺し合いは、この出来事から二週間も経たぬうちに起こる。

どれほど願おうとも運命の歯車は止まらない。そして、起きてしまった惨劇を巻き戻すこともできるはずがなかった。

閑話休題、六章「奪われた希望」へ……

第六章 奪われた希望（前編）

私は、芝崎初音を憎んでいた。

それは否定しない。いくら否定しても、胸に渦巻くどす黒い感情は消えないと知っている。だからこそ、私はこの真っ黒な憎悪を否定しない。

妬ましかった。芝崎初音は、あまりに慎に近かったから。

私が知らない慎を知っている。それだけで憎かった。一緒に過ごした年月も、芝崎初音でも私は負けている。慎と芝崎初音のたくさんの思い出を奪いたかった。奪って八つ裂きにしてやりたかった。慎に芝崎初音のことを忘れてほしかった。

もちろん、それが無理なことはわかっている。そもそも、本気でそう思っていた訳ではない。誰だって好きな人ができれば、独占したいという欲求が出るだろう。それが、芝崎初音相手だと強く出てしまう。彼女があまりにも慎に近いから、どうしても反発してしまう。

芝崎初音が大嫌いだった。でも、認めていた。

彼女は強い。私とは別種の強さを持っていた。だから、どこか憧れていた。もちろん、そんなことは表には出さなかったが、それでも決してこの感情も偽りではなかった。

嫌いだったが、そうではない感情もあった。

好敵手。

一言で言い表すなら、私と芝崎初音の関係はまさにそれだった。憎み合いながらも、認め合っていた。だから、憎くて憎くて殺してやりたいと思ったこともある。だけど、心底消えて欲しいとは思ったことはなかったと思う、多分……。いつまでも喧嘩をして、慎を取り合っていたい。そんな気持ちもあった。

でも、今では全て、反吐が出るほどに腐った綺麗言だった……。

「初音 エエエエエエエツッ!!」

絶命した初音を前にして、慎は慟哭した。

彼の悲しみの声が、私の心を抉る。

芝崎初音を殺したのは、私だ。

私が無残に殺してやった。

……慎を殺そうとしたからだ。

あの時のように目の前で大好きな人を殺されるのは、見たくなかった。

「……ごめん、慎」

泣き咽ぶ慎の側に近付き、私は慎を縛る縄を切っていった。

慎をこのままにして置いて逃げて構わなかった。むしろ、そうすることが最善だった。しかし、私は慎を見捨てることはできなかった。

「……許されようとは思ってない。恨みたいなら、いくらでも恨んで。慎になら、殺されたって構わないから……」

慎に殺されても構わない。これは本音だ。

どうせ、このまま生きていても血と罪に塗れた復讐の道しかない。最期はまともな死に方をできないだろう。志半ばで無残に殺されるに決まっている。ならば、今ここで愛する人に殺されても構わない。

慎を愛しているのだ。

どうしようもないくらいに慎が好き。

彼を失った後悔を言葉で表すことなどできない。

慎への贖罪のためなら、ウェアウルフの誇りだって捨てられる。

しかし、取り返しのつかない罪を侵した私が、慎に触れていいはずがない。

「……慎、私を殺して……」

何を言っているのだろうか、私は……。

もしかしたら、本当は慎に殺して欲しいのかもしれない。

殺されることで許しを得、この生き地獄から解放してほしいのだろ

うか。

どのみち殺されても地獄に行くのだから、意味はないことなのに。でも、慎の心が少しでも安らぐなら、殺されてもいい。

「馬鹿言うな、マイラ……」

慎の声に、私は子犬のように怯えた。

慎に殺されることは怖くない。慎に嫌われることが何より怖い。

「さっき言った言葉、忘れたか……？ 『お前が人間じゃなくても、お前がどんな罪を犯そうと、俺は最後までお前の味方だ』。あの言葉は、嘘じゃない」

「ば、馬鹿は慎でしょ！ 自分が何を言っているか、わかってるの？ 私は人殺しだよ？ その上、人間ですらないのよ？ そんな化け物相手に……」

「関係ねえよ！！」

怒鳴られ、私はまた子犬のように怯え、縮み込んだ。

言葉では慎を拒絶しているくせに、慎の言葉は泣きたくなくなるくらいに嬉しかった。私は何者であろうと私を受け入れてくれる、そんな魅惑的な言葉に心揺らされた。しかし、慎までこの地獄に巻き込む訳にはいかなかった。

どれだけ望んでも、慎とは一緒にいられない。地獄に落ちるのは私一人で充分だ。

「俺は問答無用でお前が好きなんだよ！」

「し、慎……」

嬉しかった。本当に、嬉しかった。

でも、駄目だ。その言葉を受け入れたら、もう引き返せなくなる。再び彼の優しさに甘えてしまったら、二度と私は戦えなくなるだろう。

「お前はバレンタインの時に、俺にこう聞いたな！ 『……もし、私が人殺しになったら、慎はどうする……？』 って！」

私は何の反応も示さなかったが、あの時のことは今でもはっきりと覚えている。直接的ではないにしろ、慎との別れを決意した出来事だった。

「俺の答えは変わらない！」

「馬鹿だよ、慎は……。どうして、そんなに馬鹿なの……」

そんな馬鹿なところに惹かれているのだから、私もどうしようもない大馬鹿者だ。

「『だったら、俺もお前と同じところまで堕ちてやるよ』。あの時は、確かに何も考えずに言った言葉だ。だが、今度は違う。俺は、本気だぜ？ お前と一緒になら、どこまでも堕ちてやる！」

「……ウザい、鬱陶しいよ、虫唾が走りそう。何？ 慎っていつからストーカーになったの？ 気持ち悪いよ。私は慎となんか……」

想いとは裏腹に、慎の心を切り裂く言葉を口にする。

巻き込んではいけない、拒絶しなければいけないのだ。こんな地獄に慎を巻き込まないためにも、彼を突き放さなければならなかった。本当に慎を愛しているのなら、私は慎を拒絶しなければならないのだ。

「マイラ！」

慎は私の肩を掴み、キスができそうなほど顔を近付けられた。

不覚にも、初心な少女みたいにドキッとしてしまった。ちよつと悔しい……。

「拒絶の言葉なら、俺の目を見て言ってみろよ」

「な、何でそんなこと……」

「お前は嘘を吐く時、目を見ない！ 根は正直な奴だからな、目まです嘘を吐けないってわかってるんだろう？ 思い返してみれば、俺を振った時は俯いているか、背を向けているかだったな。俺の目を見て、俺を拒絶してみろよ！」

慎は強気だった。

あの二月の寒空の時とは別人だ。あの時は無条件で私の言葉を信じてくれた。そもそも話の内容が衝撃的過ぎて、嘘だと疑うことすらできなかっただろう。私も逆の立場だったら、動転して何も考えられなくなっただろう。いや、その前に刺し殺していたかもしれない。

私はまだ慎のことが好きだ。おそらく慎はそのことをお節介なお人好しから聞いたのだろう。だから、これほど強気でいられるのだろう。

「……あのチビツコめ、余計なことを……」

私が余計な告げ口をした美夜に対して悪態を吐くと、慎は苦笑した。結局美夜は慎の味方か……。別に恋愛感情とかは全然ないだろうけど、ちょっと悔しいかなあ……。

「そうだな、あいつはお節介だ。さすがに最初はここに来ることを止められたさ。だけど、最後は味方してくれた。まだお前の想いが俺に向かっているって教えてくれた。」

マイラ、俺はお前を誰よりも愛してる。お前がいてくれれば、それだけでいい。本当に、それ以外は何も望まない。だから、一緒にいさせてくれ、マイラ」

血と罪に塗れた教会で告げられる愛の言葉に、私の心は大きく揺れていた。

教会は漆黒の闇に包まれ、咽返るような血の臭いが充満していた。天井のステンドグラスから差し込む月明かりも雲に遮られ、闇は更

に深く堕ちていく。ここで私が慎を受け入れれば、運命は必ず私達に死よりも残酷な悪夢に引き込むだろう。

世界は決して私達を祝福しない。

血と罪に塗れた私に救済などあるはずがない。

それなのに、私は誰よりも愛している人を地獄に引き込もうとしている。

「馬鹿……。どうして私が慎を振ったかわからないの……？」

「俺を巻き込みたくないためだろ？　だけど、それはお前の勝手な理屈だ。俺は巻き込まれたい。何があってもお前と一緒にいたいんだ」

慎の手が私の頬をそっと撫でた。

頬を伝う涙を拭われて、私は初めて自分が泣いていることに気付いた。

「それだって充分勝手な理屈だよ……」

「わかってる。だけど、お前を独りにしない。それは初めて出会った時からの約束だ」

まだそんな約束、覚えていたんだ……。馬鹿なくせに変に記憶力が

いいんだから……。全く、どうしようもない大馬鹿だよ、慎は……。

「頼む、マイラ……。俺を側に置いてくれ……。俺も独りは嫌なんだ……」

慎は私を優しく抱き締め、囁くように言った。

懐かしい温もりだった。慎と別れて以来、どれほどこの温もりを切望していただろう。思わずこの温もりに溺れたくなりそうになる。いや、すでに溺れかけていた。

「……ずるいよ。そんな言い方されたら、断れないじゃん……」

「必死なんだよ、お前を取り戻すために……」

ふと、芝崎初音の死体が視界に入った。

光のない死人の瞳が呪わしげに私を見つめていた。お前なんか幸せになれるはずがない、そう言いたげな怨念が残っていた。おそらく彼女の魂は昇天などできないだろう。これから私を呪い続ける悪霊となるだろう。

それでも構わない。最期の時は、貴方に呪い殺されてやろう。

「いいよ、慎……。一緒に地獄に堕ちよう……」

だが、私はそう簡単には死んでやらない。どれほどの地獄が待ち受けていようと、慎がいれば私はいくらでも強くなれる。

そして、最期に地獄に堕ちるのは、私一人だ……。

慎まで地獄に付き合わせてはいけない。私はこうして抱き締めてもらうだけで構わない。それだけで天に昇りそうなほど幸せだから。彼だけには救いをあげて欲しい。

「ああ、マイラ……、いつまでも一緒だ。もう二度と離さないからな……」

「……うん。慎、大好きだよ……。何に代えても守ってあげるからね」

「そ、そういうセリフは俺が言いたかったんだがな……」

慎は複雑そうな顔をして呻いた。さすがに、守ってあげるなんて言われると、男のプライドが傷付いたのかもしれない。

だけど、実際私の方が強いし、守る立場なのは私なんだよねえ……。あゝ、なんていうか、主人公とヒロインの立場が逆じゃないかなあ……？

「お前等、よくこんな所でいちゃつけるな？」

ギィィ、と教会の扉が軋む音がし、私達は慌てて振り返った。そこには、沼影敦盛がニヤニヤと笑みを浮かべながら、立っていた。

「よお、大神。随分と派手にやったな。一応援護してやるつもりで潜んでだが、必要なかったな」

「援護ねえ……。そんな気配、全くなかったけど……。まあ、いいわ」

今ひとつ、沼影は信用できない。生理的に受けつかない。

「……もしかして、沼影は仲間か？」

沼影の存在に対して、あまり驚きの表情を見せない慎。衝撃的な出来事の連続で、もはや沼影如きの存在などでは驚くに値しないのだろう。元々、沼影なんかに驚く価値はない。

「仲間というか下僕か使い走りね」

「何でお前は素直に仲間と言えないんだよ？」

「生理的に受け付けないわ。譲歩して、下僕として認めてあげる」

「お前、そんなに僕のこと嫌いか！」

「うん、その面見てるだけで反吐が出るわ♪」

「清々しい笑顔で人の心を躊躇なくナイフで抉るようなこと言うな！」

軽く泣きべそをかく沼影。こうしてからかうと実に面白い。

「まあ、それより、逃走経路ぐらい準備しておいたんでしょ。さっさと出ましよう。真面目な話、私にもう戦う力はないわ。早く休みたい……」

まずは熱いシャワーを思い切り浴びたい。血塗れの体を入念に洗い、この血の臭いを早く消し去りたい。

それと、戦う力がないというのも事実だ。肉体的疲労もあるが、精神的疲労も激しかった。もう指一本動かすのも億劫だった。仁と徳島の二人を同時に相手し、芝崎初音と芝崎壮二郎を殺した。私が生き残れたのは、ほとんど奇跡だった。もう一度、同じ条件で同じ相手と戦っても、私はほぼ百パーセント勝てないだろう。

「ちっ……。確かに長居はできねえな。外に車を用意してある。ほれ、行くぞ」

「そうね。……慎、行こう？」
「ああ……」

慎は一瞬、血塗れの初音に見て、瞳に言葉にできない悲しみを浮かべた。

慎は幼い頃から初音のことを知っていた。彼女の死を、悲しまないはずがない。私に対して恨み言を喚き散らしても不思議ではない。

それなのに、慎は私を選んでくれた。憎まれても仕方ないのに、私を愛すると言ってくれた。

……もしかして、本当は私みたいに復讐を考えて……？

「マイラ……？」

「えっ？ な、何？」

私は反射的に、慎が伸ばしてきた手を叩いてしまった。

な、何をしてんのよ、私はッ！？　せっかく、せっかく慎がこんな私なんかと一緒にいてくれるって言ったのに、嫌われるようなことしてどうするのよッ！？

「え、ごめん！　ごめんなさい、ごめんなさい……。わ、私……」

「いいんだ、マイラ……。気にすんな。今のお前はナーバスになってるんだ……」

慎はもう一度手を伸ばし、私の頭を撫でた。

子供扱いされているようで頭を撫でられるのは好きではなかったが、今はこうして撫でられることが凄く嬉しかった。

「っと、そういや、頭撫でられるの嫌いだったっけ？」

「あっ……」

不覚にも、慎が手を離れた時に名残惜しそうな声を上げてしまった。まるで甘えん坊の子供みたいだ。恥ずかしくて、頬が熱くなった。

「行こうぜ、マイラ」

先ほどまで私の頭を撫でていた手を肩に回し、私を気遣うように歩き出した。

これはこれで嬉しい。こうして普通に慎と触れ合えること、それがただ嬉しく仕方なかった。私はこんなにも甘えん坊な性格だったろうか。

「……待て、マイラ、慎……」

「じ、仁……」

気絶させたはずの仁が目を覚まし、立ち上がっていた。得物を構え、素直に私達を通してくれそうにはなかった。

「……マイラ、これ以上罪を犯すな。本当に取り返しのつかないことになる……」

「じゃあ、組織に断罪されろ、って言うの？ どうせ死ぬなら、ウェアウルフの血と誇りのために死ぬわ」

「……血と誇り、か。俺にはわからないな……。どうして、そんなもののために命を賭けられる？ この血のせいで、俺は家族の全て

を失った。俺にとってこの身に流れる血は、忌まわしき呪いのようなものだ」

確かに、仁の一族の経緯は知っている。自らに流れる血を恨むのも無理はないだろう。亜人の血と人の血が交わると、悲しい不幸を呼ぶ。彼もそうした不幸に巻き込まれた一人である。

仁だけではない。私も、血に翻弄された一人だ。

悲しい事実だが、亜人の血によって生まれた悲劇は多い。それによって幸福を、希望を、命さえ奪われた者が星の数ほどこいる。このような悲劇は、白の派閥の尽力によって数は減ったが、それでもなくなることはなかった。

「仁、こればかりはわかり合えないわ。貴方が何を言おうとも、私はウェアウルフの血と誇りに殉じるわ……」

「……そうか。なら、俺は……、がッ!？」

突如、仁の体が床に叩き付けられた。

いや、私との会話中に仁の背後に回った者が、仁の腕を捻って押し倒したのだ。ウェアウルフの私ですら気配を読み取れないとは、相当の手練れだ。徳島と同等かそれ以上の実力者でなければ、私の第六感までを欺くことはできない。

「……き、貴様……、憂いの……?」

「う、憂いの切り裂き魔！？ 何で、あんたがこんな所に！？」

涙を流した悲しみの仮面、闇に溶けるような漆黒のコート、大型の理髪バサミ。白の派閥からもっとも恐れられている暗殺者、憂いの切り裂き魔。

彼（？）が白の派閥に属する仁を捕らえるのは不思議ではないが、この教会に来たのは私の独断だ。個人的な協力者である沼影はともかく、黒の派閥からのバックアップがあるとは思えなかった。

「……芝崎ノ序列二位ノ人間ヲ始末スルちゃんすヲ、組織が見逃スト思ウカ？ オカゲデ手間ガ省ケタ」

機械で変えられた声。仮面に変声器が仕込まれているのだろう。

「そう……」

「追ッ手が来ル。コノ男ヲ人質ニシテ、逃ゲルゾ」

憂いの切り裂き魔は素早く仁を縛り上げ、私が反論を上げる前に彼を連れ出していった。

仁と戦わずに済んでほっとしたが、仁が人質になってしまった。心中は複雑だった。もちろん仁と戦いたかった訳ではないが、こうして仁を巻き込んでしまうのはもっと嫌だった。

「なあ、マイラ……。仁は……」

「大丈夫、悪いようにはしないから……」

「……ああ、それは信じてるよ。だけど、あいつまで巻き込みたく

なかった……」

慎も私と同じ気持ちだったようだ。

仁は私の再従弟であるが、このウェアウルフの宿命とは無関係な人物だ。そして、何より私の大切な友達でもある。この血塗れの道に巻き込みたくはなかった。

何故だろう。巻き込みたくない、そう思っている人ばかり悲劇に呼び寄せてしまっている。もう二度と大切な人が死ぬところを見たくないのに。

捕まっていた慎に発信機や盗聴器の類が付けられていないことを確認し、私達は沼影が用意した車に乗り込んだ。運転手は沼影、助手席には慎、後部座席には、私、仁、憂いの切り裂き魔の順で乗り込んだ。

しばらく左折を繰り返し、追跡の確認を行った。しかし、追っ手の影すら確認できず、拍子抜けだった。一応、沼影は絶えず後方に注意を払っていたが、慎はすでに安堵しているようだった。私はまだ興奮が残り、この不気味な静けさも警戒心を掻き立てるだけだった。

「なあ、マイラ……。そろそろ、全部話してくれないか」

重苦しい車内の沈黙を、慎が破った。

彼のこの問いは覚悟していた。慎を巻き込むならば、いずれ話さなければならぬことだったからだ。

「……何から、知りたい？」

「いろいろ聞きたいことはあるんだが……」

慎の視線が一瞬だけ沼影や憂いの切り裂き魔に向かったが、すぐに私だけを見つめた。

強い意志が込められた真っ直ぐな視線。罪深い私にはあまりにも眩しくて、思わず目を逸らしたくなった。しかし、もう二度と慎を避けるようなことなんてしたくない。たとえ、慎という太陽に私という闇が焼き払われようとも、私は決して慎から離れない。もう絶対に、離れ離れになったりしない。

「まず、お前のことを知りたい」

「……それは、私が本当に人間じゃないかってこと？」

……怖い。

私が人間ではないと知ったら、慎は離れていってしまわないだろうか。不安に胸が押し潰されそうになる。せつかく取り戻した大切な者をまた失ったら、私はきつと耐えられない。

「それを含めても全部だ。お前のことは全部知りたい。そして、受け入れたい」

「慎……」

慎の優しい微笑みは、私の浅ましい不安を全て氷解してくれた。

私は本当に小さい人間だ。多くの人を殺し、その上最愛の人の言葉さえ信じられない。慎は何があってもわたしの側にいてくれる、といってくれたのに、それをまだ疑っている。

慎を信じよう。何があっても、慎だけは私の側にいてくれると。

「わかった……。全部、話すわ……」

私は一度肺の空気を全部吐き出し、新しい空気を吸い込んだ。そして、覚悟を決めて、全てを語り出した。

「……私の本名は、マイラ・フェアリア。誇り高き狼の眷族、ウェアウルフよ」

「フェアリアって……？ 大神ってのは、本名じゃなかったのか？」

「うん、前に日本人の血なんて一滴も流れていないって言ったでしょ？ なのに、どうして日本の苗字名乗ってるのか疑問に思わなか

ったの？」

「あ、あははは……、そういや、ちょっとだけ、そんなことを思ったり思わなかったり……？」

私の名の矛盾に、慎は全く疑問を持っていなかったようだ。久里子と沙雪にはそのことを聞かれたことがあったので、いずれ慎にも聞かれるのかと思っていた。しかし、それも私の取り越し苦労だったらしい。

「あー、それより、ウェアウルフってのは何なんだ？ さっきは誰もが知ってて当然みたいに話してたから、今一つわからねえんだが？」

確かに、先程は状況的にもウェアウルフのことを説明する余裕はなかった。そもそも私は正体をばらすつもりなどなかったし、芝崎側も組織の守秘義務があるので説明は絶対にしなかっただろう。

「ウェアウルフの説明の前に、慎に理解してほしいことがあるわ。

まず、世界は貴方達人間だけの天下ではないこと。確かに圧倒的に個体数を誇り、事実上世界の支配者であることは間違いない。でも、私達のような人間の亜種も確かに存在しているの。

そして、そうした存在は幾つかの組織によって隠蔽され、保護もしくは抹殺されているわ。私もかつてはそうした組織の一つに保護を受けていた者よ」

慎は怪訝そうに眉をひそめ、理解に苦しんでいた。しかし、無理矢理頭の中に、そうした事実がある、ということ捻じ込んだ。

「……なあ、どうして隠す必要があるんだ？ そんなことをしなくても共存でき……」

「共存なんてできる訳ねえだろうが！？」

慎の考えなしの発言に、沼影が食って掛かった。私も今のセリフを言ったのが慎でなければ、激昂していたかもしれない。

それにしても、沼影がこれほど感情的に怒鳴るとは思わなかった。

あの話、少しは信じてもいいのかもしれない。私を信用させるための嘘ではないかと疑っていたが、沼影のこの反応を見る限りでは、あの話が冗談だとは思いついた。

「人間ってのはな、てめえと少しでも違えば即、異端として迫害する生き物なんだよ！ 同種同士ですら迫害し合うってのに、どうして異種を迫害しないと思えんだ？ ええ！？ ちったあ歴史の勉強しやがれ！ 人間がどれほど迫害を続け、殺戮を繰り返してきたか、知らねえのか！ 今でも、亜人を殺し尽くそうっていう組織は存在しているんだ！ そして、そうした連中に僕の家族は殺されたんだ！ 大神の家族なんざ、一族郎党皆殺しにあった！ それでも、共存できるっていうのか！」

「……わ、悪い、考えが足りなかった……」

「……いや、僕も熱くなり過ぎた」

柄にもなく怒鳴り散らしてしまった沼影は罰が悪そうに頬を掻き、運転に集中した。怒鳴っている間に車線はかなりはみ出していたようで、もう少しあのまま怒鳴り続けていたら対向車と正面衝突をしていたところだった。

「でも、慎……。今回は沼影が正しいわ（非常に不快だけど……）。私達は人間とは相容れないの。慎だって、私以外のウェアウルフを見たら、違う反応してたでしょ？」

「それは……。いや……」

慎は慌てて取り繕うとしたが、私の真剣な目に押されて何も言えなくなった。もし、綺麗言で言い繕うとしたのなら、一発殴っていたかもしれない。

「まあ、それは仕方ないわよ。自分と違う種に対して線引きをするのは、当然のことなんだから。むしろ、慎のように受け入れてくれる人の方が希少よ」

「……」

何か言いたそう顔で口を開くが、慎は結局何も言えなかった。おそらく気休めでも言おうと考えたのだが、言葉が浮かばなかったのだろう。

慎は知らない。私達のような亜人がどれほど辛い仕打ちを受けてきたのかなど。筆舌し難い苦行の歴史を歩み、血塗れになりながらも生き続けたことなど想像もできないだろう。しかし私自身、エディンバラでのがなければ、慎のように甘えた理想論を語っていたかもしれない。

「……話を戻すわね。ウェアウルフってのは、人間の亜種の一つ。ウェアウルフの特徴としては、この耳と、硬質な爪と牙、他の人間種の中でも取り分け高い運動能力ってところかしら。あゝ、でも、

高い運動能力っていつでも、せいぜいオリンピックの選手程度ね。それほど人間と掛け離れているって程でもないわ。人間でも鍛えれば、ウェアウルフ以上の能力を持つ者もいるわ。まあ、ウェアウルフも鍛えれば、もっと強くなるけどね。

それと、他の人間種の血液を摂取することで、その人間の姿に擬態することができる能力。ウェアウルフを含めて亜人種ってのは、ホモ・サピエンス種に化ける術に長けていてね、ほとんどの亜人にこうした特殊な擬態能力があるわ。今まで慎達に見せてきた姿は、人間に擬態した姿だったの。この姿が、本当の私」

「……なあ、その犬耳みたいなのって、本当に生えてるのか？」

「犬言うなあ！ ウェアウルフは誇り高き狼の眷族なのよ！ ……でも、まあ、信じられないのも無理はないかあ」

「……触っていいか？」

私は目を細めて慎を睨み付けた。

この耳は、ウェアウルフの誇り。自らが狼の眷属であることの証明であり、同族であっても夫婦同士でなければ触れさせない。まして、他種族になんて絶対に触らせない。逆に言えば、夫婦ではない者に耳を触れられることは最大の屈辱でもある。

「あっ、いや、今のなし。冗談だ」

でも、慎になら……。慎にだけなら……。

全てを投げ打ってでも、私の側にいることを選んでくれた慎になら、許しても構わない。慎が誠意を見せてくれたのなら、私もそれに答

えるべきだ。

「……いいわよ、触っても」

「本当か？」

興味津々に目を輝かせる慎。

……可愛い。やんちゃな子供みたいで……。

「うん……。慎になら、構わないよ……」

「じゃあ、触るぞ？」

が、柄にもなく緊張する……。

本来なら、夫にしか触れさせない場所。そこを触れさせるということは、つまり慎を夫と認めると同義。婚姻を交わすようで、私は今にも心臓が飛び出そうなほど緊張していた。

ううー、今更婚姻なんかで緊張するなんて恥ずかしい……。

慎も私の緊張が伝わったのか、妙に顔を赤くしている。伸ばした手も若干震え、私の耳に触れることを戸惑っているようだった。

「会話だけ聞くと、微妙にエロいな」

「黙れ、エロ河童！」

く、くそー、沼影が余計なこと言うから、余計に緊張するー。

慎も変なことを想像したのか、顔も手付きも微妙にいやらしくなっていた。締りのない面を少し殴りたくなったが、私は平常心を保って我慢した。

「んん……」

「おお……、ちょっと温かい……」

く、くすぐったい……。

「……確かに生えてるな。それに、血管が少し浮き出てる」

「ひゃ……、うう……、ちょっと、もう少し丁寧……、あん……」

「俺達みたいな耳はないんだな。まあ、それも当然か。耳が四つもあっても意味ないしな。うんうん」

「く、くうん……。し、慎……、駄目え……」

び、敏感なのよお、人間の耳以上に……。せ、性感帯の一つだし……。よ、弱いんだからあ……。

「オイ、鼻ノ下伸ビテルゾ、馬鹿二人……」

憂いの切り裂き魔が大バサミを最大に開いて、慎と沼影の首筋に突き付けた。

まさか彼に助けられるとは思わなかった。隣を見ると、仁も居心地の悪そうな顔で、私から目を背けていた。この二人は紳士だ。

それに引き換え、前席の二人は本当に最低のスケベ野郎達だ！ 特に沼影。

「……慎、今のわざと？」

「や、やゝ、ち、違いますよ、マイラさん？　ちよつとした知的探究心に火が点いたっていうか……」

「ぶっちゃけ、エッチな声が聞きたかったんでしょ？」

「YES！　って、しまった！　つい本音が！」

「慎……」

この状況でよくそんなスケベ根性を出せるわねえ……。それが男って奴なの？　全く、だとしたら本当にどうしようもない生き物ね、男って……。

私は慎を一発、沼影を三発殴って、憂さを晴らした。正直、もっと殴ってやりたかったが、仕方なく我慢した。

「はあ……、とにかく私がウェアウルフってのはわかった？」

「ういゝ……」

殴られた場所を擦りながら、慎は唸り声で返事をした。

「私が白人ってことでわかると思うけど、本来ウェアウルフはヨーロッパ原産の種。今の組織に保護されるまで、私の一族はヨーロッパ中を転々と流浪していたわ。ちょうど私の祖父の代からイギリス（まあ、正確に言うところスコットランド近く）に居を落ち着けたそうね。私も日本に来るまではエディンバラで暮らしていたわ。……もし、何もなければ、今頃私は子供と一緒に幸せに暮らしてたでしいうね……」

「……こ、子供!？」

慎は驚愕に目を丸くし、呆気にとられていた。覚悟を決めていた慎でも、さすがに動揺を隠せないようだ。というより、私のことが好きなら尚更、ショックが大きいのは当然かもしれない。

本当は、少しでも聞き流してくれることを期待した。しかし、そう上手くはいかないらしい。神様はいつも性格が捻じ曲がっている。

「……全部、話すって言ったでしょう。だから、隠さないわ……」

それは、決して消せない記憶。

ただ一人生き残った私の最後の希望、それが奪われた瞬間。残された私の心を完膚なきまで碎き、絶望の底へと突き落とされた悪夢。

「……私は、慎と出会う一週間前に、流産しているの……」

つづく

第六章 奪われた希望（後編）

二年前、慎と出会う十日前。

当時、私は一四歳にて妊娠八ヶ月だった。

一般的にいえば、かなり早い妊娠だと思われるが、私達のような亜人ではそれほど早い時期ではなかった。

亜人の妊娠が早くなる理由としては、亜人は元々絶対数が少ないために、種を存亡させるために多くの子孫が必要となる。そのため、早期に婚姻を結んで、子を生まされる。

また、亜人のコミュニティーはどうしても人間社会から隠蔽しなければならぬので、閉鎖的となってしまう。閉鎖的なコミュニティーは一般的な社会よりも早く婚姻するので、出産も早くなる。

最後に特殊な理由として、人間よりも成長の早い種や、長命短命な種など、独自の生態によるものもある。

私は一三歳に本家の長男（ちなみに私は分家の娘）、カーティス様の側室として嫁いだ。ウェアウルフでは珍しく物静かな方で、いつも屋敷で読書をしていた。柔和な笑みを絶やさず、よく頭を撫でてもらった。夫というより、優しいお兄さんのようだった。

臨月の近かった私は、カーティス様と共にエディンバラから少し離れた場所にある古城で過ごしていた。旧市街と新市街が美しく調和した町並みから離れた丘に聳え立つ古城は、エディンバラ城ほどではないにしろ荘厳なものだった。

あの日は、一年に一度の一族の集会であったが、そこで話されたことといえば、出産の近い私のことばかりだった。ヴァンパイア種やウェアウルフ亜種は長命であることと引き換えに出生率が低く、絶対数も少ない。そのため出産は諸手を上げての祝い事だった。

親戚一同に揉みくちにされ、ようやく開放された頃には宵の刻を過ぎていた。しかし、緯度の高いエディンバラの冬は日が長く、まだ空は闇に包まれてはいなかった。

「寒くないですか、マイラさん？」

「あつ、カーティス様！ 雪ですよ、雪！ こんな日に家でじっとしてられる訳ないじゃないですか！ 最近は全然外に出られなくて、ストレス溜まってたんです！ 今はみんな酔っ払ってますし、監視もいません！ 今遊ばずにいつ遊ぶって言うんですか！」

「もう臨月も近いというのに、元気ですねえ。まあ、マイラさんらしいですけど」

雪にはしゃぐ私を見て、苦笑をするカーティス様。庭園の中央にいる私に近付くと、カーティス様は上着を脱ぎ、私の肩にかけてくれた。

さり気ない気遣い。慎もあれで優しいところはあるが、優しさという点では遠く及ばない。思えば、慎とカーティス様は真逆な性格だった。

「でも、体を冷やすのは胎児によくありません。さあ、戻りましょう？」

「うう……、そういう言い方はずるいですよ……。戻るしかないじゃないですか……。カーティス様もみんなも心配し過ぎですよ……」

「一四年振りに一族に子宝が恵まれたのです。慎重になるのは当然でしょう？」

亜人の中には出生率の著しく悪い種が存在する。ウェアウルフ種もそうした種の一つで、私が生まれて以来、私の一族に子供は生まれていなかった。

「そうだ。お前はもう自分一人の身ではないのだぞ」

「ヴィ、ヴィオラ様!？」

ヴィオラ様は、カーティス様の正妻。カーティス様が一五歳、ヴィオラ様が一七歳の時に結婚し、以降十年以上カーティス様を尻に敷いている。落ち着いた雰囲気のカートィス様と違い、鋭く剣呑な雰囲気をもっている御方で少し怖い。正妻を差し置いて妊娠してしまったという立場もあり、できればあまり顔を合わせたくない人物だった。

「おい、マイラ。何だ、今の反応は？　それと、失礼なことを考えたな？」

「い、いえ、滅相もないです！ はい！」

おまけに勘もいい。ウェアウルフの女として懂れていた部分もあるが、当時の私の中では恐怖の方が大きかった。

「そ、それより、ヴィオラ様、ウィル伯父様達と呑み比べしてたんじゃ……」

「ふん、飲み比べで私と勝負できるのはお前くらいだ」

「あ、あははは……」

いやゝ、私も負けず嫌いなもので、妊娠前に呑み比べをしたことがあった。さすがに普段呑み慣れていなかったので全く歯が立たなかったのだが、それでも他の親戚よりはマシだと認められた。

「いいか、マイラ！ ウェアウルフの女にとって出産は一世一代の大勝負だ！ 子供のことを第一に考え、行動しなければならないのだ！」

「はゝい……」

耳にタコができるほど聞いたセリフ。ヴィオラ様に限らず、一族の女性陣ほとんどに言われた。一族の中で私が一番下なので文句を言うこともできず、正直嫌いなセリフだった。

「戻るぞ、マイラ。カーティスもこいつを甘やかすな」

「「はい……」」

私とカーティス様は項垂れながら、ヴィオラ様に連行されていた。

せつかくの雪だというのに、遊ぶことさえできないとは、妊娠中というのはつまらない。私は素直にヴィオラ様の注進を受け取れず、子供っぽい反発心を抱いてしまった。

「時にマイラ、子供は女の子らしいな？」

「はい、そうです」

子供の性別は生む時の楽しみにしたかったのだが、周りの親族に無理矢理調べさせられた。その結果、私の中に宿る命は女の子だと判明した。

「名前は決めたのか？ 子に名を付けるのも、母の役目だぞ」

「はい、もちろん決まっています。子供の名前はずっと考えていたんですから」

「ほお、感心だ。して、子の名は何と言う？」

「……ホープ。この子が、一族の新しい希望になってくれることを願って付けました」

「ホープ、か。うむ、いい名だ。その名のとおり、みな希望になってほしいな」

普段怒られてばかりなので、ヴィオラ様に褒められると嬉しくなってくる。カーティス様も隣で、いい名前ですね、と微笑んでくれた。

この時の私は、明日は無条件で幸せなものだと信じていた。当然の
ようにいつもの日々が訪れ、温かな笑みに囲まれながら、我が子の
生誕を迎えられると思っていた。

惨劇が起こったのは、それから三時間後のことだった。

薄い闇に包まれた夜。深々と降りしきっていた雪も止み、エディン
バラの夜は静寂に満ちていた。

身重の私は、いつものように少し早い時間に床に就いていた。しか
し、その日は何故か眠ることができず、窓から夜空を眺めていた。
できれば、月を見たかったのだが、今日は不幸にも新月だった。

伝説のウエアウルフは満月を見ることで狼（獣人）と化すと謂われ
ているが、実際はそんなことはない。この伝説の由来は、おそらく
擬態を解いた時のウエアウルフの姿が化け物に見えたのだろう、と
謂われている。正直面白い話ではないが。

しかし、ウエアウルフと月に何の関連性が全くない訳ではない。

かつてのウエアウルフ種は人間社会から離れ、深い闇に閉ざされた

場所を住まいにしていた。そのため、我等の種にとって月は唯一の光。いつしか、月はウェアウルフの信仰の対象となっていた。亜人の多くは、月を信仰する宗教も多く、特にヴァンパイア種の信仰はもっとも古く、戒律が厳しいことで有名だった。

宗教を信じている訳ではないが、私は月が好きだった。心洗われるような月光が、まるで優しく笑うカーティス様のように思えたから。

「んっ？ 足音？」

夜空を眺めていた私の耳に、慌しい足音が聞こえた。相当急いでいる様子だった。

足音が聞こえてからしばらくして（ウェアウルフの耳はかなり遠くまで聞こえるのだ）、部屋の扉が勢いよく開いた。

「ヴィオラ様？」

こんな夜更けに突如現れたのは、ヴィオラ様だった。いつも凜々しい彼女にしては珍しく、息を荒立て慌てているようだった。

「ぶ、無事か、マイラ……？」

「無事？ 何のことで……」

と言いかけた時、妙に足並みの揃った複数の足音が聞こえた。訓練を受けたような整然と揃った足音だった。何故、こんな夜更けに軍人のような足音が聞こえるのだろうか。エディンバラの古城には、私達ウェアウルフ以外いるはずがないというのに。

胸がざらついた。私の第六感が本能的に危険を告げていた。

「くそ、早いな！ 行くぞ、マイラ！ ここはもう危険だ！」

「な、何が起こったんですか、ヴィオラ様！？」

「我等ウェアウルフを脅かすような連中は一つしかないだろう！
クルキアレ殲滅部隊が攻めてきた！」

クルキアレ殲滅部隊。未だに秘密裏に存在する異端審問会に所属し、異端者や異教徒、そして私達亜人を殺し尽くすための戦闘部隊。もっと端的に言えば、一方的な殺戮を殉教と勘違いしている下衆な連中だ。

キリスト教の最盛期であれば、異端者や異教徒（あとは私達のような亜人）を殺すことに、それなりの建前を持って行えただろう。十字軍や魔女狩りがいい例だ。しかし、現在表向きには異端審問会は廃絶され、そうした非人道な虐殺は行われていないとされている。

しかし、実際連中はまだ存在している。千年以上にも渡って殺戮の限りを尽し、未だに多くの同胞が連中に殺されている。そして、今も私達ウェアウルフ一族が狙われている。

「く、クルキアレ……」

「そんな情けない顔をしない！ お前はこれから母となるのだ。お腹の子を守らなければいけないのだ。母ならば、決して弱さを見せるな」

ホープ。私の子供。みんなの希望。

必ず守らないと。私の命に代えてでも、この子だけは絶対に守らないと。

「いい目だ。その意志があれば、大丈夫だろう。行くぞ、マイラ」
「はい！」

ヴィオラ様に手を引かれ、私達は部屋を出た。廊下を駆ける音が二つ、エディンバラの古城に響き渡った。追跡者も私達が逃げたことに気付き、走り出したようだ。思った以上に多くの刺客がいるらしく、かなりの足音が聞こえた。

「あの、お父様やお母様は無事逃げられたのですか、ヴィオラ様？」
「……………」

何でもズバズバと物申すヴィオラ様が、唇を噛んで私から目を逸らした。そして、私の問いには答えず、そのまま私の手を引き続けた。また胸がざらつく。追求するな、と本能が告げていた。しかし、私は両親の安否を聞かずにはいられなかった。血と家族はウェアウルフにとって何よりも重んじられることだから。

「……ヴィオラ様、答えてください……」

「クルキアレの襲撃は主に奇襲だ。ホールにいた者達は奇襲に合い、大半はそこで……」

お父様もお母様も親戚と一緒にホールで……。う、嘘！ そんなことある訳ない！ お父様は私の十倍は強い！

たとえば、ヴァチカンの連中がどんな卑劣な手段を使おうと、お父様が負けることなんて絶対にない！ お母様だって、ウィル叔父様だっている！ そんなことがある訳……、ある訳ない！

「じよ、冗談は止めてください、ヴィオラ様……。わ、笑えませんよ」

「……マクシミリアン様とマリアン様は……」

マクシミリアンとマリアンは、私の父と母の名だ。

何を言おうとしているんですか、ヴィオラ様？ どうして私の目を見ないんですか？ 嫌、聞きたくない……。ヴィオラ様の冗談は全然笑えない……。

私は立ち止まり、ヴィオラ様の手を振り解いた。そして、小さな子供のように激しく首を振り、頭を抱えるように耳を塞ぎ、彼女の言葉を拒絶した。

しかし、ヴィオラ様の言葉は私の意思を無視して、私の耳に届いてしまう。

「……私とカーティス様を庇って、亡くなった……」

「嘘だアアアアアアアアツ！！」

信じない……。

お父様とお母様が死んだなんて、嘘に決まっている……。ヴィオラ様の冗談は、本当に最低だ……。

「マイラ！ 立つんだ！ ここにいては殺されるだけだ！」

「嘘、嘘、嘘……」

「軟弱者！ しっかりするんだ！ お前の身は一人ではないのだ！
こんなところで死んではいけないのだ！」

……そうだ、私のお腹には赤ちゃんがいる。

この子は、この子だけは絶対に死なせてはいけない！

母としての本能が、絶望に打ちひしがれていた私を立ち上がらせた。

どれほどの悲しみや苦しみに苛まれようとも、母は子を守るために
命を燃やす。自らを犠牲にしても、子を守るために戦う。お母様
やヴィオラ様に教えられてきた言葉の数々が甦ったが、この時よう
やくその言葉の真の意味を知った。

「……そう、私は母親になるんだ。この子の、ホープの母にならな
きゃいけないんだ……。こんなところで殺される訳にはいかない！」

「マイラ……、よく立った。それでこそウェアウルフの女だ」

手を引かれるままだった私は、自らの意志で歩き出した。

生きなければいけない。何があっても、私はこの子を守るために生
き残らなければならない。

本当はヴィオラ様に手を引かれた方が速いのだが、ヴィオラ様は何
も言わずに私の歩みに合わせてくれた。私の意志を買ってくれたの
だろう。

しかし、刺客の足音は確実に近くなっていた。

クルキアレ殲滅部隊は、私達を以ってしても化け物と謂わしめる悪魔のような集団だ。普通に逃げてでも逃げ切れる可能性は低かったが、それでも想像よりずっと早く追いつかれてしまいそうだった。

そんな時、前方からも慌しく走る足音が聞こえた。一瞬、クルキアレの連中に回り込まれたのかと思ったが、足音と交互に混じる金属音から、前方から走ってくる人物を特定することができた。

「ヴィオラ、マイラ！」

「ウィル伯父様！」

「お父様！」

ウィル伯父様。ヴィオラ様の実父であり、喧嘩では無敗を誇っていた荒くれ者だったが、数年前にクルキアレ殲滅部隊との交戦で片足を失っていた。それ以来、金属の義足を付けていた。しかし、義足になっても実力には衰えはなく、私はおろかヴィオラ様でさえ勝つことができない。ただし、酒には滅法弱い（そのくせ悪酔いするまで呑みまくる）。

ウィル伯父様は顔には大きな火傷を負い、全身には数え切れない傷を負っていた。幸い、致命的な怪我は負っていないようだが、それでも満身創痍だった。

「無事だったか……」

「はい！ ウィル伯父様もご無事で何よりです！」

「ああ、老いたとはいえ、そう簡単にはやられんよ。だが、あまりに相手が悪い……」

ウィル伯父様らしからぬ弱気な発言だった。たとえば、勝てぬ戦であろうとも決して引かぬ蛮勇な方なのに、こんな弱音を吐くとは少々意外だったし、少し幻滅してしまった。

「お父様！ たかがヴァチカンの犬にそのような……」

「……犬、か。否定はしない。だが、貴様等は犬以下の糞共だ！」
『……ッ！？』

古城の廊下に響く声。

ただ声を聞いたただけなのに、私の中の何かが警鐘を鳴らした。

殺される……。

背後から感じる圧倒的なプレッシャーはあまりに圧倒的で、私は戦う前から敗北を悟ってしまった。絶対的な捕食者に追い詰められた恐怖が、全身を駆け巡る。自らの力に絶対の自信を持つウェアウルフの女が、相手を見ずして恐怖に屈してしまった。

情けない、と自分を叱咤することもできなかった。そんな考えに至る隙さえないくらいに、私の思考は恐怖に吞まれた。

「……セントエルモの火？」

振り返った闇の向こうには、青白い光が見えた。

私が口走ったセントエルモの火とは、尖った物体などに発生する青白い発光現象のことだ。その名の由来は、船乗りの守護聖人である聖エラスムス。

闇の向こうに揺らめく青白い光はセントエルモの火とは明らかに違

い、まるでランタンのようなおぼろげな光だった。しかし、初めはおぼろげだった青白い光は徐々に巨大になっていき、まるで全てを覆い尽くさんばかりになっていった。

そして、その青白い輝きが、何故か生涯最後の光景になるような錯覚を覚えた。

「ヴィオラ、マイラ!!」

ウィル伯父様が突然駆け出し、私とヴィオラ様を押し退けて、青白い火の前に立ちはだかった。

次の瞬間、全てが青に呑み込まれた。

私が気付いた時には石造りの壁は真っ黒に焦げ、絨毯は無残に消し炭と化し、ウェアウルフと共に歴史を共にしてきた調度品は見る影もなく炭化していた。私の意識が一瞬途切れたその間に、美しい古城の内装は一瞬にして失われていた。

「ぶ、無事か、二人とも……」

青白い光から私達を庇ったウィル伯父様もまた、目も当てられないほどの大火傷を負っていた。ダンディな髭も見る影もなく、消し炭と化していた。

素人目から見ても、間違いなく致死傷だ。今、目の前に立っていることさえ信じられないほどの。

「お、お父様……」

「ウィ、ウィル伯父様……」

「どうやら、無事のようだな……」

ほとんど傷を負っていない私達を見て、ウィル伯父様は安堵し、力尽きた。

ヴィオラ様は倒れるウィル伯父様の体を支え、青き炎が襲ってきた方向を睨み付けた。そこには、声だけで私達を萎縮させた化け物があった。

「……さすがは鉄壁のウィリアム。あれを食らってまだ生きているとはな」

その男は、天秤の紋章が刻まれた真紅の法衣を纏い、凍り付くような青き炎に包まれていた。業火のような赤い髪、それとは対を為す氷河のような青い瞳。狂犬のような血に飢えた雰囲気を持ちながらも、その瞳は死人のような暗さを秘めていた。長身で年嵩に見えるが、まだ大分若そうだった。一見すれば、ただの美しいだけの少年だった。

しかし、私は一瞬で悟った。

この男こそがクルキアレ部隊の指揮官であると。

異能の力を持ち、私達を蹂躪するために訪れた悪魔であると。

化け物を殺すための化け物集団の中にあっても、なお化け物と恐れられる存在であると。

男の後ろには、彼と同じ赤い法衣を纏った連中が控えているが、格の違いは明らかだった。恐らく彼等一人一人も相当な手練れなのだろうが、この男と比べれば大人と赤子くらいの差はあるだろう。そ

れくらいの圧倒的な力の差を感じられた。

「……青い燈籠……」
ブルー・ランタン

ブルー・ランタン？

あの男の名前、いや、通り名か暗号名のどちらかだろう。何度かクルキアレ殲滅部隊と対峙したウィル伯父様なら、面識があっても不思議ではないだろう。

「残念だ、鉄壁の。敵とはいえ、貴様との決着がこんなつまらぬものになるとはな。お別れだ、鉄壁のウィリアム。はーっははははははははははははッ！！」

「……青二才が、もう勝った気でいるのか？ だから、いつも貴様は詰めが甘いのだ……」

ウィル伯父様は一瞬だけ、私達に目配せをした。逃げろ、とそう伝わった。恐らく、私達が束になっても、ブルー・ランタンには勝てない。自分がブルー・ランタンを引き付けるからその間に逃げろ、というのだろう。

しかし、ウィル伯父様はヴィオラ様の父親だ。私にとっても大切な伯父。大切な血族を見捨てて逃げるなんて、そんな情けない真似はできない。

私は懐のナイフに手を伸ばし、あの澄ました面の優男に斬り付けてやろうと思った。しかし、私の手はヴィオラ様によって止められた。

「……行くわよ、マイラ」

「な、何を言っているんですか、ヴィオラ様!? ウィル伯父様を見捨てる気ですか!？」

「私達の使命は、生き残って種を絶やさぬことよ……」

「ヴィ、ヴィオラ様……」

ヴィオラ様の唇から血が零れていた。あまりに唇を強く噛んだために切れたようだ。

ウィル伯父様を置いて逃げる、という選択に一番心を痛めているのは、実の娘であるヴィオラ様だ。そのヴィオラ様が使命を果たすと決めた以上、私は逆らえなかった。

「……ウィル伯父様、ごめんなさい……」

「……お父様、新たな希望は私の命に代えても守り抜きます。ヴィオラは血と誇りのために戦い抜きます。お父様のように……」

「うむ……」

ヴィオラ様は私の手を引き、一度も振り返らずに走り出した。強い女性だ。両親の死に取り乱した私なんかとは違う。血と誇りのために、全てを賭す真のウェアウルフの女だ。

しかし、あまりにも悲し過ぎる。

実の父親を見捨ててまで、種を残すことがそれほど大事なのか。肉親が殺されるとわかっていのに、血と誇りのため、と正当化して逃げることもできるのか。

闇に包まれた古城を走りながら、私は何度も振り返った。ウィル伯父様の姿が完全に闇に飲まれた後も、何度も振り返った。

そして、漆黒が青に飲まれた光景を見て、私は振り返るのを止めた。涙が止まらなかった。私も、ヴィオラ様も。大粒の涙を零しながらも、私達は走り続けた。どれだけ悲しくても、どれだけ辛くても、歩みだけは決して止めなかった。

この城には、祖先が数年の年月をかけて掘り進めた秘密通路があった。作った理由については今更説明など必要ないだろう。ある程度の人数が通れるように、それなりの広さがある通路だったが、それでも広いとは言い難い。四、五人が横に並べる程度の幅で、高さも二メートル半以下。坑道を少しマシにした程度の通路だった。

ここまで来れば大丈夫と思っていたが、どうやら私の考えは甘かったらしい。秘密通路にまで、追っ手が迫ってきた。

さすがは私達のような連中を追い詰めるプロフェッショナルだ。巧妙に隠されていた秘密通路をあつさりと見つけてしまうとは。クルキアレの連中も相当な場数を潜っているのだろう。秘密通路に逃げ込んだくらいでは、逃げ切れないらしい。

私はそろそろ限界が近かった。元々種的に持久力が乏しい上、妊娠八ヶ月でかなり大きくなった赤子を抱えている。全力疾走がいつまでも続くはずもなかった。

一方、クルキアレ部隊は確実に私達との距離を詰めてきている。足音がかなり近くまで来ていた。

「マイラ、頑張れ！ 奴等に追い付かれたら、終わりだ！」

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

返事はできなかった。しかし、その分は足で答えた。

ここで私達が殺されたら、ウィル伯父様を犠牲にした意味がなくなってしまう。私達のために命を捨ててくれた者のためにも、私達はここで死ぬ訳にはいかなかった。

「あ、あれは！？」

私に声をかけるために振り返っていたヴィオラ様の目に何かが映った。一瞬、遅れて私も振り返った。

青。絶望の青が迫っていた。

次の瞬間、ヴィオラ様がその青から庇うように私を抱き締めた。

そして、煉獄の炎が私達を包み込んだ。しかし、業火は私まで届かない。ヴィオラ様が身を挺して私を庇ってくれたから。

ヴィオラ様は全ての炎を一切漏らさず受け止め、私には火傷一つ負わせなかった。しかし、その代償はあまりにも大きかった。

「ヴィ、ヴィオラ様、髪が……」

「だ、大丈夫。心配するな……」

流れるように美しいヴィオラ様の髪が、無残に焼け落ちていた。髪だけでなく、背中は肉がただれるほどに焼け、致命傷なのは間違いなかった。

「……マイラ、私を置いて、行け……」

ヴィオラ様が言わんとすることは理解できる。

このまま一緒に逃げても足手纏いになるだけ。たとえ、ここで逃げられたとしても、町に辿り着くまで生きていられる保証はない。身重であっても私一人で逃げた方が助かる可能性が高い。

理屈では、ヴィオラを置いて逃げるのが一族のためだ。一人でも多くの種を残すことがウェアウルフの女の使命なのだ。

「そんな……、そんなのって……」

「わかるだろう……、マイラ……。行くんだ……」

残った力で私を突き飛ばすヴィオラ様。しかし、凛々しく美しいヴィオラ様とは思えないほど弱々しい押し方だった。

「……ヴィオラ様を置いて、逃げるなんて……」

どうして、どうしてそんなことが正しいの？

大切な人達を見捨てて、みすばらしく生き残って、それでどんな意味があるというの？

血と誇りがあるなら、最後まで戦うべきではないの？

「……ホープ、よい名だ……。できることなら、私もその子の顔を見たかった……。いや、できることなら、私があの人の子を身ごもりたかった……」

はは……。私は弱いな……。この期に及んでも、私はお前に嫉妬している……。

マイラ、こんな女のために馬鹿なことを考えるな……。逃げて、逃げて、生き残れ。そして、頼む……。あの人の子を、ホープを、産んでくれ……。

その子は、みんなの希望なんだ……。生きて、その子を産め……。それが、お前の使命なんだ！！」

どうして、どうして、どうしてッ!?

こんな立派な人が死なないといけないのッ!?

でも、私の母としての本能が、生きろ、と訴えるッ!!

「はーっはははははははッ!! 鉄壁の犠牲は無駄になったな」

「ぶ、ブルー・ランタン……」

恐怖と憎悪が渦巻く。

ウィル伯父様でさえ勝てぬ絶対的な力に対する恐怖。

ウィル伯父様を無残にも殺されたことに対する憎悪。

この男が私の家族を殺した。絶対に許してはいけない悪魔。

「……マイラ、ここは私が時間を稼……」

「無理だな。俺が相手をしなくても、時間稼ぎすらできぬだろう」

「くっ……」

ブルー・ランタンの指摘は正しい。ヴィオラ様はまともに立つことすらできぬほどの重傷を負い、今の状態では普通の人間にすら勝てぬだろう。相手は私達のような人間以上の存在を殺すための特殊部隊、障害にすらなれぬまま無残に殺されるだけだ。

「この狭く酸素の少ない通路でこの火力……。貴様のその炎は、魔力を媒体とした術式だな? だから、これほどの威力を……」

物理現象の燃焼は酸素を媒体にして起こるものだが、魔力（霊力と呼ばれることもある。呼び名が違っても意味はほぼ同じ）を媒体にした炎は酸素を消費しない。

魔力そのものは、基本的にほとんどの物理法則の影響を受けない。そして、魔力を媒体に起こされた現象は、物理法則に影響されずに本来の物理現象に近い効果を生む。それがどれほど物理法則に影響されるかは、その能力者や現象次第で変わる。

「術式とは違う。これは楔だ。俺の命を代償に、得た力」

「ブルー・ランタン、ここは絶対に通さない……。一分でも一秒でも、貴様を足止めし、我等の希望を生かす……」

ヴィオラ様は致死傷にも拘わらず、凜々しく立ち上がり、両手を広げ、私を守るように立ちはだかった。

「愚かだな。これだから、犬にも劣るんだよ、糞共が！」

「マイラ、行け……。お父様や一族の犠牲を無駄にするな……」

「でも、ヴィオラ様！ 私は貴方を置いて逃げるなんて……」

「甘えるな！ お前は血反吐を吐いてでも生きるんだ！ その身に新たな命を宿す母である限り、絶対に死んではいけない！ これから生まれてくる命のために、お前は生きなければいけないんだ！」

ホープ……。

この子のために、みんなを犠牲にしろって言うの？

……違う、みんながホープのために犠牲になってくれているんだ。

私達は自分で戦うことができるけど、この子には無理だ。

だから、みんなはホープのために戦う。

私もこの子のために戦っている。

だから、みんなを見捨てることが正しいっていうの？

……そんなの、間違っている！

絶対に認めない！！

「わかってます！ 私はこの子のために戦う！ でも、だからといって、私はヴィオラ様を見捨てることなんてできない！」

「はーっははは！ いい度胸だ！ 逃げるより、よっぽど生存率が上がったんじゃないか？ まあ、せいぜいコンマいくつ程度だろうがな！」

「マイラ、逃げるんだ……。私は、もう長くない……。一緒に戦っても、無意味なんだ……」

「嫌です！ これから生まれてくるホープに、母はみんなを見捨てた臆病者だなんて思われたくないんです！ この子だって、誰かを犠牲にして生まれたりしたくないはずです！ 私の子なら、絶対にそう思います！ 絶対に、間違いなく！」

私にはわかる。

この子は、私と同じお転婆で負けず嫌いだ。

ちよっとお腹を撫でるだけで蹴り返してくる元気な子なのだから、間違いない。

「私は戦う！ 母なら、逃げちゃ駄目なんだ！」

「マイラ……。お前という奴は……」

ヴィオラ様は俯き、それ以上何も言わなかった。

私の想いが伝わってくれたのだろうか。それとも、呆れてしまったのだろうか。個人的には後者の方の可能性が高いような気がしてならない。

「はーっははははははははははッ！！ じゃあ、二人一緒に消し炭になるんだな！ 犬にも劣る糞共めが！」

「「……ッ!？」」

ブルー・ランタンの全身から青き業火が吹き上がる。まるで自身をも焼き尽くさんばかりの勢いで、耐え難い熱波が私達にまで届く。

やはり、怖い……。

まるで蛇に睨まれた蛙のように、私達は恐怖に凍り付いた。絶望的なほどに力の差がある。不退転の決意が揺らぎ、逃げ出しそうにな

「ヴィオラ……、私がもう少し早く駆けつけられれば、こんなことには……」

カーティス様は傷付いたヴィオラ様を抱き締め、焼け焦げた髪を慈しむように撫でた。

いついかなる時も優しく、本当に穏やかな方だ。私はこの人が怒ったところを見たことがない。しかし、今彼の瞳には静かな憤怒と憎悪が激しく燃え上がっていた。

「マイラさんも私が間に合ったからいいものの、あと数秒で消し炭になっていたかもしれないのですよ。もう少し自重してください」

カーティス様はヴィオラ様を抱きしめたまま、私にも優しい笑みを向けてくれた。私はその穏やかな笑みだけで充分だった。

「き、貴様が、カーティス……。静かなる暴君カーティス……」

静かなる暴君。あまりにも有名なカーティス様の二つ名だ。

カーティス様に嫁ぐと決まった時、その仰々しい二つ名に怯えたものだ。しかし、実際に会ってみれば、眼鏡をかけた優男（いや、ただの第一印象だから！ 決して普段そんな風に思ってる訳じゃないわよ！）。少々拍子抜けしたのを今でも覚えている。

「一思いに首を刎ねて差し上げようとしたのですが、さすがですね」

「な、舐めた真似を……」

「舐めた真似……？」

あ、れ……？

何、この感じ……？

……こ、わ、い……？

カーティス様はそつとヴィオラ様を離し、ブルー・ランタンに向き直った。

肩を斬られて憎悪に燃えるブルー・ランタンが凍り付く。あれだけ絶対的で恐ろしく見えたブルー・ランタンが今は小さく見える。

「それはこっちのセリフだ。『思念統合体』の分際で、ウェアウルフを舐めるな。殺すぞ、薄汚い寄生虫が！」

……カ、カーティス様……？

滅茶苦茶ガラが悪いんですけど……？

ヴィオラ様に目を向けると、無言で首を振った。何か、達観したような表情だった。

どうやら、あれが静かなる暴君と謳われたカーティス様の本性らしい。あの、いついかなる時も穏やかで優しかったお姿は、どうも猫を被っていただけらしい。……ウェアウルフのくせに。

「はア？ 何言ってやがる？ 殺されるのは、てめえ等だろうが！？」

「キャンキャンうるさいな。ヴァチカンの犬ってのは、どうしてこう品のない野良犬ばかりなんだ？」

「黙れ、負け犬が吠えるな！ ここでいくら吠えようとも、てめえの一族は終わりなんだよ！」

「……終わらせるか、終わらせてなるものか！！ 一族の血と誇りを、貴様のような薄汚い外道共に踏み躪らせはしない！」

カーティス様は一族の秘法として伝えられているバグベアクローを構え、ブルー・ランタン率いるクルキアレ部隊の前に立ちはだかった。

「マイラ、ヴィオラを連れて、行くんだ！ ここは俺が引き受ける！ もう誰一人死なせるな！」

「でも、カーティス様……」

「俺の心配はいらん。この俺こそ一族最強の男だぞ。いいからさっさと行け」

……無駄に自信たっぷりだ。普段のヴィオラ様にそっくり。

「……マイラ、今何考えた？」

「いえ、何も！？」

「……まあ、いい。元々、私もあれの影響で今みたいなのになったんだからな……」

今の一言に、知られざる夫婦の歴史を垣間見た気がする。

カーティス様とヴィオラ様の関係については何度か聞いたことがあった。

若き日のヴィオラ様は体が弱く、まさに深窓の令嬢のように大切に扱われていたらしい。ちなみにそれを聞いた時、失笑してヴィオラ様に殴られた。

そんなヴィオラ様を、当時相当荒れていたらしいカーティス様が強引にさらっていったらしい。ちなみにそれを聞いて爆笑したら、夜にカーティス様に苛められた。

私はてっきり作り話だと思っていたのに……。あまりにも想像がつかなかったから。

「行くんだ、マイラ！ お前に一族の全てを託す！ お前は生きて生きて生き抜いて、我等ウェアウルフの希望をつなげ！」

一族の全て……。

お父様、お母様、ウィル伯父様、ヴィオラ様、カーティス様、そしてホープ。今、ここで私達が全滅したら、我が一族の全ては無に帰す。みんなの想いを無駄にしないためにも、私は生きなければならぬ。

……わかってる！ でも、大切な人を犠牲にしてまで、私は生きたくない！

「頼む、ヴィオラやホープを死なせないでくれ……」

「……ッ！？ わ、わかりました……。絶対に、もう誰も死なせません！」

逃げる訳じゃない。

私が行かなければ、助からない人達がいる。
みんな、一族の希望をつなぐために戦っていった。

私も、一族の一員なら、戦わなきゃいけない。

ホープとヴィオラ様を救う。
それが私の戦いだ。

「待て！ 逃がすな、ブルー・ランタン！」

日本語……？

今、確かにブルー・ランタンの後ろの部隊の一人が確かに日本語で叫んだ。しかも、訛りのない流暢な日本語だった。

「ここは通さねえよ！ てめえ等、俺の女に手を出しておいて、ただで済むと思うなよ、糞豚共が！ てめえ等全員、肉片すら拾えねえほどに切り裂いてやる！」

「一人も逃がすな！ 我等が協力していることを悟られるな！」

また日本語？

私はヴィオラ様に肩を貸しながら、必死に先を急いだ。この時は急いで脱出することに頭がいっぱいで、些細な疑問などすぐに消えてしまった。

カーティス様は超人的な瞬発力を生かし、狭い通路内を駆け回ってクルキアレ部隊の連中を次々と切り裂いていた。ブルー・ランタンも仲間に炎は放てず、カーティス様のスピードに翻弄されていた。

……カーティス様なら、きっと大丈夫。

私はヴィオラ様を連れて、町へと急いだ。人のいるところに出れば、連中も騒ぎは起こせない。それに、ヴィオラ様を病院に運ばなければいけない。

お願い、もう誰も死なないで……。

「……マイラ、私のことはもういい……。見捨てろ……」

「馬鹿言わないでください！ 弱気なこと言うなんてヴィオラ様らしくないですよ！ 無駄に気が強くて高圧的なのがヴィオラ様じゃないですか！」

「……あんた、人が弱ってることをいいことに言いたい放題ね……」

満身創痍なくせに眼光だけは鋭いヴィオラ様。少し怖いけど、こうでなければヴィオラ様らしくない。今は少しでも元気を出してほしい。

「そうそう！ 怒っている方がヴィオラ様らしいです！」

「……ったく。だから、嫌いよ、貴方……」

「私は好きですよ、憧れです。いつか、ヴィオラ様みたいなカッコいい女になるのが夢なんですから」

「……私みたい、か……。私はお前が思っているような女じゃない……。弱くて嫉妬深いだけのつまらない女だ……。カーティスがお前を迎え入れると聞いた時は、絞め殺しに行つてやろうかと思ったくらいだ……」

ヴィオラ様が思い止まってくれて、本当によかった……。

「……私などより、お前の方がよっぽどいい女だ。だから、私など捨てて行け……。そして、ホープと共に生きるんだ……」

「だから、馬鹿なこと言わないでください！ もう誰も死なせませんよ！ カーティス様とヴィオラ様と私とホープで、四人で幸せに暮らすんです！ 誰一人欠けず、みんなで幸せに生きるんです！ 犠牲になった人達の分も、私達が幸せに生きるんです！」

そして、私が次に目を覚ました時には、仁がいた。
最初、目の前にいる相手が仁と気付かなかった。最後に会った時と比べて、仁はあまりにも変わっていた。顔の傷は以前からあったが、身長はカーティス様よりも高くなり、顔立ちも精悍になっていた。
無愛想なガキが立派な男の子になっていた。

「……仁？ ああのファイア・ジーニアスに嫁いでいった一族の、仁……？」

「……ああ、そうだ。……久しいな、マイラ」

仁の祖母は、元々私の祖父の姉だった方。純血のウェアウルフの女は、半ば純血の子を産むことが義務化されている。しかし、仁の祖母は一族の掟を破って、とあるイギリス人と結ばれ、一族から追放された。

そのため、仁の一族は日本に移り住み、芝崎家の庇護下にいる。前に仁にあったのは、芝崎の家に訪問した時だった。

「ファイア・ジーニアス……。まさか、あんたがあの青い炎の……」

「？」

ファイア・ジーニアス。直訳すれば、火炎魔人。怪奇現象の父チャールズ・フォートが名付け親であり、端的に言えば発火能力者のことである。仁の家系（といっても、今は彼しかいないが）は念力発火能力に加えて、ウェアウルフの高い戦闘力を継いでいる。そのため、日本での彼の苗字は火から由来した字になっている。

「……あらかじめ言っておくが、俺達のファイア・ジーニアスが生み出せる炎は、物理現象としての炎のみだ。あんな狭い坑道を焼き尽くすことは不可能だ」

「……そっか、ごめん。一族の者を疑うなんて、最低よね……」

「……しよせんは追放された一族だ。疑われても仕方ない」

「うう、ほんと、ごめん……」

仁と話しているうちに思考はクリアになっていき、だんだん仁と話しているこの状況に疑問を覚えた。

何故、仁がここにいるのだろうか。仁単独でイギリスに行く権限はないはず。ならば、芝崎家の者と共に来たというのか。しかし、あの芝崎家が積極的にウェアウルフを保護してくれるとは思えなかった。

白の派閥にも様々な勢力が存在している。芝崎家はどちらからといえば、クルキアレ殲滅部隊に近い性質をもった極右勢力だった。わざわざイギリスにまで来て、ウェアウルフを助けに来るとは考えにくかった。

「……あのさ、どうして仁がここにいるの？」

「……お前が発見された時、すでに凍死寸前だった。一度は一般の病院に運ばれたものの、クルキアレの襲撃を危惧し、日本の組織管轄の病院に移された。それが三日前のことだ。それから、お前は三日間眠り続けていた」

「三日も……？ しかも、凍死寸前だったなんて……。……私が凍死寸前だったのなら、ヴィオラ様は……？ カーティス様や、ホープはどうなったの……？」

嫌な予感が脳裏を過ぎり、悪寒が全身を巡る。

違う、違う、違う！ そんなことある訳がない！ もう誰も死ぬ訳がない！

「……お前が一緒に連れてきたヴィオラ・フェーリアは発見時にすでに亡くなっていた」

「嘘！ そんな訳、ないじゃない……。あの人が死ぬ訳……」

そんなはずがない。ヴィオラ様は殺されたって絶対に死なないタイプだ。

気が強くて高圧的で恐ろしい方だけど、私にウェアウルフの女として模範を見せてくれた最高の女性。誰よりも憧れ、尊敬している素晴らしい御方。あの方があれしきの傷で倒れるはずがなかった。

『……私みたい、か……。私はお前が思っているような女じゃない……。弱くて嫉妬深いだけのつまらない女だ……。』

「……カーティス・フェーリアの遺体は、バラバラにされて城門に打ち捨てられていた」

「嘘！　嘘！　嘘！　どうして、そんな酷い嘘言うの！？」

有り得ない。カーティス様がクルキアレのような卑怯な連中に屈するはずがない。

ウェアウルフ最強の魔人、静かなる暴君。普段は穏やかで、木陰で読書ばかりしているけど、一族を守るためなら神にさえ牙を剥けられる。守る時にこそ本当の力を振るう御方。誰よりも優しく、力の意味と重みを誰よりも理解していた。そんな方が全力で戦い、守れないものなんてないはずだった。

『行くんだ、マイラ！　お前に一族の全てを託す！　お前は生きて生きて生き抜いて、我等ウェアウルフの希望をつなげ！』

「……そして、お前の子は、先日……」

「やめて、言わないで！　お願いだから、止めてよオオオッ！！」

もう何も聞きたくない……。

仁はとても酷い嘘を吐いている。ありもしないことを言って、私を惑わしているのだ。本当はカーティス様もヴィオラ様も助かっているのに、こんな残酷な嘘を吐いて私を騙しているに違いない。

あの二人が死ぬなんて絶対に有り得ない。あんなに強くて立派な方達だけが死んで、私みたいな臆病者だけが生き残るなんてあるはずがなかった。

そうだ、これは全て夢なのだ。出産を前にして不安になった私が見た悪夢。今、目の前にいる仁も夢の中の住民。いくら仁でも、こんなに酷いことを言うはずがない。早くこんな悪い悪夢から目を覚まさないといけない。目を覚ませば、エディンバラの古城に戻るはずだ。

そこにはきつと……、

カーティス様が隣で微笑んでいて、

ヴィオラ様には相変わらずお説教されて、

ウィル伯父様はお父様達とまだ酒盛りをしていて、

ホープは生まれてくるのが待ち遠しいかのように私のお腹を蹴るの

だ。

だから、この痛みが何を意味するのかなんて、考えたくもない。私のお腹にあるはずの重みが消えたように感じるのは、きっと夢のせいなのだ。

「……死産した」

『……ママ、会えなくてごめんね……』

「嫌アアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

私が慎と出会うのは、これより三日後のことであった。

その出会いが私にもう一度生きる希望を与えてくれた。しかし、あの時の出会いが本当に正しいことだったのか、それは今でもわからなかった。一族の血を絶やさぬために生きるようとした。しかし、こんな血塗れになった私に、ウェアウルフの誇りを語る資格があるのだろうか。今の私に、生きる価値はあるのだろうか。

わからない。私が、私だけが生き残って、本当によかったのだろうか……。

「それが、全部よ……」

あの日の絶望は、今も忘れられない……。

慎との出会いが私に生きる希望を与えてくれた。

最初は、仮初の希望でしかなかった。

カーティス様やヴィオラ様が託した一族の血と誇りを守るために、ただ生きようとしていただけ。

しかし、いつしか本気で慎に惹かれている私がいた。

何も知らないけど、その屈託な笑みが好き。

何も知らないけど、その無邪気な笑みが好き。

何も知らないけど、その優しく温かい笑みが好き。

慎への想いが、いつしか本当の希望に変わっていた。

だから、慎と一緒に前に進めると思った。

だけど、あの惨劇の裏に芝崎がいることを知って、奴等から施されている平穏が全て偽りだと知った。あんなにも優しかった人達を殺した連中が、まるで同情したかのように私の側にいることに激しい怒りを覚えた。

そして、私は全てを賭して、復讐を果たすと決めた。

それが大切な人達の想いに反するとわかっているけど、私は死と復讐の運命を選んでしまった。

「……マイラ、その、なんて言っているのか……」

慎は慰めのような言葉を出そうとしたが、結局それは形にならなかった。

慎には悪いが、正直そんな言葉を期待してはいなかった。何も知らない慎に、私の苦しみを全て理解できるはずがない。そんな人に、私の心を救える言葉なんて絶対に紡げない。

「いいよ、気を使わなくても……。慎に私の苦しみをわかれって言うのは無理だし」

「うつ……」

「きつとどんな言葉でも、私の心の傷を塞ぐことなんてできない。本当は、この話だってしたくなかった。忘れることができるなら、忘れてしまいたい。でも、それは絶対にできない。あの日の出来事は、私の中のあらゆるものを奪い取っていった。私はあの日に、一度死んだの。私が私である限り、あの日の出来事は忘れられない。」

慎との出会いは、私に新しい生を与えてくれた。何も知らない貴方の存在が、ただ救いだった。こう言うと、慎は傷付くかもしれないけど、何も知らないでいてくれた貴方だから、私は安らぎを得られたの。だから、貴方からの慰めなんて、期待していない」

「……きつついこと言うなあ。だけど、悔しいけど、俺じゃ何も言ってやれねえ。俺は今の話を聞いて、何を言っているのかかわらなかった……。情けねえな……」

多少複雑な家庭環境だったとはいえ、慎はごく普通に生きてきた。私の味わった苦しみを想像しろというのが無理だろう。

慎は、私の心を癒してくれる薬であると同時に、私の心を扶る劇薬にもなり得る。この絶望だらけの世界で、私の唯一の希望である。しかし、私にとって生きることは地獄のような苦痛を伴うものなのだ。慎はその苦痛を和らげる存在にしか過ぎない。

もし、この生き地獄で私を救えるとしたら、きっと逢瀬美夜だけだろう。

あの子になら、私は殺されたって構わない。あの子の信念に負けるのなら、私は全てのしがらみを忘れて眠ることができるだろう。うん、あの子だけがこの生き地獄を解放してくれる唯一の救いなのだ。

私の苦しみも悲しみも全て知った上で、私を本気で叩きのめす。それができるのは、逢瀬美夜ただ一人。

「さあ、着いたぞ。話なら隠れ家でしろよ」

「そうだな。まだ話を全部聞いていないからな。それも聞かせてもらうぞ」

「……だな。組織については、大神より僕達が話した方がいいしな」

慎と沼影は車を降り、目の前の小屋へと向かっていった。憂いの切り裂き魔は仁を連れ、辺りを警戒しながら車を降り、私もそれに続

いた。

ここは町から少し離れた場所にある森だ。車のライトが消えると、夜の森はまるで墨汁で塗り潰されたかのような深い闇に包まれ、不気味な静寂に満ちた。まるで私の心を象徴しているかのような、漆黒の闇。

そこへ、やはり彼女は訪れた。私と相対すべく。

淡く青い輝きを放つ天使の翼を羽ばたかせ、漆黒の闇を切り裂くように天空より舞い降りる。その神々しい姿はまさに地上に降臨する天使。神の寵愛を一身に受けるべき聖女のような美しさを備え、決して揺るがない強い意志が溢れていた。

「……来るような気がしてた。私が芝崎初音を殺した瞬間から、貴方はきつと私の敵になるって、思ってたから」

「……マイちゃん、どうして初音ちゃんを殺したんですか？」

美夜が私に、刃を向けるのは当然のことだった。

美夜にとって初音は、大切な友人だった。私のようにいがみ合う関係ではなく、本当に仲のよい姉妹のような関係だった。

だからこそ、本当は誰よりも私を止めたいと思っていたはずだ。芝崎家と対立を続けていれば、いずれ初音と戦うことになっていた。そして、本来ならば私は組織を裏切った罪で殺されていたはずだった。

それが、何の因果か、私が初音を殺してしまった。

芝崎初音自身は、何の罪もない少女に過ぎない。ただ、好きな人を奪われまいと必死なだけの少女だ。それを無残に殺した私を、美夜が許すはずがなかった。

あの時、もし相手が芝崎初音でなければ、殺さずに止められたはずだ。

初音を殺したのは、私の心のどこかで彼女を殺したいと思っていたからだ。もし、あの時慎を殺そうとしていたのが初音でなければ、殺さずに止められていたはずだから。

私は、自らの意思で、芝崎初音を殺した、最低の悪魔……。

「……穂村慎、焰仁、両名の解放。狼王の遺産ブラックファングの放棄。及びに無条件降伏を要求します。……もし、要求に応じぬ場合……、実力を以って貴方を排除します!!」

「……上等よ、美夜。貴方も殺してやるわ、あの小娘みたいに……」

悪魔は悪魔らしく、無様に散ってやろう。

血と罪に塗れた私には、もはや死以外の救済は有り得ない。

そして、私に安らかな終焉を与えてくれるのは、逢瀬美夜だけなのだ。

う
う
う

閑話 **C r i m s o n F l a m e**

焰仁。

ウェアウルフの高い運動能力と、ファイア・ジーニアスの発火能力を持つ少年。ただし、どちらの能力もオリジナルと比べると見劣りする。彼の真価はそれぞれの能力の高さではなく、多様な能力を持つ汎用性と彼個人の暗殺者としての素質。全力で戦えば、ブラックアングを持つマイラと同等の戦闘能力を持っていた。

元々、彼の祖父母は共にイギリスに住んでいた。しかし、彼の祖母でありフェーリア家のウェアウルフが、ファイア・ジーニアスとはいえ、ただのホモ・サピエンス種と交わったことが問題となり、国外から追放されたのだ。それ以後、彼の一族は芝崎家の庇護下に置かれている。時に、芝崎家暗部の仕事も担わされている。

これが、マイラの知る限りの情報だった。

しかし、彼女が知らされている情報は、表向きのもののみ。経歴についてはマイラが知っているとおりであるが、実際に焰家（もつとも、現在は仁のみ）が担っている仕事のほとんどは芝崎家暗部のもの。マイラが知らぬところで、仁は芝崎家に仇なす者を暗殺してきた。組織の任務にもそうした後ろ暗い面はあるが、仁はマイラが想像している以上に深い闇の中にいた。実際、仁が初めて人を殺したのは、マイラがプライマリー・スクール（日本での小学校）に通う頃だった。

そして、芝崎家最大の重要機密であり、マイラにとっても一族の仇

である存在。ブルー・ランタンは、本来焰仁のために作られた術式だった。

そもそも、Blue Lantern System（ブルー・ランタン・システム。以降BLSと表記）とは、祖父の代より劣化した発火能力を強化するための術式である。ただし、現在のところBLSは完成していない。二年前にマイラが遭遇したブルー・ランタンは、BLSの試作段階の術式が組み込まれただけの人間。ちなみに、試作術式を埋め込まれた少年は、カーティスとの戦いで相討ちとなり、死亡した。

BLSの仕組みは、人間を強制的に思念統合体と化す術式である。

思念統合体とは、一つの物的な器に二つ以上の精神体（魂、思念、魔力など）が統合もしくは共有した存在の総称。本来存在し得ない存在であるが、それ故に人知を超えた力を持つ場合が多い。ただし、その存在は不安定であり、死や魂の消滅の可能性が高かった。ましてや強制的に思念統合体と化すことは非常にリスクを伴う。

BLSは東洋と西洋の術式を組み合わせた特殊な術式であり、その術の構築には芝崎初音も関わっていた。故に、彼女もまたマイラの仇であったが、BLSの実験体の活動については初音も関知していなかった。当然、ウェアウルフ殲滅に関わったという自覚もなかった。初音は知らぬうちにフェーリア家虐殺に加担し、マイラは知らぬうちに仇をとっていたことになる。皮肉なことに、彼女達の深い因縁は互いに知らぬところでも繋がり、殺し合うことは必然だったのかもしれない。

思念統合体の性質上、BLSは危険な術式である。しかし、仁の立场上、BLSを拒むことはできない。

まるで芝崎の飼犬だな……。

それが、誰にも言えない仁の心の内であった。BLSによって一族を虐殺されたマイラに相談することなどできない。慎に芝崎家の暗部を明かす訳にもいかない。それ以外の知り合いはほぼ芝崎家の関係者で、当然不満を口にできるはずがない。

唯一、仁が全てをぶつけられる人物は、敵である憂いの切り裂き魔だった。皮肉なことであるが、仁が全ての感情を爆発できるのは戦い以外になく、彼と互角に戦えるのは憂いの切り裂き魔以外にいなかった。二人は敵同士であるが、互いに通じるものがあり、正体が気付きつつも私生活では普通に接している。

ただし、それでも仁の心の奥にある不安は消えない。戦いでは、彼の心を癒すことはできない。しかし、そんな彼の心を癒す存在が現れた。初めて出会った時はただの小娘だと思っていたのに、いつしか仁は彼女に惹かれていた。

「……思念統合体、というのはどんな気分なんだ？」

「また聞き辛いことを聞きますねえ」

仁が逢瀬美夜に興味を持ったのは、彼女が『思念統合体』だからだった。

美夜が自分自身の存在について知ったのはつい最近のことらしく、いろいろと悩みがあったのだろうと思い、仁にしては珍しく積極的に彼女に声をかけた。

「……頼む、逢瀬」

「うーん、そこまで言われると困っちゃいます。でも、仕方ないですね。あんまり話したいことじゃないんですけど……」

美夜は自分が思念統合体と知る以前は、ごく普通の少女でしかなかった。だから、彼女が自分の存在に気付いた時のショックは大きかった。いつも笑顔で悩みなどなさそうに見えるが、彼女も辛い経験を重ねてきたのだ。

「……初めは、もちろん取り乱しましたよ。自分の中に、自分以外の存在がいる、そんな恐怖は実際に体験しないとわからないと思います。急に訳もなく、全身を掻き毟りたくなって……、いつそ狂ってしまえば楽だとさえ思いました……」

「……今も、そんな風に思う時はあるのか？」

「ないですよ、開き直っちゃいましたから。私の場合はすでに統合状態で安定しちゃってますし、死んじゃうような心配もないですから。それほど深刻な状態でもないの、心の持ちようで、不安はなくなりましたね」

とてつもなく前向きで楽観的な娘だ。

普通は彼女のように割り切ることはできないだろう。自分の存在が違うものに塗り替えられていく、そんな恐怖は彼女の言うとおりに体験した者にしかわからないだろう。仁もそれを体験し、自分の存在を塗り潰されようとしている身なので、その恐怖を良く知っている。そして、それが簡単に克服できないことも嫌というほどわかった。

「……信じられないな。そう簡単に開き直られるなら、初めから苦しんだりしない」

「焰君は、自分が思念統合体にされないか不安なんですね？ 芝崎家にはそういう動きがあるようですし」

「……お前、どうして……？」

正直、彼女のようなぼんやりした少女が芝崎家の暗部を知っているとは思ってもみなかった。ただの小娘に見えても、美夜は紛うことなく組織の一員であった。

「大丈夫ですよ。保護下にある者を自分達の都合で思念統合体化させるなんて許されません。焰君、貴方は私が守ります。私の目の前で、もう誰も犠牲にさせたりしません」

「……お前みたいな奴から守ると言われると、複雑な気分になる……」

自分の胸元にも届かぬような小娘に、そんなことを言われるとは露にも思わなかった。

しかし、美夜の笑みはとても温かくて、信じてみたくなるような不思議な魅力があった。彼女には人の心を癒す天性の素質がある。ただ、笑顔でいるだけで人を幸せにする、そんな魅力があるのだ。

今まで誰も信じられず、孤独な人生を歩んできた仁は、この時初めて人を信じてみたいと思った。

「あつ、酷いです！　こう見えても本気を出せば、マイちゃんや焰君より強いんですよ」

「……そうらしいが、未だに信じられないな」

「見た目で判断しちゃ駄目ですよ。……私は、化け物なんですから」

そう言って笑う美夜の笑顔には、物言えぬ寂しさがあつた。しかし、彼女は自分の存在に悲観しているようには見えなかった。残酷な真実を見据え、しっかりと受け入れていた。

強い娘だ、と思った。

その時はまだ、そうとしか思わなかった。ただ強くて優しく、初めて信じようと思える人で心を癒す希望をくれた。いつか芝崎家の呪縛から解放してくれるのではないか、と期待すらしてしまった。

「あつ、焰君。仁君って呼んでもいいですか？　ほら、学校だと紛らわしいじゃないですか？　穂村君と同音ですし」

「……………」

仁が無言で頷くと、美夜はまるで花が綻ぶような可憐な笑みを浮かべた。

彼女への期待。それがいつしかどうでもよくなるくらいに、彼女に

惹かれるようになるのだが、それはまだもう少し先のこと。

「それにしても、字が違うと言っても名前が一音違いなんて凄いですよね？」

そういえば、言霊って知ってますか？ 言葉に力があるって考えは、東洋にも西洋にもあるんですよ。もしかしたら、二人は強い運命で結ばれているのかもしれないですね？」

今はただ、彼女の笑顔が眩しかった。そして、その笑みを見ていると、何故か嬉しいと思うだけ。

閑話休題、七章「BLUE & a m p; BLUE」へ……

第七章 BLUE & BLUE（前編）

天使……。

神々しい青の輝きを纏い、闇に包まれた世界の中にあっても光の祝福を一身に受けた天使の如く、逢瀬美夜は俺達の目の前に降臨した。逢瀬の神々しさはあらゆる闇を払い退け、光と正義に満ちた意志を携えていた。

彼女と唯一、対等に向き合っているのはマイラだけだった。

禍々しい赤の血痕を纏い、光に満ち溢れる希望を前にしても闇の怨嗟に囚われている悪魔の如く、大神マイラは逢瀬を見上げていた。マイラの禍々しさはあまねく希望を拒絶し、闇と復讐に満ちた意志を纏っていた。

マイラがここまで感情的になる相手は、初音以外にはいなかった。マイラは自分が認めた相手に対して、感情的になって食って掛かることが多い。だが、今回は少し勝手が違うような気がする。

どこかあの二月の別れを想起させるような悲壮感があった。まるで自ら嫌われようとしているかのような振る舞いに、あの時の既視感を拭えない。

「マイちゃん、無理ですよ……。貴方に、私は殺せません」

「この私がチビッコに負けるとでも？」

あつ、天使の威厳がちょっと揺らいた。

やはり、天使の姿をしても逢瀬は逢瀬らしい。あまりの神々しさに度肝を抜かれたが、あれは間違いなく逢瀬だ。

それにしても、どうしてこう俺の周りには非常識な奴等ばかりなのだろうか？

「ど、どこからそんな自信が出てくるんですか？ 貴方にはもう狼王の遺産は使えないのに！」

狼王の遺産が使えない！？

マイラと逢瀬以外全員が驚愕し、戸惑いを隠せなかった。何故、先ほどまで使えたはずのブラックファングが使えなくなるのだろうか。そして、何故そのことを逢瀬が知っているのだろうか。

「どういふことだよ！？ 何故、狼王の遺産が使えないのさ！？」

沼影は逸早く、ブラックファング使用不可の理由を問い質した。

その問いにマイラは何も反応を見せなかった。しかし、逢瀬が一瞬マイラに目を向けてから、俺達を見据えた。

「……マイちゃんが、初音ちゃんを殺したからですよ……」

初音を、殺したから……？

それと一体何の関係あるのだろうか。俺はその意味が全くわからなかった。しかし、沼影達は大きく息を呑み、何故か納得の表情を浮かべた。

「そうか、狼王の誇りを穢したからか……」

「おい、一人で勝手に納得してんな！ 説明しろ！」
俺は沼影の肩を掴み、怒鳴りつけた。

「……狼王ロボは、誇り高き獣の王者だ。どんな理由があろうとも女子供を殺すことを許さない。ロボは妻を人質に取られて人間に捕まったという逸話もあるくらいだからな。女を殺すような真似は絶対に認めない。」

以前、狼王の遺産を使った者が誇りを穢す行為をして、その魂を食われたという事例は存在する。芝崎初音を殺した今の状態じゃ……」

「……沼影の言うとおり。今の状態でブラックファングを使えば、ほぼ百パーセント、私の魂は魔具に喰われる。だから、使えない」

沼影の話の続きを、マイラが重苦しい口調で繋げた。

初音の呪いとは思えない。末期の瞬間、マイラを呪った彼女の怨念がブラックファングを封じた。初音の呪縛がマイラの最大の武器を奪った。

ブラックファングは強力な武器だ。それを封じられ、これからの戦

いを切り抜けるのは難しいだろう。初音の呪いは確実にマイラの首を絞めていた。

「マイちゃん、貴方は何の罪もない初音ちゃんを殺しました……。あの子はただ大好きな人のために必死だったただけなのに……。どうして、どうして殺したんですか？ 貴方がもう自分の目的のために誰でも殺すような人間に堕ちたというのなら、私は……」

「違う！ マイラは……」

マイラは俺を守るために、初音を殺した。

いや、マイラにそうさせたのは俺が原因だ。初音が狂気に落ちたのも俺が原因だ。もっとも罪深いのは俺なのだ。責められるべきは俺だ。マイラよりも、俺が責められなければならない。

「黙って、慎！」

はつきりとした拒絶の声。

どうして、こいつはいつも自分一人で何もかも背負おうとするんだ。

初音の死は、マイラだけの責任ではない。初音を死に導いたのは他ならぬ俺自身。マイラが初音の殺した罪で罰せられるなら、俺も一緒に罰せられなければならない。

「黙ってられるか！ お前があいつを殺したのは、俺を……」

「慎のことは関係ない！ 慎を守るだけなら、あの子を殺す必要なんてなかったの！」

……何、言ってるんだ、マイラ……？

……あれは意図して初音を殺した訳じゃないんだろう……？

……初音を殺したのは、俺を守るためだったんじゃないのか……？

……だから、俺は仕方ないと思ったのに、違うのかよ……？

……マイラ、冗談は止せよ、なあ……？

「……私は、自分の殺意を止められなかった……。妬みや憎しみに負けて、芝崎初音を殺してしまった……。それは、紛れもない真実……。」

貴方の言うとおりよ、美夜……。私自身、自覚しているわ……。私はもう壊れ始めている……。自分の目的のためなら誰だって殺せる、そんな外道に堕ちた……。

でも、だからといって、私は止まらない！ どれだけの罪を重ねようとも、私は殺し続ける！ 私から全てを奪った連中はもちろん、それを邪魔する全てを、殺す！

美夜、私は貴方を殺す！ 貴方にも譲れないものがあるのなら、私を殺しなさい！ 私は殺されるまで戦い続ける！ 殺されるまで、

絶対に止まらない！」

どうしてだろう、殺してくれ、と懇願しているように聞こえるのは。

あの血塗れの教会でマイラは、俺に殺されることを望んだ。本当は復讐の運命から逃げたいのだと思う。しかし、マイラはあまりに大きな宿命を背負っている。愛する人達の死が今も彼女の心を蝕んでいる。

だから、マイラは殺されることによって、運命から逃れたいのだろう。そして、マイラに安らかな死を与えられるのは、おそらく逢瀬だけだ。

俺はどんなことがあっても、マイラに生きてほしいと望んでいる。それでは結局、マイラを救えないのではないだろうか。

「……マイちゃん」

逢瀬はゆっくりと長刀を抜いた。

鞘から抜き放たれた刃は、月光を反射して淡く煌く。ブラックファングのように圧倒的な邪気ではないが、逢瀬の長刀からは神秘的な魔力を感じる。

しかし、それ以上に逢瀬自身から凄まじい魔力の奔流を感じられた。天使のような神々しさを纏い、彼女はマイラに刀を向けた。

「私は貴方を殺しません」

「美夜……」

「世界には、理不尽な力で全てを解決しようとする人達があります。そして、そうした人達の前では、力がなければ全てを奪われてしまいます。私も、貴方も、奪われたことがある身ですから、わかるはずです。力がなければ、守れないものがあるということ。

私が戦うのは、そうした横暴な人達から大切なものを守るためです。力がなければ救えないものがあるから。何に代えても守りたいものがあるから。だから、力を手にして戦うんです。……だけど、私はそんな人達と同じように、力で全てを解決するような人間にはなるつもりはありません！

私がこの力を振るう理由は、理不尽な力を振るう人達のように力で物事を押し通すためではありません！ 大切な人達を守るために振るうんです！ この銘刀白夜は、大切な者を守るために受け継いだ力なんです！ もう二度と大切な人を奪わせないために！

そして、私にとって貴方は大切な親友です！ 今の貴方を止めるには、力を振るうしかないから、だから、戦うんです！ 絶対に、私は貴方を殺したりしません！」

逢瀬の言葉が、夜の闇に響き渡る。

マイラとは、全く別の覚悟を背負った強い言葉だった。

逢瀬の言葉を聞き、マイラは俯いてしまった。そのため、マイラの表情は見えなかったが、彼女の心に逢瀬の言葉は届いたはずだ。

まっすぐな逢瀬の想いを受け、マイラは何を思っているのだろうか。

「……そう、それが美夜の意志？　力づくで私を止めるくせに、殺してはくれないのね」

「そうです。私は親友にこれ以上の罪を重ねさせないために来たんです。マイちゃんがマイちゃんであるうちに、貴方を止めにきたんです！」

美夜は銘刀白夜を構え、強い意志が込められた瞳でマイラを射抜いた。

一方、マイラは顔を俯けたまま虚ろな笑みを浮かべた。その笑みは次第に薄れ、マイラの顔から表情が消えていった。美夜とは対照的に機械的な冷たい瞳で彼女を睨み付けた。

「……どうして、誰も彼も私をこんな生き地獄に縛り付けるの……？」

これ以上、私を生かしておいても意味はないのよ、美夜！　私はただ存在しているだけで、みんなを不幸にする！　慎も芝崎初音も、私のせいでこんな悪夢みたいな運命に巻き込まれてしまった！

私を殺してよ、美夜！　そして、慎を解放してあげて……。私はもう自分の意志で、彼から離れられないの……。このままじゃ、慎を地獄まで連れて行ってしまう！　慎だけは、何があっても死なせたくない！　慎は、慎は私みたいに闇の中で生きてたらいけないの！　だから、お願い……。そうなる前に私を殺して。そして、慎を助けて……」

「マイちゃん……」

馬鹿野郎……。

お前はまだそんな寝ぼけたことを……。

あの時の俺の言葉は、お前に届かなかったのか……？

「マイラ、お前はまだそんなことを考えていたのかよ！？ 俺は決めたんだよ、地獄までお前と一緒に行くって！ その想いは届かなかったのか！？ なあ、どうして全部一人で背負い込もうとするんだ！ もっと俺を頼れ、マイラ！」

「……もう、充分過ぎるほど頼っているよ、慎……。貴方がいなかったら、私はとくに発狂してたわ。こんな絶望の中で、生きられるのは、全部慎のおかげだよ……。

だから、慎は私の希望だから、生きていてほしいの……。もう、目の前で大切な人が死ぬのを見たくないから！ もう、あんな想いはたくさんなの……」

マイラの瞳から一筋の涙が零れ落ちた。それを皮切りにマイラの涙腺は決壊し、堰を切ったように泣きじゃくった。

今まで必死に堪えてきた涙が零れ落ちていく。耐えてきた時間が長ければ長いほど、涙は止まらなくなる。きつとどんな慰めをかけても、マイラの涙は決して止まらないだろう。

無力だ……。俺は、本当に無力だ……。

俺のせいで泣かせてしまっている。マイラに笑顔でいてほしいのに、何故彼女を泣かしているのだろう。どうして、俺は女を泣かすことしかできないだろう。

「……お願い、美夜。私を、殺して……。酷いお願いだって、わかってるよ……。

でも、私は自分で自分を止められない……。自分の意志で、慎を手離すことなんて、できないの……。慎が、好きだから……。どうしようもないくらいに、慎が好きだから……。このままじゃ、彼が死ぬってわかっていても、離れられないのよオオオッ!!」

「マイちゃん……。それでも、私は貴方を殺せません……。生きて、慎君と幸せになってほしいんです……。私には叶わなかった奇跡を、見せてほしいんです……」

「貴方の希望まで、私に押し付けしないで！ 私は、貴方や慎に愛されるよう人じゃないの……。貴方達の希望まで打ち砕く悪魔なのよ!!」

マイラ……、お前、そこまで追い詰められていたのか……。

いまやマイラの心は発狂寸前だ。先ほどのマイラの言葉を信じるなら、相当前から苦しんでいたのだろう。俺が初めて出会った時、マイラは自ら命を絶とうとしていた。

同じだ。結局、俺はマイラの苦しみをわかっていなかった。何を知っても、俺はマイラの心を理解できなかった。救いの手を差し伸べることができなかった。

「マイラ……」

俺は無意識のうちにマイラに駆け寄っていった。

マイラの苦しみを癒したくて、ただそれだけで走り出していた。

マイラのためなら、俺は何でもする。たとえば、地獄であろうと何だろうと、マイラがいればそれだけでいい。それはもう、何があったって揺るがない決意だ。

しかし、俺の歩みは彼女自身によって止められた。

「来ないで、慎！ 来たら、死ぬわよ……」

「マイラ……。お前、それは……」

マイラの手には、銀の宝珠が埋め込まれた指輪、狼王の遺産が握られていた。

ブラックファングは使えないはずだ。初音を殺したことにより、狼王の遺産に封じられていた魔獣が力を増し、今使ったとしてもマイラ自身の魂が食われるだけだ。

……マイラの魂が食われる？

まさか、あの馬鹿……、ろくでもないことしでかす気じゃないだろうな！？

「マイちゃん、駄目です！ それを使っちゃ……」

「もう、遅いわ……。美夜、私が真正正銘の化け物になってしまえば、もう殺すしかなくなるわよね……？ そうしなければ、貴方は大切な者を守れないんだから……」

「駄目です、マイちゃん！！」

美夜の青い翼が羽ばたいた。

まるで一陣の風のように凄まじい速さで大地を駆けていく美夜。それは俺が今まで見てきた中で誰よりも早く、美しい飛翔だった。

しかし、それでも間に合わなかった。あと一步届かなかった。

「止めろ、マイラアアアアッ!!」

「……我が誇り、汝の魂と共にッ!!」

銀の閃光が闇に包まれた森を照らしていく。しかし、その光から一切の温もりは感じられず、まるで銀の闇が広がっていくようだった。銀色の闇の中で、マイラのシルエットだけははっきりと映っていた。彼女だけがこの孤独な物悲しい闇の世界で生きること認められているようだった。俺がいくら手を伸ばそうとも、その闇には届かなかった。

まるでマイラに拒絶されているようだった。

闇が晴れたその先に、マイラ、……いや、マイラの魂を喰らった怪物が立っていた。銀色に染まった髪をなびかせ、額にはブラックフアングに刻まれているものと同じ紋章が煌かせ、マイラの魂を喰らった獣は俺達を睨んでいた。それは人とは思えないほど邪悪な瞳で、戦慄さえ覚えるほどだった。

『……美しい月だ。そうは思わないか、下賤なる人間どもよ……』

そいつはマイラと同じ声色で、しかし、邪悪さを孕ませた声で俺達に語りかけてきた。瞳は依然としたまま俺達を睨んだままだ。

ただそこに存在しているだけで、俺達は圧倒されていた。目の前にいる怪物に。

俺は本能的に悟った。今、俺達にいるそいつはマイラと同じ姿をしているが、全く別の存在。底知れぬ憎悪と殺意を撒き散らす獣だった。

こんな怪物がマイラであるはずがない。確かにマイラは血と罪に塗れた人殺しだが、それでもこの怪物とは全く違う。俺が惚れた女と同じ姿をしていても、そいつはマイラとは異質な存在だった。

「……てめえは、誰だ？ ……マイラは、マイラはどうなったよ！？」

『マイラ？ ああ、我の新しい肉体となったウェアウルフの女か？』

マイラの顔をした悪魔は俺を嘲笑う。奴の邪悪さを感じれば感じるほど、マイラと同じ顔をしていることが許せない。

「ふざけんな！ そいつは俺の女だ！ 返しやが……」

「駄目です、慎君！ 殺されちゃいますよ！」

マイラの姿をしたそいつに向かって飛び出した俺を、逢瀬が身を挺して止めた。逢瀬は小柄ながらも全身の力を上手く使い、体格で明らかに勝っている俺の勢いを完全に殺した。

「止めるな、逢瀬！ マイラが、マイラが！！」

「わかってます！ でも、慎君が一人で突っ込んだところで何ができるんですか！？」

「うるせえ！ 何ができるかなんて知るか！ 俺はあいつを助ける！ たとえ、殺されようと、絶対にだ！」

俺はマイラのためなら、命だって惜しくない。マイラを助けられるのなら、殺されても構わない。

「だから、駄目なんです！ 慎君が死んだら、マイちゃんはもう死んでますか！？ あの怪物を倒しても慎君がいなきゃ、マイちゃんの心は一生救えなくなるんです！ マイちゃんの心を救えるのはこの世で唯一人、慎君だけなんです！ マイちゃんも、慎君も生きてなきゃ駄目なんです！

もう私の目の前では、誰も死なせません！ あの怪物は、私が倒します！！」

「逢瀬……」

……どうして俺の周りにいる女ってのは、こんなにも凄惨な奴等ばかりなんだろうな……。

逢瀬は強い意志のこもった瞳でマイラの魂を喰らった獣を睨み付ける。こんなにも小さな少女の背中に頼もしさを感じてしまう。そう感じるのはきっと、逢瀬の何よりも強い信念を知ったからだろう。

マイラと同じ顔のそいつは、不愉快そうに逢瀬を見下ろした。

『……ほお、面白いことを言うな、小娘。我を倒すだと？ 何の冗談だ？ 人間の分際で……』

「人間？ いいえ、私は貴方と同じ化け物ですよ？ だからこそ、貴方に勝つことができますんです！」

銘刀白夜を正眼に構え、少し悲しげな表情で自分を化け物と呼ぶ逢瀬。

そういえば、クラスメイトということ以外、逢瀬のことを何も知らない。マイラは彼女が来訪に驚くどころか、予想どおりといった様子だった。彼女もきっと俺の知らない世界の存在なのだろう。

『我と同じ？ 侮蔑するな、小娘が。貴様には人間のニオイが染み付いている。化け物というには、生温い。貴様は人間でも、化け物でもない半端者でしかない。』

中途半端な下等生物の分際で、我に勝つ気でいるだと？ 虫唾が走る。その傲慢、死で償うがいい！』

ブラックファングが逢瀬の首に振り下ろされる。マイラの魂を喰ら

った魔獣は、逢瀬にまでその毒牙を伸ばそうとしていた。

しかし、逢瀬は瞬時に抜刀し、ブラックファンクを防いだ。あれだけの長刀を瞬時に抜き放つ逢瀬の技は、初音にも引けを取っていない。

「……あいにくですが、私は簡単には殺せませんよ。私を殺したいのなら貴方も本気で来なさい、狼王!!」

『小娘が、調子に乗るなアアッ!!』

狼王ロボは憤怒の雄叫びを上げながら、強引に刀ごと逢瀬を捻じ伏せようとした。しかし、逢瀬は狼王ロボとの力比べには挑まず、青い翼を広げてすぐさま上空へと飛び立った。標的を失ったブラックファンクは勢いのまま地面に突き刺さった。その威力は土を隆起させるほど衝撃だった。

恐ろしいまでの威力だ。あれが人間の出せる力とは思えない。狼王ロボがマイラの体に乗っ取っているからこそ出せる威力なのだろう。

逢瀬は夜空を切り裂く青の軌跡を描きながら、狼王ロボの頭上に刀を振り下ろした。当然、狼王ロボはブラックファンクでこれを防いだ。しかし、逢瀬の攻撃はまだ終わっていないかった。

青き翼が大きく羽ばたき、羽根が無数の矢のように狼王ロボに降り注いだ。完全に予想外の攻撃だったらしく、狼王ロボは防御姿勢を取る間もなく、全身に青い羽根を喰らった。

『ぐう……。この程度の攻撃に、これほどのダメージを受けるとは……。なんと人間の体は脆弱なのだ！ おのれ、我の真なる体さえあれば……』

「真なる体があっても、私は負けませんよ！」

『舐めるな、驕るな、分際をわきまえろ！ 我は誇り高き狼の王ぞ！ 貴様のような半端者如きに遅れを取るものか！』

狼王ロボに突き刺さっていた青き羽根が蒸気を上げながら消えていく。そして、たった今付いたばかりの傷があっという間に癒えていった。

何だよ、あいつは……。？ 不死身なのか……。？

今の攻撃は狼王ロボの誇りを大きく傷付けたらしく、獣らしい憤怒の形相で逢瀬を睨み付けた。そのプレッシャーは俺でさえ足が竦むほどだった。しかし、逢瀬は一切怯むことなく、再び青き羽根を飛ばした。

しかし、今度は狼王ロボまで届かなかった。

狼王ロボが鼓膜まで破るような咆哮を上げると、青き羽根が瞬く間に蒸発してしまったのだ。

『無駄だ！ 我に人間の英知である魔術は通じん！』

「ええ、今度は攻撃のつもりはありませんから」

青き羽根の蒸気を目晦ましにし、逢瀬は一瞬で狼王ロボの背後を取った。常人離れのスピードに加えて、目晦ましまでされ、魔獣は何の反応もできなかった。

逢瀬は躊躇なく、狼王ロボの背中を斬り付けた。狼王ロボの背中、マイラの体から鮮血が噴き出し、倒れた。あれは相当な深手のはずだ。

「……って、逢瀬！？ マイラまで殺すなよ！？」

「大丈夫ですよ！ 今のマイちゃんは殺しても死にませんから！」

何を言っているんだ、と叫ぼうとした瞬間に気付いた。

狼王ロボの背中から薄い蒸気が溢れ出ていた。蒸気、というには妙に嫌な気配を感じる。おそらくあれが瘴気というものなのだろう。瘴気は斬り付けられた傷口周辺に集中し、しばらくすると傷口ごと消えてしまった。

あれほど出血するのなら相当の深手だったはずなのに、狼王ロボは何事もなかったかのように立ち上がった。しかし、顔には屈辱にまみれた憤怒の表情が浮かんでいた。

『小娘がア……』

「ほら、言ったでしょう？ 思念統合体となったマイちゃんは、狼

王ロボの力によって簡単に死ねない体になっています」

……思念統合体って何だ？ さっきのマイラの話でも思ったが。まあ、いいか。聞ける状況ではないし、聞きたいことは後でまとめて聞けばいい。マイラが助かった後で。

とにかく、マイラは狼王ロボに乗っ取られているおかげで治癒力が上がったらしい。まるでRPGゲームのキャラクターみたいだ。しかし、今ここで起こっていることは全て現実だ。

「だけど、すぐに傷が再生しちゃうんじゃない、傷付けても意味ないんじゃないのか？」

「いいえ、そんなことはないです。体の再生にはそれ相応の霊力、魔力が必要です。本来の狼王が相手ならともかく、今は復活したばかりの状態です。まずはこうしてダメージを与え続けて、狼王の力を削ぎます。その上で、再封印しちゃいます。」

慎君は離れてください。もう奇襲染みた攻撃は通じないでしょう。正直、これからが厳しいんです。巻き添えにならないよう、早く逃げてください」

女一人を置いて逃げるのはあまりに格好悪い。しかし、今はそんなことを言っている場合ではないだろう。俺では足手纏いにしかならない。

頼むぞ、逢瀬……。マイラを、助けてくれ……。

う
う
へ

第七章 BLUE & BLUE（後編）

俺はこの場を逢瀬に任せ、沼影の車へと避難した。車にはすでに人影はなかったが、代わりに小屋の明かりが灯っていた。どうやら沼影達は小屋に移動したらしい。俺は急いで小屋の中に入った。

「仁、先程ノ言葉、違エルナヨ」

「……わかっている、約束は守ろう。逢瀬を死なせる訳にはいかないし、お前等もここでマイラと狼王の遺産を失う訳にはいかないだろう」

小屋に入ると、仁が解放されていて、憂いの切り裂き魔と話していた。

断片的な情報だが、おそらく仁はマイラを助けるのに協力してくれるのだろう。マイラとブラックファングの奪取は諦めざるを得ないようだが、ここはマイラと逢瀬の命を優先してくれたのだろう。

「仁……、お前も、戦ってくれるのか……？」

「……ああ。だが、戦うのはお前もだ」

「俺も？」

仁の言葉に、俺は怪訝な顔を浮かべてしまった。

戦えるものなら、一緒に戦いたい。

マイラを救いたい気持ちは誰にも負けない。

だが、俺には何の力もない。大切な人が苦しんでいるのに、俺にはそれを救う力がない。一緒に戦っても、足手纏いにしかならないだろう。

しかし、仁は俺にも一緒に戦えと言う。合理主義の仁が、足手纏いとなる俺に戦いに参加しろ、というのは明らかにおかしかった。

「……慎、単刀直入に言う。お前はマイラのために死ねるか？」

俺はまた怪訝な顔を浮かべ、仁の顔をまじまじと見た。

仁が単刀直入に言うのはいつものことだ。というより、仁が喋る時はほとんど余計な言葉はつかない。

それにしても、いきなり何を言い出すのだろうか、こいつは。マイラのために死ぬことは構わないが、それをこんな状況で聞いてどうするとかのか。

「ああ、当たり前だ。だけど、んなこと聞いてどうすんだ？ 特攻でもしろってのか？」

「……まあ、それに近い」

こいつの言葉は単純明快で実にわかりやすい。

とりあえず一発殴ってみたが、次の瞬間殴り返された。

「今のあいつに突っ込んだって無駄死にだろうが！ それに、俺が死んじまったらマイラはどうなんだ？ 発狂するぞ！」

そもそも、自暴自棄になってブラックファングに宿る怪物を解放したのだ。

マイラは精神的に打たれ弱い。何かを支えにしていなければ、生きていけない。感受性が高いためか、人よりも喜びや楽しみを感じる分、苦しみや悲しみも多く感じてしまう。おまけに寂しがりで、誰かが一緒にいてやらないとすぐに泣いてしまう。

マイラを助けられるのなら命など惜しくはないが、俺が死んだ後にマイラが苦しんでは意味がない。俺はマイラの心まで助けたいのだ。

「……今の状況では発狂して死んだ方がマシだろう。昇天できない魂は消滅すら出来ずに永遠に苦しむ」

「余計な話はいいから、さっさと用件を言え。回りくどいのは、お前らしくもないぞ」

「……わかっている。だが、あまり愉快なことではない。いずれ知ることになるだろうが、俺の口から言いたくはなかった」

本当に珍しく回りくどい。仁は普段はあまり話したがらないが、言いたいことは何でも率直に言う。こうして言い淀むのは本当に珍しい。

「……まず、思念統合体について少し知ってもらわないといけない」

「あゝ、何度か聞いた単語だが、一体どういうものなんだよ？ その、思念統合体ってのは？」

「……言葉の意味どおりの存在だ。複数の思念が統合、統一した存

在。美夜や今のマイラ、ブルー・ランタンといった存在だ。それと、今更説明するまでもないと思うが、思念統合体の多くは異能力を持っている」

確かに文字どおりだな。二つ以上の思念が統合した存在。そして、異能力を持つ存在。

それに、逢瀬も思念統合体だったのか。自分を化け物扱いしていたが、そういう意味だったんだな。

「……芝崎家には人為的に思念統合体を創り出す計画があった。それが、強制思念統合術式 ブルー Blue ランタン Lantern システム System、通称BLSだ」

「ブルー Blue ランタン Lantern システム Systemって、まさか……!？」

背筋に嫌な汗が流れる。胸糞が一気に悪くなった。

「……そのまさかだ。マイラの一族を殺したのは、紛れもなく芝崎家だ。マイラは、ヴァチカン主導と思っているようだが、実際は逆だ。無論、ヴァチカンも深く関わっているのは間違いないが、実際にフェーリア家を滅ぼそうとしたのは、芝崎家だ」

「何故だ!？ 何のために、そんなことを!？」

俺は仁の胸倉を掴み上げ、絞め殺さんばかりの勢いで詰め寄った。

「……俺はその理由については知らない。だが、今はそんなことはどうでもいい。まずは、お前のことだ」

「俺のことが何なんだよ!? それと、芝崎家がやったことと何の関係が……」

「……今、フェーリア家を滅ぼしたBLSは、お前の中にある」

一瞬、時間が止まったような気がした。

今、こいつ、何を言った？

俺の中に、マイラの一族を滅ぼした元凶がいるって、そう言ったのか？

「……どう、いうこと、だ？」

俺はあまりの衝撃に茫然自失となり、上手く言葉を出せなかった。仁の胸倉を掴んでいた手も力なくずり落ちた。

「……言ったとおりだ。芝崎初音が、万一お前が裏切った場合の保険としてお前の中に術式を埋め込んだ。お前を罰するために。お前を従わせるために。そして、お前とマイラが殺し合うように仕向けるために……」

……初音が、俺に、そんなことを……？

初めは信じられなかった。しかし、初音の断末魔の様子が脳裏を過ぎり、その可能性が絶対には言い切れなくなった。初音は嫉妬に狂っていた。俺の心からマイラを引き離すために、わざわざ教会に呼び出して公開処刑を見せつけようとしていたくらいだ。それくらいに狂っていた初音なら、俺にBLSを埋め込むくらいしても不思議ではないだろう。最期の瞬間は俺を殺そうとしていたくらいだったのだから。

裏切られた、という気持ちがあまりに大きい。しかし、俺は確かに初音に酷いことをしてしまった。これくらいの報いを受けるのは当然かもしれない。

「……BLSは術式を施した者、つまり、芝崎初音にしか解除不能だ。そして、いまだに不完全な術式は、いずれ宿主を殺す」

俺は言葉を失い、ただ呆然と仁を見つめていた。

この期に及んで、仁が冗談を言うはずがない。ならば、BLSは今俺の中に埋め込まれているのだろう。そして、それはいつしか俺を殺すという。

初音を裏切ってしまった俺への罰のようだ。術者にしか解除できないというのなら、BLSは確実に俺を殺す。初音の手によって埋め込まれた術式が、必ず俺を殺す。

それだけのことをしてしまった罪の自覚はある。だが、確実な死の前にして絶望が押し寄せてきた。俺は項垂れ、改めて初音に謝罪の祈りを捧げた。

「はは……、傑作だな。心のどこかで、俺はこの血塗れの運命に無関係だと思っていた。だけど、違ったんだな？　俺も、殺されるべき罪人……。死は、確実に訪れる……」

「……ああ、そうだ。だが、代わりにお前は力を得た」

「力……？」

俺は顔を上げ、仁の顔を見た。そこには悲痛な、痛みに耐えているような苦しそうな表情だった。

「……そう、力だ。思念統合体が悲しき運命を背負うことと引き換えに得られる力だ。BLS、今お前の中にあるそれは、マイラを救うための刃となれる。ただし、その力を得れば、お前は更に命を縮めることになるだろうがな」

「マイラを、救う力……」

それは俺が願っても得られなかったもの。

こんな絶望の中で、俺は初めて希望を見つけられた。

ああ、上等じゃないか……。

命と引き換えにマイラを助けられる力が得られるのなら、俺は迷わずこの命を差し出せる。

「マイラのために死ねるかってのは、そういう意味か……」

「そうだ。もう一度聞くぞ。お前はマイラのためにその命を捨てることができるか？」

「ああ、当然だ!!」

逢瀬は狼王ロボを相手に善戦を繰り広げているが、戦況は明らかに劣勢だった。

狼王ロボが咆哮を上げるたびに逢瀬の翼は揺らいでいた。その隙を狙って狼王ロボは果敢に攻め込み、逢瀬を追い込んでいた。神速のスピードを持つ逢瀬でなければ、とつくに狼王ロボの一撃が食らっていただろう。

逢瀬はあの水によって形成された青き翼を起点にして戦っている。あの翼がなければ逢瀬は戦えないということは素人目でもわかった。

「……くそっ、美夜……」

「今は耐えろよ、ホムラ二号。僕達全員が突っ込んだところで殺さ

れるだけだ。奴が逢瀬に止めを刺す寸前、そこを攻める。勝機があるとしたら、そこしかない」

「ソシテ、奴ニ唯一有効ナ攻撃ヲ与エラレルノハ、穂村慎、才前ダケダ」

「おい、ホムラ一号？　どうだ、BLSの能力は制御できるようになったか？」

誰が一号だ。

俺は手に持っていたライターを思い切り沼影の顔面に投げ付けた。阿保が一人悶絶してうるさくなっただが、誰も気にしなかった。

跳ね返ったライターを拾い、火を点ける。ゆらゆらと揺れる赤き炎は、やがて青に染まり、巨大な業火と化した。ライター程度の火でも、十分な殺傷能力がある炎となる。何とも恐ろしい能力だ、BLSとは。

「余裕だぜ。コツさえ掴めば、ほとんど意のままに炎を操れる」

首から提げられた銀のロザリオが淡い光を放っていた。

この銀のロザリオは、BLSを制御するための呪術道具。本来BLSを受け継ぐはずだった仁のために作られた物だったが、今は俺がBLSを制御するために譲り受けた。余談だが、ロザリオが十字架の方ではなく数珠の方だったということを、今日初めて知った。

BLSの行使には、ロザリオと炎が必要だった。俺は仁のように自分の力で炎を生み出す力ないので、このようにライターなどの炎を起爆剤代わりになっていた。

「……一応言っておくが、ロザリオは首から提げる物ではないぞ」
「いいんだよ。腕周りがあると邪魔だし」

そもそも俺はクリスチャンでないのだから、ロザリオを使って祈る必要もない。

「穂村慎、護身用ニ持ッテオケ」

「これは……」

憂いの切り裂き魔が手渡してきたそれは、二挺の銃だった。しかも、随分とレトロな銃だ。俺の記憶が確かなら、両方とも五十年以上は昔のものだ。

一つは、一九三八年にドイツ陸軍で制式採用されたカール・ワルサー社の名銃、ワルサーP38。口径は9mm、装弾数は八十一発。使用弾薬は、サブマシンガンなどに用いられる9mm×19パラグラム弾。当時としては画期的なショートリコイル式の撃鉄システムに、画期的なダブルアクション機構を組み合わせた近代拳銃の基盤となった自動拳銃。

一つは、44マグナム弾を発砲可能なもつとも古い回転式拳銃、S&W M629（正式には、スミス・アンド・ウェッソン・モデル29。数字の先頭に6が入るのは、ステンレスバージョンだから）。口径は44口径、装弾数は六発。自動車のエンジンを撃ち抜ける、という誇張的な風聞が有名だが、もちろん拳銃でそんな真似はできない。それはS&W M629に限らず、最強拳銃S&W M500でも不可能だ。ただし、それでも本来熊のような大型獣の狩猟を目的とした銃弾、44マグナム弾の威力は強大だ。

「こ、これって本物か？　つか、俺がもらっていいのか？」

「目をキラキラさせてんなよ、一号。素人が面白半分で使えるようなものじゃねえぞ」

いつの間にか復活した沼影が余計な口を挟む。

「うっせえ、お前に試し撃ちすんぞ！　あと、一号言うな」

「ば、馬鹿、止めろ！　冗談に聞こえねえぞ！」

沼影は顔を青くして、机の下に隠れてしまった。何とも情けない姿だが、どうにも沼影には情けない格好の方がよく似合う。

ちっ、隠れやがって。試し撃ちしたかったのに……。

どちらも古いが、性能と知名度共に抜群の名銃だ。それにしても、よく日本でこんなものがあったな？　まあ、トカレフなんざを渡されるより、百倍マシだ。

「デキレバ、使ウヨウナ事態ニナラナケレバイイノダガ……」

「まあ、そりゃな……」

古き名銃に少しはしゃいでしまったが、マイラに銃口を向けるなんてことはしたくない。いくら狼王ロボに乗っ取られたからとはいえ、傷がすぐに治ってしまうとはいえ、マイラを撃ちたくはない。

それに、できることなら青き炎だって、あいつに向けたくはない。この炎は、あいつの大切なものをたくさん奪った呪われたものなのだから。

「……慎、今は割り切れ。戦わなければ、取り戻せないんだ」

「わかってるさ。じゃなきゃ、命削った意味ないだろ？」

発火能力を持つ多くの者は、自らの炎によって焼き殺される。俗に言う人体発火現象のいくつかは、自らの能力に殺された結果らしい。強過ぎる力は意志とは無関係に人を傷付けてしまう、と仁は自嘲気味に言っていた。

BLSの解放により、俺は自らの意志で青き炎を使えるようになった。しかし、BLS活性化により俺が焼き殺される時期は確実に早まった。

たとえば、自らの命が削られようとも、俺は……。

「……んっ？　おい、そろそろ本気でヤバそうだぞ、あのチビッコ！」

青き翼を羽ばたかせ、高速で地上を駆けて行く逢瀬。その速さはまさに神速の域に達している。人間には決して到達できない速さだ。

しかし、狼王ロボは易々と逢瀬を追っている。それも、まるで可愛い子犬と戯れているかのように薄ら笑みを浮かべながら。

逢瀬は明らかに狼王ロボに押されていた。

彼女本来の戦闘スタイルは、水の術を行使しての遠距離戦。青き翼も、水の術によって具現化されたものようだ。移動時はジェットのように水を噴射し、攻撃時には硬化させて羽根状にして飛ばす。相手に接近された時に限って刀を用いるが、剣術はまだ一流の域には達していない。

一方、狼王ロボは接近戦を主体とした戦闘スタイル。その強さは、接近戦を得意としていたマイラさえも軽く凌ぐほどだ。もし、相性の悪さがなければ、狼王ロボの方が圧倒的に不利だったろう。しかし、狼王ロボには逢瀬の術を無効にしてしまう力がある。一定の距離に近付かれると、逢瀬の水は形を維持できなくなる。逢瀬の機動力の要は、水で形成された青き翼だ。青き翼がなければ、逢瀬は確実に瞬殺される。

『随分頑張ったようだが、もう終わりだな』

狼王ロボがついに逢瀬の背後を取った。

逢瀬の表情が凍り付いた。背後から貫かれたら一巻の終わりだ。逢瀬は慌てて翼を翻し、狼王ロボに向き合った。そのまま体を回転させた勢いを乗せ、強烈な斬撃を放った。

しかし、接近戦では狼王ロボに敵わない。逢瀬の刀は簡単に受け止められ、遠くに弾かれた。更に、狼王ロボは逢瀬を蹴り飛ばし、倒

れた彼女に覆い被さった。

「きゃあああッ!？」

『命までは奪わん。だが、二度と抵抗が出来ないように我の恐ろしさをその身に刻んでやろう』

狼王ロボはブラックファングを振り下ろした。凶刃が容赦なく青き翼を抉る。抉られた場所から青き翼は蒸発し、逢瀬は片翼を失ってしまった。

肉体的には一切ダメージはないが、機動力を奪われて逃げられなくなった。精神的にダメージが大きい。

『さあ、絶望し、屈服するがいい!! 狼王に牙を剥いたことを……』

「……天衣無縫、壺式ッ!!」

片翼の翼が、一瞬にして天女がまとう羽衣の形へと変わった。そして、その薄絹のように長い羽衣が刃のように、狼王ロボの腹に突き刺さった。

窮鼠、猫を噛む。思わぬ抵抗に一瞬だけ驚いたようだったが、狼王ロボはすぐに薄ら笑いを浮かべた。傷は瞬時に治り、咆哮一つで魔術を無効化することが出来る。この程度の抵抗に意味はなかった。猫を噛んだ鼠は、結局最後は食われてしまう。

『この程度の抵抗など……、ぐあああッ!?!』

「これには私の全霊力を注いでいます！ 簡単に消し去れると思わないでください！」

形勢逆転。

逢瀬の性格からしてこんな逆転劇を狙っていたとは思えないが、最後まで諦めずに抗った逢瀬の反撃が思った以上に功を奏したのだろう。

「このまま……」

『舐めるな、ガキがアアアッ!!』

狼王ロボは怒りの雄叫びを上げながら、天衣無縫の羽衣を掴んだ。爆ぜるような電撃が迸り、羽衣は狼王ロボを拒絶した。しかし、それでも狼王ロボは退かなかった。獣の王としての意地とプライドが、退くことを許さなかったのだろう。

逢瀬も額に脂汗を浮かべて必死で抵抗しているが、状況は明らかに不利だった。逢瀬の力が相当に優れているは間違いないが、狼王ロボの力はそれを上回っている。

『鬱陶しい!!』

ブラックファンクが羽衣を引き千切った。

逢瀬は完全に武器を失った。もう一切の抵抗ができない。狼王ロボは勝ち誇った笑みを浮かべ、容赦なく逢瀬の顔面目掛けて叩き込もうとした。逢瀬の絶体絶命の危機だ。

しかし、この瞬間こそ俺達が動く時だった。
つまり、奴の終わりの時だ。

「後ロガガラ空キダゾ、狼王？」

『……ッ！？』

狼王ロボがその場を飛び去ったのと同時に、大バサミが空を切った。背後から、しかも攻撃寸前であったのにも拘らず、憂いの切り裂き魔の攻撃は避けられてしまった。しかし、避けられることはまだ想定内。

『……何者だ、貴様は？』

狼王ロボは宙を舞いながら、新たな敵を確認した。

悲涙の仮面を被った謎の暗殺者、憂いの切り裂き魔。この暗殺者について俺は何も知らないが、それでも恐ろしい実力者であることは理解できる。そして、この暗殺者もまた人には語れぬ深い業を背負わされているのだろう。

もつとも、憂いの切り裂き魔が背負う深い業を知るのはまだ先のこと。今の俺には知る由もなかった。

「畜生ニ答エル義理ハナイ。貴様ハ黙ッテ消エルガイイ」

『何者かは知らんが、分際をわきまえろ！』

着地。その瞬間を狙い、沼影が飛び出した。

「おら、死ね死ね、馬鹿犬が！」

沼影は二挺のAK-47を構え、狙いも定めず乱射した。

AK-47は一九四七年にソビエト軍に制式採用されたアサルトライフル。性能よりも信頼性の高い銃。更に、安価であるために世界中の紛争地域で使われ、テロリストなども多く愛用している。恐らく、史上でもっとも人を殺している兵器であろう。

『ぐう……、小賢しい真似を……』

銃弾が命中しているものも、狼王ロボは致命傷を避けるようにブラックファングで急所を守っていた。致命傷にはなっていないが、全身を撃たれて狼王ロボは動きが取れなくなった。

完全に計算どおりだ。憂いの切り裂き魔の攻撃により、逢瀬から狼王ロボを引き離す。沼影の乱射するAKが狼王ロボの動きを封じる。そして、次は……。

「逢瀬、早くそこから逃げろ！」

「慎君？ ……ッ！？ まさか、BLSを発動させて……」

「……美夜、いいから退くんだ！」

「は、はい！ 天衣無縫、式式ッ！！」

逢瀬は青い翼を具現化させ、その場から瞬時に飛び立った。先ほどのものと比べると、あの翼は随分小さかった。

天衣無縫、それが逢瀬の術の名。水を霊力によって翼や羽衣の形状

に変化させ、自由自在に操作する術。

「行くぞ、仁！」

「……応！」

俺と仁が同時に、ガソリン入りのポリタンクを狼王ロボに向けて投げ飛ばす。ポリタンクはAKの銃弾によって穴を開けられ、ガソリンを周囲に撒き散らした。

これで不足な火力は補える。狼王ロボの力が足りずに、マイラが死なないことを祈りたい。逆に俺達の力が足りなかった場合は……。

「燃え尽きろ、化け物!!」

仁の両手から赤き炎が巻き起こった。

ああ、こいつは本当に発火能力者だったんだな……。

初めて仁の炎を見て、俺はそんな感想を思った。今更ながら、そんなことを思ってしまうのは随分と間抜けだった。

仁が放った炎がガソリンに引火し、闇夜を照らす紅蓮の渦が巻き起こった。灼熱の業火が狼王ロボを包み込む。銃弾で足止めされていた狼王ロボは逃げられず、炎に吞まれていった。

「よし！ 突っ込め、ホムラ一号！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！
」

BLS能力者となった俺に、普通の炎は一切通じない。全ての炎を、青き炎へと変化させることができるからだ。いや、正確には俺の魂に埋め込まれたBLSが、強制的に炎の性質変化を行ってしまうからだ。

逢瀬が自分自身を、化け物と言った理由がわかったような気がした。わかるんだ、魂が歪んでいく感覚が。能力を行使していく度に魂が軋み、いびつに変化していく。自分が自分ではない何かに歪んでいく。

俺達、思念統合体というのは、魂の内側から化け物へと堕ちていく。

内側から喰われていく感覚ほど、恐ろしいものはない。自分が別の何かに塗り潰されていく。次の瞬間には、自分が違うものになってしまうのではないか。そんな恐怖に苛まれる。自分自身の意志さえも、信じられなくなってしまう。

だが、それでも俺は戦わなければならない。マイラを取り戻すために。

『人間がアアア、この程度で我を殺せると思うたかアアアッ!!』

「うるせえ!! 俺の女を返しやがれ、畜生がアアアアアッ!!」

BLSが発動し、紅蓮の炎が鮮やかな群青に染まっていく。これは煉獄の業火、マイラが犯してしまった大罪を焼き尽くす贖罪

の火。マイラを救うため、この命を燃やして彼女の罪を焼き払おう。彼女と共に生きるため、俺は自らの命を業火に代えて戦わなければならない。

マイラ、お前は俺を巻き込まないために、自分自身さえをも殺そうとした。だけど、俺だってお前を救うためなら、自分の命だって惜しくない。マイラの想いがある限り、俺はいくらでも戦える。命懸けの愛には、命懸けで答えてみせる。

そして、世界は果てしない青に堕ちていった。

つづく

閑話 唯一の信仰

その男の隣にいれば世界を手に入れる瞬間を見られると、本気で信じていた。

ただ、隣にいられるだけでよかった。その男が世界を手にした瞬間、その男の隣にいられば。誰よりも高い頂に立つその男の姿を見られるだけで充分だった。

幼き頃からその男は神童と呼ばれ、齡が十を数える頃には母国語であるフランス語を含めて一二ヶ国語を自在に扱えるようになっていた。フランスの権威ある枢機卿に愛され、後の教皇候補とすら言われるほどだった。

沼影敦盛にとって、その男は絶対的な存在であった。当時の沼影はまだ熱心なカトリック信者だったが、それでもその男の存在は神以上に崇高な存在だった。その男の隣にすることが神に祈りを捧げることよりも重要なことだと信じていた。

余談ではあるが、当時沼影が滞在していたフランスは国民の七割がカトリック信者であり、幼い頃からフランスで育った沼影がクリスマスチャンとなったのは自然なことだった。

「アツモリ、君の決心は変わらないのかい？ 何故、クルキアレに入ろうなんて……」

「君を守るためだ。君はあまりに優し過ぎるから、敵でさえ許して

しまうほどに優しいから、僕が君を守らなきゃ駄目なんだ。そして、あそこなら合法的に『力』を得られる」

沼影はあえて明言を避けたが、彼の言う『力』とは教会で禁忌とされる魔術のことだった。

ヴァチカンには異端者から奪ってきた数々の魔術書が保管されている。その禁書の閲覧を許されるのは、枢機卿以上の権限、もしくは許可を得た者に限られている。しかし、例外的にクルキアレ部隊に籍を置く者には、異端殺しのために禁書を閲覧することが許されていた。

教会に属しながら魔術を知るためには、クルキアレに入隊することが一番の近道であった。しかし、クルキアレ部隊に属するということは、教会に属しながら異端者と蔑まれることでもある。熱心な信徒にとって、異端者と呼ばれることは最大の侮辱である。

「アツモリ、君の信仰は清く正しいものだ。それが疑われるべきものではないことは私が誰よりも知っている。今ならまだ間に合う。考え直すんだ」

「罪から来る報酬が死であったとしても、僕は君を守るために強くならなければならない」

「やはり、君の意志は変わらないのか……」

その男はあまりに優し過ぎた。だからこそ、沼影の決意を理解することができなかった。

あまりに優し過ぎるその男は、自分を狙う悪意の存在を知らない。たとえ、知っていても全て許してしまう。悪意ある者にとって、その優しさは甘さとしかならない。敵を愛しても、敵のために祈っても、奪われてしまう命はあるのだ。

「ならば、せめてこの言葉を君に贈ろう。『恐れてはいけません。私は貴方と共にいます。たじろいではいけません。私が貴方の神だから……』」

イザヤ書、四一章十節。

まさにその言葉は、沼影にとって真理だった。

その男こそ沼影の神。彼にとっての信仰は全て、その男のために捧げられていた。

当時、沼影は十一歳。ヴァチカン異端審問会所属クルキアレ殲滅部隊訓練兵として二年間、古代魔術について貪るように勉強した。魔術習得には生来の資質に左右され、資質がなければ一生習得不可能なものだ。幸い、沼影には魔術師となる資質があり、目覚ましい努力の甲斐もあって短い期間で基本的な術式を扱えるようになった。

見るだけで魂まで穢れると言われる魔術書に臆することがなかったのは、全て神と信奉するその男のためであった。禁忌に触れ続けたのも、沼影のその男に対する信仰があったからだ。

血が滲むような訓練が二年目に達した頃、沼影の耳にその知らせが届いた。

かつて沼影が滞在していたフランスの田舎町で大規模な呪波反応が観測された。

呪波反応とは、あらゆる魔術を行使する際に発生する呪力エネルギーのことを指す。ただし、個人の魔力を用いた魔術によって、他者が感知できるほどの呪波反応は極めて稀だ。たとえるなら、人がどれほど大きく呼吸をしたとしてもそれに気付くのには相当近くにいるといけないことと同じだ。個人の放つ呪波反応は微々たるものに過ぎない。よって、人間一人の魔術によって発生される呪波反応を、数十キロ先から観測することは実質的に不可能である。しかしながら、それが観測されたということは、よほどの規模の魔術が行使されたということに相違ない。

直ちにクルキアレ殲滅部隊から二個中隊が現場に派遣されることとなり、土地感のある沼影も同行することとなった。

二個中隊と聞くと少なく聞こえるかもしれないが、クルキアレ殲滅部隊に選抜された悪魔祓いの実力は一人一人が一騎当千の実力を誇る。通常の任務ならば、班以下の人数で事足りる（場合によっては、非戦闘員を連れていくことも多い）。よほどの大事件にでもならない限り、分隊以上が動くことはまずない。それらを考慮すれば、二個中隊派遣ということがどれほど異常な事態か理解できるだろう。

イタリアの軍学校からかつての故郷へと向かう道すがら、沼影は神と仰ぐ男の安否が心配でならなかった。あの男に限って、魔術師や悪魔風情に後れを取ることはない。しかし、あの優し過ぎる男は敵ですら許してしまう。その甘さを逆手に取られてしまえば、呆気なく殺されてしまうこともあるだろう。

美夜に似ている。もし、マイラ達はその男を知っていたのなら、彼にそんな印象を持っただろう。強く気高くも、その限りなき優しさが弱さに繋がってしまう。

沼影の故郷で起こった呪波反応の根源は、その男の優しさが招いてしまった。

ボルドー近郊にてクルキアレ殲滅部隊が後一步まで追い詰めた魔術師がいた。クルキアレ殲滅部隊の伍長と互角の戦いを繰り広げ、勝利を収めるほどの実力者だった。しかし、その伍長との戦いはあまりに壮絶で、魔術師は満身創痍となっていた。残る力を振り絞って、命辛々沼影の故郷である田舎町に辿り着いた。しかし、その魔術師はそこで力尽きた。

そして、その魔術師を最初に見つけたのは、沼影が神と仰ぐ彼であった。その男は魔術師から放たれる血と罪のにおいに気付きながらも魔術師を懸命に介抱した。

魔術師は生まれて初めて、異教の神に感謝した。

この死の淵において愚かな獲物を授けてくれた神に対して。

そして、限りなき優しさが招いてしまった災禍が起こってしまった。

ヤドリギは西洋魔術において重要な役割を持つ。ケルトの祭司ドルイドはヤドリギの巻き付いた櫓の下で儀式を行い、北欧神話では万人から愛された光の神を殺した剣はヤドリギで作られた。聖なる樹木として崇められ、強力な呪力があると信じられていた。

魔術師はヤドリギを用いた魔術をもっとも得意とし、人間に寄生させることを特に好んでいた。

沼影が到着した時、そこは死と恐怖のみが蔓延する地獄だった。

魔術師にとって想定外だったのは、その男の魔力が魔術師の手に余るほど強大であったこと。ヤドリギの寄生を成功させたものの、その男の魔力を際限なく吸い続けたヤドリギは術者の思惑を超えるほど強大に成長した。結果、村一つを喰らい尽すほどまでに暴走してしまった。

今となっては魔術師がヤドリギを使ってどんな術式を構築したかは不明だった。しかし、暴走したヤドリギに喰われた村を目撃した沼影は、原爆の投下された広島を想起させる壮絶な光景だったと言う。人々は消し炭ではなく、精力を吸い尽されてミイラとなっていた。村は焼け野原ではなく、暴走したヤドリギに覆われていた。それでも、この凄惨な光景はかつての広島に見劣りするようなものではなく、人の業によって生まれた現世の地獄だった。

「これでは案内役を連れてきた意味がないな」

クルキアレ殲滅部隊第六中隊長は、凄惨な村の光景を見てもそれほど驚くだけだった。

殲滅部隊では中隊長、階級にすれば大尉が実質的な最高責任者だった。佐官以上は名目上置かれる教会上層部のお飾り。尉官こそクルキアレ最強の魔人達だった。

「……『炎の鉄槌』だな」

炎の鉄槌。

クルキアレ殲滅部隊のある作戦行動を指す隠語である。

異端に関わった一切を灰塵に帰せ。穢れた存在全てを徹底的に焼き尽くすという恐ろしく単純な作戦。しかしながら、クルキアレ殲滅部隊でもっとも行われる作戦行動であった。

第六中隊は、クルキアレ殲滅部隊の中でも『炎』に特化した戦闘部隊。芝崎家と繋がりが深く、BLS開発を支援した部隊でもあった。この事件の二年後に、フェーリア家殲滅を行うのも第六中隊だった。

沼影の故郷もクルキアレ殲滅部隊によって焼き払われた。家族と呼べる者も、友人と呼べる者も全て灰塵に帰した。そして、あの男も故郷を焼き尽くす業火の中にいるはずだった。だから、沼影は彼を求めて一人駆け続けた。

そして、沼影は二年越しの再会を最悪の形で迎えた。

かつて共に夢を語り合った教会は、魔術師の悪意によって生まれたヤドリギによって蹂躪されていた。もはやそこは沼影の知る場所ではなく、その男もまた沼影の知る面影を失っていた。

「やあ、アツモリ……。久し振りだね……」

「なんで、こんなことに……」

その男はヤドリギに肉体のほとんどを侵食された状態であっても、まだ沼影に笑顔を向ける力があった。ヤドリギは村一つを喰らい尽すほどに成長してもまだ、その男から魔力を吸い出し続けていた。

近寄ろうにも膨大に成長したヤドリギによって道を阻まれていた。ヤドリギはその男ごと天井のステンドグラス近くまで伸び、よじ登らない限り届きそうにもなかった。

「今助ける！」

沼影は道を阻むヤドリギを越え、よじ登り、彼の元へと向かおうとした。

「無理だよ、アツモリ……。僕はもう助からない」

「何を言っているんだ！ 絶対、絶対に助ける！ 僕はそのために強くなったんだ！」

「僕の体はもう完全にヤドリギと一体化している。無理に切り離せば、僕は死ぬだろう。それに、このヤドリギをこのまま野放しにすることもできない。仮に僕をこのヤドリギから切り離すことができたとしても、僕の魔力がある限りこのヤドリギは再び蘇るだろう。だから、僕ごとこのヤドリギを殺すんだ、アツモリ……」

「なっ!？」　　そ、そんなことできる訳がないだろう」

沼影はその男を守るために、力を得ようとした。その男のためだからこそ、どんな厳しい訓練にも耐えることができたのだ。それなのに、その男を殺すために力を振るうなどできるはずがなかった。

「今、僕を救う方法はそれだけなんだ、アツモリ……。このままでは僕はヤドリギと共の愛すべき人々を殺し続けてしまう。そんなことは耐えられないんだ。だから、君の手で殺してくれ……」

その男がそう願うことは理解できた。

彼はあまりにも優し過ぎるから、大切な人々を殺すくらいならば自らの命を差し出す。しかし、だからこそ沼影はあらゆる悪意から彼を守ろうとしたのだ。そのために自らの魂を穢しながらも強くなるうとした。

「嫌だ、そんなことできる訳がない！　僕は必ず君を助ける！」

涙が止まらなかった。その男を助けることも、願いを叶えることもできなくて。

それを理解しながらも、沼影はそう叫ばずにはいられなかった。ここで屈してしまえば、今まで積み重ねてきた全てが意味を失うから。自己の存在価値すらなくなってしまふから。だから、沼影はその男を助けると叫び続けた。

しかし、無情にも、幸いにも、その男の願いを叶える存在が教会に

来訪してしまった。

「……あの男がヤドリギの核だな？」

「た、隊長……」

クルキアレ殲滅部隊最強の魔人は、悠然とその男を見上げていた。

沼影はその声を聞くまで中隊長が自分のすぐ背後にいることに気付きもしなかった。魔人の存在感は見ただけで屈伏してしまいそうなほど圧倒的だというのに、その接近は恐ろしく静かだった。

炎の鉄槌を下した以上、中隊長が村の人間を生かすはずがなかった。異端に関わった全てを滅する。つまり、彼は助からない。それは決して覆らない決定事項だった。

「ええ、そのとおりです。どうか僕をこのヤドリギごと殺してください」

「無論、そのつもりだ」

中隊長が片手を掲げ、その男に照準を合わせた。

炎に特化した部隊において、最強の炎を従える魔人。あらゆる罪と穢れを焼き尽くす煉獄の業火を振るい、異端者に死を与える大天使。第六中隊ではそのように称され、崇め恐れられていた。

「……や、やめてください！ 今ならまだ助けられるかもしれまん！ どうか、どうかお慈悲を……」

一度下された決定は絶対であり、覆ることはなかった。異端をこの世界から殺し尽すこと、それこそがクルキアレ殲滅部隊の掟。それを理解しながらも、沼影はそう懇願せずにはいられなかった。神と崇める男を守るため、沼影は魔人の前に跪いた。

しかし、魔人の眼光に慈悲の輝きは一切なかった。

「……アツモリ、もう僕のために自らを犠牲にすることは止めるんだ。あの魔術師を改心させることができず、再び魔道へと落としてしまったのは僕の罪。だけど、神は真実で正しき方。その罪を許し、全ての不義から私達を清めてくださる……」

「だ、だけど……、うわああッ!？」

未だ懇願を続ける沼影を、中隊長は容赦なく投げ飛ばした。
この場で為すべきこと理解していない者を排除し、罪深きその男を見上げた。

「……神に祈る時間をやろう」

「……感謝いたします」

もし、罪がないと言うのなら、それは自らを欺くことであり、真理は私達の中にない。

もし、私達の罪を告白するのなら、神は真実で正しき方であるから、

その罪を許し、全ての不義から私達を清める。

もし、罪を犯したことがないと言うのなら、それは神を偽り者とする
ことであり、神の言は私達のうちでない。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！
」

そして、世界は穢れなき赤に染まっていった。

閑話休題、八章「夜明け」へ……

第八章 夜明け（前編）

「……どうして、あんたがこんなところにいるのよ……」

私はブラックファンクを暴走させ、狼王ロボに魂を喰われたはずだった。慎を私のような悪魔と共にいさせないために。

いずれ破滅する運命にある私と一緒にいれば、慎は必ず無残に死ぬだろう。彼には何の力もなく、何の知識もない。この世界がどれほどの闇に満ちているかも知らない慎に生き残る術などない。慎を救うためには、完全に私との縁を断つ以外にないのだ。

しかし、あの教会で慎に抱き締められた瞬間、私は彼を突き放せなかった。私の本心は、慎と共に在りたいのだ、と思い知らされた。だからこそ、慎を救うためには私が死ぬしかない。私が死ななければ、慎を解放することができなかった。

美夜なら、私を殺してくれると思った。しかし、あの子は誰よりも優しく、誰よりも強かった。こんな悪魔のような女でさえ、救おうとしてくれた。

生きる、と美夜の瞳は語っていた。しかし、私はもう限界だった。これ以上、こんな地獄には耐えられなかった。私は美夜のように強くはなれないのだ。

だから、残酷な運命から逃げ出し、虚無の終焉を選択した。そこに救いがないとわかっていても、慎だけは救うことができるから。現実はいつも残酷で、私の大切な人達を平然と殺していく。そんな現

実にもう耐えられるはずがなかった。たとえば、この魂が消滅することになるうとも、私はあの地獄のような現実から逃げたかった。

しかし、目の前にはまだ悪夢の続きが笑みを浮かべていた。

「ふふ、わからないんですか、マイラ先輩？」

「……芝崎、初音……」

その存在は私が犯した罪の証明。

この手で殺したはずの女が、悪夢と共に私の前に現れた。

確かにこの手で殺したはずなのに、芝崎初音は私の目の前で微笑んでいた。

「ええ、そうですよ。初音ちゃんです。どうも、こんにちは。お久しぶりです。またお会いできて本当に……、反吐が出そうなほど不愉快です」

「……あんた、どうして生きてるのよ？」

「生きてる？ 何言ってるんですか？ 確かに、貴方が殺したでしょう、私を？」

初音は愉快そうな笑みを浮かべているが、その目は確かに私を責めていた。

殺した相手に、殺したことを責められるのは非常に苦痛だった。良心の呵責程度では済まないほどの酷い罪悪感に苛まれた。と同時に、払拭しえない嫌悪感が全身を駆け巡っていた。殺したいほど憎かった相手がまだ目の前に存在している。それが何よりも不快だった。

不倶戴天の敵。やはり、私と芝崎初音は相容れない存在だった。互いに殺さずにはいられない。どちらかの存在を消し去るまで、私と芝崎初音の因縁は終わらない。

「私は貴方の知っている芝崎初音であると同時に、全く別物でもあるんです」

「どういうこと？」

「人間である芝崎初音は、確かに貴方によって殺されました。これは間違いありません。今の私は貴方と同じようにブラックファンダに、……狼王ロボに魂を喰われた存在。ここは狼王の腹の中。今の私も、貴方も、魂だけの存在なんですよ」

若干疑問が残ったが、おおよそ納得した。狼王ロボの腹の中というのなら、私と芝崎初音が一緒にいるのも納得ができる。やはり、私の魂はあの大きい獣に喰われた。故に、これは悪夢の終わりであり、新たな地獄の始まり。

しかし、それでも慎が救われるなら構わなかった。私自身が地獄に堕ちることは覚悟していたのだから。

「……そう」

「気に入りませんね、その淡白な反応……。貴方にはもっと絶望してほしいのに」

私一人が地獄に落ちるなら、むしろ望むところだ。

罰を受けるだけの罪を犯したのはわかっていて。死後にも安楽があるとは思っていなかった。

ただ、慎が私から解放されたのなら、それだけで充分だ。

「……まあ、いいです。私の手で絶望に歪ませるという楽しみがありますしね。ふふふ……」

不穏な初音の言葉に背筋が震えた。

何か違和感を覚える。私の知っている初音とは何かが違う気がした。

「ねえ、そもそも狼王の遺産って何だと思います？」

「何だ、って言われても……？」

狼王の遺産。

伝説から生まれた幻想種、狼王ロボが残した魔道具。

誇り高き狼王が卑怯な人間達を憎悪して最期に残した武器。

それ以外に何がある？ 初音は何を言いたいのだろうか？

「……わかりませんか。まあ、貴方の頭では理解できませんか。では、少し質問を変えましょう。……狼王ロボは何故、狼王の遺産を残したと思いますか？」

「それは……、人間への復讐のためでしょう？」

「まあ、それもありますが、それは本来の目的のおまけですよ。元々の目的は別にあります。幻想種が自らの力を残した魔道具は多く存在しますが、それらと同じ理由ですよ？ ふふふ、だからこそ普通は人に害する幻想種の武器は使用を禁止されているんです」

悪魔染みた邪悪な笑みに私は全身の毛が逆立った。ウェアウルフの本能が不吉な気配を感じていた。

狼王ロボ、人に害する幻想種が自らの力を魔道具として残す理由。

幻想種、人の信仰から生まれた幻想を具現化した存在。それは魔術を同じ起源をもつものであり、本質的には同義。魔力を糧として食らうことにより現世へ顕現する。

魔力……は、魂から生み出される霊的エネルギー。

……魂を食らう、ブラックファング……。

まさか……、まさか……！！？

「そう……、一度死んだ狼王ロボが復活のために残した魔道具！それがブラックファングなんですよ！そして、貴方が私達を殺してくれたおかげで、私達は新たに生まれたんですよ！！」

初音から発せられたのは狼王の獣気だった。

違和感の正体はこの気配だった。今、初音の中に狼王ロボの力が宿っている。いや、それは正確ではない。狼王ロボに魂を食われ、同化してしまったと言うべきだろう。

今の初音は、もう一人の狼王ロボと言える存在かもしれない。

少なくとも、今の初音は私の知っている彼女とは一線を画す存在だ。

「あ、貴方は芝崎初音なの……？」

「ふふふ、違いますよ。最初に言いましたよね？ 私は芝崎初音であると同時に、全く別の存在だって。」

今の私は、芝崎初音と狼王ロボが融合した思念統合体です。いえ、融合しているのは芝崎初音の魂だけではありませんね。貴方や、以前のブラックファングの所持者が殺してきた魂と融合した存在……。

ああ、そうそう、もちろん貴方の魂だって狼王ロボの一部ですよ？ 貴方がここに存在していること、それ自体が狼王ロボと同一化した証拠です」

「わ、私も……、狼王ロボの一部……」

「ええ、そうです。貴方には感謝していますよ。何と言っても、芝崎初音を……、あれほど憎悪に塗れた魂を持つ者を殺してくれたんですから。貴方が私を殺してくれなければ、狼王ロボの魂は復活しませんでした。それに、貴方は自らの身体まで捧げてくれて、本当にいくら感謝しても足りないですよ」

また私のせいで悲劇が起こってしまったんだ……。

全部、この残酷な運命に翻弄されたものだと思っていた。しかし、全ては私が犯してしまった罪が招いてしまった惨劇だった。この血塗れの手が更なる悪夢を生み出してしまった。一族の希望を生むことができず、私はこんな邪悪な絶望を生み出してしまった。

全部、私のせいだ……。こんな悲劇を生んだのは、全部私がいけなかったんだ……。

「ふふふ……。私を生んでくれて、ありがとうございます♪」

「……ッ!? わ、私が……。私がそう言ってほしかった子は……。あんたなんかじゃないわよオオオッ!!」

生んでくれて、ありがとう……。

今の私をこれほど打ちのめす言葉はなかった。

ホープを失って、復讐のために罪を犯して、それで生まれたのが更なる災厄を呼ぶ存在。

私が……。私なんかが存在しているから……。
生まれてきて、ごめんなさい……。

青き炎が我を包み込む。

まるで罪を浄化する煉獄の炎のようだった。

この青き炎は、魂を焼き払う浄化の業火。精神面からの直接攻撃。だからこそ、魂の集合体である我にとって、この青き炎は天敵とも言える。

我はこの炎を知っている。我の生みの親であり、半身でもあるマイラの記憶に、この忌まわしき業火の存在があった。

「終わりだ、狼王ロボ！ マイラを、俺の女を返せ！！」

『調子に乗るな、人間が！』

ブラックファングを振るうも、辛うじて避けられてしまった。万全な状態ならば、確実に穂村慎の首を落とせたのだが、炎の渦に吞まれているために上手く狙いが定まらなかった。

しかし、穂村慎の精神集中が乱れ、青き炎の勢いが弱まった。ただの炎となってしまうえば、我を殺すことは不可能だ。

『死ね、穂村慎！！』

「……冗談じゃねえよ！！」

穂村慎は咄嗟に二挺の銃を構えた。この距離でならば、確かに我を、正確に言えばマイラの体を殺すことが可能だろう。しかし、銃口は見当外れの方を向いていた。これならば仮に一発当たったところで、我を止めることなどできない。

『どこに銃口を向けている阿呆が！』

「阿呆はてめえだ！ 狙いは完璧だ！」

『何だと！？』

二つの銃口は、正確にブラックファングを狙い済ましていた。

しまった、そう思った瞬間には遅かった。銃声と共に、青き炎を纏った銃弾が発射されていた。あの青き炎は唯一、我を殺すことができる力だった。

「ブルー・ブレイズ・ブレット!!」

青の銃弾がブラックファングを直撃した。

ブラックファングには魔力による結界が張られ、一定威力の物理干涉は受け付けない。もちろん相当の威力を持った攻撃ならば、ブラックファングを破壊することが可能だが、銃弾程度で貫けるものではない。

しかし、あの青き炎は魔力干涉を無視する能力がある。加えて、あの青き炎の最大の恐ろしさは、魂を直接焼き払う能力。銃弾と共に放たれた青き炎は、ブラックファングに宿る私の魂に直接的な打撃を与えられる。青き炎を纏った銃弾は、我にとってあまりに危険な存在だった。

「くたばるのはてめえだ、狼王ロボ!!」

「……う、うう、ああ……、かはあ……」

「貴方は存在すること自体、罪なんですよ」

初音は愉悦と嘲笑に満ちた表情で、私を踏み付ける。

私には抵抗する力も、気力も残ってはいなかった。心の痛みにはもう耐えられなかったが、ただの痛みならいくらでも甘んじられた。一方的な初音の責めを甘受し、死を待っていた。しかし、死はあまりにも遠い。

今でも美夜が狼王ロボと必死に戦っているのは、ここでも感じられた。不愉快なことだが、私と狼王ロボは一体の存在。狼王ロボの感覚は、そのまま私にも伝わってくるのだ。

……美夜、もう頑張らなくていいんだよ。貴方が本気を出せば、狼王ロボとなった私でも殺せるはずなんだから……。

「気に入りませんねえ。早く死なせてくれ、って顔。もっと足掻いてくださいよお。じゃないと、蹴り甲斐がないじゃないですか!」

「ぐう……」

私は顔面を蹴り上げられ、地面を転がった。しかし、ここを地面と定義していい場所なのかはわからない。無重力空間で転がり落ちているようだった。

「ええ。……といっても、人間だった頃の私が、ですけど」

「そんなこと、どっちでもいい！ あんた、慎に何かしたら八つ裂きに、あぐう……」

初音の拳が私の顔面を叩き付けた。それでも、私は倒れずに初音に縋り付いた。そうした瞬間、初音は心底楽しそうな笑みを浮かべた。慎に、慎に何かしたら、絶対に許さない……。

「いい顔になりましたねえ。そうじゃないといたぶり甲斐がないじゃないですか？」

「し、慎に、何をしたの……？」

「BLS、通称Blue Lantern Systemという強制思念統合術式を埋め込んだんですよ。ああ、そういえば、貴方の一族の仇だったんですね、ブルー・ランタンは？ 私、さっきの車の中での話で初めて知りました」

こいつ、今何て言った……？

……ブルー・ランタン？

あの忌まわしき青き炎の力を慎に埋め込んだ、だって？

「BLSを完全に制御するには、焰仁のような発火能力を必要とします。その能力のない穂村慎は、いずれBLSに焼き殺されます。」

こんな生ぬるいものではなかった。五臓六腑まで染み渡るようなおぞましい恐怖。

しかし、この悪魔からは恐怖は感じられない。あの初音さえ退けた私が、この程度の悪魔如きに殺されるはずがなかった。

「上等よ!! やれるものなら、やってみなさいよ!!」

……私の、私の自我が崩壊していく。

いや、そもそも自我など初めから存在しなかった。

我は、厳密に言えば狼王ロボではない。狼王ロボに喰われた魂の集合体でしかないのだ。我も喰われた魂の一つ、マイラの心の闇を顕在化されただけの存在なのだ。

我は、誰にも望まれた存在ではない。

人の汚い部分だけが凝縮されたおぞましい穢れでしかない。誇り高き獣の皮を被っただけの汚物。

だが、だからといって、我は簡単に滅びたりはしない。誰にも望ま

この男は命を掛けた戦いをしたことがない。人の命を奪ったことのない半人前の戦士でしかない。我を殺すという行為に、躊躇が現れている。

勝機だ。今、この男を殺せば、我は生き延びられる。

我にとって脅威なのは、この青き炎のみ。あの半端な化け物娘は確かに手強いが、勝てぬ相手ではない。

『死ねエエツ!!』

「ぐあああッ!!」

ブラックファングが穂村慎の肩を浅く抉った。首を狙ったのだが、この青き炎の中で正確に狙いを定めるのは難しい。しかし、今は当てるだけで充分だった。

穂村慎は明らかにたじろぎ、青き炎の勢いは更に弱まった。これだけ炎の勢いがなくなれば、我がこの男を殺すのには充分だった。

『終わりだ、穂村慎!!』

「ち、畜生……」

穂村慎は大きく飛び退き、我の一撃を避けた。しかし、だからこそ甘いのだ、この男は。

我の攻撃を避けたことにより、また青き炎の火勢が弱まった。我を

唯一滅ぼすことができるのは、この青き炎だけだというのに。我を倒すつもりならば、逃げずに青き炎を維持し続けなければならなかったのだ。

ようやく詰みだ。今の火勢ならば、我にも振り切ることができる。そして、この青き炎の消滅は我の勝利、奴等の敗北を意味する。

『消え失せろ、鬱陶しい青き炎よ!!』

「うわあああああああああああああああッ!!」

我はブラックファンクに宿る狼王ロボの魔力を解き放った。青き炎は、物理現象である炎と同時に顕在しているために、単純な魔力なだけで防ぐのは難しい。しかし、基本的にはアストラル・サイドに属するエネルギー。相性が悪いとしても、圧倒的なエネルギーをぶつけられれば、霧散するしかない。ちょうど小波が大波に飲み込まれるように。

鬱陶しい青き炎は吹き飛び、美しい月の見える夜空が我の目の前に広がった。いや、広がるはずだった月夜の空は深い雲に覆われていた。先ほどまではほとんど雲のない美しい夜空だったというのに、今は黒き曇天が広がっていた。

何故、空がこんなにも曇っている。我が青き炎に吞まれていたのは、長く見積もっても数分のはずだったのに。

「貴方は存在していること自体、間違っているんですよ！ いい加減私に屈して、私達に取り込まれたら、どうですか！」

青き炎の威力は、やはり凄まじかった。同じ狼王ロボの中に取り込まれている私もダメージがあったが、それでも今日の前にいる狼王ロボほどのダメージはなかった。

この狼王ロボは、犠牲者達の魂が集まった存在。一つ一つの魂にそれほど強い力はない。たくさんもの魂が一つとなったから狼王としての力を振るえる存在。だからこそ、青き炎によるダメージは大きかった。自己を形成する無数の魂が焼き払われ、明らかに力が衰えていた。

「さっきまではそれでもいいと思っていたわ！ でもね、やっぱり考えが変わったわ！ あんたが慎を殺すというのなら、私は絶対にあんたを殺す！」

それに、こんな罪深い私のために、慎が戦ってくれている！ 本当に、自分の命を削ってまで、戦ってくれている！ 私には責任があるのよ！ 無関係だったはずの慎を、こんな残酷な運命に巻き込んでしまった！ 私だけが逃げる訳にいかない！

だから、生きて戦う！ 慎を守るために戦うの！」

何故だろう。先程まで早く死にたいと願っていたのに、慎のためだと思えばいくらでも力が湧いてくる。

ああ、私って本当に最低だ。こんなにも不幸を呼び込み、慎を地獄にまで引き摺り落としておいて、それでも嬉しいって思っている。地獄でも一緒にいられる、って喜んでいる最低な女だ。

やっぱり、私は本当に、馬鹿が付くほどに慎が好きなんだ。

「償いきれない罪を犯したくせに、まだ生きようとするんですか！本当に悪魔のような女ですね、貴方は！貴方のような最低な人間は、存在する価値もないって、まだ気付かないんですか！」

ええ、確かにそうかもしれない。

私は史上最低の悪女に違いないだろう。

だけど、だからといって易々と死んでやるものか。

「慎が私と共にある限り、私は絶対に生き続ける！どんな汚いことをしたって、絶対に生きてやる！」

「その穂村慎も、今まさに殺されるところですよ！」

「甘いわね。確かに慎は弱いし、あんたの力は強大過ぎる！　どんなに頑張ったってあんたに敵わないかもしれない！　だけど、私やあんたのような理不尽な暴力を絶対に許さない、本当に強い奴がいるのよ！　その子は、絶対にみんなを守ってくれる！」

私の最高の親友で、最強のライバルで、尊敬すべき無敵のチビッコが絶対にあんたを倒す！」

不気味な闇夜であっても、その声はどこまで透き通っていた。

穢れた我とは相対する、美しく澄み切った存在。その声の主は妬ましいほどに、美しかった。何より、強い意志が秘められた瞳がもつとも美しく、妬ましかった。

何故、我はこのような半端者に恐怖を抱くのだろうか。あの程度の屑が私の脅威となるはずがないはずなのに。それなのに、私の魂は絶対的な恐怖に縛られていた。

「……慎君、ありがとうございます。おかげで十分な靈力を溜め込むことが出来ました」

マイラの記憶の中でもっとも信頼され、ある意味もっとも恐れられている存在。親友であり、ライバルであり、尊敬すべき少女。

我にとってはただの半端な、人間でも我々側の存在でもない小娘でしかなかった。しかし、彼女から発せられる魔力は尋常ではない。神の領域に踏み込んでいる。ただの半端者ではないはずの小娘が、何故これほどまでの魔力を保有しているのだろうか。

穂村慎はすでに遠くに避難していた。まさか、初めからこういう手筈だったのか。青き炎で我の動きを止め、あの小娘に魔力を溜め込む時間を与えた。

考えてみれば、実戦経験もなく、つい先程能力に目覚めたばかりの男に、最後の一手を任せるはずがなかった。

「終わりです、狼王ロボ……。いえ、哀れな魂達……。永劫の呪縛から、貴方達を解放します！」

『ふざけるな！ 解放だ？ そんなもの、必要ない！ 我は生き続けるのだ！ どれだけの命を犠牲にしても、我は永遠に存在し続ける！』

「貴方達はまだ気付かないですか？ ブラックファングに囚われ続ける限り、貴方達の安息はないんです！ ただ苦しみが続くだけです！」

『たとえば、それでも我は死にたくないのだ！ もう苦しみたくないのだ！』

「……でも、このまま貴方達が狼王ロボと生き続けても、その先に救いはないんです！ 私はお節介ですから、勝手に貴方達を助けます！ 恨まれても、憎まれても、私は貴方達を助けます！ 私にはその力があるから、何が何でも戦うんです！」

なんと傲慢な……。所詮この小娘も人間に毒されている。勝手に助けるだど？ それは善意の押し付けではないか。鬱陶しい独り善がり。

我は生に執着し続ける。我自身の存在が過ちであっても、我は存在し続ける。だから、我は逢瀬美夜に負ける訳にはいかない。

勝手に我を助けるなどと妄言を吐く逢瀬美夜を打ち滅ぼすべく、我は彼女目掛けて突っ込んだ。

「……龍命に於いて、逢瀬美夜が命じます！」

光だ。

数え切れないほどの数の稲妻が、逢瀬美夜の刀の元へと集まり、一つの凄まじい閃光となっていた。信じられないほどに凝縮されたエネルギーだ。もはや刀には収まりきらず、凄まじい光はまるで天使の翼のように広がっていった。

光り輝く翼の天使。青き翼とは比べ物にならないほどの神々しさだった。

「神衣光翼ッ！！」

光が、全ての闇を薙ぎ払った。

夜明けの朝日が世界を照らすかのように。

この時、我は彼女に立ち向かいつつも、悟ってしまった。

これこそが、我にとっての唯一の救いだ。

我は、二度目の死を迎えた。

ۛۛۛ

第八章 夜明け（後編）

「マイラ ああッ！！」

目を覚ますと、問答無用で思い切り慎に抱き締められた。

ああ、温かい。慎の優しい温もりだ。世界で一番、私を幸せにしてくれる人の抱擁だ。

「……慎、ごめんね」

目が覚めたら、絶対に最初に慎に謝ろうと思っていた。

慎には、本当にいくら謝っても謝り足りないほど迷惑を掛けてしまった。呪われた運命に引き摺り込み、死の運命を背負わせてしまった。

私なんかと出会わなければ、きっと慎は……。

「なんて顔してんだ、馬鹿。俺はな、お前に出会えたことを後悔したことなんて一度もない。迷惑掛けたとか、そんな心配しなくていいんだ。俺はお前が好きだから、一緒にいるって決めたんだ。お前が迷惑でも、俺は絶対に離さないぞ。」

お前は俺の女だ。もう勝手にどっかに行くなよ。迷惑なんていくらでも掛けていいから、ずっと俺の側にいろ。ったく、何度も言わせんな、馬鹿……」

「うん、うん……」

慎、大好き……。

私も慎の背中に手を回し、思い切り泣きついた。子供のように泣きじゃくり、必死に慎に抱き付いた。周りにみんながいるのは知っていたが、それでも泣き続けた。

「マイちゃん、無事で、よかったです……」

そうだ、美夜にも随分と迷惑を掛けてしまった。私は美夜の声がした方へ振り向いて、愕然とした。

美夜は全身に酷い火傷を負い、私の隣に寝かされていた。ところどころ皮膚が裂け、相当な出血が見受けられる。満身創痍、瀕死の状態だった。

「美夜！？ 貴方、そんなボロボロになってまで私を……」

「にやはは……。やゝ、ちょっと無茶し過ぎちゃいました。今の状態で神衣光翼を使えばこうなるってわかってたんですけど、全力を出さないとマイちゃんも、あの可愛そうな魂達も助けられなかったですから……」

哀れな魂達、芝崎初音や多くの犠牲者達。美夜はあえてその名を口にしなかったが、ブラックファンクに囚われてしまった大切な友人を救いたかったのだろう。

だからこそ、この子はこんな無茶をしたのだろう。本当に、どうしようもないくらいにお節介なお人好しだ。

「……美夜、ごめん……。ごめんなさい……」

「『ごめんなさい』より、『ありがとう』って言ってほしいです。慎君も、みんなも、貴方にこれ以上過ちに囚われてほしくないんです。前を向いて、笑顔でいてほしいんです」

「……うん、ありがとう、美夜……」

「はい、どういたしまして♪」

彼女に出会えて、本当によかった。私の最高の親友。

私は上半身を起こし、東の空に目を向けた。

夜空が静かに明けていく。漆黒の闇に包まれた空が、徐々に薄紫色に染まっていった。薄い糸のような陽光がいくつも結びつき、大きな光の螺旋になっていく。どんな悲しい夜が続いても、必ず希望の朝は来る。たとえば、私達がどれほど苦悩しようとも、世界は変わらず回り続ける。

ついに夜の終わりを告げる朝日が姿を現した。その眩しさに、私は右手をかざした。

その時、不意に右手に指輪の存在に気付いた。視線が朝日から、指輪へと移った。狼王の遺産、ブラックファンク。以前までも禍々しい気配は感じられなくなったが、それでも圧倒的な魔力は消えていなかった。それに、私が犯してしまった罪も、消えてはいない。

わかっている。決して忘れた訳ではない。

私は、許されざる罪人だ。

「……マイラ」

「何、仁……？」

「……お前はこれから戦い続けるのか？」

私は一度、運命から逃げてしまった。

もう戦いたくない、と言って死を望んでしまった。

でも、私はもう逃げないと決めた。

「……うん、戦い続けるわ。私が望む望まざる関係なしに、戦いは続くと思う。今度の一件で、芝崎家は完全に私を敵と認識しただろうし、協力関係にあるヴァチカンも多分動くと思う。これから本気の潰し合いが始まるはず。

本音を言うと、逃げたい。でも、今更私が罪に目を逸らして、逃げることなんてできない。だから、私は戦う。戦い続ける。その結果、芝崎初音のように罪のないものを殺してしまうこともあるかもしれない。それが過ちだってことはわかっている。でも、連中はそれが過ちとすら気付かずに殺し続ける。私は、もうあんな連中に殺される人達を見たくない。私が罪を犯し、戦い続けることで、もう犠牲が生まれなくなるというのなら、私はこの命を懸けて戦い続ける。

それが、罪人としての私の決意。もう引き返せないのなら、同じ外道達を殺すための牙となる」

「……そうか。ならば、俺や美夜とは違う道を歩むんだな……」

悲しいけど、そういうことになるだろう。

私の決意は、ある意味で美夜と近いものかもしれない。しかし、やはり相容れないものだ。大切なものを守るため、人を殺すか否か。私は殺す、美夜は殺さない。だから、私と美夜は敵同士になる。これからも、ずっと戦い続けるだろう。

仁は私の言葉を聞くと、無言で頷き、美夜を抱き上げた。

「うにゃあ!？」

急に抱き上げられて、奇声っぽい悲鳴を上げる美夜。

「……聞いてのとおりで、憂いの。わざわざ俺が説得するまでもなかったな」

「ソウダナ……。デハ、コノ二人ノ身柄ハ、我等黒ノ派閥ガ預カラセテモラウゾ」

「……BLSの制御キーも渡した。美夜の安全は保障してもらおうぞ」
こいつ、もしかして美夜の安全のために、私を売った……？ まあ、元々最初に裏切ったのは私だけだ。っていうか、二人ってことは慎重も？ それに、BLSまで売った？

しかし、それではほとんど無条件降伏に近い。まさか、そうまでしても美夜を守りたかったのか。あの自分の命にさえ無関心だった奴が、ここまでするなんて驚きだ。

「ククク……、コノ私が逢瀬美夜ヲ討ツ絶好ノ機会ヲ見逃スト思ッテイルノカ……?」

『……ッ!?!』

憂いの切り裂き魔は得物の大バサミを美夜と仁に向けた。
こいつ、美夜を殺す気……? そんなの、絶対に許せる訳がない。

「ソノ小娘ハ黒ノ派閥ノ幹部ヲ倒シテイル。殺セル時ニ殺ス」

「ちょっと待ちなさいよ、憂いの切り裂き魔!」

私は憂いの切り裂き魔の前に立ちはだかった。恩人である美夜を殺される訳にはいかない。一命の恩は、一命を以って返す。

「ソコヲ退ケ、大神まいら。千載一遇ノ好機ヲ見逃ス訳ニハイカナイ。ソレトモ、我等ヲ裏切ッテマデ逢瀬美夜ヲ守ルトイウノカ?」

「……違うわ、憂いの。この子は私の獲物よ。誰にも渡さない」
「オ前ガ、逢瀬美夜ヲ殺ストイウノカ?」

「ええ、美夜を殺していいのは、私だけよ。でも、決着をつけるのは、互いに万全の状態の時。今はその時じゃないわ」

「……ソナ言葉デ、私ガ納得スルト思ッテイルノカ？」

「納得しないのなら、私があんたを殺すだけよ？」

「……………」

私と憂いの切り裂き間の睨み合いが続いた。

今、現状で戦闘能力が一番高いのは憂いの切り裂き魔だ。まともに戦えば、私の方が圧倒的に不利だ。しかし、ここで退くつもりはなかった。

憂いの切り裂き魔は無言で私を睨み続けた。一体、今何を思っているのだろうか。無機質な仮面に潜む感情は全く読めなかった。

「……イイダロウ。ソコマデ言ウノナラ、逢瀬美夜ノ始末ハ才前一任シヨウ。ダガ、イズレ必ズ殺セ」

「わかってる……。もう、私は逃げない……」

憂いの切り裂き魔は得物を仕舞い、踵を返した。どうやら諦めてくれたようだ。

美夜を討つより、私と慎の協力を選んでくれて本当によかった。黒の派閥の幹部を倒した美夜を討てば、間違いなく大きな功績となる。だが、ヴァチカンと戦うには私達の協力は不可欠だ。黒の派閥の中には、ヴァチカン敵視の者はそれほど多くない。ここで味方を減らすと、今後の戦いが厳しくなる。そう考えて、憂いの切り裂き魔は退いてくれたのだろう。

それにしても、功績よりも復讐を選ぶとは、憂いの切り裂き魔にとってヴァチカンとは相当に憎い相手なのだろう。

「マイちゃん、ありがとうございます」

「……恩に着る、マイラ」

二人からお礼を言われるが、正直くすぐったい。所詮その場しのぎをしただけに過ぎない。でも、少しだけ強がってしまう。

「これで助けてもらった借りは返したわよ。戦場では、敵同士だからね」

「はい。でも、学校では今までどおり、親友ですよ」

「……そう、だね。うん、学校では、ね」

敵わないなあ、この子には……。

私が男だったら、絶対に惚れちゃうなあ。

「……行くぞ、美夜」

「あっ、はい。ごめんなさい、仁君、迷惑掛けちゃって……」

「……『ごめん』より、『ありがとう』だ。自分で吐いた言葉くらい忘れるな」

「あははは、そうですね。ありがとうございます、仁君」

あいつ、絶対に顔真っ赤にしてる。こちらを向いてないからわからないけど、間違いない。確信できる。

仁は（おそらく顔を真っ赤にしたままで）美夜を抱え、去っていった。送り狼にならないか、と少しだけ不安になった。しかし、彼にそんな度胸はないだろうと思って、すぐに不安は消えた。

まあ、送り狼になったら、それはそれで面白い。

「変ワツタナ、アノ男……。昔ハ世界ソノモノヲ憎ンデイルヨウダツタノニ……」

「……確かにね。あいつは芝崎家に戦うことを義務付けられて育ったから、何かも信じられずに世界を恨んでいた。でも、美夜に出会って、誰かを信じることを知った。だから、あいつは人間らしさを取り戻したのよ」

「戦士ハ人間デハナイ。戦士ハ所詮戦士。人間デアッテハナラナイ」

「そう、かもね……」

憂いの切り裂き魔が言わんとすることはわからないでもない。人間らしさは戦場において不要な感情だ。たとえば、美夜みたいな甘い奴に戦士としての適性があるとは思えない。どれだけ強くても、結局相手を殺せない戦士に意味はない。

確かに、戦士は人間であってはいけない。しかし、私は人間であり続ける。心を捨てた外道達の蹂躪がどれだけ残酷かを知っているから。そうした外道達と戦うために、力を振るうと決めたから。

「まあ、何にせよ、帰ろうぜ。僕は疲れたよ」

「お前、何か疲れるようなことしたか？」

「うるさいよ！」

慎と沼影が阿呆な喧嘩を始めたので、私は問答無用で沼影を蹴り飛ばしてやった。慎に手を出す奴は許さない。というか、沼影がウザい。

「うるさいのは、あんたよ。いいから黙って、私達を送っていきなさいよ！」

「それが人に物を頼む態度ですかねえ？」

「うるさい！」

私と慎の蹴りが、綺麗に沼影の顔面を捉えた。

その後、さめざめと泣く沼影の運転で、私達は町へと戻っていった。行きの時はエディンバラの話をしていたので気付かなかったが、林道は車だと酷く揺れた。

芝崎家から完全に敵として認識されてしまった以上、今まで自宅していたマンションには戻れなかった。これからは慎のアパートに住むことになるだろう。今更同棲で戸惑うほど初心ではないが、少しだけドキドキする。

それにしても、今日は疲れた。本当にいろいろあって精根尽き果て

た。

不規則な車の揺れと連戦の疲れで眠りを誘う。知らず知らずのうちに慎に寄り掛かっていた。彼はそっと私の肩に手を回し、ほつれた髪を優しく梳いてくれた。温かい。世界で一番安心できる私の居場所。私はいっしか深い眠りに落ちていた。

小一時間ほど経ち、ようやく慎のアパートに着いた。

車から降り、慎が住むボロアパートを見上げた。夜遅くに見ると、幽霊が出そうなほど雰囲気があり、非常に不気味だった。しかし、泣きそうなほどの懐かしさが込み上げてきた。

慎のアパートに来るのは、本当に久し振りだった。付き合っていた頃は、よく遊びに来ていたが、別れてから二ヶ月も来ていなかった。

「じゃあ、僕達は行くぞ」

「ええ、いろいろありがとう」

「……何だか、素直にお礼を言われるのは気持ち悪いな。まあ、ありがたいと思うなら、僕達の計画にこれからも協力し続けてくれ」

「わかってるわよ。ヴァチカンを許せないって気持ちは消えていないから」

ただ、無闇に恨むのは止めようと思う。盲目的に憎しみに塗れてしまつては、また今回のような過ちを犯してしまうかもしれない。

「ああ、それと、ホムラ一号。てめえも協力しろよ」

「一号言うな、エロ河童」

「誰が河童だ！ 僕はお前等みたいなビククリ人間と違って、純度百パーセントの人間だよ！」

いまいち信憑性に欠ける。どちらかといえば、人間というより河童に近い顔なのに。

まあ、沼影が人間だろうと、河童だろうと、私には関係ない。河童の方が強そうなので、どちらかといえば河童であってほしい。あと、私個人としても河童の方が面白いので、河童であってほしい。

「まあ、俺だって好きでビククリ人間になった訳じゃないんだがな……」

慎はきつと誰にも聞こえないように言つたつもりだろうが、私には聞こえてしまった。ウェアウルフである私の聴力は、人間のそれとは性能が違う。

慎、やっぱり口ではああ言つても、後悔している部分があるんだ。まあ、そうだよな。簡単に割り切れるものじゃないし……。

「いいから、さっさと行けよ」

「ああ、そうさせてもらうよ。じゃあ、せいぜい今日はイチャついてろ」

「「やかましい！」」

私と慎が沼影を殴ろうと踵を返した瞬間、車が発進した。

あの野郎、逃げ足だけは速いな。今後会ったら、一発殴ってやる。

「……じゃ、じゃあ、俺達も行こうか」

あつ、慎ってば、さっきの沼影のセリフで動揺してるな。可愛い。

慎はスケベなくせに意外に純情なので、こういうネタに弱かったりする。私はいろいろと経験済みなので、そういうネタは結構大丈夫。そういえば、男子の方がそういうネタが弱いと聞いたことがあるが、あれは本当なのかもしれない。

「うん、行こう」

私は慎の手を握った。慎は少し、ビクツ、と震えた。可愛い。

手を繋いだまま狭い階段を上り、狭い通路を歩き、一緒に部屋へ入った。

私知知っている慎の部屋と少し違った。私の私物は全部なくなり、代わりに初音の私物らしきものがいくつか見受けられる。しかし、私が慎にプレゼントした物がいくつか残っていた。

初音の残滓が、私の罪悪感を締め上げた。しかし、きっと慎は鈍感だから気付いていないのだろう。普通に家に入り、やかんでお湯を

沸かしていた。

「マイラ、とりあえず何か食うか？」

「……うん、いらない」

座布団の上に座り、私は大きく首を振った。

あれほどの惨劇を見たというのに、慎は普通に食欲が沸くのだろうか。意外に神経が太いようだ。私はとてもではないが、食欲などない。

「……一応、何か食った方がいいぞ。あれだけのことがあったんだ。俺もお前も、結構ボロボロだろ……？ 無理にでも何か食って力つけた方がいい」

「慎……。ごめん。私のこと、心配してくれてたんだ」

私は少々、慎のことを見下していたかもしれない。確かに、度重なる過酷な戦闘で私達の疲労はピークに至っている。何かを食べて、体力を回復した方がいい。慎はそこまで考えて、何か食べよう、と言ってくれたのだ。

「正直、今食っても吐き出しちまいそうな気分なんだけどな」

慎はきっと初音のことを思い出しているのだろう。あの光景は絶対に忘れられないだろう。あれだけ鮮烈な殺人シーンを、しかも大切にしていた少女が殺されるシーンを間近で見て、忘れられるはずがない。

「私もそうだよ……」

「でも、何か食べないとな……。生きるって決めたんだからな、俺達は……」

「うん……」

そうだ、私達は生きる。もう二度と逃げない。

お湯が沸いた。慎は二人分のインスタントコーヒーを淹れた。コーヒー豆もまた違う銘柄に変わっていた。あのコーヒー豆は初音の趣味だったのだろうか。

空きっ腹にコーヒーは重い。しかし、それでも私達はコーヒーを飲み干した。

コーヒーを飲み干し、慎が何かを作るといって、冷蔵庫を漁った。私の知っている慎は、料理などできなかった。やはり、初音に教えてもらったのだろうか。

……駄目だ、さっきから初音のことを考えては凹んでいる。

台所では慎が不器用に、調理を始めた。私が通っている時は、いつもコンビニ弁当か外食で、調理器具なんて錆び付いていたはずだったのに。

ああ……。また昔のこと思い出して凹んでるよ、私……。

私はちゃぶ台に突っ伏し、コーヒーカップを回して遊んだ。こうしていると、夫を扱き使っているぐうたら妻のようだ。実際、家事炊

事も何もできない駄目女だけど。

……うう、マイナス思考が抜けない。今日は本当にいろいろあったから……。

「できたぞ、マイラ」

ただ目を閉じたつもりだったが、少し眠ってしまったようだ。目を開けると、すでに慎の料理が出来上がっていた。お世辞にも綺麗な出来ではないが、愛情がたっぷり込められている和風きのこスパゲティーだ。

「どうだ、俺も結構マシになったろう？」

「うん。前に作ったイカ墨なしのイカ墨スパゲティーよりは美味しそう」

「黙れ、思い出させるな。それと、お前はスパゲティー煎餅作ってたろう。あんなに自信満々だったくせに」

「うっ……、うるさいなあ、もう！」

私はフォークを掴むと、思い切りスパゲティーを掻きこんだ。

「お前なあ、一応イギリス育ちなんだから、もっと行儀よく食えよ」
「行儀がいいことに、日本育ちもイギリス育ちもないわよ」

「まあ、そりゃな」

行儀に文句を言う慎も、フォークの扱いは適當だった。

「……ねえ、慎？」

「何だ？」

「食べ終わったら、寝よ？」

「ああ、そうだな。今日は疲れたよ」

私は深々と溜め息を吐き、慎の鈍感振りに呆れるしかなかった。こいつは本当に男なのだろうか。まあ、私が恥ずかしくて言い方を素っ気なくしたのがいけなかったのかもしれないが。

馬鹿だからなあ、ストレートに言わないとわかんないのかな？ 全く仕方ない……。

「そうじゃなくて、エッチしよう？」

「ぶふうー！！」

慎の口から見事にスパゲティーが逆噴射した。麺やらきのこやらが飛んできたが、フォークで叩き落した。想像していたが、愉快なほどの動揺振りだ。

「な、ななな、何言ってるんだ、お前は！？」

「別におかしいことは言っていないでしょ。付き合ってた時だって、

そういう雰囲気には何度かあったし……」

まあ、その時は私が拒否したのだが……。

……別に嫌だった訳じゃなかったんだけど、その私にもいろいろあったから……。

「い、いや、だけど、お前……」

「確かに、ウェアウルフの女は、夫以外に体を許しちゃいけないわ。特に、私のような純血は、絶対に純血の子を産まなければならない。それが絶対の掟。」

でも、私はもう慎以外の人に体を許す気はない。たとえば、それがウェアウルフの誇りを穢すことになっても、私は慎じゃないと嫌なの……」

「マイラ……」

「……それに、私、もう子供産めない体だし……。構わないの……」

あの日以来、私に出産能力はなくなった。

臨月寸前に凍死しかけた上、流産をしてしまったのだ。出産能力失う以外の障害が残らなかったことが不思議だった。あの時に失ってしまったものは、ホープだけではなかった。未来の希望さえも奪われた。

私はフォークを置き、俯いた。涙が零れそうだったが、必死に我慢

した。

「……私は、慎に本当に迷惑をかけた。こんな悪夢のような運命に巻き込んでしまった。慎がそれを望んだからといっても、やっぱり私自身がそれを許せないの。慎に対して、何かをしたいの。私にできることは、これくらいだから……」

「マイラ……」

いつの間にか隣に来ていた慎が、強引に食るように私の唇を奪った。そして、そのままキスをしたまま私は押し倒された。柄にもなく純情な乙女のように胸が高鳴った。

「……いいんだな、俺で？」

「うん。私の全てを貴方に捧げたいの……。慎は、私のために全てを投げ打ってくれてくれた。だから、私も慎の想いに応えたいの」

「……わかった。つか、この状態で駄目と言われても、もう止められねえし」

「あっ、でも……」

「でも？」

うわぁ、餌を取り上げられた子犬みたいな顔した。可愛い。

さすがにこの状態で止められたくはないだろう。以前にもこういう状態になったことがあったが、その時は思い切り股間を蹴り飛ばしてしまった。それから、慎は私に襲い掛かるようなことはしなくなった。

……ごめん、あの時は本当に悪かったわ……。

「……あ、あの、この耳、嫌じゃないかなあ？ え、えっと、一応、まだ擬態しようと思えばできるんだけど、でも、興奮したりすると勝手に出ちゃうし……」

私はウェアウルフの耳を隠し、上目遣いで慎に尋ねた。

不安は拭えなかった。私はウェアウルフで、慎は人間。人間にとって、この獣の耳は異形以外の何物でもない。化け物と罵られた同朋達の悲しみと苦しみを知っているからこそ、拒絶される恐怖が脳裏を離れないのだ。

慎に拒絶されたら、私はもう生きていけない……。

そんな不安に満ちた私に対し、慎は優しげな笑みを浮かべた。その笑顔が私の不安を一瞬で吹き飛ばしてくれた。彼が笑顔でいてくれるなら、私はこんなにも幸せになれる。

「犬耳最高！」

「い、犬言うなアアア!!」

う
う
う

閑話 龍と悪魔

それは惨劇が起こる数分前の出来事。

青き閃光が深き闇を切り裂く。月光よりもなお清く美しい閃光は、爆ぜるように夜空を駆けていく。寝静まった町の上空数百メートルで青き閃光は幾度も瞬き、相対する漆黒の闇と激しい火花を散らしていた。

夜闇よりもなお暗き漆黒の闇は閃光が瞬くほどに深き色へと堕ちていく。青き閃光がどれほどの輝きを見せようとも闇は決して消えはしない。世界は闇によって構築されている。いかなる閃光も永遠の闇に喰われる定めにある。

青き閃光、逢瀬美夜。亜麻色の長髪は月光を反射し、神秘的な輝きを放っていた。身丈の倍以上はある青き翼を背負い、手には二尺九寸の銘刀白夜が握られていた。勇ましき武装とは裏腹に、少女はあまりに可憐な顔立ちをしていた。

漆黒の闇、憂いの切り裂き魔。悲涙を流した仮面で表情を隠し、全身を黒きロングコートで覆っていた。性別不明な長身瘦躯。得物には巨大な理髪ハサミを用い、黒き旋風を纏って天を駆けていた。

(……話には聞いていましたが、これは噂以上の实力ですね)

青き翼を翻し、美夜は銘刀白夜を握り直した。

相手の実力を過小評価していた訳ではなかったが、美夜は正直ここまで憂いの切り裂き魔が手こずる敵だとは思っていなかった。美夜得意の空中戦でも憂いの切り裂き魔は一步も引かない実力を有していた。

目の前にいる敵の認識を改め、美夜は能力のギアを数段上げた。今のままの出力では確実に負ける。憂いの切り裂き魔の実力は少なくとも、ブラックファンングを持ったマイラより数段上だった。

(……化け物ト聞イテイタガ、確カニコレハ化け物ダナ……)

漆黒の風を最大展開し、憂いの切り裂き魔は防御に徹するしかなかった。

美夜が全力を出していない、というよりも出せないということを憂いの切り裂き魔は知っていた。彼女は数ヶ月前、神に比肩するほどの霊力を全て失っていた。現在、美夜の霊力は本来の総量の十分の一未満しかないはずだった。

しかし、それでも目の前にいる少女の霊力は、憂いの切り裂き魔の数倍以上だった。加えて、美夜はまだその十分の一未満の霊力すらも全開にしていなかった。

次元が違い過ぎる。彼女を化け物と言わず、何を化け物と呼べばいいのだろうか。

「……貴様ハイツカラ芝崎ノ犬ニナツタ、逢瀬美夜？」

「犬になった覚えはありませんよ。私は私の都合で貴方を足止めしているんです」

美夜は青き翼を羽ばたかせ、静止状態から一瞬にして音速に達した。彼女の姿は一瞬にして憂いの切り裂き魔の視界から消えた。しかし、美夜のスピードが音速域まで達することは今までの戦闘で充分に思い知っている。憂いの切り裂き魔は慌てることなく得物を振るった。

火花を散らしながら衝突する二人の刃。

憂いの切り裂き魔は卓越した戦闘能力と宙を舞うために纏った風の結界によって美夜の超スピードを感知、予測していた。特に憂いの切り裂き魔が纏う風の結界は、空を舞うためだけのものではなかった。むしろ、敵が風の結界内に侵入する際の気流の乱れで、敵の接近を逸早く察知するための防御結界だった。

「貴様ハ大神まいらノ友人ダロウ？ 彼女ガ一人デ芝崎家ノ猛攻ニ耐エラレルハズガナイ。助ケニ行カナクテイイノカ？」

「……こうなった以上、私が止めたところでまた同じことが起こるだけです。ここはあえてマイちゃんには捕まってももらいます。その後で、私の権限でマイちゃんの身柄を奪い返します。マイちゃんはエディンバラの唯一の生き残りで、芝崎家の関与を証言できる唯一の人物ですからね」

美夜は芝崎家が所属している白の派閥の上位組織、清流会の所属である。

清流会、世界の理を守護する者。現在、その組織を正しく知る者は少ない。清流会が為すべきことは全て終わり、世界は正しい理によって支配されている。現在は、白の派閥を含めた多くの下位組織によって管理を行っている。

白の派閥の勢力は確かに世界に影響を与えるほど大きなものであるが、それでも清流会に逆らうことは決してできない。清流会には美夜を含め、神々に比肩するような魔人達が揃っている。逆らえば、死は確定する。だからこそ、派閥は清流会には逆らわなかった。唯一、魔人殺しの任を担っていた黒の派閥以外は。

「シカシ、清流会トイエド裏切り者ヲ生カスホド甘クモナイダロウ？」

「ええ。だから、マイちゃんの身柄を保護した後、国外に逃がすつもりですよ。芝崎家やクルキアレの手の届かない遠い場所へ……。マイちゃんも、決して戦いを望んでいるはずではないはずですから……」

大人しくマイラがそれに従ってくれるかは正直怪しかったが、このような事態になった以上、美夜にそれ以外の手立てはなかった。もし、彼女の想い人に同じことをしたとしても決して頷いてくれなかっただろう。だから、美夜は正直マイラを説得できる自信はなかった。

「……虫唾ガ走ル」

齒軋りの音が聞こえた。

と同時に漆黒の風が美夜に襲い掛かった。大バサミが少女の細首を刎ねる寸前、銘刀白夜を間に差し込んで無理矢理に凶刃を止めた。

美夜には憂いの切り裂き魔のような卓越した戦闘能力はなかった。だから、美夜は早く距離を置いて遠距離戦に持ち込みたかった。しかし、相手が簡単にそれを許すほど甘い相手でもなかった。

ハサミの力は凄まじく、非力な美夜ではそれを弾き返すことはできなかった。加えて、もう片方のハサミが執拗に美夜を狙った。あまり美夜にとって有利な状況ではなかったが、それでも彼女はまだ劣勢ではなかった。美夜は青き翼を翻し、その全ての攻撃を完璧に捌いていた。不利な状況にもつれ込んでも決して劣らぬ美夜 능력は凄まじかった。

「偽善ナノダヨ、貴様ノ考エハ！ 大神まいらハ、イヤ、我々ハ皆復讐ヲ望ンデイル！ 奪ワレタ最愛ノものヲ、味ワツタ絶望ヲ、我々ハ決シテ忘レルコトハナイ！ コノ空虚ナ心ヲ満タスタメニハ、復讐ヲ果タス以外ニアリハシナイノダ！」

「いいえ、違います！ 復讐の果てにあるものこそ空虚です！ 貴方達は復讐を望んでいるんじゃないやありません！ その空虚な心を満たしたいだけなんです！ でも、復讐なんかじゃ貴方達の心は決して満たされることはありません！」

「知ツタヨウナ口ヲ！」

黒き旋風が刃となって美夜を呑み込んだ。

憂いの切り裂き魔は、天空を駆けるほどの風を支配する魔術師。今までは滑空と防御のみに風を使っていたが、それを初めて攻撃に転じさせた。美夜の得物を封じ、手を伸ばせば届くほどに接近した状態で放たれた魔術。これを回避するのは美夜でも不可能だろう。

「……解!!」

「……ッ!？」

予測していた。しかし、それでも憂いの切り裂き魔は信じられなかった。

この至近距離から放った攻撃魔術を瞬時に解呪された。呪縛系や結界系のような固定状態の魔術ではなく、能動的に敵に向かう攻撃魔術をいとも容易く。

あらゆる魔術は術者によって構築されたものであり、全てに解呪する方法が存在する。しかし、だからといって魔力が暴風のように乱れる攻撃魔術を一瞬にして解呪できるはずがなかった。たとえるなら、投げられたボールを空中で解体するような芸当だった。そして、それを可能とする絶対的な対魔術能力こそが美夜の真骨頂だった。

しかし、魔術だけで勝負が決する訳ではない。美夜が憂いの切り裂き魔の魔術を解呪したとして、それで戦いが終わりはしなかった。

「破ッ!!」

敵の一瞬の隙を突き、美夜は刀を振るってハサミを弾き返した。

得物を弾かれ、憂いの切り裂き魔の思考は魔術を解呪された驚愕から戦闘状態へ再移行した。美夜の常軌を逸した能力については事前

に知っていたので、驚愕は最小に済ませることができた。両手の得物で再び美夜の首を狙った。

一閃。

凶刃が美夜の首を掠め、青き翼を打ち抜いた。美夜の姿勢が一瞬崩れるが、それでも彼女はその間に刀を返し、憂いの切り裂き魔目掛けて斬り返した。その一太刀と同時に、憂いの切り裂き魔の二撃目が美夜を襲おうとしていた。

両者の白刃が振るわれたのは同時だった。どちらが退かなければ、相打ちとなって勝者なきまま決着がつけただけだろう。

「破アアッ!!」

「……ッ!!」

退いたのは、憂いの切り裂き魔だった。

憂いの切り裂き魔は超人的な反射神経で身を仰け反らせたが、それでも一瞬間に合わなかった。悲涙の仮面に一筋の亀裂が走り、小さな音を立てて割れた。二つに割れた仮面はくるくると回りながら、はるか地上へと落ちていった。

そして、今まで隠され続けていた憂いの切り裂き魔の素顔が月下に晒された。

「……やっぱり貴方でしたか、岸边藍さん」

「どうして……、なんて聞くのは愚問ね。あらゆる気の流れを読み

解ける『龍眼』の使い手に、こんな仮面なんて無意味なものね」

憂いの切り裂き魔、岸边藍は薄く微笑んだ。

正体を晒されたことに対し、藍はさして憤りを感じてはいなかった。むしろ、この超高度での戦いを選んだのは正体がばれることを予期してのものだった。相手が逢瀬美夜である以上、藍は死すらも覚悟していた。

「私の能力は『龍眼』なんてものじゃありませんよ。私自身が『龍』そのものなんです。この世にあまねく靈力を支配する神獣。そして、神に比肩する存在を内包した人間の器、それこそ私の正体です」

少女は龍。

天を支配し、天を駆け巡り、天を我とする存在。
神に比肩する靈力をその身に秘め、森羅万象を支配する世界の守護者。

「とりあえず、質問です。今の貴方のことは、岸边藍さん、と呼んでもいいんでしょうか？ それとも……」

「……いや、岸边藍で構わない」

彼女は一瞬逡巡したが、それでも自らを岸边藍と称した。

美夜から彼女を見ると、一つの少女の器に三つの魂が宿っていた。生徒会長として振る舞っていた女性的な魂、現在憂いの切り裂き魔として表層に出ている男性的な魂、底知れぬ魔力を秘めた悪魔的な魂。現状、男性的な魂がもっとも強く表層に現れ、岸边藍という少女の器を支配しているようだった。

「確かに私……、いや、僕は岸边藍とは全く別の人格ではある。しかし、かつての人間であった頃の僕の名に今更意味はない。また、岸边藍という器の名も、『悪魔』としての名についても同様だ。僕はただ、王の帰還を待つ従者。王が、王として復活するその時まで僕達の存在に意味はない。だから、あえて名乗るとするなら器である岸边藍が妥当だろう」

少女は悪魔。

悪魔はただ、王の帰還を待つのみ。
災禍の風を支配する魔王が再誕するその瞬間まで、従者はその存在に意味を持たない。

「藍さん、取引をしましょう。ここで大人しくマイちゃんを諦めてくれれば、ブラックファングはお返します」

「……………大神マイラはこちらとしても貴重な存在だ。そうやすやす諦める気はない」

と言いつつも、藍はすでに取引に応じるつもりで思考を切り替えていた。

確かに今彼女自身が言ったとおり、大神マイラの存在は貴重だった。しかし、大神マイラは捨て駒の一つに過ぎなかった。ブラックファングさえ取り戻せれば、替えが利く。

利害を考えれば、ここは取引に応じるのが最良だった。しかし、引き出せる物は限界まで引き出しておきたかった。

「藍さん、私はできれば穏便かつ迅速に事を終わらせたいと思っています。取引をするとは言いましたが、その取引に応じる時間はさして長くはありませんよ？」

美夜は不敵な笑みを浮かべながら、藍にプレッシャーを与えた。彼女は一切譲歩をするつもりはなく、それ以上を求めるならこの取引は破綻と言っている。

藍は逡巡した。分が悪いのは、明らかに藍側だった。これ以上戦っても藍が勝てる見込みはなく、このままマイラの身柄が捕らわれれば何も得られない。

美夜の様子を見る限り、マイラが芝崎家に捕らわれた時点で藍達を手出しできない状況になる可能性は高かった。もちろん藍達がマイラを取り戻せるチャンスは完全に断たれる訳ではないだろうが、それでも今マイラを取り戻さなければ藍達が不利になることは間違いない。なかった。

「……なるほど、初めからこちらに交渉権はないようだな。それに、貴様に見ればこの交渉そのものが時間稼ぎ。タイムオーバーで取引そのものが破綻してくれば、それに越したことはないか……。ぼけーっとしているようで相当の切れ者だな。いや、曲者と言った方がいいか」

「そうですね。ここで取引をすることによってマイちゃんの平穩は恒久的に約束される、というメリットはありますが、それは絶対に必要なものではありません。貴方達が手を出せない場所にマイちゃんを匿えば、それで充分なんですから」

「わかった、取引に応じよう。今後、大神マイラに干渉しないことを約束する」

このまま時間切れでは何も得られずに終わってしまう。それだけは避けたかった。この少女の甘さから考えて、一度交わした取引を反故にする可能性は低かった。ならば、ここで取引に応じておくべきだった。

「ありがとうございます、藍さん。では、後日ブラックファングは……、ッ!？」

「……この魔力は!？」

突如、眼下から凄まじい魔力の奔流を感じ取った。

この邪悪で禍々しい魔力は紛れもなくブラックファンクから放たれる魔獣の力。しかし、ブラックファンクといえどもこれほどの魔力を放つためには、よほど質の高い贄を喰らう必要があった。今、教会にいます中でその条件に一致する者は一人しかいなかった。

芝崎初音、彼女がブラックファンクで殺された。眼下から放たれる強大な魔力を説明するには、それ以外考えられなかった。

「……初音ちゃん」

「やってくれたな、大神マイラ……」

大神マイラが芝崎家の包囲網を破った以上、ここに彼女達がいる意味は失われた。

美夜は芝崎家を守るため藍を足止めしていた。藍は芝崎家を殺すために美夜を倒そうとしていた。どちらの目的も大神マイラが絡んでいるが、もっとも重要だったのは芝崎家だった。その芝崎家の者が殺された以上、ここで対峙する理由も、取引をする理由も失われた。

また、芝崎家の者がマイラに殺された以上、マイラを捕らえられる者はいなくなったということだ。つまり、美夜の計画は芝崎家が倒されたことによって破綻し、藍を足止めする理由も失われた。

藍は小さく溜め息を吐き、懷から予備の仮面を取り出した。そして、再び憂いの切り裂き魔としての姿に戻り、眼下へと降りていった。

美夜は憂いの切り裂き魔を止めず、呆然と眼下を見下ろしていた。

百分の一の確率の惨劇が起きてしまった教会を、ただ悲しげに見下ろしていた。

「マイちゃん、どうして思い止まってくれなかったんですか……。己が欲望のままに力を振るえば、どんな末路を辿るかわかっていたんじゃないですか……。なのに、どうして自分自身に負けてしまったんですか、マイちゃん……」

少女の瞳から涙が零れた。

零れ落ちた涙は、月光に煌きながら地上へと落ちていった。

天から零れ落ちた美しき雫は、誰にも知られず惨劇の起きた教会を濡らしていた。

「……どうして、何かを守ろうとすると、何かを失わなければいけないんですか？　どうして、全ての人を助けることはできないんですか？　誰かを犠牲にして、誰かを守る？　そんなことは、もうたくさんですよ！　誰かが助かって、誰かが死んだら駄目なんです！　誰かを守るために犠牲になった人は立派かもしれない！　でも、立派だからっていいこと訳ないです！　みんなが助からないと、駄目なんですよ！！」

一人を守れば、二人を傷付ける。

二人を助ければ、四人を助けられない。

百人を救おうとすれば、千人を犠牲にしてしまう。

世界は、この世にあまねく全ての事象は多くの犠牲の上に成り立っている。しかし、それを知りながらも犠牲のない世界を願った者がいた。かつて全ての人々を守るために戦い続けた戦士が願い続けた儚き夢。そして、それは大切な人を守れなかった少女が受け継いだ想い。

誰一人犠牲にせず、全てを守り抜く。少女が背負った想いは言葉にするほど安い覚悟ではなかった。己がどれほどの血肉を代償にしようとも、誰かの命を守るために戦い続ける。

一人を守るために、十人の痛みを庇う。

二人を助けるために、二十人の嘆きを背負う。

百人を救おうとするために、一万人の死を受け止める。

少女が背負う願いとは、魂さえも代価にして突き進む茨の道。それは、金箔の王子像が貧しき者達のために自らを覆う金箔を分け与えていくようなこと。金箔を剥がされた王子も、金箔を貧しき者達に届けた燕も、最後はゴミ溜めに捨てられる。金箔の王子像はすでに果て、燕は未だ王子の願いを叶えるために空を駆けている。

「……あの人の願い、私の想い、それは届かない夢なんですか？……誰も悲しむことのない、誰も苦しむことのない優しい世界を願ってはいけないんですか……？」

願いは果てなく遠い。

人の見る夢は、何故いつも儚いのだろうか。

少女の瞳は涙に濡れながらも、その翼はまだ折れてはいない。

閑話休題、終章「それぞれの春」へ……

終章 それぞれの春

「……ママ、見て見て、スノーマンだよ！ ホープが作ったの！」

わかっている、これは夢だ。

こんなにも幸せに満ちた世界は、幻想でしかない。

それはわかっているけど、この子に会えて、本当に嬉しい。

夢の中とはいえ、こんなにも大きくなった姿を見ることができなんて思ってもみなかった。本当に夢だとわかっているけど、こういう表現しか浮かばない。

夢のように幸せ……。

「うん、ホープは凄いね。でも、お母さんが作った方が大きいわよ！」

「うう……。うう、うう……」

私が作った大きな雪ダルマ（あー、私も随分と日本語に感化されるな）を見て、ホープはほっぺを膨らませ、不満そうに唸り出した。とっても可愛い。

我が子とはいえ、そう簡単に勝ちを譲りはできない。勝利は苦難の果てにあるもの。安易に得られると思ってほしくはない。大切なのは、戦い続けること。私はこの雪ダルマを通じて、それを教えたかった。そう、獅子が我が子を千尋の谷に落とすように、私は心を鬼にする必要があるのだ。

「コラ、大人気ないぞ、マイラ」

「あう！ 痛いですよ、ヴィオラ様！ 何も殴らなくても……」

いつの間にか私の後ろにいたヴィオラ様に殴られた。

相変わらずヴィオラ様は私に対して手厳しかった。この方が私に優しいことは滅多にないが、ホープに対しては随分甘い。あからさまな鼻肩はよくないと思う。

「問答無用だ。子供相手にムキになってどうする？」

「ううゝ。うゝ、うゝ……」

ホープのように唸ったら、また殴られた。

私が叱られる様子を見て、ホープはけらけら笑っていた。母の不幸を笑うとは、親不孝にもほどがある。あとでよく言って聞かせないといけない。

「ママ、おばちゃんに怒られてるゝ。あははは！」

「……ホープ。おばちゃんじゃない。お姉ちゃんと呼ぶようにと……」

「パパゝ、おばちゃんが怖いゝ」

少し離れていたところで私達の様子を眺めていたカーティス様の元へと駆けていくホープ。私もヴィオラ様もあの方相手では敵わなかった。

それにしても、ヴィオラ様をおばさん扱いしたまま謝らず逃げるとは我が子ながら、なんて怖い物知らずだ。もし、私だったら説教と

拷問が半日続いただろう。世の中には危険なものがたくさんあるということを、しっかり教えなければならない。そうでないと、私が八つ当たりされる。

「おや、ホープ。どうしたんですか？」

「あのねえ、おばちゃん、おばちゃんって呼ぶと怒るの。ホープ、怖い」

「……ヴィオラ、大人気ないですよ？」

「うう……」

ヴィオラ様を黙らせるとは、我が子ながら末恐ろしい子だ。

ホープはカーティス様に抱っこされると、私達に向かってアツカンベーをした。私の血が流れているのだから仕方がない気もするが、お転婆過ぎる。というか、羨ましい。私なんか、ヴィオラ様が怖いからほとんどカーティス様に抱っこしてもらったことなんてないのに。

「ああ、マイラ。先ほど、マクシミリアン様とマリアン様がお越しになりましたよ。……今はウィリアム様と酒盛りをしています」

「ええ、真っ昼間からですか？」

「一応、止めたんですけどね。ウィリアム様が強引にお二人を……」

「すまない、マイラ。父が……」

「いえいえ、いいんですよ。ウィル伯父様がいらっしゃる時に来ることとは、私に会いに来たと言うより、ウィル伯父様と呑むために来たんですよ」

私の両親とウィル伯父様は年齢も近いことがあって、非常に仲がよい。これは噂なのだが、母を巡って父とウィル伯父様とで殺し合いにも近い大喧嘩をしたことがあるらしい。しかし、今の仲良し振りを見ていると、そんな過去があったとは思えない。きっとただの噂なのだろう。

「がっははは！ どうした、マックス？ もうギブアップか？ 情けないぞ！」

「何を言うか、ウィル。そういう貴様も顔が真っ赤ではないか！」

「あらあら、困りました。うふふふふふふふ……」

あちらは完全に出来上がっている。弱いくせにあんなに呑むからいけないのだ。両親は共に酒が弱い。しかし、私は酒豪だった祖父の血が濃いようなので酒には滅法強い。

「私も妊娠していなければ、久し振りにお前と呑み比べをしたかったんだが……」

ヴィオラ様は大きく膨らんだお腹を撫でながら、小さく溜息を吐いた。

十年来の念願が叶い、カーティス様とヴィオラ様の間によやく子供ができた。出産は間近に迫り、今か今かと待ち侘びている。

胎教に悪いと言って、妊娠して以来、徹底した健康生活を送っている。飲酒など言語道断だった。そのせいで私もいろいろ被害をこうむっている。

「今のところ、私の三勝二敗五引き分けでしたよね？」

「むっ、違うぞ。三勝は私だ！」

「いゝえ、違います！ あれは私の勝ちです！」

「違う！」

なんて負けず嫌いな人だろう。あの時に勝ったのは私なのに、変な意地を張っている。

「はいはい、喧嘩はそこまで」

「そこまで」

「「うう」」

「ほら、ママもおばちゃんも、笑顔笑顔」

私もヴィオラ様も、ホープの太陽のような笑顔には弱かった。その笑顔を見ると、何もかも許してしまいたくなるのだ。

いや、それでも後でお説教はしなければならぬ。しなければならぬが、今はホープを抱き締めたくて仕方がなかった。

「ホープ、こっちおいで」

「うん！」

ホープはぴょんとこちらに飛んできて、私の胸の中に納まった。すっかり大きくなって、近頃では抱っこするのも一苦勞だった。しかし、この重みほど嬉しいものはない。ホープの鼓動を、そのまま感じる事ができるから。

大切な我が子、ホープ……。これはなんて嬉しくて、残酷な夢なのだろう……。

「ママ、大好き♪」

カーテンの合間から差し込む朝日によって、心地よいまどろみから目が覚めた。

何気なく頬に触れると、ひやりとした感覚に少し驚く。寝惚けた頭が覚醒するのに少し時間が掛かり、すぐに自分が泣いていることに気付けなかった。子供のような寝顔をしている慎を見て、ようやく先程の出来事が夢だと思い出した。

ホープが生まれていたのなら、きっとあのような幸せな日々が続い

ていたはずだった。カーティス様はいつも変わらず優しく、ヴィオラ様には相変わらず怒られてばかりで、ホープが元気で私の側にいてくれる。そんな幸せな日常を望んでいないというのなら、それは嘘になる。今でも心の底から望んでいる。あの届かなかったもの、ものの日常を。

大好きな人達を失った悲しみは決して消えない。奪われた大切な世界を取り戻したいと願わずにはいられない。それが届かぬ願いと知りつつも、それを願わない者はいない。なくしてしまったものを愛していれば愛しているほど、その想いは強くなる。

今を生き、前と進まないといけないことは理解している。しかし、それでも失った者達は願わずにいられない。失ってしまった大切なものと過ごす幻想を。

未だ静かに寝息を立てている慎の頬を優しく撫でた。慎と出会ったことは後悔していない。だから、これ以上奪われた過去のことに囚われることはない。私は前を向いて、生きていける。しかし、それでもたまには過去に想いを馳せることを許してほしい。

『……いい夢は見れましたか、マイラ先輩？』

その声に私の背筋は凍った。

まだ悪夢は終わっていないのか。

何故、彼女がまだ私の前に現れるのだろうか。

「芝崎、初音……」

『ええ、そうですよ。初音ちゃんです。どうも、こんにちは。お久し振りです』

狼王ロボの中で再会した時と同じセリフで微笑む芝崎初音は、窓枠に腰掛けながら私を見下ろしていた。しかし、あの時のような露骨な敵意は感じなかった。かつての穏やかな雰囲気に戻っているように思えた。

だから、私は思った以上に慌てることはなかった。天敵であるはずの芝崎初音の笑みが私を落ち着かせてくれた。

『……今更、マイラ先輩をどうこうする気なんてないですから安心してください。そんなことをしたら、美夜先輩が悲しみますから』

ブラックファングに囚われた初音の魂を救うため、美夜は命を賭けて戦った。

美夜がそこまでして戦ったのは、初音を後輩として友人として大事にしていたからだ。同様に初音も美夜を実の姉のように慕っていた。美夜は私も、初音も、みんなを守ろうと戦ってくれた。だから、私は美夜を信じられたし、初音も美夜を慕っていた。

「……じゃあ、何のためにここにいるのよ？」

『私だって好きでマイラ先輩と一緒にいる訳じゃないですよ。ブラ

ツクファングに取り込まれて、その後マイラ先輩まで取り込まれて、その結果としてこんなことになったんですよ。全部、マイラ先輩がいけないんです』

「意味わかんないわよ。……まあ、私が原因だろうってことは否定できないけど……」

そもそも初音を殺したのは私だ。初音がその後、どんな目に合うかは全て私の責任と言っても間違いではないだろう。

『仕方ないですね。説明してあげますから、よく聞いてください』
「はいはい……」

腹が立つ言い方であったが、ここで争っているのは話が進まないのだから、怒りをぐっと堪えた。

『そもそも、魂って言うのは非常に脆くて不安定なものなんです。だから、一度思念統合体のように同化してしまった魂を切り離す術はありません。私とマイラ先輩の魂は、ブラックファングに取り込まれたことによって、狼王ロボの思念統合体として同化してしまっただけです。ブラックファングに宿っていた他の魂は美夜先輩の力によって浄化されましたが、どういう訳か私の魂だけはマイラ先輩の魂と混じり合ったままになってしまったんです』

「最悪……、よりによってあんたが……」

ブラックファングにはたくさんの魂が囚われていたのだから、他の

奴が残ってもよかったものを……。よりによって、芝崎初音なんか……。

『それはこっちのセリフですよ。……まあ、理由として考えられるのは私とマイラ先輩に深い因果関係があったからかもしれません。縁によって魂が結び付くということは多いですね』

縁か……。

確かに私と初音の間には因縁めいたものがあった。同じ人を愛したということもそうだが、BLS開発という形で初音はエディンバラの惨劇に関わっていた。私達自身が知らぬところで深い何かが結ばれていたのかもしれない。

それに、あまり認めたくはないが、私達は似た者同士だ。負けず嫌いだが、意外に繊細で打たれ弱い。好きな人には一途で尽くすタイプだが、嫉妬深くて恋人が裏切ったとしたら殺してしまうほどに苛烈で情熱的。

『まあ、安心してください。こうして私とマイラ先輩が話せるのもこれが最後だと思います』

「えっ？」

初音の寂しげな表情に私は戸惑った。確かに私は初音が嫌いだ。実際に殺すくらいに憎んだ。それでも、私の中に残っているちっぽけな良心が痛んだ。

『今の私は魂の残りカスみたいなものですからね。マイラ先輩の魂に干渉するほどの力はありません。いずれ、自身を維持できなくなつて消えてしまうか、マイラ先輩の魂に吸収されてしまうかのどちらかでしょう……』

「初音……」

『マイラ先輩が謝る必要なんてないですよ。貴方はせいぜい罪悪感に苛まれながら、苦しみ続ければいいんです。それが貴方の罪に対する罰なんですから』

言われなくてもわかっている。

芝崎初音を殺した罪から目を背けるつもりはなかった。慎と一緒にいる限り、私はどんな罪からも逃げたりはしない。どれだけ苦しくても、どれだけ辛くても、私はもう二度と罰から逃れて楽な死を望むことはない。

私は俯きがちだった顔を上げ、真っ直ぐ初音を見据えた。罪悪に苛まれながらも、それでも初音から目を背けることだけはしたくなかった。

「……そうね、この苦しみから逃げるつもりはないわ。たとえ、どれだけ惨めな末路を辿ろうとも私はもう決して逃げたりはしない。私はこの血塗れの手で戦い続ける。理不尽な悪意を全て殺し尽す。二度と悲劇を起こさないために、それを起こそうとする全ての悪を殺す。あらゆる罪を殺し、私は全てを守ってみせる。貴方は黙って見てなさい、私の戦いを！」

『……見届けてあげますよ、貴方の覚悟。その信念の牙が折れる瞬間まで……』

初音は不敵な笑みを浮かべながら、静かにその姿を消していった。

姿は見えなくなってしまったが、初音の存在が消えてしまった訳ではなかった。初音は私の覚悟の証人。私が惨めな死を迎えるまで、彼女は私の戦いを見続けるだろう。だから、芝崎初音の存在は私の中にあり続ける。

もう二度と無様な真似は見せられない。どれだけ償おうとも、犯した罪が消える訳ではなかった。だから、私は逃げずに戦い続けよう。

「……んん、マイラ？ 誰かいるのか？」

もそりと布団が動く。ようやく慎が起きたようだった。

慎は寝惚けた様子で周りを見渡し、不思議そうな顔をした。私以外に誰かがいるはずがない。

「今、誰かと話してなかったか？」

「……ううん。慎、寝惚けてるんじゃない？」

初音のことは、慎が知る必要はない。

私と初音の呪われた因果に、これ以上慎を巻き込む訳にはいかなかった。これ以上、私や初音のせいで慎が心を痛める必要なんてないのだから。

「……気のせいか。んん」

慎は未だに不思議そうな顔をしていた。

そんな寝惚け顔の慎が可愛くて、私はボサボサになっている慎の頭を撫で回した。セット前の髪を触られるのを嫌がり、慎は私の手を鬱陶しそうに払った。そして、先ほどの疑問などすっかり忘れて、起き上がった。

慎は朝ご飯を用意する、と言って台所に向かった。私も何か手伝おうかと言ったのだが、まだ休んでいろ、と言われてしまった。昨日の戦いのことで私を気遣ってくれているのだろう。確かに昨日の激闘のダメージは一晩休んだだけでは癒えていなかった。

しかし、それは慎も同じはずだった。慎だけに辛い思いはさせられない。これからはどんな困難も二人一緒に乗り越えていくのだ。だから、私も慎の後を追った。

「慎、やっぱり私も手伝うよ」

事件から数日後。

初音の死によって一時期騒然となっていた学園もようやく静かになった。初音の恋人であった俺に対して、同情や興味本位などで声をかけてくる者も多かったが、それも落ち着いてきた。おかげで俺はようやく静かな学園生活を取り戻すことができた。

初音の死は、全て俺が原因だった。だからこそ、初音のことを聞かれると本当に心が痛んだ。何も知らない者にとって、俺は恋人を失った傷心の男に見えるだろう。しかし、現実は全く違う。初音を裏切ってしまった最低な男。この苦しみは彼女を裏切ってしまった俺が受けるべき罰なのだ。初音の死を永遠に背負い続け、苦しみ続けることが俺の罰。

そして、その罪と罰を背負いながらも、俺はマイラのために戦う。あの時、初音を選ばなかった俺の責任。マイラへの想いとは別に、俺が戦い続ける理由。

そう、戦いはまだ終わってない。今は平穏のように見えても、死の足音はすぐ側まで迫っている。近日中にも芝崎家からのアクシヨンは必ずある。

「……その時、俺はちゃんと戦えるか？」

昼休み、俺は一人屋上の貯水タンクの上で寝そべっていた。

地上ではどれだけの惨劇が繰り広げられようとも、空は変わらず青い。目を閉じれば、昨日の壮絶な死闘の記憶が蘇る。地上でどれほどの犠牲の羊が山のように積もろうとも、この空は決して変わらない。たとえば、明日俺が死のうとも、何も変わらない。

あの狼王ロボとの激闘で初めて、死というものを身近に感じた。あ

の刃を避けるのが一瞬でも遅ければ、俺の首は胴体と永遠に別れていただろう。戦いは一瞬の判断によって生死が分かつ。あの時、一つでも判断を違えていれば、俺は死んでいた。

今回は運よく生き残れた。あらゆる幸運と奇跡が重なって、俺とマイラは共に死線を潜り抜けることができた。もし、同じ条件で同じ戦いをしたとしても、俺達は生き残れないだろう。

次も二人で生き残ることができのだろうか。楽観視はできない。少なくとも、今回のような奇跡が起こるとは思えない。ならば、生き残るための道はただ一つしかない。

「なんだか難しい顔をしていますね、慎君？」

「ああ、何だ逢瀬か？」

唐突に視界に入ってきた小柄な人影。

逢瀬はいつの間にか貯水タンクの上にまで登ってきて、俺を見下ろしていた。近付いてきた気配は全く感じ取れなかった。まるで初めからそこにいたかのように微笑んでいた。

「いざとなったら、マイちゃんが守ってくれますから心配しなくても大丈夫ですよ」

「てめえ、聞いてやがったな。あと、それが情けなくて嫌だから悩んでるんだよ」

実際に否定できないのが悔しい。

守られるために俺は力を得たのではない。大切な者をもう二度と手放さないため、愛する人を守るために俺はBLS能力を手に入れた。それなのに、襲いかかってくる敵に怯えて守られていては何の意味もない。しかし、俺自身が殺されてしまったては一番意味がなかった。マイラの心は決して強くはない。一度は擦り切れ、死を求めたくらいだ。だからこそ、俺が支えてやらなければならない。マイラを守りつつ、俺自身も生き残らなければならないのだ。

「慎君は強くなりますよ。マイちゃんを守りたいって気持ちがあれば、いくらだって。」

それに、BLS能力があります。あの能力は危険が多い反面、とっても強力なものです。あの青き炎は術者の中にある霊力ではなく、周囲の霊力を無尽蔵に飲み込んでいきます。思念統合体や魔術師の天敵みたいな能力ですね。構築した術式を根本から壊したり、自身の存在を維持するために必要な霊力を奪われてしまいますから」

「じゃあ、お前にも勝てたりするか？」

「うーん、多分無理ですよ。ほら、狼王ロボが魔力で青き炎を吹き飛ばしたじゃないですか？ あれと同じことが私にも出来ると思えますから」

「そりゃ残念だ……」

軽い口調でばやいたが、俺の心は重く淀んでいた。逢瀬みたいな圧倒的な力があれば、運命を変えられたかもしれない。あんな悲劇なんて起きなかったかもしれない。

自分の弱さ、無知が憎かった。

俺の弱さのせいで初音が死んだ。純粹に俺のことを好きでいてくれた女のことを死なせてしまった。

もう二度とあんな悲劇は御免だった。俺がもっと強ければ、逢瀬みたいに運命を変える力があれば、初音は死なずに済んだのではないか。

「……慎君、初音ちゃんのことですが……」
「——ッ!？」

「私は、初音ちゃんを死なせた貴方達を許しません……」

逢瀬は初音を妹のように可愛がっていたし、初音も逢瀬を本当に慕っていた。彼女が俺を許せないというのは、仕方がないことだ。

「だけど、復讐は絶対にしません。どんな理由があっても、憎しみで白夜を振るうことはありません。私があの刀を受け継いだのは、全てを守るため、理不尽な運命を斬るためです。もう二度と、憎悪と怨嗟に塗れた刃にしないためにも、復讐は絶対にしません……」

「逢瀬は、強いな……。俺は、俺自身を殺してやりたいよ……。初音を死なせてしまった俺自身を……。だけど、駄目なんだ……。俺が生きていないと、マイラが死んじゃう……。」

俺のせいであんない女が死んじゃったのに、俺はあいつのため

に何も出来ない……。何もしてやれない……」

「慎君……」

気付けば、俺の頬を一筋の涙が伝っていた。

自分が泣いている。その事実気付くと、もう涙が止まらなくなつた。

止め処なく溢れる涙と共に激しい憎悪と怨嗟が噴き出した。あれほどまでに想っていてくれた少女を、俺は残酷にも裏切ってしまった。そんな馬鹿な真似をした最低な男に対する怒りが今、俺の中で爆発しそうだった。

俺は、俺自身が許せなかった。出来ることなら、この手で殺してやりたいくらい憎い。しかし、それができずに俺の瞳は涙がぼろぼろと零れ落ちていた。初音を救うことが出来なかった後悔の涙だった。

「俺は……、俺は……、本当に最低な糞野郎だ！！　クソ、クソオオオッ！！　俺はあんない女を泣かせて、狂わせて、殺してしまつたんだ！！　なんて、なんて酷いことを……。畜生、どうして、あの時初音も救うことができなかったんだよ……。どうして、マイラだけじゃなく、初音も救うことができなかったんだ……。どうして二人を助けることが出来なかったんだよ……。畜生オオオッ！！」

怨嗟と後悔の涙は決して止めることはできなかった。

あの時、マイラを選んだことに後悔はなかった。マイラを愛し、救

いたいと思った気持ちは決して偽りではなかった。しかし、初音を救えなかったは想いも決して偽りではなかった。

誰かを助ければ、誰かを殺さなければならぬのか。犠牲を出さず、全てを救うことはできなかったのか。

「……慎君、全ての人を救おうとするのはとても難しいことです」

逢瀬は何とも言えない悲しそうな笑みを浮かべながら、俺にハンカチを差し出した。しかし、俺はそれを受け取らず、服の袖で乱暴に涙を拭った。

「だけど、全員を救おうとすることはいけないことかよ!？」

「……いいえ、そんなことはないですよ。ただ、それを為すための道のりは修羅道よりもなお辛いものです。誰かの涙を止めるためには自らの血で買い、誰かの嘆きを癒すためには自らの肉で買い、誰かの願いを救うためには自らの魂で買う。全てを救うために、己の存在を削っていくような地獄の道のりです。そして、力及ばなければ死と絶望しか残されません。」

わかりますか、慎くん。今、貴方の願いを果たすにはそれだけの力と覚悟が必要なんです。それでも、貴方は全ての人を救おうとするんですか？」

「ああ、救う!! 救ってみせる!! もう二度と、初音のような犠牲を出さないためにも俺は戦う!! それが初音を救えなかった

俺の償いだから……」

「うん。慎君なら、そう言うと思っていました」

逢瀬は天使のような頬笑みを浮かべ、俺の決意を祝福してくれた。

しかし、逢瀬の笑みは嬉しそうでいて、どこか悲しげだった。俺には逢瀬の胸中にどんな想いが秘められているか知る由もなかった。ただ一つ確実に言えるのは、逢瀬は俺が見てきたよりも残酷な運命を背負って戦っているということだった。

彼女は俺がこれから歩もうとする道の険しさを知っている。そうでなければ、その道の険しさを語れるはずがなかった。逢瀬は今まで自らの血肉を代償に、その修羅道よりもなお険しき道を歩んできたのだろう。そして、新たにその道を歩もうとする俺に対し、祝福するような、諫めたいような複雑な心境なのだろう。

「……初音は許してくれるかな？」

「わかりません……。その答えは初音ちゃんにしか出せないですから……」

俺達は二人で果てしなき青空を見上げた。

この遠き空の果てに初音はいるのだろうか。それとも、俺達を呪い続けながら現世に残っているのだろうか。どちらだとしても、俺が初音に対してできることは祈る以外になかった。

せめて安らかに眠れ、初音……。

予鈴が聞こえ、俺の意識は唐突に現実に取り戻された。昼休みが終わり、あと五分で五時限目の授業が始まる。

「……慎君、戻れますか？」

「……今日はサボりだ」

「そうですか」

まだ目は赤い。涙の跡は当分消えないだろう。

初音のために泣いたことをマイラには知られたくなかった。直接的に初音を殺したのはマイラだ。俺が初音のために泣けば、マイラは間違いなく今以上の罪悪感に苛まれるだろう。マイラは充分過ぎるほどに罪の意識を持っている。これ以上、マイラを苦しめるようなことはしたくなかった。

普段ならサボりを諷めていただろうが、逢瀬は俺の心中を察して何も言わなかった。少しだけ寂しそうに笑い、貯水タンクを降りて行った。去り際、俺は最後に言いたいことがあって彼女を呼び止めた。

「……逢瀬！」

「ふえ？ 何ですか？」

呼び止められることを予想していなかったのだろう。逢瀬は少し間拔けな声を上げ、慌てて顔を上げた。その様子を見ると、あの惨劇の夜の凜々しさが幻だったかのように思えた。

「いろいろあって言うのが遅くなったけど、ありがとな。お前がいなかったら、俺もマイラも、そして初音も救われなかった。確かに悲しい犠牲は出た。失われた命もある。だけど、それでもお前がいなかったら俺達は絶望の中で朽ちていったはずだ。お前が頑張ってくれたから、俺達は救われたんだ。感謝してる、逢瀬」

あれから言えず仕舞いだったが、ようやく逢瀬に感謝の気持ちを伝えることができた。

彼女は奇跡の紡ぎ手。俺達があの日狼王ロボとの激闘から帰還できたのは、全て彼女が起こした奇跡のおかげだった。逢瀬には心から感謝していた。もし、逢瀬がいなければ、マイラは永遠に魔獣に囚われ続け、初音の魂も決して救われることはなかっただろう。

俺も逢瀬も初音の命を守れなかったことを後悔していた。しかし、それでも逢瀬がいなければ俺達はもっと悲惨な末路を辿っていただろう。逢瀬の頑張りは決して無駄なことではなかった。守れたものが一つでもあるのなら、その戦いは決して無駄ではなかったはずだ。

「……ありがとうございます、慎くん。そう言ってもらえて、少しだけ元気出ました」

俺の言葉に逢瀬は一瞬驚いていたようだったが、その表情はいつしか満面の笑顔に変わっていた。その笑顔には純粋な喜びに満ちていた。

どうやら俺の想いはしっかりと彼女に届いたようだった。

守れなかった者はいら。しかし、一人でも守れた者がいるのなら逢瀬の戦いは無駄ではなかった。あんなにも頑張った逢瀬が心を痛め続ける必要などないのだ。

「あははは、励ますつもりが逆に励まされてしまいました」

「お前にしても、マイラにしても凄過ぎんだよ。たまには俺にも格好つけさせろ」

BLS能力を得ても、俺はあの惨劇の中で誰も救うことはできなかった。できたことはせいぜい時間を稼いで、逢瀬に一発逆転のチャンスを与えることくらいしかできなかった。考えてみれば、情けないことこの上なかった。

「慎君は充分格好いいと思いますよ。マイちゃんも初音ちゃんもそんな慎君だから好きになったんですよ」

臆面もなく言い切られると、さすがに恥ずかしかった。

逢瀬は微笑みながら、真っ直ぐと俺を見据えていた。その素直な視線が恥ずかしくて、俺は明後日の方向を向くことしかできなかった。

彼女の言葉はとても純粋で嘘偽りが一切なかった。だからこそ、彼女の言葉には強い力が宿っている。その力強い言葉は非常時には頼もしい限りだが、このような平穏時には少しくすぐったかった。

「じゃあ、私はもう行きますね」

「おう、またな」

屈託のない笑顔で手を振る逢瀬に対し、俺も適当に手を振り返した。授業に向かう逢瀬を見送り、俺は再び貯水タンクの上に寝そべった。こうして授業をサボるのは久し振りだった。マイラと付き合い出すようになってからは真面目になったが、昔はよく授業をサボって行く当てもなく街をぶらついていた。

しかし、もうあの頃とは違う。命に代えてでも守りたい者ができた。俺の中に宿る呪われた青炎の力。この青き炎は、かつてマイラの一族を虐殺した忌まわしき殺戮の力。しかし、俺は二度とこの炎を殺戮のために使わないと誓った。この力は大切な人を守るため、悲しい犠牲を出さないために振るう。

誰かが死ねば、誰かが泣く。マイラが家族を殺されて泣いたように、俺が初音を死に追いやって泣いたように。悲劇によって生まれた涙は、果てしなき憎悪と怨嗟を孕み、新たな惨劇を生む。復讐は忌まわしき血の連鎖となって永遠に悪夢を繰り返してしまう。そして、その連鎖によって初音のような犠牲が二度と生まれないように、俺は全てを守るための道を選んだ。

二度と悲しい犠牲を出さないということは、復讐の連鎖を断ち切ることだ。

この不殺しの誓いは、マイラの覚悟とは相対するものだろう。しかし、その根本にある願いは決して違わないはずだ。復讐の連鎖を断つために、修羅として全ての罪人を殺し尽すか、人として全てを守っていくかの違いだけだ。その先にある願いは、誰もが笑顔でいられる幸福な世界。その未来に辿り着くための道は決して一つではな

いはずだ。

俺達が進む道は全て違う。しかし、目指す未来は同じ。己の信念さえ貫き通せば、俺達はいずれ同じ場所に辿り着くはずだ。その道の途中、力尽きてしまうこともあるかもしれない。道を踏み外してしまふこともあるかもしれない。だが、その信念さえ忘れなければ、道は違えど同じ場所に辿り着けるはずだ。

誰もが願う、その場所に。

しかし、誰も願いながら届かぬその場所。

「この血塗れの連鎖を断ち切り、俺達は辿り着いてみせる」

果てしなき空へと手を伸ばす。届かぬ未来に掴もうとするように。

誰もが願いながら届かぬ世界を、この手にするために俺達は戦い続ける。その戦いがどれほど残酷で無残なものであっても、俺は決してこの信念を曲げたりはしない。二度と悲しい犠牲を生まないために。誰もが幸福でいられる世界に辿り着くために。

そして、何よりも惚れた女を笑顔にさせてやるためにも、俺は最後まで諦めない。マイラが共にいる限り、俺はどんな運命にだって抗える。

「マイラのためなら、俺は世界だって変えてやる!!」

了

終章 それぞれの春（後書き）

長かったですね。

「BLACK FANG」は元々、文芸部の批評用作品として、第一章だけしかない話でした。

その時はそもそもこんな物々しいタイトルではなく、恋人二人が別れて、新たな恋に生きるわーって話だったんですが、どこで道を間違えたんでしょうね??? WW

第一章のあの展開から「呪ってやる呪ってやる」になるなんてWW

色々と思入れのは作品でした、本当。

シリーズとして続き物を書いています、

最終的にはハッピーエンドになってほしいなーと思ってます。

でも、まあ犯した罪の分だけの罰は受けなければいけないんでしょうが……。

次作「BLACK FANG 2 ―咎人の烙印―」鋭意執筆中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0147q/>

BLACK FANG -血塗れの連鎖-

2011年7月30日00時38分発行